
昇藤

晴香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

昇 藤

【Nコード】

N8084S

【作者名】

晴香

【あらすじ】

藍染との戦い終了後、尸魂界から命令が下される。“黒崎一護の霊圧及び記憶を封印せよ”それはあまりに、残酷なものだった。

元 『鏡花水月』

注意

注意

これはbleachの二次小説です。

書くにあたり、原作の設定に忠実、キャラクターの性格・口調を壊さないようにするということを気をつけていきたいと思っています。

ですが、コミックよりアニメで見ているので、私自身の知識不足は否めないと思います。

話の都合上、捏造・オリキャラも多々ありますので、そういうことを不快に思われる方はご注意ください。

読んでいて、これはダメだと思ったら、急いでバックして下さいね。

あとは、一護が主人公なのですが、十番隊（特に日番谷くん）がでしゃばっています。完全に自己満足です。

それでは、楽しんで読んでいただけたら嬉しいです。

全てを忘れた少年（前書き）

第一章

花萼　―別れ―

全てを忘れた少年

最後に聞いたのは、車のブレーキ音と少女の叫び声だった。
。

藍染率アランカルいる破面の軍勢との戦いからおよそ十年の月日が経った。

あれから、一護を始め織姫・茶渡・石田の四人は霊力と記憶の封印を施され、普通の人間として生活している。もちろん、それは、彼らに関わり意図せずとも死神について知ることとなった友人、家族も例外ではない。

「お兄ちゃん！じゃ、私達は大学行ってから朝ご飯、食べておいてねっ」

「あ？何だ、もう行くのか？」

人間の月日とは残酷な程に早い。一護は家の後を継ぎ医者に、妹達は地元の大学へと進学した。短くも波乱に満ちた数ヶ月を忘れて。

平凡に溢れた日常に違和感を感じることなく。

「もう」って一兄、時間見てみなよ」

霊力を封じた一護は、虚はもちろん、^{ホロウ}霊を見ることはなくなった。虚はともかくとして、霊が見えなくなったことに関しては首を傾げたが、そういうものかと今では納得している。

夏梨は相変わらずのようだし、遊子さえも、未だにぼんやりとはいえ見えているらしい。完全に見えなくなったのは、一護ただ一人である。それも、もう慣れた。

「うおっ！ やつべ、後ちよっとで病院開けなきゃなんねえじゃねえか！」

虚など見えないのだから、死神などまさに見える訳がない。否、存在することさえ知らない。だから思うのだ。そう、彼は知らぬが故に思う。

“また、平和な一日が始まった”と。

「大丈夫、お兄ちゃん？昨日も遅かったんでしょ？」

「ん？大丈夫だって！ありがとな、遊子」

しかし、そんな仮初めの平和にはいつか終わりが来る。それは明日か、はたまた何年後か。

「ほら、行くよ遊子。一限遅れる」

「あ、待ってよ！夏梨ちゃん！じゃあ、行ってくるね。お兄ちゃん」

「おう！気をつけて行けよ！」

もしかしたら、今日かもしれない。

橙の髪が印象的な彼の名は黒崎一護。空座町で小さな病院を経営している。

とはいえ、患者は耐えることを知らない。一人やってきてはまた一

人。

病状の軽い者や重い者、様々な患者がやってくる。かなりの根気が必要なのだ。

そんなことなのだから、たまには休息を取りたくなるのも仕方ないだろう。

お昼時、患者が一段落したところで一護は昼ご飯を食べ、気分転換にでもと散歩に出掛けた。

意味はない。ただの気分転換である。

(ずっと座ってたなら、気が変になっちまうぜ)

ぐっ、と背筋を伸ばして息を吐き出す。住宅街では換気扇から漂うカレーの匂いが鼻をくすぐり、公園が近くなってくると子供達の笑い声が響く。

如何にも平和な一時であった。ふ、と思わず笑みが零れる。

(いいな、こういつのも)

彼の家も変わらず賑やかではあるが、すっかり大きくなった妹とはもうはしゃぎ回ることはない。

楽しそうにきゃっきゃと笑う声が懐かしかった。赤いボールを投げ合う子供、一緒に砂場で遊ぶ親子。

(ん?)

その時、一護は見覚えのある男性を見つけた。ベンチで鳩に餌をやっている。白髪混じりの髪をオールバックにし、縁なしの丸い眼鏡をかけた、優しそうな男性だ。

彼には以前、助けてもらったことがある。一護は挨拶しようと公園に足向け、視界に赤いボールが入って止めた。

「あっ」

投げられたボールが、手を目一杯伸ばした少女の手の上を飛んでいった。

それは運悪くも公園の入り口をトン、トン、と跳ねながら転がっていく。

それを向かいの歩道から眺めていた一護は、胸が嫌な予感に支配されていくのを感じていた。

「あ、待って！」

少女は必死にボールを追っていく。

トン、トンとボールが転がっていく。

一護はハツとして顔を横に向けた。何と運の悪いことか、普段、あまり車の通らない道に車が走ってくるのが見えた。

「捕まえた！」

少女は両手でボールを捕まえる。そして、嬉しそうに顔を上げたところで、自身に近寄る物の存在に気がついた。

一護は足を駆け出した。

考えることすらせず、ただ助けなければという思いのままにである。運転手も気がついたのだろう。甲高いブレーキ音が閑静な住宅街に耳障りな程響き渡った。

そして間もなく、ドンッ、という音が　響いたのだった。

一護はゆっくりと目を開いた。まだ霞む視界に、数回瞬きをして重たい体を無理矢理起こす。

ふと、ぼんやりとする頭に、遠くで誰かの泣き声が聞こえてくるのに気がついた。

他にも人々のざわめきがあるのだが、まるで壁越しに聞いているかのようにはつきりしない。

何があったんだ。

掌に感じる固い感触に下を見る。どうやらコンクリートらしい。

何故、自分はコンクリートの上に寝転がっているのだろう。まさか、眠いからといって処構わず寝た訳ではあるまい。

自分はそれくらいの常識は弁えているはずだ。では、突然の心臓発作か、それとも貧血か。そう考えて一護は否、と首を振る。

そんなどこぞの病弱な少女になった覚えはない。では一体　。

(何が　)

あったんだ、と再度続けようとして、一護は唐突に全てを思い出す。その途端、遠くで聞こえていた泣き声と人の声が耳に飛び込んでくる。それは聞いている方が悲痛に感じる叫び。

「お兄ちゃん！目を覚まして、お兄ちゃん！」

先ほどの少女が泣きながら誰かに訴えている。それは、自身が最もよく知る人物。

「俺 …… ツ！？」

少女が揺るままに、力無く左右に揺れる体はまさしく自分自身。あの橙色の特徴的な髪を間違える訳がない。呆然とする一護の耳に、周りの声が聞こえてくる。

「何があった！」

「人が轢かれたぞ！」

「おいつ、救急車を呼べ！」

「つ駄目だ！死んでる！」

（死んで、る…！？）

まるで、テレビ画面を通して見ているかのような感覚。その中で唯一はっきりと聞こえてきた言葉に、一護は愕然と目を見開く。

「嘘、だろ…。おい…っ」

一護は感情が高ぶるままに、死んだと口にした男に掴みかかった。しかし、残酷にもその手は男をすり抜け空を切る。

「嘘だ…」

己の手を絶望と怒りで見つめる。

「嘘だ…」

ぎゅっ、と爪が食い込む程に握り締めて額へと当てた。

「嘘だ、嘘だ…っ」

自分はまだ、妹達を置いていく訳にはいかない。自分がいなくなったら、誰が彼女達を守るといつのだ。

「嘘だ嘘だ嘘だっ」

信じられるか。こんな現実を。そう、きっとこれは夢。彼処で血を流し、力無く倒れているのは自分ではない。自分によく似た誰かなのだ。

「嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ！」

嘘だ
。

「残念ながら、嘘じゃないわ」

突然降りかかった声に、一護は勢いよく顔を上に向けた。太陽を背にして立っているため、顔は見えない。

眩しそうに目を細める一護に気付いたのかそうでないのか、その影が塀の上に立つ影がスツと音もなく降り立った。

「あーあ、悲惨ね。これは」

そう軽く言っただけなのは、明るい茶色の髪を一つに纏め、暗い青の目をした少女であった。妙な黒い着物を着ている。

「アンタ、誰だ？」

「あたし？あたしは嶺川紫水。ミネカワシスイ初めまして、少年」

「あ、初めまして …… って、違えよ！」

「少年、鋭いツツコミするね…」

突如現れた、奇妙な格好をした少女に名前を訊くなど呑気なことをする訳がない。

呑気な少女につられ、呑気に挨拶してしまった自分が恥ずかしい。

「誰がこの状況で自己紹介しろつつつた!？」

「誰って訊いたのは少年じゃない」

「だーかーらっ、そうじゃねえって言うてんだろ！」

愉快げに自分を見る紫水と名乗る少女に、一護はガシガシと頭を掻いて「あー、もう!」と叫ぶと向き合った。

「あのな、てめえは何者かって訊いてんだ!恐らく幽霊であろう俺が見えて、しかもっ、刀を持ってやがる!銃刀法知らねーのか!めちゃくちゃ怪しい上に危ないじゃねえか!」

「ちよつと、落ち着きなさいよー」

「これが落ち着いてられる訳ねーだろ！」

「あー、分かった分かった。説明するから」

とりあえず、と一護達は公園のベンチに座った。事故現場では警察が来たり救急車が来たりと騒がしい。それが自分を中心に行われていると分かっているから複雑だった。

「成る程。アンタは死神で、俺みたいな幽霊をその尸魂界ってところへやり、尚且つ虚という化け物を退治すると　　って、信じられるかボケエ！」

「うおおう！？」

頷きかけて、紫水は素っ頓狂な声を上げた。

一通り説明されたが、その現実とはかけ離れた内容を、一護は到底信じることは出来ない。だからこそ卓袱台チャブダイをひっくり返す勢いでそう言っただが、紫水は不機嫌そうに顔しかめた。

「何ですよ。何が信じられない訳？」

「全部だ、全部！いきなり死神だの何だの言われて、信じられる訳がねえだろ！」

「いるじゃん、死神。目・の・前・に！」

「見えない。俺には頭の弱い変な格好した奴にしか見えない」

「ちよ、失礼ね！」

哀れむような視線を向けた一護に、紫水は思わず大きな声を上げ、一息つく。それを聞いて一護も息をつくと言った。

「大体、俺はこれでも昔靈感があつて、幽霊も見えてたし触れてたんだ。でもな、俺はお前みたいな格好した奴になんざ会ったことも見たこともねえぞ」

「…触れてた？」

「おっっ」

驚きに見張る紫水を傍らに、一護は事も無げに頷いてみせた。

(整ブラスに触れるってことはそれなりに霊力があるはずよね…？それなのに、今目の前にいるのは霊力もない只の魂魄…)

紫水はこちらを怪訝げに見ている少年をマジマジと眺めた。正真正銘、ただの魂魄である。

「少年、君、今は幽霊見えんの？」

「ん？ああ、いや…、いつ頃だったかな。急に見えなくなったんだ」「そう…」

(急に靈力がなくなるなんてあるのかしら…)

「おい、アンタ何考え込んでんだ？」

一護に話しかけられ、紫水ははっと顔を上げた。危なく考えに耽るところだった、と紫水はホッと息をつく。

(まあ、今は靈力ないわけだし。万が一に備えてさっさと魂送しちやえば問題ないわね)

そう結論づけて、紫水はさっと刀を抜いた。

「ちよっ、おまつ、お前、何刀抜いてんだよ！？危ねーだろうが！」

「安心しなさいよ、魂葬するだけだから」

紫水はそう言って刀をくるりと反転させ、柄を一護に向けた。

「じんそうっ？」

「魂葬。さつき説明したでしょ？現世で言う成仏よ」

紫水はベンチに乗り上げた。そのまま柄を一護の額に当てようとしたところで、「待った！」の聲がかかる。

「何よ」

「悪いが、それちょっと待ってくれねーか」

「はあ？そんなこと」

紫水は文句を言ってやろうとして、ふと口を噤んだ。先程までの快活さをなくし、一護が暗い沈んだ表情をしていたからだ。

「俺、まだ逝く訳にはいかねえんだ。俺が死んだら、彼奴らは二人つきりになっちまう…」

彼が想うのは二人の妹。彼女達はまだ、自分が死んだことも知らないだろう。

成長したと言っても、これからを一人で過ごしていくのは辛いに決まっている。親戚もない彼女達を置いていくのが、一護は心配だった。

「なあ、頼むよ！俺は死ねないんだ！」

「だから、待て？」

「ああ…」

躊躇うように頷く一護に、紫水は大きく溜め息をついて見せた。

「魂葬を待つてどうするつもり？ずっと現世を彷徨うの？ずっと家族を見守るとでも？」

紫水は刀を下ろした。

一護はその台詞に肩を落とすだけで何も言わない。

「人は生まれた時から死に向かって生きている。人間が死ぬことは必然で、世の理。貴方は、死んでいるの」

「でも、俺は…っ」

「それだけじゃない。さっき説明した虚はね。元々貴方と同じ人の魂なのよ」

一護の肩がびくり、と震えた。人の魂が人を襲う。それが何を意味するのか一護は未だ分からない。しかし、嫌な予感がした。聞いてはいけない。

「そして、堕ちた魂が始めに狙うのは家族。貴方の、妹さん達よ

」

一護の目が紫水の目を捉える。そこには信じられない、という思いがありありと見て取れた。家族を襲うなど、一護にとっては考えも及ばないこと。だが、紫水の言いたいことは、分かってしまった。

「この世に長く止まれば、貴方もいずれ虚になる可能性が出てくるわ。それに、貴方が虚に狙われる可能性だってある。早々に成仏した方が、妹さん達や貴方自身のためなのよ」

「でも、それは可能性の問題だろ？」

それでも、それでも一護には踏ん切りがつかない。自分が死ぬだけなら全然いい。だが、妹が残されることだけは納得がいかないのだ。残される者の悲しみは、誰よりも知っている。

（納得しないか…）

紫水は心中で舌打ちをする。虚の話は事実だし、一理あるのだが、本当のところは違う。どこからと言えば後者の理由の方が強い。

今は霊力がなくとも“もしかしたら”“まさか”がある。優しい家族想いな彼のこと。こういえば納得してくれると思っただが。

しかし、紫水はそんなことを露にも顔に出さず、感じた気配に続けた。

「まだ、分からないの？」

紫水は逆手に持っていた刀を正しく持ち直した。それに数瞬遅れて一護達を圧迫感が襲う。

大きな獣の叫び声が聞こえた。

「な、ん何だよ…、これ…っ」

影った頭上に目を遣って、一護は声の震えを堪えて言った。そこにいたのは白い顔に胸に穴の開いた化け物がいたからだ。

対して、至って平静な紫水は、一護を庇うように刀を構える。

「見なさい、少年。アレが虚よ」

「アレが？」

「確かに虚にならない霊だってある。でも、なる可能性だって同じくらいあるの」

その時だった。目の前の虚がまた大きな叫びを上げたのだ。ビリビリと震える空気に、一護は慌てて紫水を見上げる。

「おい！」

「大丈夫よ。安心しなさい」

彼女は真っ直ぐ、虚を見つめていた。

「言ったでしょ？あたしの仕事はアレを倒すことなのよ」

その姿は堂々としていて、一護は目を離せない。そんな彼に紫水はにっと笑って、次の瞬間には虚の頭上で刀を振り下ろしていた。

(……?)

その時だった、一護はその姿に妙な既視感を覚えていた。どうにも初めて見たとは思えないような感覚。それを思い出そうとするも、まるで何かに遮られるように思い出せない。

その間に、虚は足元から昇華されていた。

「大したことないわね」

刀をぶら下げながら何事もなかったように来た紫水に、一護は慌てて駆け寄った。

「おいつ、お前大丈夫かよっ」

「平気平気。それより、分かったでしよ？アンタもあなる可能性があるの。その前に、大人しく魂送されなさい」

一護はう、と息を詰めた。それを見て、紫水は溜め息をつく。

「何なら、最後にその妹さん達に会ってく？」

最大限の譲歩だと提案すれば、一護はしばらく考えてから、諦めたように笑ってふるふると首を横に振った。

「いい、会ったら余計成仏出来なそうだし」

さっさと魂葬つてのをしてくれ、と言う一護に、紫水は驚いて目を見張った。あれほどまでに拒んでいたというのに、どういった心境変化か。

「よく考えたら、彼奴らはそんな弱くねえと思ってさ。それより、何時までも未練たらたらに残ってる方が怒られそうだ」

微笑む一護の表情に、その言葉が嘘でないことが分かる。

「そ、じゃあせめて痛くしないであげるわ」

「おう。頼むぜ」

ポンと音をたてて、一護の額に柄が当てられた。

「少年、名前は？」

消えていく一護に、紫水は最後に尋ねた。恐らく、相手は向こうに
ついた瞬間に自分のことを忘れてしまっただろう。しかし、紫水は奇
妙にも彼の名を知りたいと思ったのだ。

「黒崎一護だ」

「一護、いい名前ね」

「アンタもな、紫水」

その言葉を最後に、一護は尸魂界へと旅立った。

「また、会えたら会いましょう。一護……」

見知らぬ場所で

「ん…」

気付けば、一護は爽やかな風吹く丘に大の字に寝そべっていた。薄い青は高く、自分の状況など気にも留めずに手を伸ばした。

「空が、高え…」

上空を鳥が飛んでいった。しばらくぼうつと空を眺める。何も考えず、ただぼうつと。どのくらい時が経ったか。ふと気がつく。と空が茜色に染まっていた。

「やつべ、帰らなきゃ」

そう慌てて立ち上がったところで、一護はハタと気がついた。

何処に？

そう考えて一護は頭を抱える。

何処に帰るといふのだ、自分は。

それをきっかけにあらゆる疑問が、水が湧くように溢れ出た。自分は何者で、家は何処で、家族は何人いて、自分は何歳で、何が好きで、何が得意で、今まで何処にいて、何をしていた、何を、何が、何で、どうしてどうしてどうしてどうして　　ッ！

どうして　　！

何も知らない　　？

何かを思い出そうとしても、結局一護は自分の名しか思い出すことは出来なかった。

「こつちやいらねーよな…」

悲観に暮れる暇はない。

いつの間にか紫色に染まりつつある空を見上げて、一護は歩き出した。

フラフラと宛もなく歩き続ける。見知らぬ場所にポツンと取り残されたのだ。頼れる人物も身を寄せる場所もあるはずがない。とにかく歩くことしか、一護には出来なかった。

(どーすっかな…)

一護は途方に暮れて溜め息をついた。しばらく歩いたが、もう日が

暮れてしまったせいとか人に会おうこともない。先ほどまで暢気に空を眺めていた自分を怒鳴り飛ばしたかった。

(腹減った…)

歩いたせいとお腹も空いてきてしまい、気付けば履いていた草鞋の鼻緒が擦れて痛い。正直休みたかったが、ここで立ち止まる訳にはいかなかった。

(負けるな、俺！)

そう自分を叱咤して、また一步足を踏み出す。声をかけられたのは、その時だった。

「そのの、こんな時間にどうかしたのかい？」

薄暗い闇の中で、暖かな声音が耳朶を震わせた。

一護は弾かれたように後ろを振り向く。

そこには、ふっくらとした老婦人が佇んでいた。細い目はこちらを優しく見つめ、一本一本の皺には生きた年月が見て取れる。

「アンタは…」

「あんたはここに来たばかりのようだね」

まだ着物が新しい、とその老婦人は言う。自分の姿を改めて見直して見る。今まで気にしなかったが、確かに自分は真新しい濃紺の着物を着ていた。

「行く所はあるのかい？」

「ねえ、けど…」

「じゃあ、うちにおいで」

「うめえよ、婆ちゃん！」
「そうかい？嬉しいねえ」

一護は豪快にご飯をかき込んだ。成り行きでその老婦人の家へと連

れられ、さらにお腹が空いたと知らせる一護のお腹のために、親切にも老婦人が用意してくれた夕餉をご馳走になっているのだ。

「おかわりっ」

「はいはい。たんとお食べ。まだまだ食べ盛りだろうからねえ」

温かな笑みをそのままに、老婦人は一護から受け取った茶碗にご飯をよそう。

一護は茶碗を受け取ると、礼を言って今までの疑問をぶつけることにした。

「なあ、婆ちゃん。ここは何処なんだ？」

「そうか、一護はまだ知らないんだねえ。ここは尸魂界にある第一地区潤林安さ」

「じゅんりんあん？」

「そう、潤林安。運が良かったよ、一護。もし、更木や戌吊なんかにいたら、命はなかったかもしれないんだからねえ」

「そう、か ……？」

よく分からない単語も出てきて、正直全ての内容を把握することは出来なかったが、それでも自分の運が良かったことだけは分かった。

「一護、お前さえよければここで暮らすといいよ」

「え…、でも迷惑じゃねえのか？」

突然の申し出に、一護は喜びと驚きに顔を染め、しかしすぐに申し訳なさそうに眉を下げた。

「なあに、昔は二人も家族がいたんだよ。逆に賑やかになって、あたしは嬉しいくらいさ」

「え、じゃあその二人は？」

ふ、と老婦人は懐かしむかのように視線を膝へと移した。

「死神になるために、この家を出ていったんだよ」

「死神？」

始めに浮かぶのは、鎌を手を持った骸骨である。しかし、老婦人の家族が死神を目指したのだから、それが違った想像だということは分かった。では、一体何なのだろう。

「霊力のある、力を持つ者のことだよ。ちなみに、一護もお腹が空くってことは霊力があるってことだねえ」

「ふーん」

「一護は興味がないのかい？」

あまり関心の見られない一護の返事に、老婦人はやはり笑みを崩さないまま静かに尋ねた。すると、一護は「うーん」と唸って言う。

「興味がないつつーか……。死神について俺何も知らないし。霊力があるからって言われてもな」

苦笑する一護に、老婦人はやはり「そうかい？それも、そうだねえ」と笑って、それきり死神の話題は出なかった。

結局、一護は有り難く老婦人の家に住まわせてもらうことにしたのだった。

（死神……）

一護は布団の中で寝返りを打つと、頭の下に手を入れた。どうやら昔いた家族のものらしい布団は、一護にはやや小さく足先が少し出してしまう。

しかし、そんなことが気にならない程、一護は考えに耽っていた。

(なんか…)

何処か気になるその単語。もしかしたら、何処かでそれを聞いたことがあるのかもしれない。

そう過去を振り返るも、今日以前の記憶がない自分が聞いたことなどあるわけがなく、溜め息をついて終わる。

(気のせい、だよな?)

納得しない自分に気がつかないふりをして、一護はすぐそこまできた睡魔に身を委ねた。

勝利の代償

瀨霊挺六番隊執務室

「十三番隊第四席、朽木ルキアです。書類を届けに参りました」

「おう、入れよ」

中から聞こえた了承の返事に、黒髪に紫の瞳を持つ朽木ルキアは戸を開けた。中にいたのは赤毛に額の手拭いが特徴的な六番隊副隊長阿散井恋次である。

「真面目に仕事をしているようだな」

口元に笑みを浮かべて片手を挙げて挨拶した恋次は、ルキアのその台詞にげんなりと肩を落ち込ませた。

「お前、会ったそうそうそれかよ……」

「冗談だ」

「冗談つて……」

「で、恋次。兄様は居らぬのか？」

キヨロキヨロと辺りを見回すルキアに、恋次は大きくため息をついて“これだからブラコンは”と悪態をついてから答える。

「隊長ならたぶん、資料室にいますと思っせ」

「そうか…、せっかく兄様にわかめ大使の人形焼きを持ってきたのだが」

「そ、そうか…。そりゃあ、残念だったな……」

ルキアの手にある奇妙なキャラクターのプリントされている包みを見ない振りをして、恋次はルキアから書類を受け取った。それを新たに書類の束へと加えると、恋次はひとまず休憩しようとして席を立ち上がった。

「まあ、座ってるよ。今、茶あ淹れてくるからよ」

休憩しようぜ、と給湯室へ向かう恋次の背中に、ルキアは「すまぬな」と礼を言っただけで送った。

「そっぴゃあ、あのヘンテコなぬいぐるみは元気にしてんのか？」

「ぬいぐるみ……。おお、コソのことが」

ルキアは出された鯛焼きに手を伸ばしながら返事をする。それを見て恋次もつられるように鯛焼きを手にとると、「そっぴゃあそんな名前だったな」と遠まわしに肯定した。

「相変わらずだ。今朝も一緒に行くと言わぬものだから、踏み潰して来てやった」

「お前、朝から何やってんだ……」

ありありとその様子が想像出来、恋次は呆れたように息を吐き出した。昔から変わった性格のぬいぐるみだったが、生活が変わった今でも相変わらずらしい。

「ま、いいじゃねーか。元気になったみたいだよ」

ふと苦笑して言う恋次に、ルキアは目を伏せた。

「ああ、そうだな……」

ここに来た当初は、本当にコンなのかと目を疑う程に落ち込んでいたものだ。だが、それも仕方がないのだろう。彼らは何だかんだで仲がよかったのだから。

ルキアは当時を思い出すように目を細める。それを見て、何を思い出しているのか手に取るように分かった恋次も、湯呑みを手にとってまま静かに言った。

「十年になるか？」

「ああ、早いものだな」

藍染等の叛乱から十年　　。

自分達はその戦いの勝利を手にし、代わりに戦友を失った。

彼は死神であり人間。

その間には大きな隔たりがあることは知っていた。住む世界、生死、規律。

だが、それすら忘れる程に彼は自分達に馴染み、当たり前前の存在かのように仲間となった。

共に苦しみ、傷つき、もがき、戦った彼との別れを、誰もが信じ堅く思ったのは言うまでもないだろう。

しかし、死神の世界において中央四十六室の決定は絶対。反論した所で受け入れられはらずもなく、その日はやってきた。彼は最後まで笑っていた。

離れてたって、魂はお前らを忘れない。だから、待っていてくれよな。死神になって、会いに行くからよ。

そうして、彼は自分達に関する記憶を失った。

隠密機動による監視も、五年経って異常がないと分かると外されたため、彼が今どうしているか知る術はない。現世任務など、滅多なことと言い渡されるものではないのだから。

ルキアも無席から十三番隊の四席になった。未だに三、五、九の隊長は埋まっではない。そう簡単に隊長の座は務まるものではないのだ。

もちろん、斬拳走鬼のみにおいても言えるが、特に必須条件である卍解は努力と年月で会得出来るものではないのだ。

死神における十年の月日で埋まるものではない。しかし、それでも五番隊では雛森が復帰するなど、あの事件の傷跡は着々と癒えつつある。

彼という仲間を失って。

あと何十年待てばいいのか。

死神にとって、そう長くもないはずの数十年が今のルキアにはもどかしい。早く、とは間違っても口に出来ない。

それでも　　。

「待っておるぞ、一護」

会いたいと思う気持ちだけは、どうか　　。

太陽のような人だった

静霊挺十番隊執務室

「へー、現世じゃこういう服が流行ってんのねー」

「……………」

「あら、これ可愛い！でも、ちょっと高いわね」

「……………」

「靴も欲しいしー。あ、でもバッグも新しいの買いたいのよねー」

「っ、松本！仕事はどうした、仕事は！」

ソファに寝そべっていた乱菊は、突然の怒鳴り声に肩を跳ねさせた。

驚いて声の主を見れば、筆を片手にこちらを睨みつけている自身の上司、十番隊隊長日番谷冬獅郎がいた。

「やだ、隊長。そんな大きな声出したら吃驚するじゃないですかあ！」

「お前な…」

冬獅郎は眩暈のする眉間を押さえたため息をついた。全く、この部下は一体自分を何だと思っているのか。

普通の隊では、上司が真面目に書類と向き合っている側でソファに寝転がるなどあり得ないはずだ。というより、あり得たら困る。

それだと言うのに、何故目の前のこいつは、必死に雑務をしている上司を放って雑誌を読んでいるのか。更に言えば煎餅まで貪り食っている。

そんな様々な怒りを堪え、賞賛に値する冷静な声音で言った。

「早く仕事しろ、いつまで寝そべっているつもりだ」

「えーっ、休憩しましょうよーっ」

それなのに、乱菊はそんな冬獅郎の努力を水の泡の如く潰しにかか

「駄目だ。昨日、十三番隊の応援に行っている隊士から報告があった。あれまとめとけ」

「はい」

問答無用とばかりに言ってやれば、乱菊は渋々と机に向かった。

「そついえば、たいちよー。あの子が行ってる所って確か…」

「……ああ」

乱菊が最後まで言わずとも、冬獅郎には何が言いたいか分かった。た。

思い出す　　。

太陽のような髪をしたあの少年を　　。

己が嘗ての親友との決着をつけた時、彼には“死神代行風情に”という暴言を吐いた。当時、そんなに付き合いのなかつた彼に、自分に関わる必要はないと思つてのこと。

それなのに、彼はそんな自分を最後まで信じ、正面から向き合い、そして自分の間違いを正してくれた。彼は自分の、十番隊の恩人だ。ろう。それからちよくちよくここに顔を出すようになった。

もちろん六番隊の副隊長や十三番隊の彼女に比べれば劣るも、やはり何かと接点が多かった冬獅郎にも、いつの間にか仲間の意識が芽生えていたことは間違いない。

正直に言えば、自分は彼奴を嫌いではなかったのだろう。

「どっかで会ったりしてんですかねー」

依然として書類から目を離さずに乱菊は言う。それに冬獅郎が「さあな」と返して、その話は終わったのだった。

もう、彼奴はただの人間なのだ。

乱菊の仲間に会いたいという気持ちに気付かないふりをすると同時に、冬獅郎は自分にそう言い聞かせた。

第一章

花菰 | 別れ | 【完】

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
:
.
.

太陽のような人だった（後書き）

とうとうやってしまった…（…）

いやね、前々からこういうジャンルの携帯小説は読ませてもらってたんですよ。特に日番谷くんの。

じゃあ、何で書き始めたかというと、一護が死神代行から死神になる話を書きたかったんです！

趣味丸出しの話になりますね。

楽しんで読んでいただけたら嬉しいです。

事件のプロローグ(前書き)

第二章

紅葉葵

―優しさ―

事件のプロローグ

技術開発局

「ふム」

一人の男、否、人間と言つてもいいのかさえ分からない奇つ怪な容姿をした男が、キーボードを弄る手を止め、あるモノを見上げた。

彼の名は涅マユリ。白い羽織^{レッキ}を着ていることから分かるように、歴とした十二番隊隊長である。

「成る程ねエ。光の屈折を利用し、姿を消すという詭力。加えて靈力まで消せるとなると、そりゃあ厄介だったはずだヨ。だが」

涅はにい、と口元を歪めると続けて言う。

「一番厄介なのは知能を持っていることのようなダネ。死神を避けて霊力の高い、ただの魂魄を狙っていたと言っじゃないか」

彼が見ていたのは、大きな円柱状の水槽に入った虚だった。それは多くの管に繋がれ、意識はない。

「涅」

つらつらと述べていくマユリを、凜とした声が遮った。それにピタリ、とマユリは話すのを止めると後ろを振り向きその姿を捉える。

「何だネ、日番谷隊長。君がこの虚を連れて来たから、わざわざ説明してやっているんじゃないか」

そこにいたのは十番隊隊長日番谷冬獅郎だった。腕を組み、いつもの表情でマユリを睨みつけている。

「確かにそうは言ったが、俺は早々に奴らの居場所を特定する方法を聞きたい」

「ふんっ、生意気な餓鬼だヨ！だが、まあいいだろう。この虚は実に興味深かつタ」

冬獅郎は“餓鬼”の単語に眉をしかめるが何とか反論しようとする口を抑える。今は口論をしている暇などないのだ。

そもそもの発端は現世に大量発生した虚だった。それは姿・霊圧共に感知出来なくする厄介な虚。

加えて、涅の言う通り知能を持つためなかなか捕らえられずにいる。それを何とか一体捕らえ、それを尸魂界に持ち帰ったのだ。その人物が、ちょうど応援で出ていた十番隊士だったため、こうして冬獅郎が技術開発局に訪れているのである。

「で、方法はあるのか？」

「勿論だヨ。方法は二つある。まず一つめは太陽そのものを隠すこと。光の屈折によって隠しているんだ。太陽がなければ姿は隠せない。君なら出来るダロウ？」

「ああ、だが」

「分かっているヨ。君が現世に行けないから、ワタシの所に来ていることくらいは。馬鹿にしないでくれたまエ」

ならば、さっさと話せばいいだろう、そんな気持ちを押し殺す。

「ネム！」と、マユリは声を上げる。すると、暗闇の中から「はい、マユリ様」の声と共に彼女は現れた。十二番隊副隊長長湊ネムである。

「これをどうぞ」

ネムは両手で小さなケースを差し出した。

「これは？」

中を開ければ、中には方位磁石のような物が現れる。見たままではそれ以外何も変わったところは見られないが、ただ一つ。壊れたようにその方位がユラユラと揺れ、安定していない。

「異常放射線探知機」

「異常放射線探知機？」

「そう、名前のままダヨ。不自然に屈折している光を探知し、その方向を指し示すように出来ている」

それだけ言うと、マユリは再度虚に向き合い言う。

「それを使えば、虚の居場所は分かるはずだよ」

「そうか。礼を言う、涅」

そうして冬獅郎は技術開発局を去っていった。その後ろ姿を暫し見送ると、マユリも水槽の虚に背を向けた。

「行くヨ、ネム！のろのろしているんじゃない、この雌豚ガ！」

「はい、マユリ様」

馴染んでいく

流魂街第一地区潤林安

「婆ちゃん！茶はないぜ？」

「ああ、確かこないだ淹れたので最後だったねえ」

日も傾いてきた頃、お茶でも飲もうと戸棚から茶筒を手を取った一護が中を覗き込んで言った。

それに茶菓子を用意していた老婦人が思い出すように言えば、一護は「じゃあ」と言う。

「俺、ちょっと行って買ってくるわ」

「ああ、悪いねえ。一護」

「いいって！んじゃ、行ってくる」

「気をつけて行くんだよ」

一護がこつちに来てから、すでに数十年が経とうとしていた。もはや、ここでの生活も慣れたもの。老婦人ともすでに家族としての仲間となった。

そんな一護と老婦人の楽しみは午後のお茶の時間である。

「よお、一護！買い物かい？」

「おや、一護。どこへ行くんだい？」

「一護兄ちゃん！」

潤林安でも、一護はすでにこの住民として馴染んでいるようで、至る所で声をかけられたりもしている。その度に、愛想のいい快活な笑顔を浮かべて対応していく。その屈託のない笑みも、街の人々から好かれる由縁の一つである。

「おっさん、いつもの茶あくれ！」

「あいよ！300環な」

茶葉を受け取ると、一護は急ぎ家に戻るべく、駆け足で帰ったのだ。

「へえーっ、本当素直じゃねえんだなあ。その冬獅郎ってのは」

茶の時間の専らの話題は、死神になったという二人の家族の話だった。

どうにも忙しいらしいその二人は、ここへ帰ることも出来ないらしく、一護はまだ彼等に会ったことはない。

しかし、老婦人から聞いた話では名を日番谷冬獅郎、雛森桃と云うらしい。話を聞く限り、桃は穏やかで優しく、とても頑張り屋さんらしい。可愛らしい娘だそうだ。

対して、冬獅郎はどうにも可愛げのない奴らしい。でも、非常に優しく努力家らしい、しかも自分を省みずに他人を優先するとか。

詰まるところは、目の前の老婦人の自慢である。しかし、そこまで言われてはそんな二人に会ってみたくなるのも仕方のないこと。だが、向こうは忙しくて帰ってこれないのだから残念だ。

「会ってみたいな、その二人に」

「そつだねえ。儂も、一護を紹介したいんだがねえ」

山の端に隠しつつある赤い顔を眺めながら、二人はゆっくりと茶を啜ったのであった。

《 》

聞こえる…。

《 》

声が、聞こえる…。

《 》

お前は…。

《 か。 》

お前は…。

《聞こえぬか、一護》

「ッ！」

一護は勢いよく目を開いた。視界に広がるのは、ここ何年かで見慣れた染みのある天井。

荒くなった息を整えつつ、ゆっくりと身を起こし、何気なく首元に手を這わせれば、汗をびっしょりとかいていた。

気持ちが悪い。

一護は気分でも紛らわそうと、隣で寝ている祖母を起こさぬようそっと布団を抜け出した。

もう真夜中を過ぎているのだろう。真上にぼっかりと月が浮かんで
いる。

(何なんだ、今の夢)

立ち並ぶビルのうちの一つに己は佇んでいた。ただ、妙なことにそのビルは全て空に対し水平で、その上に自分は立っていたのだった。その遠く、そのずっとずっと遠くに影はあった。

何かを訴えているのは分かるのに、まるで何かに遮断されるかのよう
に自分の耳には届かない。

(でも)

自分はその声を知っている。

それだけは確かだった。

「おや、一護。どこへ行くんだい？」

唇の片付けをしている祖母は、そそくさと出かける準備をしている
一護の背中へと声をかけた。

「ん？ああ、ちょっとガキ共と遊ぶ約束してんだ。夕方には帰ってくるから」

「そうかい？気をつけるんだよ」

「ああ！行ってくる」

一護は手を挙げて駆けて行った。この先に待つ残酷な運命をもち知らずじつ…。

事件勃発

浄霊挺十番隊執務室

「たいちよーっ、書類が終わりませーんっ」

「知るか。溜めてたお前が悪い」

サボったツケが回って来たのか。夕方の五時を回った段階で未だ、乱菊の机に積み上げられた書類の塔は三つ。対して、冬獅朗はすでに本日付けの書類は全て終わらし、お茶を啜りながら一息ついていた。

「たいちよー」

「断る」

「まだ、何も言ってないじゃないですかっ」

そう泣きながら、それでも筆は休めない。逃げようにも椅子に縛りつけられてはそれも出来ず、否応なく書類を仕上げさせられているのだ。

「どうせ手伝ってくれだろう」

「……………」

返事はない。凶星らしい。

「今日はそれ全部終わるまで帰さねーからな」

「っ、たいちよーの鬼ー！」

乱菊がそう叫んだその時だった。二回のノックの後に声がかかる。

「七席の竹添です。日番谷隊長、松本副隊長はいらっしゃいますでしょうか？」

「入れ」

冬獅郎の返事に戸が開いた。そこには頭を垂れた一人の死神「ウヘ」がいた。

「失礼します。現世任務についている隊士から書類が届きました」

竹添は手に持った書類の束を冬獅郎に渡すと、視界に乱菊に捉え目を丸くした。それもそうだ、自隊の副隊長が椅子に縛り付けられているのだから。それを書類に目を遣りながらも分かったのか、「気にしないでくれ」とだけ言う。

「どうやら、あの虚は片付いたらしいな」

ふと、冬獅郎は顔を上げて問うた。

「他に預かった物はないか？」

「いえ。書類以外は何も」

不思議そうに答える竹添に、冬獅郎は「そうか」と頷いた。

（返し忘れたか…？）

少し眉をひそめてから、書類に不備がないのを確認し、「ご苦労」と言って書類を机に置いた自身の上司を見て竹添は執務室を出て行く。

乱菊はそれを見送って、書類を睨みつけるように見ている冬獅郎を力無く見た。

「たいちよー？」

「どつやら問題の虚は片がついたらしい」

「あら、良かったじゃないですか！面倒そうな虚でしたもんね」

一気に表情を明るくする乱菊に、冬獅郎もわずかに表情を柔らかくして「そうだな」と頷いた。

しかし、その安心も束の間だということを二人はすぐに知ることになった。

ドオオオオオン！

轟音が滞霊挺に鳴り響く。瞬間襲う禍々しい霊圧。

「何っ!?!」

乱菊は厳しい視線を窓の外へと向ける。同時に同じ厳しい視線を窓の外へ視線を向ける冬獅郎は、黙ったまま霊圧を探っているようだ。

(霊圧を感じない …?)

一瞬感じた霊圧。それが今では全く感じられない。外が騒がしくなる中、冬獅郎は嫌な心当たりに眉をしかめた。

そして、その予感は的中することとなる。

ひらり、窓から地獄蝶が舞い込んできた。

《全隊長格に告ぐ。技術開発局から実験体の虚が逃走。虚は霊圧・姿を自由に消すことが可能。それぞれ虚を捕まえることに尽力せよ》

「一護兄ちゃん、こっちこっちー！」

「おっそいよー！」

「ちよ、少し休憩しようぜ…」

太陽も沈み始めた。橙の光が辺りを包み始める。そんな暖かな色の中で、一護は膝に手をつけて大きく息を吐き出した。それから勢いよく体を上げて、額の汗を拭う。

もうどのくらい遊んだか分からぬというのに、子供達はまだまだ遊び足りぬようだった。だるまさんが転んだ、かくれんぼ、鬼ごこと。一護としても、不思議と子供と遊ぶことを嫌だとは思ったことはないが、正直今は体力的にきつい。

「駄目だよー！まだまだ遊ぶの！」

「マジかよ…」

鬼ごことをするのか、バラバラに散っていく子供を見て一護は膝に手をついた。それから勢いよく体を上げて、はぁーっと肺の中の空気を全部吐き出す。そして、追いかけてくるのを待つかのようにこちらを見る子供達に、仕方ないとも言っような笑みを見せたのだった。

「んで、俺が」

そう彼は愚痴を零した。彼の名は榛名太一、十番隊末席である。

彼は自分が手に持つ四角いケースを見て、どうして自分がと眉をしかめる。本来これを返すべき彼女は、返し忘れたのは自分だということに、忙しいことを理由に自分にこれを押し付けて現世へと去って行った。最近、いろいろと厄介な虚の出現があるのだという。

末席である自分が隊長格と話す機会はそうそうない。それなのに急に執務室へ行けと言われて緊張しない訳がないのである。自隊の隊長である日番谷冬獅朗は彼の最も尊敬する人物である。もちろん、自隊の隊長を尊敬しない者は護挺十三隊にはいない。それは十番隊にも言えることであり、十番隊の隊員等はそれはもう、隊長、副隊長を尊敬し崇めている。

十番隊は護挺でも、最もバランスの良い隊であると彼は自負している。個性の強い隊長格の中で貴重とも言うべき真面目さと頭のキレ。斬拳走鬼全てにおいて優れ、その事務能力も高い。そんな彼に影響されてか、隊員達も真面目と評判なのだが、そこで固くなりすぎないのは副隊長である松本乱菊によるところが大きい。

サボり癖は難点なのだが、戦闘能力は申し分ないし副隊長としての

経験も積んでいる。その妖艶な容姿は護挺でも噂立つ程であるが、それを鼻にかけず、誰とでも気さくに話す彼女を疎ましく思う者などいるはずもなかった。

簡単に言えば、彼にとって十番隊の隊員ということが誇りであり、だからこそ彼らと話すのは緊張するということ。

加えて、彼はここ数十年で死神になったばかり。ちなみに、隊長と話すのはこれが初めてである。嬉しいような、でもやはり逃げ出したい衝動に駆られるのも仕方がないではないだろう。

(くそ、恨むぞあいつ…っ)

平隊士は隊長に会うことは基本的にない。何故なら隊長と関わることは全て席官の仕事になるからだ。だから、幼なじみの彼女が自分に頼むのも可笑しくはないのだが、どうしても他の人に頼めばよかったものをと、彼は思わずにはいらなかった。

そうこうしているうちに、執務室が近付いてきた。ここまでくるのも初めてだ。知らず、太一は息を詰めていた。

この角を曲がればすくだ。

手に小箱を握り締め、そして。

ドオオオオオンー！！

「ッ！」

感じた霊圧に近く窓へ駆け寄る。見えるのは遠くから上がる土煙。あの方向にあるのは技術開発局である。

(霊圧が消えた!?)

わずか数十年で末席に登りつめたのだ。太一はこの出来事をしっかりと感じ取り、目を見開く。

隊長から召集がかかったのは、そのすぐ後のことだった。

「これから班に別れ、それぞれ虚の搜索に当たってもらおう！」

冬獅郎は集まった隊士達を見回してそう高らかに言う。後ろには乱菊を従え、背中には自身の刀である氷輪丸を背負い、すでに戦闘に向けて感覚を鋭くしていた。

そんな冬獅郎を離れた所で聞いていた太一は懐に手を当て、どうしようか悩んでいた。すっかり渡す機会を逃してしまい、やむなく懐にしまったのだが、流石に今の雰囲気の中渡しにいけない。

この小箱が何かは知らないが、渡すべきか。否、今はやめた方がいい。

太一はそうそうに諦めた。

「隊長、確かあの虚の居場所を特定出来る方位磁石があるんじゃない？」

「ああ。だが、あれは俺が頼んで作ってもらったものだ。量産はしていない。技術開発局が現在データを元に作ってはいるが、時間がかかるそうだ」

塀の上を駆けながら、二人は例の虚を探していた。班ごとに地獄蝶を配布し、搜索させている。見つけた場合はすぐに連絡させるように言っているが、今のところ何も連絡は来ていない。

二人は適当な建物の屋根の上で止まると辺りを見回した。

「聞いてはいましたが…、本当に霊圧を感じないなんて…」

乱菊は肩にかかった髪を鬱陶しげに振り払って言う。

「ああ、戦闘能力自体は大したことはないらしい。厄介なのは、霊圧と姿を消せること、そしてその繁殖力にある」

「繁殖力って…」

「ああ、急がないと大変なことになるな」

「探せって言われてもよぉ……」

その頃、阿散井は道のだ真ん中で途方に暮れていた。自身の隊長である朽木白哉に言われ、こうして虚を探しているが、姿、ましてや霊圧を消せる相手をどう探せと言うのか。

「霊圧消されちゃあ探すもんも探せねー」

「恋次！」

名を呼ばれ振り返った恋次の目の前に、小柄な女が降り立った。

「ルキアか」

「あぁ。どうだ、見つかったか？」

「いや……。にしても、技術開発局も面倒なもんを逃がしてくれたぜ」

「場所を特定せねば、我々死神も倒しようがないからな」

ルキアが苦々しく顔を歪めた時、恋次はふと昔の出来事を思い出す。それはまだ、彼が自分達と共に戦っていた時のこと。

「そついやあ、前も霊圧を感じられねー敵がいたよな」

「ん？ああ、バウントか。だが、あの時はりりん達がいたからな」

「だよなあ。今回も彼奴らみてーに場所を特定するもんがありやあ楽なのによ」

「たわけ！それがないから、こうして苦勞を」

ルキアはぴたりと言葉を止めた。何かを考えるように握った拳を解き、顎に指をあてる。

「ル、ルキア？」

突然考え込むルキアに、恋次が怪訝そうに声をかけたその時、ようやくルキアは顔を上げた。

「思い出したぞ！」

すつきりしたという表情のルキアに、恋次はますます怪訝げに首を傾げる。だと言うのに、「そうだ、そうだ」と一人納得する彼女に、恋次は待ちきれずに問いただした。

「おいおい、一人で納得してんなよ。何を思い出したってんだ」

そして、ルキアはようやく説明をし出した。

「確か、現世に同じ虚が出現した時に場所を特定出来る方位磁石を作ったと聞く」

「ん？ああ、異常放射線探知機だろ？だが、大量生産するにはまだ時間がかかるって」

そんなことかよ、と肩を落とす恋次。それにルキアは「馬鹿者！」と怒鳴った。

「私とてそれくらいは知っておる。言いたいことはそれではない」

「じゃあ、何だよ」

ルキアの言いたいことが分からず、恋次は次を促す。

「もしかすると、たった一個ある探知機が今、尸魂界にあるかもしれぬのだ」

「なっ！マジかよ！」

「ああ。十番隊の隊士が一人、今空座町に応援に来ておるのは知っているな？」

「ああ、最重要重霊地だからもう一人担当を増やすとか何とか…。それがどうした」

「そ奴は、私が無席だった頃に出会った友人でな。たまに話すのだが、先日連絡があつたのだ。今度書類とその探知機を返しに行くから会おう、と」

そこまで話されれば、恋次でも先が読めた。つまり。

「おいおい、待てよ。まさか、その今度つてのが、今日つてわけじゃあ…」

「そのまさかだ。結局互いに忙しくてな。会えなかったから忘れていた」

すんなりと頷いて見せるルキアに、恋次はひくひくと口元をひきつけさせた。

「てめ、馬鹿か！なんで、そんな重要なこと忘れてんだよ！」

「だから、“会えなかったから”と説明したではないか！」

「そういう意味じゃねえだろ！」

口論が激しくなる前に、ルキアは「とにかく！」と話を区切るとある人物の霊圧を感じる方へと目を向けた。それに恋次も顔つきを変える。

「日番谷隊長のもとへ行くぞ！」

「おうよー！」

そして次の瞬間、二人はその場から姿を消したのだった。

その頃、双極丘の麓にある屋根の上を横切る影があった。常人では姿を捉えるのさえ難しいだろうそれは、死神独特の歩法・瞬歩である。

乱菊は少し強めに地を蹴り、数歩前に行く冬獅郎に追いつくと声をかけた。

「隊長、やはり見つけるのは困難みたいですね」

「ああ。予想はしていたが、ここまで姿を現さないととなると長期戦になることも覚悟しなくちゃならねえかもな…」

「そんな…、あんなのが増えるなんて…」

考えただけでも嫌になったのか、乱菊は顔をしかめる。

ダンツ、と音をたてて二人は立ち止まった。少し高い場所にある建物の屋根の上からは、動き回る死神の姿を見ることが出来る。

「奴は知能が高い。恐らく、俺らが探していることに気がついてい

るんだろっ」

「ええ」

「加えて、今の奴は霊力が少ない。余計慎重に」

そこで、冬獅郎は大きく目を見開いた。

「隊長？」

どうして今まで気がつかなかったのか。奴は知能が高く、力のある者には手を出さない。しかし、霊力が少ない今、力を手に入れるためには霊力を喰らうしかないのだ。そうになると、奴が狙うのは限られてくる。

それは　。

(魂魄　ッ)

そこまで考えが至って、冬獅郎は顔を歪めた。しかし、すぐに顔を引き締めて口を開いた。

「ついて来い、松本」

「どちらへ？」

「流魂街だ」

一陣の風に羽織りが翻る。冬獅郎は一步足を踏み出しつつ、確信を持って告げた。

「奴はそこへ現れる」

カシャン、と瓦が音をたてた。

「にしても、流石に隊長つてのは霊圧消すのが巧いな」

移動しながらじゃ分かんねえ、と恋次は愚痴を零した。

カシャン、とルキアもまた地を蹴ってからかうように「貴様は霊力操作が苦手だからな」と言えば、恋次は頬を赤くして言い返した。

「な！それは　ッ」

「ふ、言い返せぬか」

にや、と笑う。

それに恋次はカツとなって怒鳴った。

「そんな言う程じゃねえだろ！」

だが、まだルキアも負けてはいない。

「赤光砲もまともに撃てぬ奴が何を言う。十分貴様は下手くそだ」

「な、てめ！どうしてそれを…！」

「兄様が教えて下さった」

（朽木隊長おお！）

恋次は常に冷静で妹に甘い、自身の隊長を思つて涙を流す。しかし、言われっぱなしは気に食わない。恋次は知らず、叫んでいた。

「ででで、でも！少なくとも、彼奴よりは巧いぜ！」

瞬間、ルキアの目が大きく見開かれた。続いて、自分が何を言ったのかも気付いた恋次も目を見開く。ふ、とルキアが顔を前に背けた。しまった、と顔を歪める。互いに約束をしたわけではない。しかし、ここ十数年で彼の話題を出さぬことが暗黙の了解となっていたのに。

自然と口をついてしまう程に、まだ彼の存在は自分に染み付いてしまっているのか。

しばらくの沈黙の後、ルキアはポツリと言った。

「分かっておる…」

ルキアの顔は、前を向いてしまっていて見えなかった。だから、恋次には分からない。どんな表情をしているかなんて…。

「彼奴は、霊力操作が心底下手くそだったからな　　！」

その声は明るかったが、どうしてか恋次には泣いているようにしか思えなくて。

カシャン、と瓦の音が虚しく響く。

しばらく、沈黙が続いた。だが、それはある人物によって破られる。

「恋次！」

ひっそりと拳を握り締めた恋次に、いつもの力強い彼女の声がかかった。

「日番谷隊長がいらっしやっただぞ！」

ルキアの見つめる先、そこには探していた冬獅郎が松本を従えて移動していた。

「日番谷隊長！」

流魂街に向かう冬獅郎の背中に声がかかった。その力強い声には聞き覚えがあり、足を止めて振り返れば目の前に小柄な少女と赤い髪が特徴的な男が降り立った。

「朽木に阿散井……」

冬獅郎は二人の姿を認めると、今度は体ごと振り返る。

「あんだ達、自分の担当区域はどうしたの？」

「それは…」

乱菊も驚いたように言う。

「悪いが、今は急いでいる。大したようではなければ、後にしてくれ」

「急いでる？日番谷隊長、何かあったんスか？」

恋次は冬獅郎の台詞に顔を厳しくして問うた。すると、冬獅郎は少し逡巡してから答える。

「虚の出現場所に心当たりがあつてな」

「なっ、それは本当ですか!？」

「ああ、奴らは魂魄を狙っている可能性が高い。流魂街に行く俺は見ている。だが、なにぶん流魂街は広いからな。急ぎ向かった所だ」

それだけ冬獅郎が言うと、ルキアと恋次は頷きあつた。そして、ルキアが「そのことなのですが」と切り出す。

「もしかすると、場所が特定出来るかもしれません」

十番隊の二人は大きく目を見開いた。それもそうだろう、それさえ出来れば全ては上手くいくのだ。まあ、それが出来ぬから問題だったのだが。

「本当なの！？朽木」

「はい」

頷くルキアに、冬獅郎は冷静に問うた。

「どうしてそう言える。探知機のことを言っているなら、あれが完成するにはまだ時間がかかるようだ」

「それは分かっております。私が言っているのは、以前日番谷隊長がお頼みした探知機のことです」

冬獅郎は眉をひそめた。

「だが、あれはまだ返って来ていない」

「いえ、その探知機は今日、ここにあるはず」

冬獅郎はますます眉をひそめた。黙って先を促す。ルキアはその意図を察すると、先ほど恋次に説明したことを冬獅郎達にも説明した。冬獅郎は顔を驚きに染めるが、すぐに冷静さを取り戻し、松本、と自らの副官の名を呼ぶ。乱菊は頷くと、各班の隊士達に指示を出した。

「皆、聞こえる!？」

その声は瀟霊挺を巡る各班へと届いた。

《あなた達の中に、小さな箱を持つてる人いない?》

地獄蝶から響く副隊長の声に、立ち止まって聞く者、駆けながら者様々いる。だが、同様なのは誰もが一言も漏らさぬよう耳を傾けていることだ。

《黒い箱よ。中身は方位磁石、その針は北を指していないわ》

しばらくは、何のことか分からなかった。しかし、各班の中のうちの一人が、乱菊の説明にふと心当たりを見つけたのだ。太一である。

ハッ、と視線を胸へと向ける。

《持っていたら、すぐに教えてほしいの!》

「おい、誰か持っている奴いるか」

班の中で最も席次の高い竹添が、班の隊士に問いかける。皆が首を横に振るなか、太一ひとりだけ胸からある物を取り出した。

「お前、それ…っ」

竹添は、太一の持つ物に目を大きく見開く。そこにあつたのは、まさしく黒い小箱、中には北を指していない方位磁石があつたからである。

しかし、すぐに我にかえると地獄蝶に向かって声を上げた。

「こちら三班」

「

《こちら五班！誰も持っていません！》

《二班！持っている者無し！》

《こちら七班！誰も知らないようです！》

ルキアは聞こえてくる声に顔を俯けた。全部で班は十。さっきので八回目の伝達であった。

もしや、自分の勘違いだったのであろうか。まさか、返しに来る日は明日だったのかもしれない。否、しかし間違いなく今日であったはず。だが。。でも。。

そんな堂々巡りが続き、ついに九回目の“持っていない”が聞こえてきた。流石に、皆も不安が現れてきたらしく、恋次や乱菊の表情は冴えない。ただ、冬獅郎だけがいつもの表情と全く変わらないことだけが、ルキアの救いだった。

「なあ、ルキア…。やっぱり…」

恋次が口を開いた。ルキアは何も言うことが出来ず、顔を俯ける。

「隊長、」

「まだ早い。三班からの伝令はまだだろう」

「ですが」

待っているくらいなら、流魂街に行つて搜索をした方がいい。これが乱菊の考えであつた。しかし、冬獅郎としてはまだ最後の望みに託したかつたのだ。変に動き、虚の居場所と見当違いな方へ向かうよりは余程効率が良い。

「心に余裕を持って、松本。焦つては何も良いことはない」

「…はい。隊長が仰るなら…」

その時だつた。

《こちら三班！ありました！黒い小箱、中身は方位磁石です！》

一同に希望の光が宿る。乱菊はすぐに対応した。

「方角は！？」

《北東を指しています！》

「隊長」

それを聞いて、乱菊は指示を仰ぐために冬獅郎を見る。

「今、お前達は何処にいる」

《白道門より一キロ南です》

「近いな」

その一言で、乱菊達は冬獅郎が何を考えているかが分かった。

「いいか。その方角に敵はいる。場所さえ分かれば敵に大した能力はない」

返事はない。しかし、向こうに緊張が走っていることは容易に分かった。

「俺達もすぐに向かう。先に行き、魂魄を襲う前に」

冬獅郎は足に力を込めた。乱菊も、恋次もルキアもそれに習う。

「倒せ」

次の瞬間、四人はその場から消えていた。

真実はお前の中に

まるで身体全体が心臓になったこのようだった。ドクン、ドクン、
という速い鼓動が耳を突き、荒い呼吸が口から漏れる。

胸が苦しい、痛い　ッ。

そして何より、後ろに迫る脅威が恐ろしかった。

それでも、膝が震え、足がもつれようと、彼が走るのを止めない
のは、ひとえに生きたいという想いに他ならなかった。

そもそも、何故こうなったかと言えば、それは数刻前に遡る。

「一護兄ちゃんの負けー！」

草村に座り込んだ一護を見て、バラバラに散っていた子供達が集ま

ってきた。

結局、あれからまた一時間程鬼ごと続けた結果、一護はとうとう体力の限界となったのである。一護は一度大きく息を吐き出し、呼吸を整えてから、自分の前にしゃがみ込む子供達に観念したように言った。

「分かった！俺の負け。だから、もう勘弁してくれ！」

すると、満足した子供達も、今度は素直に「いーよー」と頷いた。それに可愛らしさを感じ、一護は「よしっ」と頭をガシガシとかき回す。

「やめろよー」と言うが、顔は素直に喜びを表していた。

一護はだいぶ疲れがとれたと見るや、重たい腰を上げる。ふう、と軽く息をつけば、習うように立ち上がった子供達に「行くか」と言ったのだった。

嫌な寒気がしたのは、それからしばらく経った時のことである。

(な、んだ ……)

背中をざわり、と撫でられるような感覚。襲いかかる圧迫感に一護は冷や汗を津垂らせる。

ザアア、と風が草原を揺らした。

「一護兄ちゃん？」

突然黙った一護に、子供が首を傾げた。子供は何も感づいていない。しかし、一護の不安を誰もが察して、瞳を揺らしていた。一護は八、と我に変えると慌てて笑みを浮かべた。

「わ、悪い！ちょっと考え事してた！」

それでも、子供の瞳から不安が消え去ることはない。だが、今の一護にそれを気遣う余裕はなかった。ここにはいけない。早く立ち去れ。そう自分の本能が警報を鳴らしている。

一護は両の手で二人の子供の手を取り、笑顔を意識して「暗くなつたから早く帰ろうぜ」と促した。先程よりも早足で歩けば、子供達は半ば駆けるようになってくる。それでも、疑問を口にしない辺り、子供達は聡いと思う。

始めは早足だった一護の足は、今では駆け足となっていた。後ろからちゃんと子供達がついてくることを確認しつつ、一護は焦っていた。

早く、早く　ッ。

ひたすら帰るべき場所を目指して。しかし、無情にもそれは現れた。ぬっ、と自分達の頭上が陰る。

(何だ　ッ)

一護は振り向いた。振り向いてしまった。そして見てしまったのである、未知の脅威を。

「何だよ、こいつ!」

白い仮面に、胸に穴のあいた化け物がそこにいた。そいつは一護と目が合うや否や、にやりと笑いケケケ、と声をたてる。

見ッケタ…ッ。

「一護兄ちゃんっ」

名を呼ばれ、一護が顔を下に向けた。そこには泣きそうになるのを必死に堪え走る子供の姿があった。

「　　ッ！頑張れよ！」

何とかしたいが、自分にはただ励ますことしか出来ない。一護はそれが悔しくて仕方がなかった。

待テ、小僧！我が食ッテケレル！

「誰がっ」

一護は振り返って化け物との距離を見る。どうやら相手は、自分達を追いかけるので精一杯らしい。

タダノ餌ガ小癪ナツ。素直ニ我ニ食ワレヨ、小僧！

この時、一護はあることに気がついた。敵は先程から“小僧”と呼んでいる。つまりは一人。そして、奴の視線は己しか捉えていない。

(賭けるしかねえ)

「達吉!」

一護の呼びかけに前を走っていた一番年上の達吉が振り向いた。その目には恐怖が見えるが、まだしっかりと年長者としての気持ちを持ち続けているように見える。

「まだ走れるな!?!」

達吉は数回頷く。

「いいか、俺が合図したら皆を連れて家まで一気に走れ!」

「いちつ、一護兄ちゃん、は ……っ?」

切れる息で、不安そうに振り返った達吉に一護は疲労を隠して笑みを浮かべた。

「俺のことは気にすんな!出来るな?」

彼は大きく頷いた。

「よし…、行け！」

一護は両手に握っていた子供の手を離し、背中を押す。その手を今度は達吉が掴むと、一緒に走っていた仲間へ呼びかけ家のある方へ向かって一気に走り出した。

「一護兄ちゃん！」

子供の泣きそうな叫び声に、胸を引き裂かれそうになるが、それがあの子達のためである。一護は子供達の走っていく方とは逆に走り出した。

「おい、榛名！本当にこっちなのか！？」

太一達は白道門をくぐり抜け、流魂街を走っていた。太一を先頭に、自身の最速の瞬歩を駆使する。方角は北東。わずかな移動はあるようだが、相変わらず針はそちらを向いている。

しかし、霊圧も、そして何の気配さえ感じない仲間達は不安なようで、先程から仕切りに確認を取っていた。

「はい、間違いありません」

竹添の問いに淀みなく太一が答えれば、そこでようやく竹添は安心したように頷いた。

ドン… ツ！

死神になってから幾度となく感じてきた嫌な霊圧。今まで感じとれなかったそれが、急に太一達にのし掛かった。

「榛名殿！」

隊士の一人が確認をとるように太一を呼んだ。それに頷き言つ。

「間違いない。竹添七席！例の虚です！」

竹添はそれを聞くと、顔を引き締めた。

「よし、急ぐぞ　　ッ!?!」

すでに反射だった。すぐ側で感じた気配に、咄嗟に刀を構える。しかし、その不意の攻撃に竹添は空を滑るように後退してしまう。それでも、すぐに体勢を立て直すと、目の前の爪を刀で受け止めた。

「竹添七席!」

太一が辺りを見回すと、いつの間にか周りには虚に囲まれていた。皆、それぞれ自分に襲いかかる虚と応戦している。そのうちの一体が太一にも虚が襲いかかってきた。

刀を抜いて、探知機を壊さぬように腕を斬りつける。

「榛名!」

「はっ」

「お前は先に行け!」

「ですがっ」

「いい!ここは任せろ!お前は早く奴の所へ行け!」

太一は逡巡してから頷くと、その場を去った。

瀨霊挺白道門付近

ドン　　ッ！

恋次は顔を引き締めた。始めに感じたきり一度も感じなかった霊圧が、遠くで現れたのを感じる。

「日番谷隊長！」

「ああ」

冬獅郎はふ、と目を閉じて頷いた。

「周りに別の虚の霊圧も感じる」

恋次に乱菊、ルキアも感じていたのか驚くことはないが、厳しい表情になっている。

「急ぐぞ」

「はっ」

「はあっ、はっ、あ…っ、くそ！」

オヤオヤ、随分ト遅クナツテキタジャナイカ。

すでに一護は体力の限界だった。化け物が現れる前に、子供達と遊んでいたせいもあってか、もう今すぐにでも地に座り込みたいくらいである。

「はっ、はっ、はっ」

飽キタネエ。

虚は徐に腕を振り上げた。

その動きを影で察した一護が振り返った時にはもう遅く、慌てて横に避けるも地面に叩き付けられてしまう。

「くっ」

その衝撃に、肺から一気に空気が吐き出される。一瞬、目の前が真っ白になるも、痛みが意識を失うことを許さなかった。

霞む視界に、その不気味な白い顔が映る。にんまりと笑っているのが分かった。

アンマリ霊力八無イヨウダガ、マァイイダロウ

(く、そ…。何言っただか全然分かんね…)

頭を強く打ったのが、視界がはつきりしない。おまけに周りの音もぼんやりとはつきりしない。

(俺、死ぬのか…?)

今ハ鷺沢ヲ言ツテラレナイカラネエ

(ふ、ざけんな、よ…)

早くシナイト死神モ来ルダロウシ…

(せっかく、この暮らしにも慣れてきたんだぞ…)

頂クトシヨウカ

(死にたく、ねえっ!)

《 》

何かが聞こえた、と思った次の瞬間、視界に広がったのは以前夢に見た不思議なビルが立ち並ぶ世界だった。

「また…」

一護は手をついて体を起こす。空は青く広がり、見渡す限りビルが見えない。しかし、遠くにはやはり例の影が見えた。

《 》

「聞こえねえ、聞こえねえよ！」

《 》

「なあ！お前は一体誰なんだ！」

《 》

「何を言ってるんだ！聞こえねえって！」

《おも　せ、　いの　を》

「だから、聞こえね　　ッ
」

一護は言葉を詰まらせた。立ち上がりかけた瞬間、目の前に遠くにいたはずの影がいたのだ。目を丸くしたまま微動だにしない一護に、男は言う。

《真実は一護、お前の中にある》

「な、にを　　」

《思い出せ、一護》

マントを纏った男の影が、次第に遠ざかっていく。一護は、ハッと我に帰ると慌てて問うた。

「待ってくれ！思い出すって何をだよ！」

自分が忘れていていること。それが何かとてつもなく大事なことのよう
な気がして、一護は引き止めようと手を伸ばす。しかし、無情にも
その手は男に掠りもしない。

《思い出せ、一護よ。魂に刻まれた私との契約を》

「契約つて何なんだ！おい、おっさん！」

その時、すでに男は姿を消していた。

「くそつ、何なんだよ！」

そして景色は吸い込まれるようにして消えていき、瞬間広がったのは腕を振り下ろそうとしている虚だった。

反射的に目を瞑る。

だが、待てど痛みは訪れず、代わりに耳を突いたのは、自分の引き裂かれる音でなく、空気を震わせるような金属音だった。

一護はそつと目を開く。始めに半分、そしてぼんやりと見えた背中に残りの半分の臉をゆっくりと。

「大丈夫か！？」

それは初めて見る格好をした男だった。黒い着物を着た、自分より少年上の男。一護は16程だから、19程だろうか。一護は記憶がないため知らないが、実は尸魂界に来た時から、彼は高校生の姿に戻っていたのだ。

深緑の短髪に、前髪を上へ上げたままピンで止められていた。頬には刀傷と思わしき傷があり、額にある汗から相当急いで来たことが想像出来る。

「お前……」

突然現れた男に、一護はそう呟いたきり目を丸くする。その姿に無事だと判断したのか、男は刀で腕を押し返すと掌を斬りつけた。

ギヤアアア！死神ガアアア！

（死神……！？）

化け物の叫びに、一護は改めて男を見た。以前、祖母の話に一度だけ出てきた死神の名。あれから特に思い出すこともなかったが、今、目の前にいる彼が死神というのか。

瞬間、一護の視界から死神が消えた。と、思うと化け物の顔面に現れ一気に斬り裂く。

オノレエエエエエ！！！！

化け物の叫び声は虚しく空へと吸い込まれていく。比例して足元から昇華され、しばらくして化け物は完全に消えた。

悔しさと決意

一連の出来事を呆けたように見ていた一護は、軽い音をたてて目の前に着地した男をようやく我に帰ったように見上げた。

気付けば日も完全に沈んでいる。上弦の月が浮かんでおり、細かな星星が空を彩っていた。

「怪我は？ねえか？」

「あ、ああ」

差し出された手を無意識にとり、一護は有り難く立たせてもらうことにする。

「あんたは……」

「俺か？俺は榛名太一、死神だ。よろしくな」

「死神……」

考えるように俯く一護、対して太一はそんな一護を観察していた。

(霊力は特別大きいって訳じゃないみたいだな。むしろ、小さいくらいか?)

「なあ」

「ん?何だ?」

かけられた声に観察するのを止め、太一は顔を上げた。

「あんた、マジで死神なのか?」

「何だよ急に。ああ、マジだぜ」

真剣な顔をして訊いてくる一護に、太一は苦笑する。太一にとつたら、自分が死神だなんてことは今更だ。

「そっか、お前が…。じゃあ、死神になったら化け物とか退治出来るようになるのか?」

突然の台詞に、太一は目を瞬かせた。何をいきなりと思うも、目の前の少年の目は至って真剣で、勢いに圧されつつもしっかり答える。

「あ、ああ。死神は彼奴らを倒す専門みたいなもんだし」

「そうか。じゃあ、死神なればいいんだなっ？」

太一はさらに目を瞬かせた。

「何だ、お前。死神に興味あんのか？」

「あ、いや…」

驚いたように訊いてくる死神に、一護は照れたように言葉を濁した。死神も特に知らない人間が、死神なりたいなど思っていることが何となく恥ずかしがったのだ。目を彷徨わせて髪をガシガシと掻く。

しかし、太一はそれを全く気にしていいたいようだった。

「んー、お前はあんまり霊力がないみたいだけど…」

何やら一護の目をじーっと見つめると、徐ににっ、と笑うと言っ。

「お前、いい目してるから。死神になれるかもな！」

そう言われ一護はたじろぐ。いきなりいい目をしていると言われても、どう反応しているか分からない。

「は？お、おお、サンキューな…」

「で？何で死神になりたいんだ？今の見てりゃ、危険だってこと分かるだろ」

そういう太一の目は真剣だ。つられて一護も真剣になる。

「そうだけど、でも、死神になれば強くなれんだろ！？」

ぎゅ、と拳を握り締める。

思い出すのは子供を連れて、ただ逃げるだけの自分。護る力もなく、不安を拭い去ることも出来ない。

悔しかった。

不甲斐なかった。

「もう、嫌なんだ！ただ逃げるのは！」

太一は静かに一護を見ていた。叫びを聞いていた。

「なあ、頼むよ！どうしたら死神になれるのか教えてくれ！」

肩を掴み、必死に訴える。するとポツリ、と聞こえてきた言葉に――
護は「え？」と力を緩めた。

「霊術院。死神になるための学校だ」

――護は目を大きく見開いて顔を輝かせた。

「霊術院……」

「ただ、合格すんのはかなり難しい。今年のはもう終わっちゃまっているから、来年から試験を受けるといいぜ」

「おう！教えてくれて、ありがとな！」

「礼を言われるようなことはしてないさ。まあ、がんば」

「ああ！」

大きな声が太一の台詞を遮った。中途半端なところで遮られた太一は、笑顔を浮かべたまま次の行動に移せない。その間にも――護は焦ったように空を見上げたりと忙しかった。

「やっべ、もう日い暮れてんじゃないか！婆ちゃん心配してるだろ

「な。悪い、俺行くわ！じゃーな！」

一護は片手を拳げて駆けて行ってしまふ。「ほんと、ありがとなー！」なんて声が、今の太一には何か虚しかった。

「……………はぁぁ」

とりあえず大きく溜め息をついた太一。そのすぐ後に、四つの影が傍に降り立った。太一は踵を返そうとして止め、暗くて分からない影へと向き合った。

影が一步踏み出す。すると、ようやく三日月の光のもとで正体が明かされた。

「ひ、日番谷隊長！」

「無事虚は退治したようだな」

「は、はい！」

目の前の隊長格に、太一はすつと背筋を伸ばした。それから、勢いよく頭を下げる。

「あのっ、申し訳ありませんでした！」

彼が思うのは探知機のこと。自分があの時、ちゃんと探知機を渡していればこんなことにはならなかっただろうに。そんなことを謝れば、冬獅郎はあっさりと「いや、いい」と首を振った。

「お前はあの探知機がどういったものか知らなかったんだ。仕方がない。次から気をつけるよ」

「は、はいっ！」

相変わらず凜とした表情でこちらを見る冬獅郎に、やはり素敵なお方だ、と思っていると、その凜とした表情の横からにゅ、と顔が現れた。

「やつほー！無事みたいで良かったわ、榛名！」

「松本副隊長！」

「とりあえず、めでたしめでたし、だな」

「結局、我らの出番はなしか」

「阿散井副隊長、朽木四席まで！」

続いて現れた恋次とルキアに、太一はますます身を固くする。何せ、

隊長格一人に会うだけで緊張するというのに、これだけの有名人に囲まれることなどそうそうないのだ。

「それで、魂魄は無事か？」

冬獅郎は頭に寄っかかってくる乱菊を鬱陶しげに振り払いながら問うてきた。

「あ、はい。運良く襲う前に助けることが出来ました。近くに他の魂魄も見当たらなかったので、被害はないかと」

「そうか」

「良かったですねー。たーいちよっ」

小さく息をついた冬獅郎を目ざとく見つけた乱菊は、にやにや笑って抱きつく。

それに「松本、」と低い声で戒める冬獅郎を見ながら、阿散井は「相変わらず日番谷隊長も大変だなあ」と手を合わせた。

「それで、その魂魄はどこへ行ったのですか？榛名殿」

「ん？そっぴや居ねえな」

「あら、本当ね」

ルキアの疑問に、恋次も辺りを見回し、乱菊も冬獅郎から離れて首を傾げた。

太一は「朽木四席は私より上なんですから、敬語なんて使わないで下さい!」とだけ言って、自分でもよく分からないためか目を泳がせると言う。

「あー…、それ、何ですが。何でも“婆ちゃんが心配してるー”とかで、つい今し方家に帰りました…」

「はあ?」

ルキア、恋次、乱菊は揃って素っ頓狂な声を上げた。

「何だそりゃ?虚に襲われといて婆ちゃんが心配で帰っただあ?」

「何て言うか…、そいつ随分凶太い神経してんのねえ…」

「否、ただの馬鹿なのかもしれませんよ…」

それぞれ呆れたように言うメンバーに太一も苦笑しか出ない。あのあっさりとした引き際には太一も言葉が出なかった。

「とにかく」

眉間の皺を押さえ、溜め息をつきつつ冬獅郎は話を遮るように言う。

「其奴は無事なんだから、それでいいだろ。ここはもういい。帰るぞ」

「あ、隊長！竹添七席達が！」

背を向けた冬獅郎を慌てて引き止めて言うと、「ああ、それなら問題はなし」と彼は顔だけ振り向いた。

「奴等とは途中で会ってな。ちょうど虚を退治し終えていたみたいだし、お前の方からも虚の霊圧を感じなかったから帰しといた」

「そうですか」

ほ、と息をついて太一は頷いた。

「分かったなら行くぞ」

「はい…」

こうして事件は終わりを告げたのだった。

流魂街第一地区潤林安

「婆ちゃん！」

「一護っ」

家に帰った途端、一護は膝に手をついて大きく息を吐き出した。帰りが遅かったから心配だったのだろう。戸口の前で待っていた祖母は、一護が帰って来たのを見てほっと息をつく。まだ荒く息をする一護の背中を撫でて、整ってきたところで家の中に入れた。

「大丈夫かい？一護。随分と遅いから心配したんだよ」

一護は最後に大きく息を吐き出して、また大きく息を吸って、また吐き出す。落ち着いたところで、ようやく一護は話し出した。

「それがさ、とんでもねえ目に遭ったんだぜ。聞いてくれよ、婆ちゃん」

「はいはい」

そうして一護は先程のことを話して聞かせる。祖母はうんうん、と頷きながら黙って話を聞いていた。

「それはそれは、大変だったねえ。一護は怪我はないのかい？」

「ああ！ちよつとばかり疲れたけど、後は全然問題ないぜ！」

心配げな表情を見せる祖母に、笑顔を見せて元気だと示せば、まだ心配そうではあるものの、安心したように息をついた。

「それで、ね」

一区切りついたところで、一護は切り出した。その表情は躊躇いがちで、言いづらそうである。

“死神になりたい”

そう言ったら、祖母はどう思うだろうか。二人の家族が死神になると家を出、さらに自分までもが家を出る。やはり、悲しむだろうか。

正直、死神になることの決心はもうついている。ただ、祖母を置いていくことだけは気掛かりだった。

「あの、その、婆ちゃん…」

「分かっておるよ」

一護は弾かれたように顔を上げた。知らず知らずのうちに顔を俯けてしまっていたらしい。

「え…」

「分かっておるよ、一護。一護が話を始めた時から、何となく分かかっておった」

そう言う表情は、やはりいつもの微笑みを浮かべていた。それは一護の決断を受け入れているようで、ようやく一護は言葉を発する。

「俺、死神になりてえ！もし、俺に少しでも可能性があるなら、婆ちゃんや子供達皆を守れるようになりたいんだ！頼む！」

下げた一護の頭に、暖かな掌が乗った。

「一護が決めたのなら、それでいいんだよ。婆ちゃんは何も言わん。ただ、あまり背負い過ぎないようにねえ」

一護はただ、「ああ」と頷いた。

「ありがとう」

「

第二章

紅葉葵

— 優しさ —

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
…
.

悔しさと決意（後書き）

はい、お婆ちゃんの口調がつかめません。もっと言えば、キャラ達の口調も怪しい…。

いやね、一応原作のキャラに似せたつもりなんですよ、これでも。

とりあえず、その、多目に見てやって下さい…。

真央霊術院（前書き）

第三章 連翹 — 希望 —

真央霊術院

清々しい青空が空に広がる。夏のような眩しい青でも、秋のような澄んだ青でも、冬のような物寂しい青でもない。

まるで全てを包むような温かな青が、まるで新たな旅立ちを祝福するように晴れ渡っている。

道端には白詰草や蒲公英が花を咲かせており、空を鳥が鳴き飛んでいった。

そんな賑やかな空の下に、一人の少年が立つ。

「じゃあ、婆ちゃん。俺、そろそろ行くな」

「ああ。忘れ物はないかい？」

青に映える橙の髪、黒崎一護である。十数回目の春、そして自分の無力さを知ったあの日から一回目の春、彼は慣れた家を去ることになった。

そう、見事に霊術院に受かったのである。

もともと、頭の出来は悪くなかったらしい。必死に勉強し、祖母が昔例の二人が使っていたとか言う本やノートをたくさん持ってきてくれたお陰である。

たくさん書き込みのあるそれらは、如何に二人が一生懸命だったかを物語っており、さらに分かり易くまとめられたノートは重宝させてもらった。

「大丈夫だつて！休みの日とか帰ってくるからさ。婆ちゃんも元気でな」

「一護も、くれぐれも無理しすぎてはいけないよ」

「ああ！」

そして一護は祖母に背を向けた。

「道に迷った…」

しばらく歩いたところで、一護は顔を青ざめて立ち止まった。確かにこっちだった。確かにこっちだったはず、である。

しかしどうにも目的の建物が見つからない。時間が定かではないため分らないが、早くしなければ入学式が終わってしまう。初っ端から遅刻など勘弁してほしい。

鮮やかな青の袴を翻し、右往左往してみるがやはり分からず、一護は声を上げて苛立ちを露わに髪を掻き毟った。

「こうしても埒が明かねえ！右だ、右！」

「いや、左だけど…」

勘を頼りに右へ曲がろうとした一護を制するように声がした。戸惑ったような声音に、一護は一步踏み出した足を退き、後ろを振り向く。そこには同じ霊術院の服を着た少年が立っていた。

「え、つと…」

驚いたように自分を凝視してくる一護に、少年は困ったように身を縮めた。それも仕方あるまい。何せ一護の目つきは、それはもう悪いのだ。

「アンタも霊術院の一年か？」

(ひっ)

ギロ、と睨まれた(一護はただ見ただけだが)少年は、心の中で震え上がった。それから、とりあえず謝ろうと頭を九十度に下げた。

「うお!？」

「いじいじ、ごめんなさいごめんなさいごめんなさい!」

「は、え、何謝ってんだよ!？」

いきなり凄い勢いで謝り始めた少年に、一護は吃驚して身を引いた。その後慌てて顔を上げさせると、ふうと息をつく。

一方、少年は戸惑ったように首を傾げていた。

「え、怒ってるんじゃない…」

「はあ?」

一護は思わず素っ頓狂な声を上げ、それに少年がびくつと肩を跳ねさせれば、納得したように「あー」と髪をぐしゃつと握る。

「別に怒っちゃいなーよ。感謝はしても、怒る理由なんかねーだろ」
それと、と一護は続ける。

「顔は生まれつきで、別に睨んでるとかそーいうのじゃねえから」
思わぬ台詞に、少年はきょとんと目を丸くしていた。何も反応がないことに一護はだんだん気まぎれになって、ヤケになって叫んだ。

「だから！目つきが悪いのは生まれつきなんだよ！」

「はあ……」

「……、もう行こうぜ！」

ずんずんと歩き出す一護の背中に、少年はようやく笑みを浮かべる。

「あのっ、僕、柳瀬平汰！よろしく！」

「黒崎一護だ。よろしくな」

「すげー」

「霊術院には毎年たくさん人が入学するから……」

無事に霊術院へとついた一護は、その人の多さに感嘆した。道を行き交う赤と青。流魂街にいたころは、こんなに多くの人がいるのを見たことがない。

一護は興味津々に視線をキョロキョロさせる。対して、平汰は落ちていた様子でプログラムを確認している。

霊術院、正しくは真央霊術院。護挺十三隊総隊長山本元柳斎重國が設立した、死神・鬼道衆及び隠密機動の育成を目的とした機関である。以前は死神統学院だったらしいが、鬼道衆と隠密機動も育成するにあたって改名したそうだ。

「行こう、黒崎くん。入学式始まるよ」

「おう！」

どうやら、山本総隊長は都合により来れないらしい。だが、それは特に珍しいことではないらしく、総隊長ともなると滅多なことでは護挺を離れることは出来ないのだそうだ。

それぞれ堅苦しい挨拶がされ、入学するにあたっての心構え、死神になるとはどんなことなのかと延々と話された。そうして、ようやく閉会の言葉を告げられてから入学式は終わりを迎える。

「あー、肩凝るってーの」

「あんなに長々と話されちゃね」

肩をぐるぐると回す一護に、平汰も流石に疲れたらしく苦笑を浮かべている。

「でも、次はクラスごと教室に集合だから。急ごう、黒崎くん」

「え、俺クラスなんか知らねーぞ」

初めて知った、と一護が焦ったように肩を回すのを止めて顔をひきつらせる。それに笑って平汰は言った。

「大丈夫。黒崎くんは僕と一緒にだから」

「そーか。んじゃ、行こうぜ」

ほ、と息をついた一護に、平汰はまた笑った。

鳩に餌をやる男

早いもので、霊術院に入学して五年が経った。霊術院での生活自体には慣れたものの、入学して以来、一護や平汰はクラスから浮いていた。

理由は簡単、流魂街出身だかららしい。特に、一護は髪の色もあって、貴族の出身者からは目の敵にされている。曰わく“たかだか流魂街の出で”らしい。

だが、理由はそれだけではなかった。何も流魂街出身者は一護達だけではないのだ。何故、一護と平汰がやたら目の敵にされるのか。一番の理由は他にある。

「おーっす、平汰」

「あ、おはよう。黒崎君」

クラスに行って見つけた友に、一護は声をかける。相変わらず勉強に励んでいたようで、机の上には教科書が広がっていた。それを見て、「朝から勉強かよ…」と顔をしかめるが、平汰は「まあね」と平然と答え教科書を閉じた。

「お前、そんなんじゃないつか頭パンクしちまうぞ」

「しないよ」

意味不明だと平汰は一刀両断する。

「次、何だっけ？」

「歴史。で、次が鬼道で、その次が剣術」

後ろの席に着きつつ問うと、返ってきた答えに一護は顔をしかめた。

「げっ、鬼道かよ!?!」

「斬拳走鬼の授業は毎日あるじゃない。今更でしょ」

「それは分かってんだけどよ……」

呆れたような視線を受けつつ、一護は机にうなだれた。それもそのはず。彼はとてつもなく霊力のコントロールが苦手なのである。

「まあ、未だに赤火砲も撃てないのはヤバイよね」

「なっ、おお俺だって白雷は出来るぞ!」

「初歩中の初歩だよ」

白雷を撃つのを真似るように指先を出す一護に、平汰は哀れむように言っただけだ。そうすれば、「くっそー」とまた机に顔を伏す。

「まあ、でも。黒崎君は剣術と瞬歩は飛び抜けて出来るからいいじゃない。僕、瞬歩は並だけど剣術はなあ…」

はあ、と大きいため息をつく平汰に一護は体を起こして頬杖をついた。

「でも、その代わり平汰は鬼道と頭が出来るだろ」

「まあね。僕と黒崎君で足して二で割ったらよかったのに」

「そりゃ言ってるな」

あはははは、と笑う二人の側に立った影があった。

「よう、流魂街出身の庶民ども！」

背後に二人の子分を従え、片手を挙げて挨拶するのは高峰ヶ原志之輔。上流貴族なのだそうだ。

彼が現れた瞬間、二人は嫌そうに顔を顰めた。平汰は居心地が悪そうに、一護は痛いものを見るようにである。

「あー、はいはい」

早くどっかへ行けとばかりに片手であしらう。それは相変わらずなのだが、平汰は焦って「黒崎君！」と咎めるように声をあげた。いつも一護にはハラハラとさせられる。

彼は実にまっすぐで正義感が強い。それは見ていてとても気持ちのいいものだし、その面に至って平汰は実に彼を尊敬している。しかしそれは、その反面とても危なっかしいものであった。

彼が志之輔のことを気持ちよく思っていないことは知っている。事あるたびに突っかかってくる彼に対し、その度に適当にあしらう一護は本当に命知らずだと思う。

彼は仮にも上級貴族、流魂街の後ろ盾も何もない自分たちの敵う相手ではないのだ。だから、平汰はそんな一護にいつも注意をしているのだが、彼は聞く素振りも見せない。

「そりゃ、残念だったな」

彼は毎朝、自分を見つけてはこの台詞をぶつけていく。一体、何が楽しくてやっているのか甚だ疑問だが、正直一護にとっては迷惑以外の何物でもない。

「お前さ、前々から思ってたんだけど、悲しくねえの？見てるこっちが痛々しくてしょうがねーよ」

哀れむような視線で見ってくる志之輔に、一護は無感動な目を向けた。

「俺はお前らが死神になるなんて思えない。さっさと辞めろよ」

そう言い捨てて去っていく志之輔の背中を最後まで見送ることもせず、一護は顔を背けた。

「ねえ、黒崎君……」

クスクス笑う、彼らをよく思っていない貴族達を横目で見て、平太は顔を隠すように俯けた。

「あん？」

沈んだ声に一護はさした興味もなく読んでいた教科書から視線を上げる。

「ずっと思ってたんだけど、僕達大丈夫かな…」

「…何だよ、急に」

「だって…」

そこで、平汰は言いにくそうに一旦言葉を切った。

「上流貴族に目をつけられたら、死神になった時大変そうだって…」

心底心配げな平汰と打って変わり、一護は目を瞬かせて「んだよ、んな事気にしてんのか？」と素っ頓狂な声をあげて言う。

「んなの、心配するこたねーよ」

「でも、相手は貴族だし、やっぱいろいろ」

「大丈夫だって！死神は実力主義なんだから？だったら、彼奴より強くなりゃ問題ねーよ」

あっさりと言ったのけるが、彼は死神の世界での厳しさを分かっているのだろうか？以前だったら、平汰はきっと呆れていただろう。

しかし、黒崎一護という人物を知った今では、“彼らしい”としか

思わない。一護にとって、周りの評価などどうでもいいのだ。人が自分を貶めようとか晒し者にしようとか、そんなことは気にしない。ただ昨日の自分より強く。それだけを思っているのだろう。

「そうだね…」

平汰は頷いた。

今はまだ、周りを気にしてしまう自分だけれど、いつか彼のようになれたら、そう願って。

「えー。昨日の続きだ、二十五ページを開けー」

そんな教師の言葉を聞きながら、一護の意識は別のところにあつた。それは朝平汰とした会話にある。彼は不安だと言っていた。“死神になつたとき”と。

一護はその時に“強くなれば問題はない”と答えたが、彼自身の不安は別のところにある。“死神になれるのか”彼はそれが心配だった。

彼の靈力コントロールの腕は、かなり悪い。心底悪い。もう、おつそろしい程に悪い。一護自身としても、ここまで出来ないとは思わなかったというのが本音である。いつそ才能なのではないのかと思っただけだ。

加えて、もともと靈力の少ない一護である。教師からも呆れられ、以前には「諦めたほうがいいんじゃないか」と言われたこともあった。

だが、志之輔にも言った通り、一護には辞める気など毛頭ない。死神になるのは、祖母の家を出てきた時から決めていたのだ。

「しかし、五大貴族の内、瀨霊挺最高位にあつた志波家が没落してしまい、五大貴族が四大貴族へと変わる、と。ここまではいいない？えー、ここで志波家に代り、勢力を伸ばしてきた家がある。それが秋ノ宮家だ」

とはいえ、このままでは死神になれるのかどうか怪しい。今までは、そこそこの学力と、歩法と剣術の成績でどうにかやってはいたが、このままでは危ういだろう。

志之輔がやたらと己らにちょっかいを出してくるのも、これが原因だ。流魂街の出のくせに、剣術と歩法は一護に勝てない、学力と鬼道は平汰に勝てない。これが彼のプライドを傷つけてしまったのである。

「鬼道の扱いにおいて、この家はかなりの才能を誇っていた。鬼道

の大鬼道長・副鬼道長は常にこの秋ノ宮家の家の者が担っていた程だ。特に、彼らは独自の鬼道を得意とし、常に前線で力を奮っていたという。しかし――

（鬼道の才能、か。このままじゃ、やべーよな…）

自分の掌を見つめてからギュツと握りしめる。そして、いつの間にか意識は夢の中へと旅立っていったのだった。

目を開けた先、そこには空があつた。先ほどまでは教室にいたはず。そう思つて体を起こせば、そこにはもはや見慣れたビル街があつた。相変わらず空に水平に立ち並ぶその世界が、己の精神世界だと知つたのは霊術院に入つてからである。

どうやら、そこで自分の刀の名を聞くことが出来れば斬魄刀を持つことが出来るらしいのだが、何度ここに来ようと名を聞くことは出来なかつた。

一護としては早いところ刀を手に入れ、力をつけたいのだが、本来院生のうちに斬魄刀を手に入れることなどそうそうないらしい、精

神世界を見る生徒すらほぼ稀なようだ。

「曇り空…?」

普段は秋晴れのような空が、今日はどんよりと灰色だった。

《それは、お前の心が曇っているからだ…》

「おっさん…」

気配もなく立っていた男に、一護は驚くことなく声をかけた。名は知らない。まだ聞こえないのだから。

「まだ、名前は教えてくれねーのか?」

どこか寂しげにそう問うた一護に、やはり男は前と同じことを述べた。

《一護よ、私はすでに名を教えている》

「でも、俺はおっさんの名前を知らねーよ」

すると、男は暫しの間を持って言う。

《お前は知らないのではない。忘れているのだ》

男は続ける。

《思い出せ、一護。私の名は　　だ》

何故か、彼が名を言う時に限って、そこだけ何枚もの壁に覆われたようにはつきりとしめない。一護が必死に聞こうと耳を澄ませようと、決して聞こえはしなかった。

《一護、時間がない。思い出せ、私は常にお前と共にある》

「　　つ。時間がないって何だよ！おい、おっさん！」

またもや、男は急激に一護から離れていく。捕まえられないと分かっている、一護はそれでも手を伸ばすが、やはりその手は空を切る。

《思い出せ、一護。私の名を！魂の契約を　　！》

そして、一護はまた急激な暗闇に落ちていく。目の前の世界が吸わ

れるようにして消えていくと同時に、引っ張られるようにして一護は目を開けた。

「あッ、黒崎君、起きた!？」

いきなり目を開けた一護に驚いたように少し身を引いて、平汰は顔を覗き込んできた。まだぼんやりとする頭を起こし、状況を掴もうとあたりを見回す。すると、それに答えるように平汰が説明をしてくれた。

「もう授業は終わったよ。何度も起こしたのに、黒崎君なかなか起きないんだから。次は演習だし、早く行こう?」

「……ああ。悪いな、平汰」

いいよ、と笑う平汰に続いて、一護は教室を出る。次が苦手は鬼道の授業だというのに、一護はそれよりもあの夢の中での出来事で頭が一杯だった。あの男は常に言う。“思い出せ”と“魂の契約を思い出せ”と。

「一体、何を忘れてるってんだ…ッ」

何も分からない自分に苛立って、一護は前を歩く平汰に気付かれぬよう唇を噛み締めたのだった。

ギヤアアアアア

!!!

雄叫びをあげて昇華されていく虚を、最後まで確認することなく刀を納めると紫水は疲れたように息をついた。ようやく一匹を片付けるも、まだこれからも現れると思うと気が重い。

何故だかは知らないが、ここのところ妙な能力を持つ虚が頻繁に現れるのだ。大して多いわけではないから良いものの、ここまで頻繁となると正直疑問である。

自分の隊長に報告はしたが、向こうも忙しいらしく、とりあえずは様子見となった。まあ、今のところ困ったこともないから仕方がない。今度、調べてみるとの報告があったし、今は自分の仕事をする

のみである。

(流石にしんどいわ…)

紫水は近くの電柱の上に飛び上がり、休む間もなく巡回へ向かった。軽やかな音をたて、風を全身に感じながら電柱から屋根へ、屋根から電柱へと移動していく。

その時、いつか変な少年と出会った公園を見つけ、傍の街灯へと飛び乗った。

(元気にしてるかしらね)

すでに十数年と経った公園は、もはや事故のことなどなかったかのように人々が思い思いに過ごしている。

「あ、お兄ちゃん。待ってよー」

「早くしねーと置いてくぞー!」

真下を仲のいい兄弟が駆けていく。微笑ましい光景だ。紫水は疲れも忘れて微笑む。砂場でトンネルを作る親子、鬼ごっこを楽しむ子供たち、ベンチでハトに餌をやる男性。

(ん?)

紫水はふ、とその男性を何処かで見たことがある気がして、目を凝らした。白髪混じりの髪をオールバックにし、縁なしの丸眼鏡をかけた優しそうな男性。

(気のせいかしら、何処かで…)

その時、その男性の目線が自分を捉えたような気がして紫水は目を見張った。だが、すぐに目を凝らすも男性の視線は足元に群がる鳩しか捉えていないように見える。

(まさかね)

死神を見ることが出来る人間などいない。結局気のせいだったのだと、紫水は納得した。

「待つてよ、夏梨ちゃん!」

「おっそい!」

そんな声が聞こえてきて、紫水は道へと目を移した。黒髪の長髪の女性と、ふんわりとした栗色の髪の女性が花束を抱えてやって来る

ではないか。

「早いよー」

「そつ？別に普通じゃん？ほら、早くしなよ」

電柱の下を指差して言う黒髪の女性に、栗色の髪の女性は慌てて黄色と白の菊の花束を供えた。そのまま二人はしゃがみこんで手を合わせる。

彼女は二人を知っていた。あの少年の妹である。今日は彼が死んだ日だ。

「お兄ちゃん、元気かなー」

「さあね。でも、一兄のことだから、そこは心配いらないでしょ」

そう言つて立ちあがった黒髪の少女、夏梨は何かを見つけたように一点を見つめ始めた。訝しげに眉間にしわを寄せ、半ば睨みつけているようである。

「どつしたの、夏梨ちゃん？」

同じく立ちあがった遊子は、夏梨の視線を追って公園の方を見た。

夏梨は何も答ええない。紫水も同じように視線を追う。そこには、先程紫水も見ていた男の姿があった。

「ねえ、遊子」

何も答えなかった夏梨が、相変わらず視線を男に遣ったまま口を開いた。

「年を取らないなんてこと、あると思うっ?」

「え?」

いきなり突拍子もないことを問うてきた夏梨に、遊子は一瞬何を言われたか分からないようだった。

「やったなあ、夏梨ちゃん!そんなことあるわけないじゃない!」

「...そうだね」

夏梨は無理矢理男から視線を外すと、顔を隠すように帽子のつばを下げた。

「そうだね、ごめん。行くうか、遊子」

「うん。あ、買い物してっついていい？今日の晩御飯は何がいいかなー。ね、夏梨ちゃん？」

去っていく二人の会話を聞きながら、紫水は今度こそ男から視線を外せなかった。相変わらず鳩を見続ける男に、変わったところは見られない。霊力も並の人間だ。それならば、あの二人の少女達の方が大きい。ただ、気になるのは先程夏梨の言っていたこと。

年を取らないことってあると思う？

(どっぴうこと…?)

普通に考えれば、それは言葉の通り彼が年を取っていないことになる。しかし、我々死神ならいざ知らず、人間としてそれはあり得ないはずだ。彼の見た目の年齢はおよそ五十程。一体、彼女はいつ彼を見たのだろう。

(不老不死？そんな馬鹿な…)

ス、と彼女は目を眇めた。

「もー！何でもいいが一番困るんだからね!？」

「あー…、じゃあカレー」

「カレーね！じゃあ、ルーと、人参と、あと …」

楽しいげな声が響いてくる。それが、何処か遠くから聞こえてくるように感じながら、紫水は混乱する頭で考える。

（隊長に報告するべきか…、でも確証もないし、見る限りはただの人間。あの子の見間違いつて点も否定は出来ない…）

その男が立ち上がる。ゆっくりとした足取りで、公園の出口の方へ向かって行った。その時、また男の視線が帽子の下からこちらに向けられた気がして、紫水は息を詰めた。

「ッ」

だが、それは気のせいかと思う程の一瞬。男の背中が見えなくなるまで、紫水はその視線を外すことはなかった。

（気のせいよ、気のせい…）

「君臨者よ、血肉の仮面・万象・羽搏き・ヒトの名を冠す者よ。焦熱と争乱、海隔てて逆巻き南へと歩を進めよ！」

左手首を右手で押さえ、およそ百メートル程の的へと向ける。

「波道の三十一、赤火砲！」

ドン、と勢いよく左の掌から飛び出した赤い砲弾が真っ直ぐの的へと向かっていく。そして、真ん中の赤い丸へとぶつかったそれは、弾けて消えた。

「よし！流石、柳瀬だな」

「ありがとうございます」

「じゃあ、次！」

戻ってきた平汰に、一護は「お疲れ」と声をかけた。それに「うん」とだけ答えて隣へ腰を落ち着かせた。

「凄いな、お前。真ん中かよ」

感心したように言う一護に、平汰は苦笑を洩らす。

「そんなことないよ。少しずれてた」

「……嫌みか」

「ええ！？ちちち、違うよ！」

「冗談だよ」

「……」

じと、と睨みつけてくる平汰を無視して、一護は自分の掌を見つめた。

「にしても、どうやったら上手く出来んだろうな」

その姿は本気で悩んでいるようで、仕方なしに平汰は怒ることを止めて、出来る限りのアドバイスをすることにする。「そっだなー」と考えながら言った。

「自分の中の、霊力の流れを感じるんだ」

「靈力の流れ…」

「そう、それを左手に集めて、ぎゅっつと凝縮させる。そうだなー、泥団子をつくるみたいなきな感じかな」

「泥団子…」

「そう。分かった？」

「んー、まあやってみるわ」

その時、ちょうど自分の名を呼ばれ、一護は立ちあがった。そして、空いた的の前に立つと、隣が赤火砲を撃つを見て自分も構える。

「よし、頑張れよ。黒崎」

「うし…」

一護は左手を出して目を閉じた。

(自分の中の、靈力の流れ…)

「君臨者よ、血肉の仮面・万象・羽搏き・ヒトの名を冠す者よ…」

眉間にさらに皺が寄る。自分の中に流れる靈力を感じた気がして、一護は次の段階へ移る。

(凝縮…)

「焦熱と争乱、海隔てて逆巻き南へと歩を進めよ」

一護は目を開いて、的を見据える。

「波道の三十一、赤火砲！」

ポフン　ッ！！

間抜けな音がした。本来赤い砲弾が飛んでいくはずが、一護の掌で煙となつて弾ける。皆が目を瞬く。一護は大きいため息をついた。後ろで志之輔達があくすくすと笑いを堪えているのが分かつて、さらに息を吐いた。

「黒崎ー、俺は心底お前が心配だ」

「は、はい…」

「練習しとけー」

「はい…」

肩を落としてやって来る一護に、平汰は「お疲れ」とだけ声をかける。ちら、と隣へ視線をやる。かなり落ち込んでいるようだ。

(何て声掛けたらいいか分かんない…)

とりあえず早く授業が終わってほしい、と平汰は毎度のことながら思うのだった。

現世実習

静霊挺一 番隊隊舎

「ほう、異常な虚の発生…とな？」

山本元柳斎重國は興味深げに問うた。

それは隊主会で各隊の報告をしていた時である。それぞれが何の問題もないと報告していく中で、十番隊の報告でそう述べられたのだ。

「はい」

冬獅郎は殊勝に頷いた。

「先日、十三番隊の応援に行っていた隊士からそう報告がありました」

「ふむ。それは本当かのう、浮竹隊長」

冬獅郎に向けていた視線を、今度は浮竹に向けて山本は問う。

「間違いはありません」

「そうか、それで？」

しっかりと頷いた浮竹に、山本は冬獅郎に先を続けるよう促した。

「前々から少しずつ奇妙な虚の発生はあったようです。しかし、特別量が増えた訳でもなかったために、報告をするのを躊躇っていたらしいのですが…」

そこで冬獅郎は息をつく。

「ここのところその頻度が以前より多くなってきたために、報告をしたと」

続いて浮竹も言う。

「ですが、まだそれ程厄介なものでもないらしい。まだ二人でも事足りているから、ただの偶然かもしれないとも言っていた」

「ふむ」

山本は暫し考えた後、浮竹に対し「浮竹隊長は昔もそのような事があつたかを調べよ」と言い、冬獅郎には「しばらく様子を見るように」とだけ言い残した。

「では、これにて隊主会を終了とする！」

一番隊舎から出てすぐ後、後ろから「日番谷隊長！」と声をかけられて冬獅郎には足を止めた。

「浮竹」

「やあ。早いなあ、日番谷隊長は」

「うちは早く帰らないと、サボる副官がいるんでな」

駆けてきたらしい浮竹を見上げ、冬獅郎は体を向き直した。にこにここと笑っている浮竹は、顔色もよく、今日は調子が良いらしい。

それに安心して、冬獅郎は内心息をつく。もし悪いようだったら早く返さねば、あの三席二人が凄い剣幕で迎えに来るだろうからだ。あれは見ているこちらが疲れる。

「で、どうした」

「ん？いや、礼を言おうと思ってね」

それに冬獅郎は訝しげに眉を寄せた。思い返してみるが、彼に礼を言われるようなことがあっただろうか。

「特に礼を言われるようなことをした覚えはないんだが……」

「ああ、ほら。空座町への応援の件だよ。十番隊から一人、派遣してもらっているだろう？」

まだ、お礼をしていなかったと思ってね、そう言う浮竹に冬獅郎は「いや」と首を振った。あれは仕事だ。総隊長に言われたから派遣したに過ぎない。冬獅郎がそう言うも、浮竹は礼が言いたいと言う。「そんなことはないさ。君のところだつて、まだ忙しいだろう？ 藍染達の叛乱は想像以上の傷を残した。君の所だつて五番隊の仕事を手伝っていると聞いたよ」

その通りだった。それぞれの隊が、隊長のいない三つの隊をフオロ―しているのだが、冬獅郎は雛森と家族だということもあって大幅に仕事を請け負っている。これは完全に冬獅郎の我儘だが、隊員達は文句も言わずにやってくれた。

もちろん、出来るだけ隊員達には負担をかけさせないようにしているが、完全には無理だ。悪いとは思いつつも、やはり自分は手伝ってしまうのだろう。

浮竹はふと呟く。

「どの隊もまだ大変だ。空座町のことだつて、彼らがいたら ……」

その声はひどく沈んでいた。その時のことを思い出していたのだろう。

彼は当時、とても自分を責めていた。彼の記憶の抹消したのは浮竹の部下である朽木ルキア。そして、それを告げるように命じられ

たのは浮竹である。

冬獅郎たちからしてみれば、決めたのは上であって浮竹ではない。彼が自分を責める必要などないと思う。しかし、優しい彼はこんな酷なことをやらせる自分が許せないのだそうだ。

冬獅郎は静かに目を伏せた。

「ああ、そうだな……」

まだ脳裏に浮かぶ、橙の色。

「おっと、すまない。暗い話をしてしまった！そうだ、日番谷隊長。疲れた時には甘いものが一番だと言っじゃないか、日番谷隊長！」

「は」

「先程つい買いすぎてしまってね。よかったら持っていつてくれ」

出てくる、出てくる。何処から出てくるのかと問いたくなるほどの菓子が、次々と自分の手に乗せられていく。それが溢れかえる寸前まで積み上げられ、そこでようやく浮竹は菓子を出すのをやめた。

「浮竹、その、ありがたいんだが…」

「いや、礼には及ばないさ！さっきも言ったが君には世話になっているからね。遠慮なく持って行ってくれ！」

「いや、そうじゃなくて…」

「じゃあ、くれぐれも体には気をつけてくれよ。日番谷隊長！」

「あ、おい。浮竹…ッ」

朗らかに去っていく浮竹を、冬獅郎は両手に抱えた菓子越しに見送る。また断れなかった、と肩を落として、やりきれない思いを堪えて呟いた。

「お前がそれを言うなよな…」

霊術院五回生、教室

「現世実習？」

「そう」

ちょうど今日最後の授業が終わったところだった。本当だったらここでもう帰ってもいいのだが、何でも五回生に限って教師から連絡があるらしく、こうして残っているのである。

先程の台詞は、一護が「連絡って何だろうな」という問いに対しての平汰の答えであった。

「五回生のこの時期には必ずあるんだ。現世に行って、魂葬するんだよ」

「魂葬ねえ……」

魂葬と言えば、虚の退治と並ぶ死神の基本的な仕事の一つである。なるほど、確かに周りからはちらほらとそんな話題が聞こえてくる。しかし、正直一護には今、魂葬どころの騒ぎではなかった。

「おーし、揃ってるなー」

教室に現れた教師は、生徒を見回した。そして、教卓に手をついて言う。

「気付いている者もいるとは思うが、一週間後、現世にて魂葬を行う。これは卒業をするにあたって最も重要な実習だからな。意気込んでだよ」

そうして全ての連絡事項を言い終えて、生徒達が教室を出ていく。

「黒崎君、帰ろ」

「おう」と一護が返事をしようとした時、「黒崎！」と教師の呼ぶ声が聞こえてきた。

「わり、先に帰っててくれ」

「分かった。じゃ、また明日ね」

「おう！」

何を言われるかは想像がついている。一護は極力表情が顔に出ないように努めて笑顔で手を振り、呼んだ教師の元へと駆け寄った。苦い顔をしている教師に、一護はやっぱりかと息をつきそうになるのを堪えて、「何スカ？」と問うた。

「お前ももう、分かっているとは思うが、このままだとお前は護挺には入れん」

「…はい」

「護挺は斬拳走鬼全てにおいて、最低ラインは出来なくちゃならないのは分かっているな？確かにお前の戦闘センスは私も認めている。斬と走は霊術院でもトップだし、体術も悪くない。ただ、鬼道について言えば、お前だけがその最低ラインに至っていないんだ。このままじゃあ…」

「分かっているぜ、先生。俺が鬼道出来ないってのは、自分でも」

「……黒崎、前に俺が言った事覚えてるか？」

言おうか言うまいか迷った末、教師はそう口にした。黒崎は頷く。「そうか」と教師は目を伏せて、同じことを繰り返した。

「なあ、もう一度考えてみる。中途半端に死神になっても、お前に待っているのは“死”だ。家にはお婆さんもいるのだろう？ 霊力の少ないお前に、死神は辛いだけだぞ？」

彼は自分を想っていてくれるだろうことは分かっている。しかし、自分はどうしてもそれに頷くことは出来ない。

「なあ、先生。俺はもう死神になるって決めてんだ。ありがてえけど、俺は諦めねえよ」

その瞳に揺らぎはない。これ以上は無駄だと教師は判断したのか、諦めたようにはあっと大きく溜息をついた

「……そうか。なら、一つ教えておこう」

一護は首を傾げた。

「言おうか迷っていたんだ。院生中に出来る者なんて稀だし、ほぼ不可能に近い。だがお前は精神世界を見ていると聞いたことがある。零よりは一に賭けたほうがいい。いいか？ あくまで可能性だ。期待はするな」

いいな？と何回も釘を刺されて、一護は訳も分からず頷いた。

「斬魄刀の名を聞け」

目が大きく見開かれた。それは、自分の斬魄刀を手にするということ。多くの死神は、たいてい護挺に入ってから自分の斬魄刀を手に入れる。

それまでは大抵、浅打と呼ばれる刀を使うのだ。院生もそれを使って今度も実習をするわけで、護挺に入ってからもしばらくはそれを使うことになる。

「え……」

「いいか？それしか方法はない。斬魄刀を手にしたものは、何であろうと護挺に入隊することが許可される。つまり、鬼道が苦手だろうが斬魄刀さえ手に入れられれば、お前は死神になれるんだ」

「ほ、本当か!?!」

「ああ。お前にはもうそれしかない。望み薄だが、お前なら出来るはずだ」

「ああ！サンキューな、先生！」

思いがけぬ話だ。しかし、それは一護の道を切り開くものだった。それは確かに望み薄だったが、一護は確かな希望を抱いて、日々斬

魄刀の名を聞く修行を努めた。だが、そう巧くはいかないもので、無意識下でなら何度か行けたあの精神世界に、意識的には行くことが出来なかったのだ。

教師に言われ、名を聞こうと意識して行けた精神世界は、現世実習を控えた前夜のことだった。

「ここは…」

辺りを見回した一護は体を起こし、立ち上がった。辺りを見回すと、軽く目を開く。

男が立っていた。もう見慣れた馴染み深い姿。しかし、彼は今までより断然、近くに立っていた。近くに来たり、遠くに佇んだりしていたが、ここまで近くに立っていたことはない。

「おっさん」

《一護…》

「おっさん、頼む。名前を教えてくれ」

だが、それを意に介することなく、一護は男を見つけるや否やそう訴えた。

強くなるために、仲間を守れるようになるために。

今の自分より強くなるためには、斬魄刀の名を聞くことはいずれ通らざるを得ない道だ。

「アンタ、俺の斬魄刀なんだろう？」

だが、男はそれに答えることなく言う。

《私は既に名前を教えている、一護》

それは以前、夢を見た時に言われた言葉。“名を知っている”“名は教えた”。だが、一護は知らない、記憶にない。だから言う。

「何、言ってるんだ…。名前を知らないから、こうやって訊いてんじやねーか！」

《もう一度言おう。お前は私の名を知っている、一護》

男は再度言った。それしか言わない、言えない。

《呼べ、一護よ…》

だから、男も訴えるしかないのだ。“呼べ”と。

「……………」

俺は知ってる…？

だが、知らない。俺は知らない。一向に進まない会話が、一護にはもどかしい。

《一護、私は だ》

男は名を言ったはずだ。それでも、一護の耳に彼の名は届かない。

《まだ、届かないのか…》

そう残念そうに呟いた途端、男は急激に遠ざかって行く。それを見、一護は焦って男を呼び止める。

「待ってくれ、おっさん！俺は、強くなりてえんだ！」

思い出せ、一護。

お前と私の魂の契約を
。

気付けば、夜は明けていた。

そうして、一護は魂魄実習の日を迎える。

「はあ…」

現世。とあるビルの屋上に、五回生の面々が集まっていた。皆が初めての現世に興奮気味に顔を輝かせる中、隣の沈んだ空気に平汰は顔をひきつらせた。

それは鬼道の授業で失敗した時と同等で、一体どうしたものかと首を捻らせる。はあ、とまた溜息が聞こえてきて、とうとう平汰は問うた。

「黒崎君、どうかしたの？」

「いや、何でもねえんだ…。気にしないでくれ…」

はあ、と猫背のまま片手をあげて言う黒崎だが、こつもあからさまに落ち込まれて気にならないわけがない。しかし、だからと言って問い返すことは出来ずに平汰は「そ、そう」と引き下がった。

そんな時、また彼らが現れる。

「やあ、庶民どもじゃないか。悪いが今回は君お前らに出番はないよ。どうせ、俺達には勝てないんだからな」

ハハハハ！と笑う志之輔達から平汰は視線を反らした。この実習では、自分達が何体の魂魄を魂葬したかを数え、報告する。あく

まで目的は、如何に巧く魂葬が出来るかだが今後の参考までに数えておくのだ。おそらくはそれを言っているのだろう。

「集まっているようだな」

二枚の障子戸から三人の上級生が現れた。男二人に女一人。今回の実習の引率を任された者だろう。

一斉に静まりかえった院生達の目が、上級生に向く。

「今回引率を任された松沢だ。右にるのが新崎、左にるのが藤道だ」

院生達から見て右手にいた女性が新崎、左手にいた男が藤道というらしい。

「いいか。確かに魂葬をした数は今後反映されることはあるが、あくまで重要なのは如何に巧くやるかだからな。何かあつたら俺達上級生に報告しろ。集合は今から三刻後だ。じゃ、予め決めてある班で行動するように。散！」

わらわらと院生達が動き始めた。平汰達も、魂葬へ行くために班の一人である一護を促そうと振り向いて、表情が固まった。

立ったまま、ぼうつと屋上から眼下を見下ろしている。まだ落ち込んでいたのか、そう近寄って、それが間違いだったことに気がついた。少し目を見張ったその表情は何処か懐かしさを秘めている。

（ ……黒崎君？）

初めて見るその表情に、平汰は声をかけられない。そんな彼に代って、一護が話しかけてきた。

「なあ、平汰。ここって、何て処だっけ？」

「え…、空座町だけど…」

現世実習に決まったのは空座町という町だった。何でも担当死神が二人いるからだそう。加えて霊の数が多いからだという。

それがどうした、というような怪訝な顔で平汰が見れば、「そうかと呟いて振り切るように眼下の景色から視線を外して「いや、何でもねーんだ」と笑った。

「あの、俺、君達と一緒にの班なんだけど…」

「あ、うん。ごめん、行くっか」

眼鏡をかけた生真面目そうな院生の一人が近寄って来た。一護と平汰、そしてもう一人の班員が彼、照屋である。

《イタタタ！ちよ、イタ！》

「わ、わり…」

やたら痛がりながら消えていく整プラスに、顔をひきつらせて謝る一護。それに対し、順調に魂葬していく照屋と平汰。平汰は苦笑して言った。

「黒崎くんは力みすぎなんだよ」

「力みすぎねえ…。力加減が分かんねんだよな」

頭をガシガシと搔いて、一護は参ったと溜め息をついた。今ので三休目。最低の三体は魂葬すればいいので、今ので一応実習は達成したと言える。

平汰や照屋含め、他の院生達は優に三体など超えているのである。少なくとも、平汰達は超えている。だが、一護としては魂葬など早く終えて、斬魄刀の名を聞く修行をしたかった。

未だに、あの男からは名を聞けない。やはり、彼の口から名が出る瞬間、分厚い壁を通しているかのように聞こえなくなるのだ。そして、その後彼は決まって言う。

思い出せ、と。お前は知っている、と。

どうにも気になって魂葬に身が入らない。否、理由はもう一つある。それは、見知らぬはずのこの町に感じる懐かしさ。何故か胸が温かくなるような、込み上げてくる感動が胸を震わす。

(俺は、知ってるってのか…?)

気付けば、溢れんばかりに胸に込み上げてくる感情。

死神。

男。

空座町。

知っているのに、知らない。
知らないのに、知っている。

思い出したい、けれど何を？知っていることか？知っていることとは何だ？何だとは何だ。忘れていることか。忘れているとは何だ。

だって、俺は何も忘れてなんかいない。ちゃんと流魂街に来たときのことを覚えている。だと言つのに、男は何を思い出せと言つのか。みんな、みんな覚えている。

婆ちゃん。

子供達。

達吉。

榛名太一。

平汰。

志之輔。

先生。

その瞬間だった。

一瞬、頭の中を見知らぬ光景が横切っていったのだ。だが、本当に瞬き程の一瞬。

何かを見た。それは確かなのに、一護にはその事実しか分からない。ただ、一つだけそこにあったのは感情だった。

(寂しい…)

大切なものを失ったような寂しさ。一護は知らず知らずのうちに、浅打を持つ手を強く握り締めていた。

キヤアアアア!

天をつんざくような悲鳴と背を粟立たせるような霊圧が一護を襲った。

「黒崎君!」

今度は怒鳴るような平汰の声が聞こえていた。それに我に返ったよ

うに平汰を見る。すると、背後から笑ったような気配がして、聞こえた台詞に戦慄が走った。

見イツケタ。

咄嗟に一護は得意の瞬歩で平汰の側まで行くと、「逃げるぞ！」と手を引いてさらに数メートル先の屋根の上まで移動する。

その瞬間、ドンと重い音が聞こえてきたことから、地面が抉れていることが容易に分かって寒気がした。あと少し遅かったら、確実に自分の命はなかっただろう。

さらに、一護達は数回瞬歩で移動する。ただの演習でやった程度の瞬歩ではスピードもそれ程速い訳でも、大きな距離を移動出来る訳でもない。

とりあえず、ひとしきり移動した所は集合場所。上級生と会えば何とかかなると思つてのことだった。だが、今まで必死に移動していた一護達が目にしたのは、見たこともない恐ろしい光景だった。

「黒崎君、これ……っ」

「な、んなんだよ……っ」

吐き出される声。

「キヤアアア！」

「うわあああ！たすけっ、助けてええ！」

いつの間に現れたのだろうか。あらゆる場所で虚が院生達を襲っていた。その数は優に十は超えているだろう。

「なんなんだよ…っ、これ！」

いくら日頃、鬼道や剣術を習っているといっても、練習だけで本当の死と向き合ったことのない院生達が、実践で冷静に力を振るえる訳がない。

「おい！全員こっちに集まれ！穿界門を開けるぞ！」

そんな阿鼻叫喚の中で聞こえた声、浅打片手に叫ぶ上級生に、院生達は集まり始めた。転がるように穿界門を潜っていく院生達に続くのと、一護達も瞬歩で向かう。しかし。

ギユオオオオオ！

地響きのような叫びに、一護は何気なく足を止めてその方向を見てしまった。

「アイツ…ッ」

一護は足を止め、方向転換をする。

「黒崎君!？」

背中平汰の驚く声を聞きながら、一護は止まらずに瞬歩で向かう。その先にいたのは、今にも虚に襲われんとしていた志之輔の姿だった。

腰を抜かしてしまっているらしい。腕を振り上げている虚を恐々と見つめているだけで、逃げようとすらしていない。

それに舌打ちした一護は、腰に差した浅打を抜くと志之輔と虚の間に割って入った。と、同時に振り下ろした腕を斬りつける。

「おい、お前!早く逃げろ!」

「へ、え…?」

「っに、ぼーっとしてんだ!」

生きているのかと問いたくなる程青ざめた顔で、自分を見上げる志之輔は、叱責する一護に縋るように何かを呟いた。

「ああ!?!」

だが、喉がひきつった声は小さく、一護は聞き返す。何度となく振り下ろされる爪を弾くことに集中しているのだ。普段より大きな声で言っただけで欲しいくらいである。

不思議と体に染み付いたような動きが、自分達を襲う爪から守ってくれているがいつまで持つか。そう顔をしかめた時、ヤケになったような声が自分の耳に届いた。

「腰が抜けて立てないんだよ!」

「はあ!?!」

拍子抜けするような発言に思わず足が止まる。それを、好機とばかりに虚は勢いよく爪を振り下ろした。

「しまっ
」

「うわああ!」

その時、威勢のいい声が響いた。

「破道の三十一、赤火砲！」

瞬間、目の前の虚が爆ぜ消える。その先には、恐怖に顔を冷や汗を流しながら、それでも覚悟を決めた顔をした平汰が手の平をこちらに向けて立っていた。

ピピッ、ピピッ、ピピッ。

先程から一向に鳴り止まない伝令神機に、紫水は出来うる限りのスピードで屋根を蹴った。

「何なの、この量は　っ!？」

画面には赤い点々が、その個々の見分けをつけられなくなるほど浮かんでいる。きっと、十三番隊の隊士も向かっているだろう。

今日は確か、霊術院の院生が現世実習にやって来ている。

(何て間の悪い…っ！)

紫水が屋根の上を走っていると、穿界門を開き院生達を逃がす上級生の姿が見えた。虚の目を盗み、ビルとビルの間隙に穿界門を開いたらしい。

その勇気と判断力に拍手を送り、それでも所々で倒れている院生の姿に眉をしかめる。しかし、すぐに気持ちを切り替えると、ラストスパートをかけて穿界門を開く院生達の前に立ち、今にも襲おうと機を窺っていた虚を斬りつけた。

ギユアアアア！

おぞましい叫びに、ようやくその存在を知った院生達は、それを倒した死神へと視線を向けた。

「あ、あの…」

上級生の一人である松沢が、突然現れた死神に戸惑ったように声をかける。しかし、紫水はそれを遮るように口を開いた。

「そこにいる彼らで最後？」

横目で懐かしい制服を着た、十数人の院生達を見て確認をとる。松沢は質問しようと開いた口を一旦閉じ、首を横に振った。

「い、いえ！それが、あと三人戻って来なくて…」

「チツ」

紫水が思わず打った舌打ちに、松沢達はビクリ、と肩を跳ねさせる。だが、当の紫水はそんなこと気にもしてないようで、何かを考えるとすぐに指示を出した。

「分かった。彼等は私が連れて帰る。あなた達は早く戸魂界に帰りなさい。いいわね？」

「はい！」

松沢が頷いたのを見て紫水も頷くと、次にはその場から消えていた。

「はあ、あ！」

風払っても風払っても、次々と湧いて出てくる虚を昇華させながら、紫水は目的の三人を探していた。

「くっ」

刀を一閃させる。さらに増えた虚に眉をしかめて、己の力の無さに歯噛みする。隊長・副隊長とまではいかぬも、せめて席次を持つ程の力さえあれば。そうすれば、始解なら出来るだろうに。

ふ、と耳に人の声が聞こえてきた。眼下を見る。暗闇に紛れる青が見えた。一人は虚の背後に立ち、一人は腰を抜かしている。そして、その少年と虚の間に立つ少年を見て、紫水は目を丸くした。

「黒崎一護 ……っ!？」

胸を貫いた赤火砲に、一護は油断した。だから、志之輔が「危ない！」と叫んだ時には遅かったのだ。

「
っ！」

横に顔を向け、目を見開いた眼前約一センチ。だがしかし、そこで爪は光の粒子となって消えていった。

「危なかったわね、少年」

代わりにそこに立っていたのは、茶色い髪を上で一つに縛った、濃い青の瞳を持つ死神だった。

「アンタ……」

「黒崎君！」

突然現れた死神の少女に目を見開いていた一護に、後ろからやって来た平汰が心配げな表情で声をかけた。

「黒崎君！大丈夫！？」

「あ、ああ……」

平汰は上から下まで一護を眺め、怪我がないことを確認してホッと息をつく。

そんな平汰に、一護は彼に助けてもらったことを思い出して礼を言った。

「それより、ありがとな平汰。さっきは助かったぜ」

「あ……い、いいよ。別に」

「でも、やっぱりすげーよお前！」

褒めちぎる一護に、平汰は照れてしまい目を泳がせる。そこで、現れた死神の存在に気がつくと思いを下げ、聞いた。そこで、現

「それより、あの、これどういうことですか！？何でこんな！」

「落ち着きなさい。私にも分からないのよ」

紫水は辺りを見回しながら言った。虚は窺うように自分達を見ている。

（やばいわね……。あつちは数十、対してこっちは無席の死神一人に院生三人……）

ギリ、と歯を噛み締めた。はっきり言って、腰を抜かした少年は頼りにならないだろう。紫水は視線を平汰と一護にやった。なるとしたらこの二人。紫水は刀を構え直した。

この時、一護は虚が見えていなかった。瞬きをした瞬間、あの奇妙なビル群に立っていたのだ。

だがそれは一瞬のこと。もう一度瞬きした時、景色は一転してまた現世へと移り変わっていた。だが、その一瞬が命とりになっただけではない。

見ると、慌てて駆け寄ろうとする死神と必死に逃げるよう叫ぶ平汰の姿がある。感じた気配。一護が振り向いたその瞬間、衝撃が体全体に走った。

「か、は ……っ！」

肺の中の空気が吐き出される。しかし、一護は痛む体を堪え、何とか体を捻ると空に足場を作^{クラ}って踏みとどまった。

「くそっ」

今、この状況で仲間と離れるのは危険だが、そうも言われてられそうにない。先程の虚が自分を追ってくるのが見えて、一護は仲間と反対方向に逃げ出した。

「黒崎一護！」

紫水は一護の背中を追おうと足を踏み出して、動きを止めた。今、彼を追うよりこの二人を避難させるべきだろう。それにまだ、そこから中に虚はいるのだ。

後ろ髪を引かれながら、紫水は身を翻すと心配げに一護の消えていった方を見る少年に声をかけた。

「アンタ、動けるわね？」

「は、はい！」

「そう。じゃあ、あの少年を連れて私についてきて。安全そうな所

まで連れて、穿界門を開く」

「っ、ま、待って下さい！」

紫水の台詞に、平汰は声を荒げて制した。

「黒崎君はどうなるんですか！？彼を置いては」

「じゃあ！アンタは残ってどうするって言つの！？」

叫ぶ紫水に、平汰は押し黙った。怖いからではない、言い返す言葉がないからである。

「アンタはまだ院生よ。人を助ける力もなければ、自分の身を守る力もない。 自覚するのね」

紫水はそつと目を伏せた。その表情に悔しさがあることを見て取って、平汰は何も言えない。分かったからだ。この人も辛いのだと。

「私があなた達を守りながら戦えばいいけど、残念ながら、私もそれ程強くないの。でも、こうして生きていられるのは、ちゃんと自分の限界を知っているからよ。限界を知らない者は、身を滅ぼすだけだわ……」

そこまで言って、紫水は「さ、行くわよ!」と顔を上げ、そして不自然な現象に目を見開いた。

「 どういうこと? 」

「 え? 」

呆然と呟かれた言葉に、平汰も周りを見回した。そして同様、あり得ない光景に言葉を失う。

「 虚が いない! 」

名を呼べ

「は…っ、はっ、あ。は……っ！」

一護はただひたすら逃げていた。何故だか増える追っ手に浅打を握り締め、己の限界のスピードで空を駆ける。少しでも気を緩めれば、すぐ側まで来ている虚に追い付けられてしまうだろう。

頬を汗がったう。

(くそっ)

何回目かの罵倒を吐き出した。

(くそ、くそ、くそっ)

それは虚にか、はたまた己にか。否、どちらにもだろう。

悔しかった。

強くなると誓い、祖母の元を離れ、霊術院に入った。

それなのに。

(なんで俺は、また逃げてんだ　っ)

悔しい悔しい悔しい悔しい　！

仲間も守れない、自分ですら守れない、己の斬魄刀の名すら聞けない。死神になりたい、と思った。でも、こんな弱い俺がどうして死神になれる？

強くなりたい　！

大切な仲間を守れるくらい強く　！

(俺は　…っ)

《何故逃げる、一護》

「　　っ!?!」

聞こえた声に、一護は隣を見た。そこには自分のよく知る己の魂が分身。しかし、周りにある景色はビルではなく、懐かしさを感じた現世の街並みだった。

《私の名さえ呼べばいい》

一護は、「だから、俺は名前を知らないんだ」と反論しかけて、しかしそれを言う前に男はさらに言う。

《前を向け、一護。呼ぶのなら今を置いて他にない》

右隣にいた男は、次の瞬間走る一護の左隣に現れる。

《お前は私の名を知っている。思い出せ、一護》

嫌な予感を感じて、一護は咄嗟に横に跳ぶ。間一髪で爪は空を裂いた。一護はさらに走る。

《数々の死線を潜り抜けてきたお前が、何を今更虚一匹恐れること

がある《

「　　っ！」

瞬間、一護の中の何かが脈打った。体から何かが溢れ出ようとして
いるかのようだ。

知らず、一護は足を止める。

《恐怖を捨てる》

急に足を止めた一護に、虚も釣られ足を止める。

《前を見る》

次いで、相手は諦めたとみた虚の口元がにんまりと弧を描く。

《進め。決して立ち止まるな》

それから、ゆっくりと爪が振り上げられた。月の光に照らされ、鈍
い光を放つ。

《退けば老いるぞ、臆せば死ぬぞ》

それに合わせたように、一護は持っていないはずの刀を抜くような
仕草を取った。

《さあ呼べ、一護。我が名は ……》

お前の名は ……。

「斬月！」

振り向きざま、一護は片手に持った刀を勢いよく薙いだ。虚が昇華されていく。

「こ、れは」

一護は握られていた刀を持ち上げて、それを見た。

鍔も柄もない、身の丈程の大刀。見たことのないその形態に、一護は目を丸くする。しかし、妙に手に馴染み、親しみさえ感じる刀は間違いなく自身の斬魄刀だと、自信を持って言うことが出来る。

《一護よ、すまぬ…》

隣に立つ斬月は、急に謝ってきた。それに、一護は刀を構えながら驚いたように視線を斬月に向けた。ちなみに、しっかりと意識は虚へと向けている。

「何だよ急に？」

《私にはこれが精一杯だった…》

相変わらずの無表情で、しかしどこか疲れと無力に嘆くような悲しさを漂わせている。

一護は眉をしかめた。

「何のことだ？」

一体何に対して謝っているのか？一護はさっぱり検討もつかない。当たり前だ、忘れているのだから。

一護の霊圧は今、死神代行時の十分の一しかない。つまり、常時始解状態の刀とはいえ、斬撃の瞬間に一護自身の霊圧を喰い、刃先から高密度の霊圧を放出する。つまり、斬撃そのものを巨大化する斬月の能力は最大限に発揮されることはない。

さらに言えば、一護の最大の武器、月牙天衝も使うことは出来ないのだ。斬月はそのことを謝っている。

一護は自身の身に何がなされているのか知らない。

そしてそれは、死神も。

知っているのは一護の魂の半身である斬月だけ。

《一護、お前は全てを思い出さねばならぬ》

だが。

《構えろ、一護。来るぞ》

「っ！ああ！」

今は目の前の敵に集中しろ。

「うおおおお！」

手にした武器で数いる虚を風払う。しかし、流石に刀を手に入れただけでは多勢に無勢の形成を逆転することは出来ない。

すぐに限界はやってきた。

「くそっ、応援は来ねーのか？」

また一体風払う。

もともと剣術は得意だったからか、擦り傷や切り傷は出来ても致命傷はない。しかし、ずっと気を張って、動いていれば体力に限界はくる。

「黒崎一護！」

ザシュツ、と一護の目の前の虚が切り裂かれた先、そこには先程の死神が立っていた。

「お前…っ」

驚く一護に、相手の紫水も驚いたようだった。もちろん、視線の先は身の丈程の大刀。

「アンタ、それ…」

「あ、ああ、これか？これは ……っ！？」

咄嗟に刀を頭上に構えた。

瞬間、かなりの重力が両腕にのしかかった。紫水が刀を縦に一閃し、次いで顔面を斬りつける。

「説明は後だな！」

「そうね。ヤバいわよ、かなり。応援は ……」

背中合わせに刀を構える二人の額を、冷や汗がつたう。それがポタリ、と顎から滴り落ちた時だった。二人を照らしていた月に一転の影が現れる。

「貫け、アナガラス孔鴉」

月の光に照らされ、キラリと刃が鈍く光る。一直線に落ちてきた影は、そのまま一体の虚の頭にそれを突き立てた。

ドン、と重い音が暗闇に響く。

凄まじい風圧に、腕で顔を庇いつつ薄目を開けて様子を見た。そして、その一瞬の光景に目を見開く。突き立てたはずの顔が木っ端みじんに吹き飛び跡形もない。確かに先程まで白い顔があったのだ。

その虚はみるみると昇華され、姿を消した。

いつの間にか止んだ突風に気付くことなく、一護は呆然と男が現れるのを待つ。雲に隠れた月が顔を出し、その姿を照らす。再度、一護は目を丸くすることとなった。

「太一！」

横の死神が男を見て、そう呼んだ。深緑の髪、頬に走る傷。

以前に一度、一護も会ったことがある。

そう、彼は十番隊末席、榛名太一であった。

「おいおい、仮にも俺はお前より上なんだぜ？呼び捨てはねえだろ」

柄の長い、黒色の槍を肩に担いで太一は溜め息と共にそう言った。

その槍は、刃がとても独特な形をしている。万年筆のペン先を平たくしたような、と言えば伝わるだろうか。

「あー、ついね。で、どうしてここに？榛名末席？」

わざとらしい物言いに、太一は少しムツとしたような表情を見せたが、それどころではないと答えることにする。

「隊長からの命令だ」

「隊長の？」

頭に浮かぶのは流れるような銀髪と澄んだ翡翠の瞳。冷たくも温かな霊圧を纏った、凜と伸びる背中に、紫水の心は震える。

「でも、どうして？まだ、様子見の段階だって。応援だって、こんな早く来れる訳が」

周りで虚と奮闘する隊士達を見て、紫水は信じられないと尋ねた。

虚の大量の出現からは、まだ四半刻も経っていない。技術開発局が虚を探知、穿堺門を用意し、そこから死神が派遣されるとなると、四半刻と少しはかかるだろう。

「まあ、総隊長からの命令はそうだったらしい。だが、どうも気になるらしくてな。俺の様子見に行かせようと、穿堺門用意し終えた時に緊急連絡が入ったんだ」

「なるほど。だから、素早く来れたのね」

紫水は心底冬獅郎に感謝をした。

ふ、と太一の視線が大刀片手にぼうつと立つ一護を捉える。

「お、前 ……」

始めに捉えたのは一護の髪、そしてそれは手に持つ斬魄刀へと移る。

「それ、お前の斬魄刀か？」

「え？あ、ああ……」

突然問われて、一護は戸惑いながら頷いた。

「驚いたな……」

紫水はそれは仕方ないと苦笑を漏らした。ついさっき会ったと思っていた少年が既に自身の刀を手に入れているのだから。彼も知り合いらしいが、自分がそう思っているのだから、太一は殊更だろう。

しかし、今は他の隊士の応援に回らなければ。

「榛名末席、今は虚を倒しましょう」

視界の端で何かが動いた。自然と紫水の目がそれを追う。

（あの男、確か昨日の……）

それは公園で見た奇妙な男。

ゆっくりと道路を歩く姿が、暗闇の中で街灯の灯りにぼっかりと照

らされている。それは何処か、紫水の目に異様に映った。
身なりは普通だし、浮浪者という訳でもなさそうだというのに、この時間帯にどうして住宅街で何も無いこの場所にいるのか。

だがしかし、今は考えている暇はない。聞こえた虚の叫びに紫水は視線を引き剥がし、その場から跳んだ。男がそれを睨むように見ているとも知らずに。

第三章 連翹 ― 希望―

t o b e c o n t i n u e . . .

名を呼べ（後書き）

なかなか纏まらずに苦労しました…。

特にどうやって一護が斬月を取り戻すのかという部分は悩みましたね。

結果、ほとんど一護が初めて斬月を読んだ場面と同じになってしまいました…（…；）

皆さんの満足いくような展開に出来ていたら嬉しいです。

とある事(前書き)

第四章

花菱草

— 願い —

とある噂

今、専ら瀟霊挺で話題になっている噂がある。

“ 霊術院に身の丈程の斬魄刀を持つ院生がいる ”

瀟霊挺、とある甘味処

「鯛焼き一つ」

「鯛焼きなしで、餡蜜二つ」

「……………」

畏まりましたー、そう返事して去っていく店員。その後ろ姿を二人は見送って。

「何だよ!」

恋次は叫んだ。

「何だ、恋次。他の客に迷惑であろう。声を落とせ」

「いやいやいや」

品書きを脇へどけながら、ルキアは目の前に座る恋次を睨みつける。正論ではあるのだが、違う。恋次が言いたいことは違う。

「なんで、勝手に餡蜜注文してんだよ!？」

すると、ルキアはきつと恋次を睨んだ。その迫力に、恋次は思わず「おおっ？」と体をわずかに仰け反らせる。

「それは貴様が悪い」

「はあっ!?!」

「餡蜜が旨いからと来ておいて、鯛焼きを頼む奴がおるか、馬鹿者!」

「んな!?!仕方ねーだろ!俺は鯛焼きが好きなんだよ!」

「鯛焼きなどいつでも食べられるではないか!」

恋次は、ひく、と口元をひきつらせた。

「それを言うなら餡蜜だって同じだろうが!」

すると、今度はルキアが眉をひそめた。

「何を言っておるか!ここの餡蜜は他と違い、限定二十食!通称幻の餡蜜なのだ!」

ルキアはぐつと拳を握り締める。

「今まで忙しく、なかなか来ることが出来なかったが、浮竹隊長のご好意で休暇を頂き、ようやくこうして…」

涙をのむように語るルキアに、恋次はもはや言葉も出なかった。鯛焼き好きの恋次としては、餡蜜に幻も何もないだろうとしか思えない。

「それを恋次！どこにでもあるなどと、よくも又ケ又ケと！」

「知らねーよ！てか、だからこんな朝っぱらから餡蜜食いに来てるのか！」

只今の時刻、朝九時半である。

遠くで鶏が鳴いた気がした。

「そつだ。何かおかしいか」

「おかしいに決まってるだろ！何処にこんな朝っぱらから餡蜜を食う奴がいるんだよ！」

「馬鹿者っ、聞いてなかったのか！ここの餡蜜は限定二十食、この

くらいが普通なのだ！周りを見ってみろ」

言われるままに周りを見してみる。いる、確かに周りには餡蜜をつつく人々の姿があった。

「マジかよ……」

恋次はため息と共に額を押さえ、信じられないと内心零したのだった。

お待たせしましたー、と餡蜜が目の前に置かれる。涼しげな硝子の器に白玉や餡子、カットされたフルーツがのせられている。確かに美味しさそうだ。

ルキアが白玉を口にいれ、顔を輝かせるのを見て、恋次も手を動かした。

「確かにうめえな」

「そうであろう。だから、言ったのだ」

自慢げなルキアに、恋次は何となく不服に感じるが、言い返しても仕方がないので黙って餡蜜を口に入れた。声が聞こえたのは、その時だった。

「ねえ、知ってる？あの噂」

「ああ、知ってる知ってる。院生が斬魄刀を手に入れたって話ですよ？」

和やかな雰囲気が一転、どこか重々しい空気になる。

「凄いよねー。何でも凄いでかい斬魄刀なんだって」

それはある日を境に、度々聞くようになった噂。その度に、彼を知る者は心揺さぶられ目を伏せる。

恋次が口を開いた。

「なあ、ルキア」

「…なんだ」

「彼奴、の可能性だって、もしかしたら」

身の丈程の大刀。そんな型破りな斬魄刀を持っていた者など、彼等の知る限り“彼”しかない。そう思って恋次は言うが、その度にルキアは首を振る。

彼女だって、そうであればいいと思っているはずなのに、である。

「何度も言っているであろう。あり得ぬのだ」

しかし、だからこそ恋次はそう言われてしまっただけは何も言い返せない。加えて、何も知らない自分より、彼女の方が知っているし、説明されれば納得せざるを得ないのだから。

「私とて」

そこまで言って、ルキアは口を閉ざした。

私とて、そう思いたい、しかし、ルキアはそれを口にすることが憚られた。口にしたら、本当にそんな小さな希望に縋ってしまいうそで。有り得ないということを何より誰より知りながら、自分の弱い部分が信じてしまいそうになる。

だから、言うのだ。自分に言い聞かせるためにも。

「あり得ぬ、のだ…」

賑やかな店内の中で、まるでここだけ隔離されたかのように、その

小さな呟きは恋次に届いた。

「……そうか」

恋次はそれだけ言って頷いた。

十番隊執務室

「どろしてですか!?!」

机に手を置き、自らに詰め寄ってくる乱菊を見て冬獅郎はよつやく筆を止めた。そして、先程から何回も言っている言葉を口にする。

「何回も言っているが、可能性は低い」

そして、乱菊も今日だけで何回も口にした台詞を言う。

「しかし！あの噂が本当ならば、限りなくあの子の特徴に近いじゃないですか！」

カタリ、と小さな音をたてて冬獅郎はついに筆を置く。

「松本、お前も知っているだろう。確かに俺等死神は奴の記憶と靈力を奪った。しかし、それは現世に生存する間に限^{カン}ったことだ」

当時のことを思い出すように、冬獅郎は目を伏せる。それは悔いているようにも悲しんでもいるようにで。

「奴の力をみすみすが逃す訳がない。こっちに来た時に記憶・靈力共に戻るよう細工を施してあるはずだ。すぐにも瀟靈挺来れるようにな」

「それはっ」

「もし、その噂の人物が彼奴ならば、何故ここに来ない」

乱菊は何も言い返せずに口を嚙む。冬獅郎の言うことは最もだった。

「彼奴なら、記憶が戻った時点で即行逢いに来ると思うがな」

冬獅郎！

目に浮かぶ…。

伏せていた臉をそつと上げ、冬獅郎は力なく立つ乱菊を見た。そのまま視線は横へと流される。

「言っただろっ…」

乱菊の眉間に皺が寄る。横に置かれた手を強く握り締めた。

「可能性は低いんだ」

そう言う冬獅郎の声が泣いているようで、ああ、この人も悲しんでいるのだ、と乱菊は口に出さず嘆いた。

入隊希望

あの怒涛の現世実習から一年、彼等はある分岐点に差し掛かっていた。

「黒崎君、黒崎君はもう決めた？入る隊」

一枚の紙を片手に、平汰は同じく紙を見ていた一護に問いかけた。

「俺か？ああ、まあな」

「え！？早くない!？」

あっさりと頷く一護に、平汰は驚いて目を丸くする。“早い”と言う平汰の台詞は間違っていない。

彼等が持っているのは入隊調査票。入りたい隊の名を決め、霊術院へと提出する。これからの死神の道を決める、重要な分岐点だ。

そのため、今から一週間の考える期間を与えられているというのに、一護の決断は確かに早かった。周りの生徒達も、友人とあーだこーだと相談している。

平汰が驚くのも納得が出来、一護は苦笑して言った。

「俺は前から決めてたからな」

「へー、どっ？」

「十番隊」

「十番隊？」

意外だとばかりに目を丸くした平汰に、一護は苦笑した。

十番隊隊長日番谷冬獅郎。史上最年少で護挺十三隊隊長に就任した“天才児”。

そんな、とんでもない肩書きを持つ少年だと一護には思いもよらなかった。祖母から毎日聞かされていた無愛想で可愛げのない、しかし努力家で優しい人。

一護が知っていたのはこれだけであった。まさか、隊長だとは思ってもせず、加えて隊長という職の凄さを知っている今は尚更驚いた。

しかし、一護は迷わなかった。十番隊に入れば、間違いないと思ったのだ。祖母が彼を話す顔は、いつも優しげなのだから。

「僕はてっきり十一番隊だと思ってたよ」

剣技巧いし、と続けた平汰に、一護は大慌てで首を横に振った。

「冗談じゃねーぜ！俺は御免だ！」

平汰はまた目を丸くする。ここまで拒否するとは、何かあったのだろうか。

「そんなに？確かにあの隊は血の気が多いつて聞くけど……、何かあったの？」

「何かあったかって、そりゃあ……何だ？」

理由を説明しようとして、はて何が嫌なのだろうかと一護は首を傾げる。先程までは、何かに駆られたように拒否していたが、よく考えてみればとんとその理由が見つからない。

「何それ？あんまり強く拒否するから何かあったのかと思ったけど」

「いやあ、俺も何か理由があったはずなんだけど……、敢えて言うなら……命の危険を感じたから？」

「ええ？流石に更木隊長だって新人隊員を殺したりはしないよ」

「はは、だよなあ」

困惑したような表情を浮かべる平汰に、一護も同様、困惑して苦笑を浮かべる。その時、威張り腐ったような声が耳に届いた。

「俺は六番隊さ！」

志之輔だった。

「何てつたつて、隊長はあの四大貴族の一つ、朽木家の人間だからね！僕に相応しいだろう？」

そう高らかに言っただけのける志之輔に、周りは目を輝かせ聞いている。それを見ながら、一護は思う。

（俺にはあんな堅い隊長とこ無理だぜ。彼奴、よく耐えてるよな
ー）

と、そこまで考え一護ははた、と気付く。彼奴とは誰だ。先程のことといい、自分が気付かぬうちに何かを考えていることが最近多い。まるで、見知らぬ誰かが自分の中にいるようだ。しかし、それに違和感を感じない自分がいて、一護は自分から分らない。

「黒崎君は？」

そんなことを思っていると、不意に平汰がそう問うてきた。質問の意味が分からず、一護は首を傾げる。

「何がだ？」

「理由だよ、理由。何で十番隊？」

すると、一護は「ああ」と頷いて「隊長がいい奴だって、聞いてたから」と言った。

「聞いた？誰から？」

平汰は不思議そうに問うた。隊長個人の性格など、院生の間には滅多に知られてはいない。せいぜい隊の雰囲気くらいである。

「んー、まあ、ちょっとな」

一護はそう誤魔化すと同時に、授業開始のチャイムは鳴った。

十番隊執務室

「……ん〜、……もう無理……ですよ〜……」

「……」

「……たい、ちよ〜ったら……ムフフ……カルシウム足りないんじゃないですかあ〜……」

「……ま……」

「酷いですよ、隊長ーっ。いきなり耳元で怒鳴らなくてもいいじゃないですかあー!」

「寝てるてめえが悪い」

その後、堪忍袋の緒が切れた冬獅郎が乱菊を怒鳴りつけ、否応なく椅子に縛り付けた。

もうすぐ、新人隊員が入ってくると皆が忙しくしているというのに、全く図太い神経をしている。

「ちゃんと、新人隊員のリストを纏めておいたんだろうな？」

気持ちを落ち着けようと、大きく息を吐き出してから冬獅郎は問うた。

「……えへ」

語尾に何かつきそうな錯覚を覚えるそれに、冬獅郎の額に青筋が浮かぶ。それを見た乱菊の表情が一気に焦りに染まった。

「松本、てめえ……っ」

「だだだ、大丈夫ですよお！今からやれば全然間に合いますっつて！」

そう松本が机に積み上げられた書類の束を示した時だった。

「へっ!?!」

窓から突如吹き込んだ風が、部屋を荒らす。冬獅郎の銀髪を揺らし、乱菊の金髪を乱し、筆を転がし、書類を巻き上げる。

白い紙が、次には部屋一面に広がっていた。

「こりゃ派手にやったな…!」

「ぎゃー!もう何よ!ムカつくわね、風!」

「風に当たっても仕方ねえだろうが…!」

冬獅郎は窓を閉めると、億劫そうに書類を拾い上げる乱菊を手伝い腰を折る。

「これで最後か?」

最後と思しき書類オボを拾い、冬獅郎は机の上で書類を揃えている乱菊に確認をとる。

「ええ、たぶん。一通り見ましたが、どこにもありませんでしたから」

「そうか」

二人は気がつかなかったのだ。運悪く乱菊の溜めに溜めた書類の上に落ちていたから。

橙の髪をした少年の写真が貼られた、新入隊員票に…。

向けられる視線の先

先日、霊術院の卒業式が終え、その数日後の今日、入隊式を迎える。

「なんか、いよいよって感じだね…」

門をくぐり、白と橙の光景を見回すと平汰は真新しい死覇装の胸を掴んだ。

緊張しているのか、若干動きが堅い。

「ああ、だな」

一方で、一護からは微塵も緊張というものが見られない。普段と変わらぬ様子だ。

「入隊式はそれぞれの隊でやるんだよね？」

「え？ああ、うん」

歩き出した一護に、平汰は慌てて追いつき頷いた。

「そう。入隊式は隊それぞれ的方式だけどね。あ、黒崎君、隊舎の場所は分かる？」

「へ！？あ、あー……」

そういえば、と問うてきた平汰に、一護はぎくりと肩を震わせると目をさ迷わせる。

それだけの反応で、平汰は全て分かった。

「やっぱりね。黒崎君のことだから、そんなことだろうと思ったよ」

そう息つく平汰に一護は乾いた笑いを浮かべる。正直そこまで考えてなかった。

「十番隊はこの道を通り直ぐ行って左だよ。千歳緑の柱を探して」

平汰は、まあそれが一護かと苦笑する。ここ六年一緒にいて分かったことである。真っ直ぐとも猪突猛進とも言える性格。それが一護の長所で、短所だ。しかし、平汰はそんな一護が嫌いではない。

「そっか！ありがとな！」

「いいよ。じゃ、僕はこつちだから」

結局、平汰は四番隊への入隊を決めた。鬼道が得意な平汰は、それを生かせたらと思ったからである。

四番隊と十番隊は真反対に位置している。

左を示した平汰は、悲しげに笑むと言った。

「しばらくは会えないだろうけど…、また暇な時とか、その…」

しどろもどろに言う平汰が、まるで初めて会った時のようで、一護は懐かしさを覚えつつ「ああ！」と笑う。

「また絶対会おうぜ！」

そうすれば、平汰は嬉しそうに笑い顔いた。

「……、どこだ？」

一護は見覚えのある景色を前に、参ったというように頭を掻いた。

平汰との別れから、教えられた通り歩いていたはずだった。しかし、どういったことであろう。一向に十番隊隊舎が見えてこないのである。

「確か、千歳緑の柱だったよな？」

辺りを見回しても、
ない。加えて、先程から通り過ぎる死神達の驚いたような視線が気まわずくて仕方がない。

「やべーな……」

空を見上げ、太陽の位置を見ればすでにそれは真上から少し傾いているところ光を降り注いでいる。

あと少しもしたら、入隊式は始まってしまっただろう。

「あーっ、ちくしょー！」

一護が身を翻し、駆け出そうとした時だった。

「叫んで何やってんの？」

「うおおー!？」

振り返った先には一人の青年が立っていた。一護より頭一つ分背の低く、やたら冷めた表情をしている。しかし、そこには確かに呆れが含まれていた。

「だ、誰だ？」

「それはこっちの台詞。さっきからずっとろろろして、もしかして不審者？」

「なっ、違えーよ!」

不審者呼ばわりされ、一護は慌てて頭を振った。^{カブリ}

「今日入隊式なんだけどよ、どうも道に迷っちゃまったんだ」

「ズルッ」

「えっ」

「どこの隊？」

「あ、ああ……」

どうにも言葉の足りない青年だ。

「十番隊だ」

「そう」

一言言つて青年は一護の横をスルリと抜けると歩き出す。一体何なのだ、一護が首を傾げその背中を見つめていると、不意にその青年は振り返った。

「行かないの？」

「え」

「十番隊」

そして、青年はまた歩き出す。

「い、行く！」

一護はそれにきょとんと呆けて、大慌てでその背中を追ったのだ。た。

何と、一護はずっと十番隊の側をうろろしていたらしい。すぐに十番隊の隊舎は見つかった。入隊式は修練場で行われる。同じ新入隊員と思われる数十単位の人々が真新しい死覇装に身を包み、修練場を目指し歩いている。

急いでいて気づかなかったが、隣を歩く青年もまた、真新しい死覇装を身に纏っていた。

「なあ、お前も十番隊入るのか？」

「当たり前でしょ。じゃなきゃ、こんなところにいない」

「そ、そうか」

(や、やりにくいっ)

一護は顔をひきつらせ頷いた。それからは大した会話もなく、そうこうしているうちに修練場へと入る。入隊式も間近に迫っているためか、一護達は大分後だったらしい。既に整列している中、一番後ろに加わる。

興奮しているのか、波のようにざわめく新入隊員達の声が、ある一瞬を境に引いていく。

後ろにいる一護からは、金銀髪美女の頭しか見えない。華やかな髪色に秋空を思わせる澄んだ瞳。霊術院で習ったから分かる。十番隊隊長松本乱菊だ。

感嘆の溜め息をつくもの、堪えきれないと漏れるはしゃぎ声。男からも女からも慕われ、憧れの念を抱かせる女性だ。

ということは、恐らく隊長である彼もいるはずなのだが。

(み、見えねえ)

しかし、何か台のような物に乗ったのか、ようやくその姿を見ることが出来た。

銀髪の髪に青緑の瞳。凜とした佇まい。そこには隊長然とした雰囲気があり、幼いながらも美しさと威風堂々とした態度が伴い目を離せない。

彼が。

「十番隊隊長、日番谷冬獅郎だ」

知らず止めた息を吐き出す。声もまた凜とし、大きくはないのによく耳に届いた。

如何にも生真面目そうな口調である。

「同じく副隊長の松本乱菊よ。よろしくね」

対して、副隊長の乱菊は陽気にそう自己紹介してみせる。

「今日からお前らはこの十番隊で働いてもらうことになる」

冬獅郎はそう切り出した。

「今まで靈術院でも剣術や鬼道を習ってきたとは思う。だが、死神になって決定的に違うのは常に死が隣り合わせになることだ。安全が保障された稽古とは違い。任務では常に冷静さと適切な判断が求められる。いいか、半端な奴はいらねえ。仲間を信じられる奴と度胸のある奴だけについてこい。それと、もう一つ。勇気と無謀は別物だ。心得ておけ」

短い、新人隊員には心に残る言葉だった。

（かっけー…）

一護も目を輝かせ、食い入るように冬獅郎を見る。

「たいちよー、かあっこいいー！」

乱菊がそう言うと、途端緊張感が和らぐ。それに冬獅郎は呆れたような、戒めるような目を向ける。怒鳴ろうとして、今が入隊式だということに気付き堪える、そんな表情だ。

生真面目な隊長と大らかな副隊長。バランスの良い隊だと、漠然と一護は思った。

そんな時、冬獅郎の目が一護へと向けられた。

瞬間、彼の青緑の瞳が大きく見開かれる。その瞳には“何故？”“どうして？”という疑問と動揺、まるで幽霊でも見ている信じられないとも言つような色が浮かんでいる。

（な、何だ？）

何故、自分がそんな表情で見られているのか。それが分からず、一護はただその視線を受け止める。

そのうち、乱菊もそんな冬獅郎の動揺と視線に気付き、一護を見つけた、と同時にまた目が見開かれる。

嘘でしょ？そう問つよつた。

「ねえ、何かアンタ見られてない？」

隣の青年が顔を前へ向けたまま尋ねてきた。

「や、やっぱ、そう思うか？」

どうしよう、そんな風に慌てれば、冬獅郎は何事もなかったように表情を普段のそれに改め、一護から視線を外す。乱菊はそれから、しばらく一護をちらちらと気にしていたが、冬獅郎を見てか、それもなくしていった。

(何だったんだ？今の)

驚かれるようなことをした覚えのない一護は、先程の隊長、副隊長の態度が腑に落ちず首を傾げる。

尸魂界に来てから、死神に触れたのは以前、虚に襲われたあの時と現世実習の二度きり。しかも、名を榛名太一という末席の死神と嶺川紫水という平の死神に会っただけ。

今の一護の立場から見れば、大袈裟でなく“雲の上”の人、隊長副隊長と会ったことなどあるわけがなく、見たのだって今日が初めてなのだ。

(もしかして髪色か?)

珍しい橙の髪色かと思うも、「いや、でもあの二人も珍しいよな」と結局はふりだしに戻る。

そんな答えの出ぬ疑問に頭を捻らせているうちに、入隊式は終わったのであった。

入隊式が終わった後は、席官からの説明がある。その席官を待つ間、一護は隣に立つ青年に話しかけることにした。

「なあ。お前、名前何てーんだ?ちなみに、俺は黒崎一護ってんだ」

「知ってる。院生の中じゃ、アンタ有名だし。身の丈程の大刀を持った院生がいるってさ」

「へー、そんなに有名になってたか?ま、俺の場合そうでもしなきゃ卒業出来なかったからなー」

「自覚なかったの?ま、いいけど。僕は浅井尚晴^{アザイナオハル}。よろしく」

「おう！よろしくな！」

お互い自己紹介を終え、握手をした時、ようやく「待たせたな」と席官が現れた。なかなか威厳のある男だ。

「七席の竹添だ。今からお前らにこれからの仕事について説明する。ついて…」

淡々と説明していく竹添がふと書類から顔を上げた。その際、視界に入った色に、言葉が不自然に切れる。その目はしっかりと橙を捉えていた。

一護は「え、俺？」とキョロキョロするが、周りの視線も竹添の視線も己へと向いている。

驚きに染まった瞳。信じられないとでも言うようなそれは、つい先程見たものと一緒で、一護はまた首を傾げる。

そして、竹添は口を開いた。

「く、黒崎殿!?!」

「お、おう!?!じゃない、はい!?!」

何故、自分の名前を知っている。一護は滯霊挺に入った時からの周

困の違和感に胸がざわつきのを感じた。

そんな一護の心境など露知らず、竹添は周りの驚きそっこのけで一護に近付く。

「黒崎殿！何故、貴方がここに！？」

「え、いや……」

「もう皆様には会われましたか？貴方がいなくなられてから、随分気落ちしてらしたのですよ？」

「ま、待ってくれよ！」

どんどん進んでいく話に、一護は慌てて制止を求める。すると、竹添は「はい？」とようやく話を止める。

「何のことスか？皆って……。だいたい、俺は今日初めて瀨霊挺に来たんすよ？」

一護は何故か妙な気まずさを感じ、視線を外しながら言った。すると、竹添は大きく目を見開く。今日で何回この表情を見ただろう、とどこか冷静な自分がそう思う。

「そん、な……」

竹添は信じられない、と息を呑んだ。そんな、まさか。今の気持ち
を言うならそんなとこか。目の前の一護を見る限り、嘘をついてい
るとは思えない。だいたい、自分達の知る一護はそんな嘘をつくよ
うな男ではないのだ。

しばらく呆然としていた竹添は、はと我に振り返りを見回す。新入
隊員達が何のことだ、と怪訝そうに自分を見ている。

「あ…、す、すまん。人違いだ、忘れてくれ」

咄嗟にそう言い訳して、列の先頭に戻る。

「何なのさ、一体」

隣で尚晴が呟いたのを聞いて、一護は首を傾げたのだった。

十番隊執務室

執務室は妙な雰囲気に包まれていた。冬獅郎はともかくとして、普段おしゃべりな乱菊も神妙な顔をして口を開かず、そして冬獅郎も筆を持って動かす素振りも見せない。

無理もなかった。二人の頭を占めるのはあの鮮やかな橙色。そう、黒崎一護のことであった。目を疑った。

俄には信じられなかった。

何故、どうして、それしか頭に浮かばず、普段の表情に戻すのには苦労した。

「隊長……」

ふざけなど見えない声音で乱菊は自らの上司を呼ぶ。

「何だ」

嘘だ。呼ばれた理由など、冬獅郎は確信を持って知っている。それが乱菊も分かっている、しかしそれを追及したりしない。

「本人、だと思いませんか？」

彼が。

冬獅郎は結局、一回も動かすことのなかった筆をカタリと置いた。

「……………間違いねえだろうな」

間が合ったのは、本人だと確信がありつつ未だ冬獅郎も信じられないから。だが、小さくともあの温かな霊圧は間違いなく彼のものであつた。

「まさか、あの噂の院生が本当に一護だつたなんて…」

背中に背負われていた一護の斬魄刀、斬月を思い出し乱菊は呟く。そして、一護を見てからずっと疑問だったことを冬獅郎に投げかけた。

「何故、一護は彼処にいたのでしょうか？」

冬獅郎はわずかに考え込むと言う。

「気になったのは、奴の霊圧だ。こっちに来た際、記憶と一緒に封印した霊力も戻るようにしたはずが、奴の霊力は並の死神以下しかねえ」

「……どういふことですか？」

意味深な台詞。乱菊は顔が強張るのを感じながら、明確な答えを待つ。

「恐らく、黒崎の霊力は何らかの影響によって未だ封印されている」

「じゃあ、まさかっ」

「ああ。霊力が戻ってないということは、必然」

コンコン。

冬獅郎の台詞が確信に迫った時だった。一つのノックがそれを遮る。

「第七席、竹添です」

「入れ」

きつちり頭を下げ入って来たのは、つい先程仕事の説明を終えて来た竹添であった。

「何かあつたか？」

そう問うてきた冬獅郎に、竹添は齒切れ悪く「それが…」と切り出した。

「あの、もしかして、黒崎殿はこちらに来ているのでしょうか？」

その内容は、正くらい冬獅郎達にが今まで話していたもの。冬獅郎は一瞬乱菊と目を合らし、気になるとばかりに自分を見る竹添に視線を戻した。

「お前も見たか」

「お前も？」

「俺らもさっきの入隊式で見たばかりだ」

「私達も驚いたわ。まさか、一護がいるなんて」

大きく息をつきながら、綺麗な金色の髪を掻き揚げる乱菊。差し込む夕日の光がキラキラと髪を照らし、場違いにも竹添は見とれる。

「私も驚きました。それにどうやら、記憶がないようでした…」

悲しげに目を伏せる竹添の台詞に、冬獅郎も乱菊も目を丸くした。それから、苦々しげに「やはりか」と呟く。

「予想はしていたが、まさか本当に記憶がねーとはな…」

「確か、封印はこちらに来れば」

「ああ。戻るはずだ。いや、だったと言ったほうがいいか…」

「こりゃ一波乱起きるな、そう大きな溜め息とともに呟かれた言葉に、乱菊は「どうします？」と問うた。」

「恐らく奴がこっちに来てることは瀨霊挺中に広まってるはずだ。事実を直接確かめると同時に大きな混乱が起こる前に、とりあえず黒崎を捕まえる。後はそれからだ」

お前は叛乱に関わった十番隊の死神に、普段通り職務を続けるように伝える。

そう竹添に言い残し、乱菊を連れ立って冬獅郎は出て行った。

第四章 花菱草 ー 願いー

t o b e c o n t i n u e . . .

向けられる視線の先（後書き）

とうとう浄霊挺編突入です！

ここからがメインですね。展開が早い早い。しかも、浄霊挺の構造が分かってないので、ちょいちょい意味不なところがあるかもしれませんが（泣

申し訳ないです（- -;）。

一方的な再会

白と橙を基調とした死した魂の逝く処、瀟霊挺。

そこを行き交うのは黒の袴を身に纏う死神達である。彼等の仕事は虚の昇華ではあるが、それ以外は大抵書類の処理と、基本は机に向かう仕事が多い。特に大きな事件さえ起きなければ、瀟霊挺も平和なものである。

そんな死神が、今日何とも慌ただしく動き回っているのは、今となつては何十年前にもなる叛乱の影響が未だ微かに残っていること、そしてそれが更に増しているのは今日が入隊式だからで、死神がざわめいているにはまた、さらに理由があつた。

慌ただしい死神達の中を、もうじき瞬歩でも使っくんじやないかという勢いで駆けていくのは、赤い髪が特徴的な阿散井恋次、六番隊副隊長である。

彼は一目散に走っていると思うと、同じく一心に走る黒髪の少女、十三番隊四席朽木ルキアを見つけて足を止めた。

「ルキア！」

そう声をかければ、ルキアも恋次に気がつき「恋次！」と僅かに驚きを含ませた声をあげる。

「聞いたかよ、ルキア。あの噂」

「ああ。しかし、信じられん。」

眉根を寄せ、視線を下に向けるルキアは未だに迷っているようだった。

“黒崎一護が瀟霊挺にいる”

それはまことしやかに流れている噂。どうやらどこかの隊の入隊式に出ているようで、実際にも見たものがあるらしい。

「やっぱり、あの噂の院生は一護っつーことだ！」

「本当、なのだろうか……」

「ああ！行こうぜ、ルキア！あの野郎、俺らに何も言わねーで。一発ぶん殴ってやんなきゃ、気が済まねえ」

「……………」

「んあ？どうした、ルキア？」

何やら考え込むルキアに気付き、恋次は尋ねる。嬉しくはないのだろうか？恐らく、一護がいると聞いて一番喜ぶのはルキアだろうと思っていたのだが。

「少し、不思議でな」

「ああ？何がだよ」

早く一護を探しに行きたい恋次は、若干急いたように聞き返す。対してルキアは、そんな恋次を気にもせず、に険しい顔で言った。

「前にも恋次、貴様に説明したが、一護の記憶そして霊力はこちらに来た際全て元に戻るようになってる。だから、私はもしかしたらあの噂の院生が一護ではないか、という貴様の意見に対し“あり得ぬ”と言った。一護がもしこつちに来たならば、奴のことだ、すぐに我々に会いに来るだろうと踏んでいたからな」

「ああ、だから俺も一護じゃねえって納得したんだぜ」

「だとすれば何故、一護は霊術院に行ったのだ。彼奴は物事を考える前に突っ走る奴だぞ」

「あー…」と恋次は唸る。全くもってその通りだからである。

「いや、でもよお。そんなの一護に会って直接訊きゃよくねえか？」

ルキアはガリガリと頭を掻く恋次を見て、僅かの間の後「そうだな」と言った。

十番隊修練場

「以上だ。初めは慣れんと思うから、数名ずつ席官と組んで仕事をしてもらおう。それまでは主に雑務だ」

竹添は何十という新人隊員を見回して言った。

「では、今日はこれまでとする。最初に案内した宿舎に部屋割りをしてあるから、そこがお前たちの家だ。仕事は明日の辰の刻から。じゃあ、解散！」

そう高らかに宣言すれば、新人隊員達は一斉にざわつき出した。そ

れは一護も同じでいつの間にか詰めていた息を大きく吐き出す。

「あー、何だか無償に疲れた」

そんなつもりはなかったが、やはり無意識に緊張していたのだろう。首もとをガシガシと意味もなかくかいて、張り詰めていた気を緩めた。

「うわ。もう日暮れんじゃないか」

尚晴と共に修練場の外へと出た一護は、すでに山の端に顔を隠そうとしている太陽を見て言った。思いの外、入隊式から時間が経っていたらしい。

ぞろぞろ出てきた他の新入隊員は宿舎に向かったり、友人と何処かに行こうと話したりしている。

「なあ、尚晴。お前これから用事あるか？」

黙って隣に立つ尚晴を見て、一護は尋ねた。

「別ないけど」

「おっ。じゃあさ、一緒に飯食い行こーぜ」

屈託のない笑みを浮かべた一護に、尚晴は人懐こい奴だと思いつつ頷いたのだった。

それからしばらくは、ほぼ一方的に一護が話しかける形で会話をしていた二人だったが、空が藍色に染まる頃、一護はふと立ち止まった。

「なあ、尚晴」

「何？」

いきなり立ち止まった一護に、尚晴は怪訝そうな表情を浮かべる。すると、気まずそうに髪を掻いた一護は恥ずかしそうに告げる。それに目を丸くしたのはもちろん、尚晴である。

「はあ！？道に迷ったあ！？」

珍しく大きな声を上げてしまつのも無理はない。

「い、いやさ。適当に歩いてりゃ着くかなーと思ってただけだよ。はは…」

「馬鹿じゃないの！？」

「そ、そんな怒るなよ……」

「怒ってないよ。ただ呆れてるだけ」

額に手のひらを当て、大きな溜め息をつく尚晴に、一護は居心地悪そうに唸る。

この数刻で一護という人間がどんなものか、尚晴には分かってしまった。だから、という訳ではないが若干の諦めを含んだ声音で尚晴は言う。

「ったく。だったら、何だって飯食べようなんて言ったのさ……」

「しっ、……仕方ねーだろ。腹減ったんだからよ……」

視線を外しながら言う一護に、最後、また溜め息をついて、尚晴は歩き出した。

「お、おいっ、尚晴？」

つい先程もこんなことがあった気がする。一護は戸惑ったように尚晴を呼んだ。まさか、怒らせてしまったのだろうか。だったら謝ろうと一護がもう一度呼びかけようとした時、尚晴が振り向く。

「ほら、行くよ」

「え」

「ご飯。僕の知ってるお店あるから。そこでいいでしょ」

最早、疑問系ですらない。しかし、一護は笑みを浮かべた。一護にも、この数刻で尚晴という人間が分かってしまった。

「おう！」

一護は駆け出すと尚晴に並んだ。その表情はやけに嬉しそうだ。

「何？」

「いやあ？尚晴は優しいなあって思ってたさ」

「……………いきなり、何」

ついとそっぽを向いた尚晴に、一護はまた笑みを浮かべる。

「いやー何でも！」

「？」

「どうした？」

何かに気がついたのか。そんな素振りを見せて立ち止まった尚晴に続いて、自然と一護も立ち止まる。

「あの人達」

尚晴の視線の先にいたのは、派手な赤い髪をした男と濃紫の瞳をした小柄な少女だった。何やら深刻そうな顔をして話している。生憎と会話の内容は聞こえてはこないが、重要な話なのか。

「ん？あれは…、阿散井副隊長じゃねえか。もう一人は誰だ？」

以前、勉強した時は自分に負けず劣らず派手な髪色をしていると思っただことがある。名前も独特なことから、日番谷隊長と並んですぐに名を覚えられた。

しかし、もう一人は見たことがない。副隊長と肩を並べて話しているのだから、隊長格なのかとも思うが、一護には見覚えがなかった。

本当に？

「え？」

一護は目を丸くした。

「どうかした？」

隣の尚晴が不思議そうに見てくるが、今、一護には首を横に振るだけしか余裕がなかった。今のは何だ。

見覚えがない。それは確かだ。こちらに来てからの記憶を振り返っても、あの少女と逢ったこともなければ見たこともない。それなのに。。。

(何で…)

何で、逢ったことがあるだなんて思うんだよ　っ！

自分が自分で分からない。言うなれば、一護の心境はそんな感じだった。

「一護？」

いきなり黙り込んだ一護を不審に思い、尚晴は名を呼んだ。すると、一護は弾かれたように俯かせていた顔を上げる。

「な、何だ？」

「何だはこっちの台詞なんだけど。いきなり黙り込んで、どうしたのさ」

「あ、え？そうだったか？悪い、ちょっと考え事してた」

「ふーん。ま、別にいいんだけど」

あまりにあっさりした引き際に、一護が思わず苦笑した時だった。

「一、護？」

息を呑んだように自分の名を呼ばれた。反射的に顔を向ければ、そこには先程まで深刻そうに話し込んでいた二人の姿があった。目を丸くして自分の姿を見る者の姿は、今日でもう何回目になるだろう。“信じられない”という自分を見る瞳。そこにあるのは驚きと喜びで。。。

(でも、俺は知らねえんだ…)

まるで、かつての友と逢ったような顔をされても …。

（俺は知らねえ…）

そんな一護の心境も知らず、二人は喜びを露わに駆け寄った。普段だったら、顔を俯け、苦々しい表情している一護に気付いたかもしれない。しかし、今の二人はかつての仲間に会えた感動の方が大きく、そんな余裕がなかったのだ。

「一護、貴様！こちらに来てたなら、どうして一言言いに来ないのだ、馬鹿者！」

「え、ええ？」

「本当だぜ！わざわざ霊術院に入るとか、何考えてんだあ？」

「い、いや、その…、え？」

詰め寄られ、更には口を挟む暇もなくまくしたてられる。

一方、尚晴は一護の隣でただ呆然としていた。己の斬魄刀を持つことにしる、その斬魄刀の大きさにしる、タダモ徒者ではないと思っただが副隊長とも親しい間柄なのだろうか。

まして、自分達は新入隊員。彼等と交流する機会などほとんどない。

しかし、一護の顔を見て尚晴は眉を寄せる。喜びに顔を輝かせる阿散井副隊長らに対し、一護は困惑したように眉を垂らしているのだ。

「一護、阿散井副隊長達と知り合いなの？」

気付けば、尚晴はそう問うていた。

「ん？」

「……あ」

そうすれば、尚晴に視線が集まるのは自然なこと。一護はもちろん、恋次とルキアの目は尚晴に向けられた。

「あ、それが」

「んだあ？一護、こいつお前の知り合いか？」

答えようとした一護の台詞に、恋次は被せるようにして言った。ずい、と顔を寄せられて、尚晴は顔を堅くして僅かに身を引く。すると、バシンといい音が響いた。

「つてえ！何すんだルキア！」

どうやら、少女が恋次を叩いた音らしい。見知らぬ少女が副隊長を叩いたという事実といきなりすることに、尚晴と一護は目を丸くする。そんな二人を差し置いて、睨みつける恋次にルキアは怒鳴った。

「馬鹿者！相手が困っておるではないか！貴様はそれでも人相が悪いのだぞ！」

「別にただ見てただけじゃねえか！殴んなくたっていいだろーが！」

「だから、それが悪いと言っただ！」

「あの一……」

一護の遠慮がちな呼びかけに、二人は「何だ！？」と一斉に振り向いたものだから、一護と尚晴は圧されたように身を引く。

「あ、いや。何でもねえ……です」

途端、恋次達は気持ち悪いものを見たように顔歪めた。

「どどどどどつしたのだ、一護！」

「ええ？」

「何か変なもん食ったんじゃねえだろーな…」

余りな言い草に、一護はむっと顔をしかめた。自分は今日配属されたばかりの平隊員。副隊長に敬語を使うのは当たり前だし、目の前の少女だって自分より先輩なのは見てて分かる。

何故、そんな自分の名を知っているのかは分からないが、確かに敬語は苦手だとして、そこまで自分は常識知らずに見えるだろうか。

一護はそれをそのまま口にした。

「俺、じゃない。私は新入隊員ツス。副隊長に敬語使うのは当たり前前ツスよ」

「…は？」

「あの。それより、何で俺の名前知ってんスカ？」

「っ!？」

瞬間、二人は息を呑んだ。

今、目の前の彼は何と言った？

「お、おいおい、何言ってるんだよ一護？知ってるのは当たり前だろ？」

「い、いや。当たり前って…。俺、阿散井副隊長と会ったのって初めてッスよね？」

「…っ」

阿散井副隊長 ？

懐かしい彼の声で呼ばれた己の名に、恋次は大きな違和感を感じる。

恋次！

彼にそう呼ばれていたのは、死神である自分にも遙か昔のように感じる。しかし、また会えたその時にはそう呼ばれるのだと信じて疑ったことはなかった。

「な、何を言っておるのだ一護！冗談だとしても度が過ぎるぞ！」

「別に俺は冗談なんか…っ」

一護は戸惑ったように眉をさらに寄せる。

「では、何だというのだ！阿散井副隊長などと…、例え新入隊員になろうと、貴様がそう言うとは思えぬ！」

ルキアは一護の死覇装を鷲掴みにして掴みかかる。泣きそつに顔を歪めるルキアに、一護は圧倒され、声を出せない。

ズキ。

頭に痛みが走る。

「それに、初めて会っただと？本気でそう言っておるのか、一護！？」

“死神になれ”

突然、一護の頭に響く声。

(な、んだ …)

それは目の前で自分に訴える少女の声と一緒に、変な錯覚に陥る。

“私は貴様を決して許さぬ”

ズキ。

“何だその腑抜けた面は！”

ズキ。

頭を過ぎる覚えのない映像と共に、頭に響く音声。まるで今まで貯めていた映像が早送りで一気に流れ出ているような感覚に、一護の頭痛は痛みを増していく。

「どうしちゃったんだよ、一護！お前、言ったじゃねえか！」

悲痛な顔をして恋次も訴える。すると、また新たな映像が一護の中に流れ始めた。

（ ……くそっ ）

“頼むっ、 を助けてくれ！”

ズキ。

“おーす！元気が、一護！”

ズキ。

「 ……っ 」

とうとう耐えきれなくなつて、一護は掴みかかるルキアの手を掴ん

だ。

「し…」

一護は強く唇を噛み締めてから口を開く。

「知らねえよ！」

ルキアと恋次が大きく目を見開いたのが分かった。しかし、一護は顔を俯けたまま続ける。

「俺はっ、今日護挺に入隊したばかりで、それまでは流魂街にいて…っ。だから、副隊長と知り合いな訳がねえッ！」

一護は胸元を掴んだまま、悲壮な顔をするルキアを悲しげに見るとさらに言う。

「悪いけど、俺はアンタとも会った記憶がねえんだ…」

そうして、一護はルキアの手を己から離す。する、とその手は簡単に離れ、力を失ったように主の体の横にぶら下がった。

二人は信じられないとばかりに一護を見つめる。しかし、今までと違いその裏にある感情は“悲しみ”。

それを見ていられなくて、一護は焦って口を開いた。

「あ…、ひ、人違いなんじゃないツスカ!？」

焦燥感から出てきた台詞は、そんなチンケなものだった。

「俺とよく似た奴と間違えたとか…っ」

馬鹿だ。

一護の中の冷静な自分がそう嘲ったのを彼は分かった。

人違い、こんな派手な頭をした奴と誰が間違うというのか。それなのに自分の口は止まらない。俯けられた顔はますます下に下がっていく。何故だか、妙な汗も噴き出してきた。

「あっ、もしかしたら、其奴も今年入隊してて、だから」

「っ、ふざけんじゃねえ!」

ドントツという音と共に、胸倉を掴まれた一護はその勢いそのまま壁に

叩きつけられた。

肺にまで衝撃が来て、僅かに空気が口から零れる。

「恋次！」

「一護！？」

焦ったようなルキアと尚晴の声が聞こえてきた。

痛みに細めた目を薄く開いて見ると、映り込んだ赤色。頭しか映らないため、表情は分からない。

「人違い…っ？なめてんじゃねえよ…っ」

「やめろ、恋次…」

ルキアが諫めるようにそう言った。今まで自分も興奮していて気づかなかつたが、人が集まり始めている。しかし、恋次は止めなかった。

「俺がつ、俺らが…っ、てめえを間違える訳ねえだろーが！」

「ぐ…」

胸倉を掴む恋次の手に力の籠もり、一護は苦しげに声を漏らした。それに気付いたルキアが「恋次っ」と声を上げる。

「何でだよ！何で忘れてんだよ！てめえは言ったじゃねえか！忘れねえって、なのに！」

俺はお前らを忘れない。

一護は僅かに目を見開いた。何かが頭に浮かんだ。しかし、それもすぐに何かにかき消される。

「約束したんだろーが！それを破るってのかよ！？てめえはそんな奴じゃねえだろーが！」

「……っ」

「一護！」

「恋次！」

その時だった。

「そこまでだ」

群集も増え、騒がしくなった空間に凜と響いた声。決して大きくはないが、自然と耳に入るその声に皆の口は一斉に閉じられた。

一護も、恋次も、ルキアも尚晴も、一様にある一カ所を見る。すると、突然人垣が割れ二人の人物が姿を現した。

「日番谷隊長……」

「松本副隊長まで……」

恋次の呟きに、さらにルキアもその名を呼ぶ。

真っ直ぐ背筋を伸ばしたその姿は紛れもない、日番谷冬獅郎。そして、それに仕えるように数歩後ろに控えているのは松本乱菊であった。

「手を離してやれ、阿散井」

「は、はい……」

一護と恋次を順に一瞥すると、冬獅郎は短くそう言った。

恋次は僅かに逡巡した後、ゆっくりと手を離す。一護は壁づたいに

地面に腰をついた一護は数回咳いて冬獅郎を見上げた。

そこに尚晴が駆け寄る。

一護と冬獅郎の目があったのは、それまでの数秒であった。

「騒ぎを起こすのは関心しないな、阿散井、朽木」

腕を組んだ冬獅郎にそう戒められ、恋次とルキアは気まずそうに謝り、頭を下げた。

「朽木…？」

隣でしゃがみ込んだ尚晴が驚いたようにそつ呟いたのが聞こえて、一護は尚晴を見る。

「大丈夫か」

ふ、と頭上が陰ると同時に聞こえた声に一護は驚いて顔を上げた。そして映り込んだのは銀と青緑。それに一時見とれ、差し出された手を慌てて掴む。

「あ、ああ…」

意外と力強く手を引かれ立ち上がった一護は、相手が隊長と思いでし頭を下げた。

「あ、すみませんでした、日番谷隊長！」

その時、一瞬日番谷の顔が険しくなったように一護は見えた。しかし、あつという間のそれに「気のせいか」と思い、次の瞬間には記憶から消える。

「いや、いい。阿散井が悪かったな。俺からも謝罪する」

「えっ！？いや、別に俺は気にしてねえッスから」

たかだか、平隊員である自分に隊長が謝罪したという事実焦って、一護はぶんぶんと手を降った。すると、冬獅郎は「そうか」と頷いて言う。

「なら、今日は早く休め。明日から忙しくなるからな。それと、飯を食うなら十番隊の食堂を利用しろ。出来るだけ、今日は出歩くな。いいな？」

「え？は、はい」

冬獅郎の台詞に不思議そうな顔をするも、そういうものなのかとあ

まり深くは考えず、じゃあ、と一護と尚晴は再度頭を下げるとその場を去っていった。

その背を見送っていた冬獅郎の後ろに、外野を追い払っていた乱菊が立った。その背中が小さくなるまでしばらく一緒に見つめる。

「日番谷隊長」

と、恋次とルキアが声をかけた。冬獅郎が振り返ったのを確認して、二人は再度頭を下げる。

「あの、本当すみませんでした」

本当に申し訳なさそうに言われた謝罪。冬獅郎はつ、と目を細めた。その青緑の目は、彼等の表情に反省意外の色を見つけていたのだ。

悲しみ …。

冬獅郎は体ごと向き直る。

「気にするな。次から気をつければいい」

「はい。ところで、日番谷隊長はどっして……」

「 …… お前らと同じだろーぜ」

一護が去っていった方向を見て言う冬獅郎に、恋次とルキアは何かを感じていたようだ。

「それでは、日番谷隊長と松本副隊長も一護の噂を聞いて来られたのですか？」

「それはちよつと違うのよねー」

「…と、言いますと？」

乱菊は「んー」と唸りながら髪を掻き揚げてから言う。

「あたしも吃驚したわ。あの子、うちの入隊式にいたのよ」

「な…っ、では、一護は十番隊に入隊したと!？」

「恐らくはな」

「じゃ、じゃあ日番谷隊長はどうして此処に…」

冬獅郎と乱菊は目を合わせる。

「確かめに来たのよ。本当は直接あの子と話すつもりだったんだけど」

「ああ。もう、その必要はねえみてーだな」

冬獅郎は恋次とルキアに視線を合わす。

「記憶、なかったか」

ルキアと恋次の目が大きく見開かれた。と、逸らされる二人の目。

「隊長」という乱菊の非難するような声が聞こえたが、それでも冬獅郎が目を逸らすことはなかった。小さく息を吐く。

「そうか」

二人の態度を見れば、それは容易に分かった。

いや、本当は訊く前から分かっていた。

…日番谷隊長。

彼が自分をそう呼んだあの瞬間、疑念は確信へと変わっていたのだ。

「……はい」

ルキアはただ頷く。

「隊長」

「今、俺らに出来ることは何もねえ。この騒ぎだ。恐らく、もう総隊長の耳にも入ってるだろう。それぞれ、各隊長の指示に従え」

そう言つて冬獅郎は隊首羽織りを翻す。一歩足を進め、冬獅郎はさらに言つた。

「いいか。彼奴に記憶がない今、奴はただの平隊員だ。それを忘れるなよ」

そう言い残すと、冬獅郎はその場を去っていく。乱菊も、恋次とルキアを心配げに見つめると、「じゃあ、またね」と言つてその背中についていく。

ギユ…。

力強く握り締められた恋次の拳に爪が食い込む。

「畜生っ」

「恋次…」

ルキアはそんな恋次の様子に、悲しげに顔を歪めた。

「畜生おおお！」

人気のなくなつた通りに、恋次の悲しげな叫びが響いたのだった。

隊主会

一番隊隊舎にて

重々しい雰囲気はその場を包んでいた。やはり未だ、三・五・九の隊長が抜けたまま、隊首会は進む。

「では」

向かって並ぶ隊長達より上に座す総隊長、山本元柳齊重國は静かな威圧感溢れる声で問うた。

「黒崎一護は確かにこの瀕霊挺にいますか？」

「はい」

答えたのは二番隊隊長碎蜂である。

「それは間違いないかと。隠密機動も動かしましたが、あの橙の髪に身の丈程の大刀、霊圧。特徴は全てあの死神代行と一致しています」

「じゃあ何だい？彼は記憶も霊力も取り戻してこっちに戻って来たってこと？」

問うたのは八番隊長京楽春水。派手な女物の羽織りを違和感なく着こなし、被った笠を僅かに上げた。

飄々とした口調だが、笠から覗く目にふぎけはない。

「否、それはない。これは私も分からぬが、我々に匹敵するあの霊力が嘘のように感じられなかった。今は席官にも及ばぬ。それに、容姿が同時のままというのも気になる」

碎蜂の後に続き、狛村左陣は京楽を厳しい目で京楽を見る。

「京楽。総隊長が施した封印の力、疑っておるのではあるまいな」

「嫌だなあ、違うよ。ただ、もしかしたらってことで言っただけだっけ」

「ならば、良い」

話が終わったのを見計らい、卯ノ花は言う。

「では、黒崎一護は霊力を失ったまま瀕霊挺にいると？」

「まあ、そうだろうネエ」

答えたのは涅マユリだった。

「もし、黒崎一護が霊力を取り戻したのなら、あの霊圧ダ。技術開発局が探知しない訳がナイ」

「じゃあ、何だい？彼は向こうで生を終え、此方に来たってわけだ」

「山じい。確か、封印はこっちに来た瞬間解けるようになってるんですよね？」

十三番隊隊長浮竹十四郎は総隊長に問う。「うむ」と頷いた。

「記憶が戻れば、あ奴は必ず儂の所へ来るだろうと踏んでな」

その言葉に、口にはしないものの全員が肯定する。一護を知る者ならば、誰もが頷くに違いない。真っ直ぐ猪突猛進、仲間思いでそのためならば努力を惜しまない。それが彼等の知る黒崎一護である。

「して、黒崎一護は今どうしておるのじゃ」

「はっ。それならば」

碎蜂はす、と総隊長から冬獅郎へと視線を移す。冬獅郎はその視線をしっかりと受け止めた。

「日番谷が一番よく知っているものと」

その言葉に、山本はもちろん皆の意識が集中する。

「どづいことかね、日番谷隊長」

「はい」

冬獅郎は組んでいた腕を解き、山本を見た。

「黒崎一護が、今日の入隊式に現れました」

動揺が走る。

「なんと…」

「しかし、隊員からの話によれば、奴はどうかやら霊力だけではなく、記憶も失ったままのようです。確かめたところ」

冬獅郎は視線だけを六番隊隊長朽木白哉に一瞬を向ける。

「親しかった六番隊副隊長阿散井恋次、十二番隊四席朽木ルキアのこととも忘れていたようでした」

「何だって!?!」

冬獅郎の台詞に明らかかな動揺を示したのは浮竹だった。とはいえ、動揺したのはこの場にいる皆も同じ。目を伏せる者、眉を寄せる者、面白そうに笑う者、目を丸くする者、様々である。

「そんなっ、彼は朽木とはとても仲がよかったじゃないか!」

「ああ。だが、間違いない。それはたぶん、本人が一番よく分かっているはずだからな」

そう言うと、浮竹は「そんな、まさか」と言いつつも引き下がる。

「記憶がないのは間違いないようじゃな」

「はい」

「して、日番谷隊長」

ふと山本の声音が変わる。それが分かって、周りの空気も硬くなつた。

「毎年、新しく入隊する隊員の名簿が届けられるはずじゃな」

「はい」

「ならば、黒崎一護が入隊することは前もって知ることが出来るはずじゃが…何故、報告がなかったのか説明してもらおうかの」

普段、細められている山本の片目が開かれ、冬獅郎を捉える。その威圧感がある場を支配する。

「私が知ったのも今日でした。書類点検ミスです。すみませんでした」

その中でも凜とした態度を崩さずに言い切った。山本は未だ冬獅郎から視線を外さずに、更に言い募る。

「もし、お主がそのようなミスを犯さなければ、此度のような騒ぎ

は起こらなかつたであろう。書類一枚といえど、怠ればこのような事態となるのじゃ」

「はい。申し訳ありません」

「とはいえ」

ふ、と威圧感が収束する。開かれていた瞳もいつの間にか閉じられていた。

「この件は霊術院の理事長でありながら、把握しきれなかつた儂にも責任はある」

よって、此度の件は不問にとす、と締めくくり、この話は終わる。目に入った涅の馬鹿にするような笑いにコメカミがぴくり、とひくつくが、何とか冬獅郎は抑えた。

「ハッ。とりあえず一護が此処にいることは間違いないねえんだろーが！ 久々に戦えるってもんだ！」

早くも闘志を燃やす十一番隊隊長更木剣八の口元に笑みが浮かぶ。もし、ここにやちるがいたのなら「剣ちゃん、楽しそー！」と飛び跳ねたことだろう。

しかし、そこで諫める声が上がった。

「更木隊長、彼は今記憶がないのですよ」

それは暗に、今彼には更木と戦うだけの力がないことを指摘している。だが、更木は笑みを崩さない。

「関係ねえな！俺は戦いたい奴と戦う！」

卯ノ花は厳しい表情をつくる。冬獅郎は「とりあえず、更木に気をつけるように言っておこう」と大きく息を吐いた。

「ペい！静かにせんか！」

山本がそう杖をつけば、その場は一気に静まり返る。

「黒崎一護の記憶及び霊力がないのなら仕方ない。とはいえ、そのまま放置する訳にもいかぬ。卯ノ花隊長は黒崎一護の封印を調べよ」

卯ノ花は「はい」と頷く。

「日番谷隊長はしばらく黒崎一護の動向に注意しておれ」

「はい」と首肯する。

それらを認めて、山本は「うむ」と頷く。そして高らかに言った。

「全隊長に告ぐ

「!

第六章

金盞花

―嘆き―

t o b e c o n t i n u e . . .

隊主会（後書き）

やっと一護の存在が滄霊挺に広まりましたー！

にしても、皆の心情が難しいー！どうやったら上手く書けるようになるのか…。

死神業務（前書き）

第六章 紫花 — 悲哀 —

い。番外編『残酷な結末』をアップしました。良かったらお読み下さ

死神業務

死神の業務は朝から忙しい。黒の死覇装をあつちへこつちへ返し、いろいろな声が行き交う。それは、新しく入った隊員達も例外ではなく、書類運びからお茶入れまでありとあらゆる雑務をこなしていかなければならなかった。

「藤堂！これを三番隊へ運んでくれ！」

「秋峰、資料室からこの資料を取って来い」

「神部！今日貰うはずの書類を二番隊から預かってきて！」

次々と名を呼ばれる同僚達の中で、一護は担当の席官から言われて壁際に立っていた。

（なんで、俺だけ？）

正直言って、肩身が狭い。目の前で忙しそうに動き回る同僚達。対して、ただ突っ立ってる自分。

「黒崎ど…、黒崎！悪いが茶を淹れてもらえるか？」

「あ、はい！」

ようやく動ける。お茶汲みを頼まれてほっとしているのもどうかとも思うが、今の一護にはあの気まずさから抜け出せるなら何でも良かった。

「ど、どござい」

ぎこちない動きで一護はお茶を配っていく。未だかつてお茶なんぞ淹れたことがないから仕方ない。

「申し訳ない」

「ありがとうございます」

順々に配っていけば、皆律儀に礼を言ってくる。にしても、丁寧なことだ。たかだか、平の、しかも新入りに礼を言うのだから。これもやはり、真面目で礼儀正しい十番隊だからなのだろうか。

（だとしたら、すげーな）

一護は全員に配り終わると、また元の位置につく。その際、目のあった同期の隊員に同情の目を向けられ、落ち込んだ。

同期と一部の隊員の間で、一護は落ちこぼれなのだと思われている。始めは、院生時に珍しい斬魄刀を手に入れたと尊敬や羨望、嫉妬の眼差しで見られていて、それもそれで鬱陶しくもあつたのだが、今やそれは昔の話、未だに書類も運ばせてもらえない可哀想な奴となつている。

（やべー、落ち込んだきた…）

すでに自分専用となりつつあるお盆片手に、一護はがっくりと肩を落とした。

「よし、昼休憩にするぞー」

五席の先輩が時計を見てそう言うと、皆わらわらと動き始め、次第に人が少なくなっていく。一護は書類を運びに行つたまま、まだ帰つて来ない尚晴を待つため、そのまま待機する。その間に思い出すのは、先日のあの出来事と最近見るようになった夢。

「何故、忘れた」と訴える恋次と落胆を露わにするルキア。

あの後尚晴から教えてもらったことによると、彼女はあの六番隊長にして四大貴族の一つである朽木家の当主、朽木白哉の養妹で、十三番隊四席であるらしい。

否、それはどうでもいい。今、重要なのはそこじゃない。
夢である。

最近、やたらと見るようになった夢。

起きた途端、何かに掻き消されるように忘れてしまうが、内容はとても重要な気がするのだ。きっと、その記憶は自分にとって大切なのだろう。

起きた時の喪失感と切なさ、自分の胸を締め付ける。

「　　」
「　　」

でも、と一護は思う。何故そんな大切なことを忘れてしまったのだ。

「　　」
「　　」

それに、とも一護は思う。今まで一護には記憶喪失になった意識がなかった。何故なら、流魂街に来たときからの記憶を辿っても、何ら欠けている所はないからだ。では、いつの記憶がなくなったのか。

「あーっ！くっそ、訳分かんねー！」

「ちょっと、一護！？」

「うおおっ!?!」

目の前に立っていたのは、一護が待っていた尚晴だった。呆れたような苛立ったような顔で自分を見ている。

「何回呼んだと思ってんの?」

「え。何回?」

「三回」

「げ、悪い」

よっこいしょ、と立ち上がった一護はそのまま尚晴と共に十番隊を出る。

「どこ行くの?」

「あー、食堂でいいんじゃない?まだ金もねーし」

「だよな」

隊舎にはそれぞれ食堂がある。狭くもないが、それほど広い訳でもないため、上位席官ともなると混み合う食堂より外で食べるように

はなるが、一護達のような者には安い食堂は好評である。

「やっぱり、混むなー」

入り口を潜ると、やはり食堂は同じ十番隊の者で溢れ返っていた。

「一護がぼーっとしてるからでしょ」

「そ、それは言いつこなしだろ」

結局、散々席を探し回り、漸く空いた席を見つけることが出来た。

一護は焼き魚定食、尚晴はざるそばである。

「って、また蕎麦かよ……」

「別にいいでしょ」

一護は今まで尚晴が蕎麦以外食べたところを見たことがない。

「いや、いいけどよ。飽きねーか？」

「別に。かけそば、ざるそば、天そば、とろろそば。種類豊富だし」

「そついう問題か？」

ずるずると蕎麦を食べる尚晴に、一護は若干頬をひきつらせた。

「で？一護はどつなの？」

「ん、何がだ？」

「何がって、仕事。ぼやいてたじゃん、雑用ばっかだって」

「……………」

ピタリ、と一護は魚をほぐしていた手を止めた。

「ん？」

いつまで経っても返ってこない返事に蕎麦を食べる手を尚晴も止め、顔を上げる。と、「はあああ」と大きな溜め息をついて一護は肩を落とした。

「何でっ、俺ばっかりっ、お茶汲みっ、何だよっ！」

「へー、そうなんだ」

「おかしくねーか？周りはもう書類運びとかやってんのに、何で俺

は子供でも出来るような仕事ばっか何だ!？」

一護はここぞとばかりに言う。

「まあ…、確かに…俺は霊力はそんなねーかも知んねえけどさ。頭はそこそこいい方だと思っただけだな」

最後はまた落ち込んだのか、肩を落としてそう締めくくった。それに、尚晴は「ふーん」と相槌を打つ。

「まあ、確かに不思議だね。一応、一護は斬魄刀を手に入れてる訳だし」

「一応って…」

「それに、先輩達の一護への態度も気になる」

「態度？」

何かおかしいのか、と言うような首を傾げる一護に、尚晴は「気付いてなかったの？」と呆れたように目を細めた。それに一護は気まぐすそくに目を逸らす。

「まあ、いいよ。慣れたし」

「なっ、慣れたって」

「なんか、礼儀正しいんだよね」

「無視かよ」

尚晴は思い出すように言った。

「でもよ、それは俺だけって訳じゃあ」

一護もやたら礼儀正しい上司達に気がついてた。とはいえ、それは十番隊の特徴であり、何も自分に限ったことではない。そう思っていたのだが……。一護はちら、と尚晴を見る。……どうやら違うらしい。

尚晴はまた呆れたように言った。

「本当、一護って他人のことには結構敏感な癖して、自分のことになるととことん鈍いよね」

何か言い返そうとする一護を、尚晴は「いい？」と遮る。

「思い出してみなよ。一護がお茶を配った時、先輩達何て言ってた？」

「何って……、ありがとございます、とかか？」

「それさ、普通に考えておかしいでしょ」

尚晴は蕎麦をつゆにつけながら、視線を一護に向けた。うんうんと唸る一護は、恐らく何も分かっていない。はぁ、と息をついて「だからさ」と口を開いた。

「例え、うちの隊が礼儀に厳しいからって、たかだか平の隊員がお茶を配っただけで、それに手え止めて、敬語で礼を言うわけないでしょ」

「そついえば、そうか？」

「そついえばも何もないんだけど」

思わず半目になりながら一護を見れば、彼は気まずそつに笑う。

「ま、偶然だろ？気にしなくたっていいって」

「ちよつと、そんなあつさり」

「それより」

「護はす、と尚晴の手元を指差す。

「蕎麦しょっぱくなっちまうけどいいのか？」

そこには箸から滑り落ち、つゆにどっぷり浸かったままの蕎麦があった。

「げ」

あれから

外の喧騒も何のその、まるでこの場所だけ隔離されたような静かな
がら空間。

「……………」

「……………」

そんな空間で筆を一心不乱に筆を動かすのは、この部屋の主である
日番谷冬獅郎。そして、その傍らでは松本乱菊がいた。

「……………」

「……………」

いつも通り、眉間に皺を寄せながら凄まじい速度で未処理の書類を
片付けていく冬獅郎だが、対して乱菊は度々筆を止めては冬獅郎を
ちらちらと盗み見している。明らかにその視線に気付いているだろ
うに、冬獅郎はそれに見向きもせず白い山に挑み続けていた。

この、ある意味幼稚とも取れる我慢比べは乱菊が折れる形で終わりを
告げる。

「たあいちよ〜っ、もう休憩しましよ〜っ
「……………」

机にだらりと体を預けて、乱菊は助けを求めるように言う。しかし、冬獅郎の返事は至って簡単なものだった。

「駄目だ」

「たあいちよ〜っ」

「今まで、あれこれと忙しかったんだ。書類が溜まっている分、早いうちに処理しなきゃ間に合わねえ」

そういう間にも、冬獅郎の手は止まらない。

「そーですけどお…」

涖々と乱菊も体を起こす。

事実、最近まで十番隊は忙しかった。それこそ、締切間近の書類を片付けるのがギリギリな程に。もちろん、原因は“黒崎一護”、彼にある。

あの隊首会の後、各隊の隊長が行ったのは、あの叛乱に関わった隊員を集めることだった。

“全隊長に告ぐ　！これより叛乱に関わった全ての死神に、黒崎一護をあくまで一死神として接するよう指示をせよ！”

それがあの日の隊首会で受けた指示である。冬獅郎はいち早く行動した。何せ、十番隊は騒動の中心人物である一護がいる隊なのだ。隊首会が終わると同時に隊舎へ戻ると、竹添の指示があり普段通りにしているとはいえ混乱を隠しきれない叛乱に関わった死神を一同に集める。そして全てを説明し、総隊長の意向を告げた。

その時、隊員達には戸惑いを隠しきれないようだった。冬獅郎と仲のよかった一護は、同時に十番隊の隊員とも仲がよかったのだ。特に、草冠との事件があつてからは。

今では、だいぶ隊員たちも落ち着き始め、一護にも極力外へ出さないように図ることで、未だ大きな混乱も起きていない。

早めの措置が功を奏したのだろう。

「うちの子達、ちゃんと上手くやってるかしら。ねえ、たいちよー？」

休憩を諦めたらしい乱菊は、お喋りへと矛先を変えたらしい。筆を持ったまま冬獅郎へ尋ねる。

「さあな。……ま、下手はしねえだろ」

渋々と冬獅郎は答える。その際に筆を動かすよう注意することもある。忘れない。

「だといいですけど。あの子達、たいちよーに似て真面目ですからねえ」

「それはどういう意味だ」

「嫌ですねえ。褒めてるんですよ!」

「どうだかな。それより、松本。手を動かせ」

そういえば、何だかんだで松本は手を動かした。それに冬獅郎は溜め息をついて書類に向き合うが、思うのはあの時のことだった。

叛乱に関わった死神達に事情を説明した翌日のこと。執務室までの廊下を松本と歩いていった時だった。

ドン、と何か重い音が廊下に響いた。何かとそちらを向けば、どうやら二人の死神ぶつかり合ってしまったらしい。お互い尻餅をついていた。ドン、というのは一人が持っていた本が数冊落ちた音らしかった。

「大丈夫かしら」

上から松本の呟いた声が聞こえてきた。

「わ、悪いっ。大丈夫スか!？」

冬獅郎と乱菊に僅かな動揺が走った。二人のうちの一人は、橙の髪を持つ黒崎一護だったのだ。相手は席官だ。

「おいおい、ちゃんと」

席官の男は文句を言おうとして顔を上げ相手を見た途端、驚いて声を上げた。

「く、黒崎殿!？」

「殿?...お、おお?」

“殿”と、自分より上の立場の人間に敬称をつけられ困惑する一護に何か気付いたらしい。まずい、という表情を零すと慌てて本を拾い上げ、一護からも残りを受けとると、ガバツと頭を下げて「ありがとうございます!」と走り去っていった。

一方、残された一護は首を傾げ、しばらく男が走り去っていった方を見ていた。

「たいちよー」

「何だ」

「あの子、めちゃくちや敬語使ってたね。一護、無席なのに」

「そっだな」

冬獅郎は額に手をつくると、大きく溜め息をついたのだった。

つまり、言いたいことは何かといえば、例え頭で一護が平隊員だと分かってはいても、心は素直だということだ。

（先が思いやられるな…）

思い出して頭痛がしてきた冬獅郎は、それを振り払うように立ち上がった。

「たいちよー、どちらへ？」

「先日、今日なら大丈夫だと卯ノ花から言伝が来てな」

「それって…」

乱菊には心当たりがあるのか、何の用事が気がついたらしい。

「すぐに戻ってくるから、それまでには書類を少しでも減らしとけよ」

「えーっ。あたしは連れて行ってくれないんですかあーっ!?!」

「お前はまだ書類整理終わってねえだろーが」

「たいちよーだけずるいですー」

「俺は今日の分終わってんだよ」

とにかく、と冬獅郎は戸に手をかける。

「俺は行く。くれぐれもサボるなんて考えんじゃねーぞ」

「はい」

「行ってらっしゃーい」という乱菊の声を聞きながら、冬獅郎は奴がいるであろう場所に足を向けたのであった。

ガヤガヤ行き交う隊員達の中で、やはり一護は肩身狭く壁際で突っ立っていた。先程、茶汲みをしたばかりで、またやることがなくなってしまう所である。

(何しりゃ良いってんだよ…)

まだ昼が終わったばかりで、仕事が終わるまでにはあと三刻ばかりある。まだまだ、果てしない。

「はあ…」

一護が大きく息をついた時だった。突然、騒がしかった室内が静まり返る。何だと一護が顔を上げると、そこには滅多にお目にかかれない人物がそこにいた。

「隊長!どうしてこちらへ?」

席官の一人が尋ねる。

「いや…、黒崎一護はいるか？」

「へっ？俺？」

「ああ、そこにいたか。来い、お前に来て欲しい所がある」

「え、ちよっ!？」

一護を見つけるや、冬獅郎は簡単に要件を告げると背を向け歩き出す。まだ混乱していた一護は、どうしたらいいのかと拳動不審にキョロキョロとし、冬獅郎の背中が見えなくなる前にと注目される中追いかけた。

「え？一護？」

その時廊下をすれ違った、冬獅郎に頭を下げていた尚晴に気付かなかった。

一護は混乱していた。

(おおお、俺何かしたっけ…?)

数歩前に行く堂々とした背中を追いかけつつ、一護はひたすら考える。何か冬獅郎の勘に触れることでもしただろうか。

いや、自分がした仕事と言えはお茶汲みのみ。むしろ、怒らせる方が奇跡に近い気がする。

(いや、もしかしたらお茶が薄いとか苦いとか、熱いとか温ヌルいとかか?)

いや、でもそんなに怒るか?と一護がうんうん唸っていたからだ。前を歩いていた冬獅郎が止まったことに気付かなかつたのだ。あと寸ででぶつかるといところで、一護は慌てて歩みを止めた。

くる、と首を捻って振り返った冬獅郎は呆れたように一護を見る。

「そんな緊張しなくても別に怒ったりなんかしねーよ」

「へ?」

「…全部声、出てるぞ」

そうすれば、一護はしまったというように額に手を当てた。

「あー…、本当すんません」

冬獅郎はそんな一護を見て、困ったように笑う。本当、こういう所は変わらないと、不意打ちで思わされてしまった。初対面であった時、“こんな小さいのに隊長!?”と言われたことがあった。その時も気まずそうに謝ってきたものだ。まあ、言い方はこんなに丁寧ではなかったが。

「本当に、変わらねえ……」

「え?」

「いや。ほら、とつとつと行くぞ」

「あ、はい!」

一護が連れて来られたのは、思いもかけない場所であった。

「四番隊?」

「ああ」

隊舎を見上げる一護を置いて、さつさと冬獅郎は中へと入っていく。それを慌てて追いかけて入れば、中は慌ただしそうに死神が走り回っていた。そこら辺は何処も変わらないらしい。

「じつちだ」

書類を届けたことがない一護は、他の隊舎が物珍しいのかひっきりなしに周りを見回している。それに呆れながらも、冬獅郎は特に注意することなく足を進めていく。

「じつちだ」

着いたのは診察室の中の一つ。さらに一護の疑念が増す。至って健康な自分が、何のために診察を受けなければならないのか。

「あの、隊長。なんで俺」

「ほら、入れ」

問答無用とばかりに冬獅郎が戸を開ける。その先には、待っていたとばかりに卯ノ花と勇音が立っていた。

「お待ちしておりました。日番谷隊長、黒崎さん」

見た目に違わない、穏やかで優しい声で声かけられる。それに、冬獅郎は「悪いな、卯ノ花。待たせた」と謝っているが、一護

の疑問は益々増すばかり。

隊長二人に副官一人という錚々たる面々。そこに平の自分。生憎と一護はそれに臆するような繊細な心を持っていないが、疑問が湧かない訳ではない。

「あの、隊長。俺なんで」

もともと気長でない一護は、堪えきれずに冬獅郎に問うた。

「ああ、お前にはこれから検査を受けてもらう」

「検査あ？」

思わず素っ頓狂な声が出てしまう。

それに冬獅郎は事も無げに頷く。

「詳しくは言えねえが、お前のためだ」

「って、言われても…」

一護は納得がいかないと言葉を濁す。すると、そこで卯ノ花が助け舟を出す。もちろん、冬獅郎の、である。

「貴方に拒否権があると思われるのですか、黒崎さん？」

「……い、いえ」

卯ノ花の笑顔は最強である。

(た、隊長。流石です……)

関係ない勇音まで寒気がしたという。

「では、早速検査を始めましょうか」

それから一護にとって地獄の時間が始まるのであった。凡そ二時間にも及ぶ検査は、一護を憔悴させるのに十分である。

「大変だったな……」

何処を見てるんだ、まだ混乱していた一護は、どうしたらいいのかと拳動不審にキョロキョロとし、冬獅郎の背中が見えなくなる前にと注目される中追いかけた。

「え？一護？」

その時廊下をすれ違った、冬獅郎に頭を下げていた尚晴に気付かなかった。

一護は混乱していた。

(おおお、俺何かしたっけ……？)

数歩前に行く堂々とした背中を追いかけつつ、一護はひたすら考える。何か冬獅郎の勘に触ることもしたのだろうか。

いや、自分がした仕事と言えばお茶汲みのみ。むしろ、怒らせる方が奇跡に近い気がする。

(いや、もしかしたらお茶が薄いとか苦いとか、熱いとか温ヌルいとかか？)

初対面であった時、“こんな小さいのに隊長！”と言われたことがあった。それに呆れながらも、冬獅郎は特に注意することなく足を進めていく。

「ここだ」

着いたのは診察室の中の一つ。さらに一護の疑念が増す。至って健康な自分が、何のために診察を受けなければならないのか。

「あの、隊長。なんで俺」

「ほら、入れ」

問答無用とばかりに冬獅郎が戸を開ける。その先には、待っていたとばかりに卯ノ花と勇音が立っていた。

「お待ちしておりました。日番谷隊長、黒崎さん」

見た目に違わない、穏やかで優しげな声音で声がかげられる。それに、冬獅郎は「悪いな、卯ノ花。待たせた」と謝っているが、一護の疑問は益々増すばかり。

隊長二人に副官一人という錚々たる面々。そこに平の自分。生憎と一護はそれに臆するような繊細な心を持っていないが、疑問が湧かない訳ではない。

「あの、隊長。俺なんで」

もともと気長でない一護は、堪えきれずに冬獅郎に問うた。

「ああ、お前にはこれから検査を受けてもらう」

「検査あ？」

思わず素っ頓狂な声が出てしまう。

それに冬獅郎は事も無げに頷く。

「詳しくは言えねえが、お前のためだ」

「って、言われても…」

一護は納得がいかないと言葉を濁す。すると、そこで卯ノ花が助け舟を出す。もちろん、冬獅郎の、である。

「貴方に拒否権があると思われるのですか、黒崎さん？」

「……い、いえ」

卯ノ花の笑顔は最強である。

(た、隊長。流石です……)

関係ない勇音まで寒気がしたという。

「では、早速検査を始めましょうか」

それから一護にとって地獄の時間が始まるのであった。凡そ二時間にも及ぶ検査は、一護を憔悴させるのに十分である。

「大変だったな……」

何処を見てるんだ、と問いたくなる一護の表情には冬獅郎も同情を禁じ得なかった。

「隊長、人は死んだら何処へ行くんスカね……」

「……………」

此処である。

重傷だ、と冬獅郎はベッドに腰掛ける一護を見て思った。まさか、一護を此処まで追い込むとは。出来れば自分は体験したくないと思う。

そこへ、扉が開く音と共に卯ノ花と勇音が入ってきた。

「日番谷隊長」

卯ノ花が冬獅郎の名を呼ぶ。

ただ、それだけではあったが、冬獅郎には十分だった。

「分かった」

お前はここで待ってる。そう言い残し、冬獅郎は卯ノ花と共に扉の向こうに消えていく。

パタン、と虚無感の漂う音が静かな部屋の中に響いた。

「何か分かったのか」

扉が閉まるや否や、冬獅郎は結果を問うた。

理由の分からぬ黒崎一護の記憶・霊力の喪失。傍から見れば、何の異常もないそれは、彼を知る者から見れば重大なことだった。

総隊長自ら行った封印には何の欠陥も見当たらない。それなのに戻らない彼のそれらは、では一体何処へ行ったのか。

ずっと、冬獅郎は考えてきた。そうすれば自ずと導かれる答え。

第三者による何らかの介入。

それしか考えられない。冬獅郎にとってこの診察は、その答え合わせとも言える。

「まず、やはり黒崎さんの霊力は以前に比べ著しく減少しています」

卯ノ花は堅い表情のままそう切り出した。

「その霊力は、以前の凡そ十分の一」

それはつまり、山本が封印を施した後と同じ。やはり、と冬獅郎は納得する。それは隊長格ならば分かっていただろう。

ただ、ここではっきりしたのは一護が故意に霊力を隠していたという僅かな可能性は消えたということだ。

「記憶の件についても、彼は本当に覚えていないようですね。脳波を調べてみましたが、彼に死神代行時代のことについて質問してみるところ、何の反応も見られませんでした。ただ」

冬獅郎は考えるように下へ向けていた視線を、卯ノ花へと向ける。

「ただ？」

「ただ、彼の身体が僅かながら衰弱しているようでした」

「衰弱？」

ひどく物騒な言葉だ。そして、一護には似合わぬ言葉だとも思う。

彼との再会を果たして思ったのは、記憶がないという衝撃と一護は何にも変わらないという安心感である。

衰弱とは全く気付かなかった。そんな自分に、隊長として、仲間として苛立ちを感じずにはいられない。

「はい」

卯ノ花は頷く。

「まだ、生活に支障もないようですし、ほんの僅かなものなので、黒崎さん自身も気付かれてはいないでしょう」

それはそうだろう。でなければ、あんな顔はしてられない。

「身体の衰弱、と言ったな。原因は分かるのか？」

「残念ながら詳しいことは分かりません。ですが、恐らくは無理矢理霊力と記憶を封じていることに原因があると思われます」

「無理矢理？」

どういうことだ、と言うように冬獅郎は繰り返している。

山本の施した封印はこちらへ来た時に自然に解かれるもの。無理矢理封じられる訳がない。

「もともと、黒崎さんの霊力は我々隊長格と同等、下手をすればそれ以上のものです。それを封じるとなるとそれ相応の術が必要なのは当然でしょう。日番谷隊長もご存知のことですが、総隊長が自ら封印を施したのもそれ故のこと。彼の身体が封印によって衰弱しない限界を見極めた上で封じ、そして彼がこちらへ来た瞬間がそのタイムリミットとなるはずでした」

だが、奴は我々の想像より早く目の前に現れた。

「それが、何故かすでに衰弱を見せ始めている」

冬獅郎は目を細めた。つまり、自分の推測は当たっていたというわけだ。

予想外に早くこちらへ来たのなら、封印が何かの手違いで未だ施されていたとしても、体に支障をきたす訳がないということか。もちろん、山本に限ってそんな手違いがあるはずはないのだが。

「なるほどな。つまり、彼奴の記憶と霊力は、総隊長でない何者かによって無理矢理封じられているということか」

卯ノ花の後ろで勇音が息を呑むのを感じる。

卯ノ花は頷いた。

「流石です、日番谷隊長。総隊長の封印は例えるなら水風船のようなもの。黒崎さんの記憶と霊力に合わせて形を変え、あくまで自然に封印するのに対し、今あの方に施されている封印は溢れる霊力に蓋をし、力付くで押さえているに過ぎません。そんなことをすれば、身体に負担を与え、いずれ黒崎さんの身体をどんどん蝕んでいくのは当然のことでしょう」

重々しく告げられる真実。しばらく、部屋に沈黙が漂う。

「その封印は解けねえのか」

答えが分かっただけで冬獅郎は聞く。解けるならば、卯ノ花がこんなにも悲痛な顔をする訳がないというのに。

そしてやはり、彼女は首を振る。

「したいのは山々ですが、その封印が未だかつて見たことがないものなのです。元々、封印さえも困難なそれを、今まで我々に悟られず施されていること自体があり得えません。そして、あの方の霊力を力付くで抑えているということも」

そうだ。そんなことを出来る死神など聞いたことがない。出来ることすれば、総隊長である山本か鬼道衆の長くらいか。

「俺達が考えているより厄介なことらしいな…」

「そのようですね」

部屋は重々しい空間に包まれた。自分達の知らないところで、何か蠢いているような、そんな予感に、隊長二人は顔を険しくするのだった。

一方、一護は一人冬獅郎を待っていた。

「遅えー」

すでに三十分は待っているだろう。何も無い白い空間でただぼーっと待つものにもそろそろ飽きがきた。だいたい、こんなに健康な自分が診察なんてする必要ないのだ。

まあ、だからといって仕事に戻らなきゃならない必要もないのだが。行っても、自分がすることなどお茶汲みくらいだ。

「暇だなー」

ベッドに仰向けに倒れる。白いシートに橙が零れ、黒が広がった。

コンコン。

彼一人の静かな空間に、堅い音が響いた。誰かが入ってくる、そう判断した一護は素早く身を起こす。人が入ってくるのとそれは同時だった。

「失礼します、包帯と湿布の補充に」

その人物と一護の目は自然交わる訳で、すると、お互いの目は大きく見開かれる。

「黒崎君!？」

「平汰!？」

入ってきた人物、それは霊術院時代の級友柳瀬平汰であった。

「え!？なんで、黒崎君が!？」

包帯と湿布を両手に抱えたまま一護に駆け寄る。そこには明らかなき驚きが見て取れた。

「あー、何だか診察を受けることになっちまってさ」

ハハハと乾いた笑いを零す一護に、平汰に「そっか」と不思議そうに頷いた。どうみても元氣そうにしか見えないからだろう。それでも診察と聞いて不安になったのか、心配そうな表情を浮かべた。

「どっか具合悪いの?」

「いんや。それが全く。何で診察受けなきゃならねえんだろうな」

「本当に？」

「本当も本当」

「そっか、なら良かった」

一護が大きく頷けば、平汰は安心したように息を吐き出した。それに「ありがとな」と礼を言う。

「あれ？じゃあ、黒崎君を診察していた人は何処に？」

「あー、どっか行っちゃった」

「どっかって…」

平汰は今度、呆れたように息をつく。それに一護は困ったように笑うことで返事を返した。

「それより、どうなんだ？仕事の方はさ」

「え？うーん、相変わらず雑用ばっかだよ。備品運んだり、書類運んだり」

無理矢理話を変えたそれに、平汰は意外にも乗ってくれた。

一護は平汰の疲れたような台詞に、大きく溜め息をつく。

「いーじゃねーか。俺なんかお茶汲みだけだしよ」

「え。あー…、それは、うん」

その時、ドアノブが回る音が二人の耳に届く。一護はようやくか、とベッドから立ち上がった。

「待たせたな、黒崎」

「あ、いえ」

もちろん、入ってきたのは冬獅郎、卯ノ花、勇音の三人。顔の前で手を振る一護の隣で、平汰は「ひいつ」と小さく息を呑んだ。

「ちよちよちよ、黒崎君っ」

一護の袖を引いて、耳に口を寄せると慌てたように小さく怒鳴る。

「なんだよ」

「なんだよ、じゃないよ！何で隊長格三人がいるわけ！？ってか、よく平然としてられるねっ」

「いや、隊長に連れられて、卯ノ花隊長と虎鉄副隊長に診察してもらったから」

「隊長直々に診察！？意味わかんないっ。黒崎君何者！？」

「何者って…」

一護が困ったように眉を寄せた時、卯ノ花が平汰を見て「あら、貴方は」と声をかけた。それを耳聡く聞きつけて平汰は「はいっ」と姿勢を正した。

「確か、今年新しく入ってきた方ですね」

「はいっ、柳瀬平汰です！」

「柳瀬さん。貴方は黒崎さんのお知り合いですか？」

「は、はい。霊術院の頃から」

「そうですか」

不意に、冬獅郎が扉へと向かう。もう用はないということだろう。

「世話になったな、卯ノ花、虎鉄」

「いいえ。これが私達の仕事ですから」

「報告は」

「私からしておきましょう」

それを聞くと冬獅郎は分かったと頷き、一護に帰るよう言うと外へ出ていった。

「ちょ、隊長つ。あ、じゃあ俺行きます！卯ノ花隊長、虎鉄副隊長ありがとうございます！平汰もまたな！」

「どういたしまして」

「い、いえつ。私は何も…」

「う、うん。またね」

微笑む卯ノ花、恐縮する勇音、呆然とする平汰を残し、扉は閉められたのでした。

第七章

紫花

— 悲哀 —

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
.

思わぬ共通点(前書き)

第七章

君子蘭

—高潔—

思わぬ共通点

穿界門をくぐると、太一はどこに寄ることもなく十番隊隊舎へと向かう。

新入隊員が入ると同時に、太一は現世へ任務に行っていたため、それ以来から約数週間ぶりだ。何となく、この空気も久々な感じがして太一は大きく息を吸い込んだ。

隊舎に入れば、皆が挨拶をしてくれる。中には自分の知らない人もいて、恐らく彼等が今年新しく入った死神なのだろう。

しばらくして、太一は隊首室の前に立つ。大きく一回深呼吸して気持ちを落ち着かせ、そして戸をトントンと二回叩き、名を名乗ろうとして

「遅え！」

罵倒を受けた。

「すみませんっ」

「…あ？」

暫し、二人は理解出来ずに見つめ合う。

太一は何が何だか分からず冷や汗を流した。戸を開ける前に逆に開けられたと思いきや、遅いと罵倒したのは隊長である冬獅郎である。

咄嗟に謝ったが、一体何をやらかしたのか身に覚えがなく、太一は冷や汗を流す。

そんな二人の時を進めたのは、乱菊であった。

「あーあ、やつちゃいましたね。たあいちよー」

からかいを含んだ声に、冬獅郎はきつと乱菊を睨みつけると気まずそうに太一を見上げた。

「済まなかったな、榛名」

「あ、いえ……」

入れ、と促してから踵を返した冬獅郎の背を見つめ、おずおずと中に入る。

「いじめんなさいねー、榛名。隊長、今ちよつとピリピリしてんのよ」

「いえ、俺は別に……」

そう言われて冬獅郎を見れば、確かに苛々しているように見える。

椅子に深く腰掛け、苛立ちを抑えるように腕を組んでいる。

「たいちよー、あんま苛々しないで下さいよー。榛名が怖がりますよ?」

「彼奴がさっさと来ねえのが悪い」

「いやじゃないですか。きつと久々の里帰りをのんびりしてるんですよ」

話の内容が分からず首を傾げる太一に、冬獅郎はひとまず奴のことを忘れようと息を吐き出して向き合った。

「悪い、榛名。ご苦労だったな、報告を頼む」

「はい」

一通り簡単に説明をして、太一は詳しく書かれている報告書を渡す。それを冬獅郎が受け取り、「ご苦労」ともう一度労いの言葉をかける、と顔つきが陰しくなる。

乱菊も何かに気付いたように「あら、来たわね」と小さく呟いたの

だが、太一はそれらに気付くことなく部屋を出ようと戸に手をかけた。

その瞬間、ガラツと鼻先で戸が開かれる。

「え」

「うおおう!?!」

さっきもこんな展開じゃなかったか？

驚きに声も出せず目を丸くする太一に対し、目の前の人物は素直に驚きを露わにする。

胸に手を当て、ばっくんばっくんと高鳴る鼓動を落ち着かせるのは黒崎一護。

それが落ち着いてきた時、不意に一護は目の前に立つ深緑の髪を持つ青年に見覚えがあるような気がして目を凝らした。

すると、相手も同じように感じたのだろう。「ん?」と小さく声を発して、一護を見てくる。そうすれば、二人が互いに見つめ合うような形になるのは自然なことである。

それを遮ったのは、部屋に漂う不穏な空気である。

「黒崎、てめえ……」

背中から感じる悪寒に、壊れた人形のようにぎこちなく振り向く太一とその体から顔を覗かせる黒崎。

自分が呼ばれたわけではないのに冷や汗が背を伝うのを感じる。近くから掠れた声で一護の「ひ、日番谷隊長？」と聞こえてきたが、それに反応する余裕はない。

「てめえ、三十分の遅刻だぞ」

「う…」

「俺はきつちり九時に帰ってくるよう言ったはずだが」

「あ、あの、それは…」

ビシビシと伝わる冬獅郎の怒り。居たたまれなさに一護はすい、と目を逸らす。

「お前は今日からここで雑務することになったと言ったはずだったんだがな」

「たいちよー？眉間のシワ増えますよー？」

乱菊の茶々が入る。それに冬獅郎が「うっせー！黙ってる！」とい

つもの如く怒鳴ったところでその声は聞こえてきた。

「シロちゃん、そんなに怒らないであげて？」

「　　つ、雛森？」

一護の背中から聞こえてきた声、それは紛れもない五番隊副隊長雛森桃、その人であった。

意外な人物の登場に冬獅郎は目を丸くする。乱菊もこれには驚いたようで、冬獅郎同様目を丸くし、しかし持ち前の脳天気さと順応さで「雛森！」と嬉しそうに声をあげた。

ちなみに、太一はこの時すでに帰るタイミングをなくしている。というより一護をどうにも見たことがあるような気がして気になって仕方ない。

「雛森、お前どうしてここにっ」

「はい、これ」

雛森は一護から書類を受け取り、手に持っていた書類に加えると冬獅郎に手渡す。

「書類、締め切りは一週間後だからね」

渡された書類を冬獅郎は納得がいかないという目でみると、「何故、雛森と黒崎が一緒にいる」と当然の疑問を問うた。

それに雛森はあっけらかんと答える。

「え？ああ、実はここに来る途中、黒崎くんと会って…。そうしたら、一緒に書類を持ってくれたの。だから、あんまり怒らないであげてね、シロちゃん」

「その呼び方はやめろっつってんだろーが」

そう雛森に釘は指すものの、あの笑みは分かっている。とはいえ、自分にも隊長としての威厳は保たねばならぬため、こうして注意しなければならぬ。

しかし、諦めかけているのも事実である。黒崎といい、雛森といい、どうして自分の周りは。

(いや、黒崎はもう違うか…)

そう一護に目を遣ると、彼はビクリと肩を跳ねさせる。どうやらまだ、冬獅郎が怒っていると思っっているらしい。

冬獅郎は一つ、ため息をついた。

「そういうことなら仕方ねえ。お前のせいじゃないみてーだからな」
すると、明らかに安堵したため息がまた一つ。「良かったわね、黒崎」と乱菊の声がかげられた。未だに慣れぬ彼女の呼び方、そしてそれに答える一護の返事もまた慣れない。

視界に入った雛森の顔が、切なげであった。冬獅郎の視線に気がついたのか、雛森はそのまま笑う。

「なんか、慣れないね」

「……………」

「私は、あんまり黒崎さんと関わることはなかったけど、でも、やっぱり何か違和感あるの」

返事をしない冬獅郎を気にすることなく、彼女は続ける。

「阿散井くんはこの間会ったけど、元気なかったんだ。当然だよな。私でさえ、悲しくなるのに」

雛森は一護に向けていた視線を冬獅郎へ向ける。

「日番谷くんも、やっぱり悲しい？」

「……………さあな」

「あー！」

そんなしんみりとした二人の空気を割くように、突然声があがった。それは今まで空気のようにその場にいた人物。そう、榛名太一である。

その声は当然、皆の耳に入り、注目を浴びたわけだが、ようやく思い出せた爽快感に太一は気付かない。

「お前、あの時の！」

威勢よく一護を指差す太一に、当の彼はきょとんとするがすぐに一護も思い出せたようで「ああー！」と互いに指を差すこととなる。

「何だ、知り合いか」

意外そうに声を発したの冬獅郎だった。

それに乱菊も「へえー！」と面白そうと目を輝かせ、雛森も「仲いいの？」と笑みを見せる。そんな皆の反応に、自分が今どこにいる

の思い出したらしい。さあーっと顔を青ざめさせた。

「あ……」

「そうなんスよ！」

しかし、一護は相手が隊長と知っているのか疑いたくなるほどあっけらかんと頷く。

「そうなのか？」

冬獅郎は今度は太一に視線を向けた。

「え、あ、はい。前にあつた技術開発局からの実験用虚の脱走の際に私が助けた少年が、この黒崎一護でして」

「あら、何？アンタがあのお図太い少年だったの！？」

「ず、図太 …… え？」

「だって、虚に襲われたっていうのにお婆さんが心配だからって帰ったって聞いたわよ？普通、怖くてそれどこじゃないわよ」

この時、太一は仕事しなければならぬことを思い出して執務室を

出て行ったのだが、話をしていた一護と乱菊は気付かなかった。

一方で、一護は“お婆さん”の言葉に何か思い出したのか「ああ！」とまた大きな声を出す。

「うるっせえぞ、黒崎！」

「す、すみません。あの、実は隊長と雛森副隊長に預かり物をして……」

そう言っつて黒崎が見せたのは、腕に下げていた紙袋だった。

「預かり物？」

「私にも？」

雛森は不思議そうに目を瞬かせた。十番隊である一護に、冬獅郎への届け物を預からせることは分かるが、何故自分にも？

「はい。どーぞ」

「……………甘納豆？」

「しゅね……」

一護から渡されたのは、巾着に入れられた甘納豆だった。見間違えるはずがない、普通のそれより少し粒の大きいそれは昔自分達がよく食べていたもの。しかし、どうしてこれは一護が？

「婆ちゃんに頼まれたんス」

「婆ちゃんて…」

その声に驚きが含まれていることは明らかで、恐らくは顔にも表れていたのだろう。

視界の端に入る雛森も、驚いたような不思議そうな表情をしていた。

「あー、俺も驚いたんですけど」と、一護は頭を掻いて言いくそくにそう始めた。

「実は、俺が初めてこっちに来たときに助けてもらったのが隊長と雛森副隊長のお婆さんだったみたいで…。俺が十番隊に入ろうと思ったのも、お婆さんに毎日『冬獅郎は頑張り屋さんで、とっても優しい子なんだよ』って言われてたことがきっかけッスから…」

言い終わって見てみれば、案の定ポカンとした表情で皆一護を見ていた。それはそうだ、と一護自身も思う。

「そ、そうか。いや、すまないな。礼を言っ…」

冬獅郎は気まずそうに目を逸らす。自分の知らないところで、そんなことを言われてたと知れば無理もない。冬獅郎の性格ならば尚のことである。

しかし、そこで楽しみに声を上げたのは乱菊だった。

「やった、たいちよー、べた褒めじゃないですかあー！それでそれで？お婆さん、他に何か言ってた？たいちよーのことっ」

「おい、松本っ」

「えーと、後は不器用で素直じゃない、ですかね？あ、でも優しいつてのは言っていました。あと、頑張り過ぎるから心配だとか」

「さすが、たいちよーのお婆さん。よく分かってるわねえ」

「それはどういう意味だ、松本」

「日番谷くんばっかずるいよ！黒崎くん、私は！？」

「雛森副隊長は、優しくて明るくて、素直ないい子だって言っていました」

「本当？やったあ！」

何故か奇妙な方向へ走った談笑は、雖森が五番隊へ帰らなければと告げたことで終わりとなった。

ちなみに、一護には席官に書類運びを頼ませるため、書類を渡しに行ってもらっている。

何故、一護に書類を運ばせないのか。その理由は至って簡単だ。混乱を招かせないため。いくら騒ぎ立てぬように言い含めているとはいえ、やはり注意を引くのは致し方ない。故に、一護には極力隊舎内での仕事に従事してもらっている。

そういう訳で乱菊と二人きりになった今、執務室はいやに静かであった。

珍しく乱菊が騒ぐこともない。

「…あかし、思わず反応しちゃいました」

そう思った矢先、乱菊は不意に言った。しかし、そこにはいつもの明るい調子はなく、どこか切なげなものである。

何の脈絡もないが、冬獅郎はそれを咎めない。分かっているからだ。それでもあえて、「何がだ？」と、分からないフリをするのは己もだったということを隠したいからだろう。

それをまた乱菊は理解しているから、素直に答える。

「一護が隊長のことを呼び捨てにしたことです。吃驚して、なんか懐かしくなっちゃいました」

肩をすくめる乱菊を冬獅郎は一瞥するだけで何も言わない。それに気分を悪くすることなく、乱菊は続ける。

「まだ、慣れないんですよねー。一護が隊長とか副隊長とか言うの。何だかむず痒くなりませんか？」

そう笑って見せた乱菊の表情が、ふと暗くなったのを気配で悟り、冬獅郎は視線だけをそちらへ向けた。

相変わらず笑みを乗せた口元は、しかし切なげなものへと変わっている。

「隊長、一護は記憶を思い出すでしょうか？」

その問いに、話すべきことを思い出して冬獅郎は静かに筆を置いた。

「そのことなんだが、可能性は低い」

苦々しげに言われた言葉は、慰めるようなものでも、誤魔化すようなものでもなかった。ただ事実を告げるもの。それが冬獅郎らしくて、乱菊は場に似合わず悲しげに笑った。しかし、その言い方に何か含んだものを感じて、次第に厳しいものに変わっていく。

「どづいづことですか？」

硬い声音に、冬獅郎も背もたれに寄りかかり、話す体勢をつくった。

護挺十三隊

「先日、黒崎を連れて四番隊に行ったのは知っているな？」

「ええ。結果はまだ教えられないと」

「そうだ。お前には隊主会で話し合ってから話そうと思っていた」

乱菊には散々、「たいちよーのケチーツ」と言われたが、まだ自分でさえ把握しきれていない状態で話すわけにはいかなかった。まして、黒崎が記憶・霊力を失った背後には何か大きな思惑がある可能性が高い。不用意に自分の推測を交えてしまふのは得策とは言えないだろう。

その場はすぐに話せる、と乱菊を無理矢理納得させたが、やはりその通りになった。卯ノ花から報告を聞いて、その緊急性を感じ取った山本から収集がかかったのはすぐだった。

一番隊にて

「どうしたのさ、山じい。こんな頻繁に集まるなんてあの時以来じゃないの?」

相変わらず、のんびりとした口調で京楽は切り出した。総隊長にこんな口を聞けるのは彼と浮竹くらいのものだ。

「その理由は卯ノ花隊長が説明する」

皆の視線は一樣に卯ノ花へと向けられた。唯一、事の次第を知る冬獅郎だけが険しい顔を伏せている。

「黒崎さんの診察の結果、彼の身体には何者かによる干渉がなされていたことが分かりました」

卯ノ花の言葉に、空気が変わった。しかし、話を遮る者はおらず、卯ノ花は続けていく。

「あの方の身体に施された封印は無理矢理彼の靈力を封じるものでした。封印の質を見て、総隊長自身がかけられたものと異なることが判明したのです。お分かりかと存じますが、あの方の靈力は我々に匹敵、若しくはそれ以上。それを無理矢理封じれば、それ相応の負担が生じるのは当然のことでしょう」

「待ってくれ、卯ノ花隊長！負担ってことは、黒崎くんの体は今…」

浮竹は半ば話を遮るように言った。

「衰弱していました。今はまだ、本人も気付かぬ程ですが、このまま行けば、いずれ…」

「そんな…」

呆然となる浮竹を余所に、涅は愉快げに言う。

「そりゃそうだろうネエ。普段から無意識下で力を隠している我々ならまだしも、常に垂れ流しにしている状態の奴の靈力を無理矢理封じ込まれてるんだ。無事な筈がないヨ。しかし…」

涅はにんまりと笑む。

「面白い……、実に面白いヨ！」

感極まった様子で言う姿は見ていて気持ちのいいものではない。卯ノ花はもちろん、冬獅郎や京楽などは目を眇める。

そんな様子に気付いていないのか、それとも気付いていて敢えて気にしてしないのか。涅はさらに言う。

「あれほどの靈力を封じられる奴がいるとはネエ。しかも、記憶もダ！あれは鬼道などではどうにも出来ないはずなのダガ……」

瞬間、周りは驚いたように目を丸くした。

「涅、貴様！それはどういふことだ！」

あまり涅に関わらないようにしている碎蜂も、怒鳴るようにして問う。皆、気付いているのだ。

「はて……、”どういふ”とは何のことだネ？」

分かっているだろうに敢えて問うてくる涅に、碎蜂は苦々しげに乗り出した身を正す。これ以上は関わりたくなかったらしい。代わっ

て問うたのは京楽だった。

「記憶は鬼道ではどうにもならないって言ったよね？じゃあ、記憶を封じたのは総隊長ではないってことかな？」

涅は笑みを浮かべて黙ったまま何も言わない。それを見て、狛村は急いたように山本に問う。

「それは本当ですか！？総隊長殿！」

「……如何にも。儂は靈力を封じたのみじゃ」

空気に動揺が走る。初耳だ。冬獅郎は周りに目を走らせる。どうやら知っていたのは涅だけのようにだ。

となると、さっきの口振りといい。

「記憶を封じる手段を造ったのは貴様が」

あまり隊主会では発言することのない朽木は、静かに言っただけのける。答えたのは涅だ。

「その通りダヨ、朽木隊長。もともと記憶置換を造ったのは我々ダ。

造作もない。まあ、もつとも、実際に封じたのは君の妹だがネエ」

その何処か含んだような台詞に、浮竹は荒れた声で涅の名を呼ぶ。一方で、朽木も目を鋭くした。

「何が言いたい」

今回、黒崎一護が記憶・霊力を失ったまま現れたことが騒動となっている。ルキアはそのことでもしかしたら、己が何かを失敗したのではと自分を責めているようだった。

しかし、その実彼女に何の落ち度はないのだ。とはいえ、真面目な彼女はそうは割り切れないのだろう。

また朽木はそれを知っている。涅が知っているかは分からぬが、朽木を苛立たせるには十分だった。

「何も。ワタシはただ事実を述べたまでダヨ」

涅が悪びれもなく言えば、朽木の目はさらに陰を増す。

「ペー！事を荒げるでない！」

総隊長がそう一言言えば、不穏な雰囲気は吹き飛ばされる。浩浩といった様子で、しかしそれを表面に出すことなく朽木は身を引き、涅はにやにやと愉快げではあるが口を閉じる。

「して、卯ノ花隊長。黒崎一護の記憶は確かに鬼道で封じられておったのじゃな？」

「言い切れませんが、敢えて言うのなら“鬼道に近いもの”でしょうか。あらゆる鬼道を複合して施された、というのが一番正しいのかもしれない」

「となると、話は随時とややこしくなるねえ」

参ったと言うように笠を下げる京楽に続き、浮竹も言う。

「一護くんが記憶・霊力を無くした背景には黒幕がいるということか」

「ふんっ、其奴が誰であろうと、我々に牙を剥くというのなら排除するまでだ！」

「言うほど簡単じゃないよ？何せ山じいでも出来なかったことをやっちゃったんだから」

碎蜂が蔑すむように言えば、京楽は忠告するように言う。

「それで、卯ノ花隊長。一護くんの体は治るのだろうか…」

戦いの前の緊張した空気が、浮竹の一言で波打ったように静まり返る。冬獅郎は誰にも気付かぬ程に視線を卯ノ花へと移した。

「難しいでしょう」

わずかに眉根を寄せて彼女は述べる。沈黙が痛い。

「施された術は我々が見たこともないもの。毒を解毒するのに材料を知る必要があるのと同じように、術もまたその根本を知らなければ解くことは出来ません。このままいけば、いずれ」

その言葉の意味するものは、誰が聞いても明らかだろう。記憶・霊力を取り戻す以前に、一護の命が危ういのだ。

自然とその場は静まり返る。そんな沈黙を破ったのは、やはり飄々とした京楽だった。

「それで、山じい。どうするんだい？」

「うむ。このまま事態を見過ごすことは出来ぬ。卯ノ花隊長と涅隊長は黒崎一護の記憶を取り戻す術を探すのじゃ。恐らく敵は奴に何

らかの形で接触しておるじやろ。黒崎一護の記憶を取り戻すことを火急とする。それから阿散井副隊長と朽木四席は出来るだけ黒崎一護と関わらせ、記憶を取り戻させるようにせよ。また、黒崎一護が敵と接触したのは現世と見て間違いない。碎蜂隊長はその捜索に当たるように。京楽隊長と浮竹隊長はこのようなことが出来る輩がいるか調べよ」

その指示に、各々首肯する。黒幕を探す手立てがない今、手掛かりは一護しかない。

「日番谷隊長は黒崎一護を側に置き、常にその動向に注意しておれ」

最後、冬獅郎が領き隊主会は終わりを告げた。

冬獅郎は全てを話し終えると、それきり何も言うことなく口を閉じた。そうすれば、執務室内は一気に静まりかえる。隊舎内ではしきりに廊下を歩く音や話声が聞こえてくるが、どこか此処とは隔離された世界にも思えた。

「そ、んな…」

不意に、乱菊の口から言葉が零れた。

「まさか、そんなことが…」

乱菊果たして何に對して驚いているのか。自分達の知らぬところで思いもよらぬ新たな敵がすでに事を起こしていたことか、それとも黒崎のことに関してか。

否、恐らくはその両方だろう。

何と言ったらいいのか分からず、乱菊は「そんな」「まさか」としか言うことが出来ないでいた。

「じゃあ、一護を隊長専門の雑務係にしたのも…？」

「ああ、奴の監視と言ったところだ。言い方は悪いがな」

些細な変化も見逃すことがないように、という総隊長の考えのもと冬獅郎はすぐさま事を起こした。

数十年前のあの叛乱に関わらなかつた者にしてみれば不思議で仕方

ないといった様子であったが、それに関わった者達は事情を察してくれたのか何も言わずいてくれている。

「そんなに事が大きいなんて思いませんでした…」

乱菊は未だ驚いたようにそう口にする。

「無理もねえ。俺だって驚いたんだ。ま、第三者が関わっているかもしれないということに関しては推測していたがな」

「そうなんですか？」

「半信半疑ではあったがな。総隊長の封印はこっちに来た時に戻るもの。それが戻らないということと考えられる可能性は、総隊長の封印が失敗したかだが、まずこれはあり得ない。となると、自ずと考えらるるのは別に封印が施された可能性だけだ」

「さすが隊長ですねえ」

淡々と述べた推測に、冬獅郎はそうでもないとばかりに反応を返すことなく書き途中だった書類に手をつける。

それを何処か遠くで見ながら、乱菊は苦々しげに眉を寄せた。

「辛いですね…」

手を休めることなく冬獅郎は「何がだ」と訊いた。

「あの子たちですよ。一護の記憶が戻らないってだけでも辛いのに、その上…っ」

「だが、それが現実だ」

「ですが　っ」

「でも、なんだ。黙っていたところで、奴の体が衰弱していくのを止めることは出来ねえんだ。だったら、遅かれ早かれあいつらは事実を知ることになる」

分かっている。だが、そんな理不尽な現実が乱菊には辛いのだ。何も知らずに近くで笑う一護が、会えた喜びもままならず自分達を忘れられ、再び大切な仲間を失いそうになっている彼らが　見　ていて辛い。

「安心しろ」

知らず俯けていた顔を、その凜とした声音に釣られてあげる。そこには相も変わらず書類を睨みつけている上司の姿があった。

「何のための護挺十三隊だと思っている」

その迷いなき声は幾度も自分たちを導いてくれ、いつだって希望と
勇気を与えてくれた。

「奴の記憶を取り戻すために卯ノ花も涅も動いているし、碎蜂に京
楽、浮竹も犯人を追っている。他の者も動きだすだろう」

そう、その声はいつも希望を。

「黒崎一護の記憶も、霊力も取り戻す。万が一なんてことは起こさ
せねえ。それに犯人も捕まえる」

勇気を。

「いいな、松本」

乱菊の表情に、迷いはなかった。

「はい…」

そうして、執務室の空気は普段のそれに戻っていったのだった。

「たいちよーおっどこまえー!」

「黙れ、松本」

「ただいま戻りましたー。あれ?何やってんスカ、二人とも?」

「聞いてよ、黒崎ーっ。たいちよーったらね」

「黙れと言ってる、松本!いいから二人とも仕事しろ!」

「うおおー!?隊長、何怒ってるんスカ!」

「違うわよ、黒崎。隊長は怒ってるんじゃないよ。ねー、たいちよ?」

「違うに決まってるんだろ!黒崎、茶!」

「ええ!?は、はい!」

「あははははは!」

第七章

君子蘭

—高潔—

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
.

護挺十三隊（後書き）

やっぱり、護挺十三隊メンバーの口調がめっさ難しい！

しかも、日番谷くんの出番がやたら多いしね！

もう明らかに、個人の好みバレバレだよ。一応言っときます！主人公は一護です！

垣間見る敵の影（前書き）

第八章

段菊

― 悩み ―

垣間見る敵の影

ポチャン…。

何処かしらの洞窟。じめじめと湿気の多いばかりと開いた空間は不気味な程の静けさがあった。

ポチャン…。

それを破るのは天井から垂れる雫のみ。ゆっくりと鍾乳石を伝い、床に出来た水溜まりへと吸い込まれていく。

ポチャン…。

それが落ちる度に小さな音は空間に響き、水溜まりに波紋をつくる。

ポチャン…。

そんな暗い空間を照らすのは橙色の灯り。壁づたいに円状に並べられた蝋燭がゆらゆらとその身を揺らす。それにつられ揺れるように、その影も揺れていた。

「もうすぐ…、もうすぐだ…っ」

その影は机にかじりつくようにして筆を走らせていた。何やら呪文のようなその文章だけでなく、他にも違う呪文を多く書いていたよ

うで丸められた紙が至る所に散乱している。

「よし…。これで…」

最後の一文字を書き終え、影は筆を置いた。それから、ケースの中の何かを一つ手に取ると洞窟の外へ出る。外は月すらもない真つ暗闇。影は影すらも見えなくなり、気配しか感じ取れない。気配は洞窟から離れ、近くの公園までやって来た。一護が第二の人生を歩むきっかけとなつたあの公園である。

その気配が手に持ったのは、以前、石田雨竜が使つたものより僅かに小さい撒き餌。

それを砕く。

瞬間、広範囲に渡って空気が歪んだ。

オオオオオオオオオオオオ…ッ。

空に点々と虚が集まり始める。

ニイ、と気配が笑った。点々と現れ始めた虚は次第に増えていく。いつの間にか現れた月が、その存在を照らし出す。無数の虚。

直に死神が来るだろう。急がねば。

気配は両手を組み人差し指と中指を合わす。

「我呼びかけし者 意思を持つて我となし 虚脱を持つて己となせ 黒き色の白き仮面 無情の常の下赤きに染め 黒天の空の幕を引く 慟哭せし彼の者よ 右の爪を我に託し 今その恨みと共に 彼岸の花の導きに従え」

詠唱だろうか。彼がその詠唱を終えた瞬間、彼の足場が輝き、そこから光が蜘蛛の巣のように虚へと伸びた。

多くの虚から叫びが上がる。

「ぐうっ」

気配からも苦しそうな声が上がった。と、同時に光の筋の輝きが薄れ始めた。しかし、そこからまた「はあ、あつ」と気合いを入れ、輝きを取り戻す。それも、ほんの数秒のことだった。

「っは」

大きく息を吐き出せば、光の帯が気配へと収束していく。すると、動きを止めていた虚がまた身じろぎ始めた。それに悔しげに舌打ちをする気配だったが、何かに気がつく^{タチマ}と忽ちその場から姿を消した

のだった。

「ちょっと！何なのよ」「レレヘー！」

紫水の目の前に広がったのは、無限に広がる虚の海だった。

不気味な月

十番隊、隊花は水仙。花言葉は神秘とエゴイスト。

真面目な者が多いと言われるこの隊を彼、一護は歩いてきた。

いつも通りにまた書類運び（まあ、隊舎内だが）を終えて「ただいま戻りました」と扉を開けた先、そこには「挨拶がなつてねえ！」と怒鳴る冬獅郎や、「朝から元気ね、黒崎」なんて言う乱菊がいるのかと思いきや、今日は二人ばかり人が多かつた。

金と銀なんていう色に混じって赤と黒があつたのだ。

「よお！一護！」そう笑うのは、六番隊副隊長阿散井恋次だ。

その隣には「貴様、何だその挨拶は！」などと説教してくる十三番隊第四席朽木ルキアもいる。

「へ？」

そんな間抜けた声を出してしまうのも仕方ないというものだろう。何せ、二人と会うのはいつぞや起こした大騒ぎ以来。

無謀にも副隊長と四席という、自分より遙か上の立場の人間とあんな険悪な喧嘩、そして別れをしまったのである。

しかも、目の前の朽木ルキアはあの六番隊隊長、加えて四大貴族朽

木家当主の妹に当たるといふではないか。だからと言ってどうという事ではないのだが、身に覚えがないとはいえあれだけ怒らせてしまっている。

正直言つて　。

(き、気まずい!) というのも仕方がないではないか。

冷や汗をだらだらと流し、目を必死で背ける一護はとりあえず「お、おはようございます…」と挨拶を交わす。

というのも、(これ以上怒らせるな! 出来る、俺になら出来る!) という信念のもとである。

「何だ、一護。貴様にも敬語を使えるのか。いや、それはいいんだが…なんだな、あれだ。気持ち悪いな」

それだというのに、この目の前の少女は一体何だというのだろう。相手を怒らせないようと自分に言い聞かせていたにも関わらず、一護の動きはピシリと固まった。

「確かに、何て言うか…、慣れねえよな」

そついう恋次の手は両腕を擦っている。まるで、鳥肌が立つというように。

「こやつは以前から礼儀というものが欠けていたからな。証拠に兄様のことを呼び捨てにしていた。あれには常々一言言ってやらねばとは思っておったのだ」

「あれか、あれは無謀だったよな……」

「でも、まあ。一護にも常識はあったということだな。私は安心したぞ」

これが一護に留めを刺した。

「てめえら……、人が下手に出てりゃあ良い気になりやがって……」

空気が固まる。「な、何だ……っ？」と焦るルキアと顔をひきつらせる恋次。正直、平の隊員に副隊長と四席がとる態度ではないのだが、残念ながら今の一護がそれに気付いた様子はない。

「お、おい、そう怒んなよ……。別に悪気があった訳じゃ……」

「それもつと悪いじゃねーか！」

「落ち着け、一護！我等は誉めているのだ！」

「今のどこが誉めてるってんだよ！」

何やら騒がしくなりつつある執務室に、冬獅郎はひくりと眉間に青筋を立てた。此奴等は今がどこでどういう時なのか分かっているのだろうか。

しかし。

(懐かしい、な…)

目の前の光景は凡そ数十年前のもの。一護がまだ死神代行として働いていた時は、よくここで騒いでいたものだ。あの時は正直、邪魔だとも思ったこともあったが、こうして思い出してみればなんと和やかな時間だったのだろうと思う。

怒鳴る一護に慌てたように言い返す恋次もルキアも、内心では懐かしく、また嬉しく思っているのは顔を見れば明らかだ。隣では乱菊も面白おかしく囃したてている。だが、いつまでもこのままにしておく訳にはいかない。

「おい、黒崎」

声を荒げるでもなく言えば、何かに感づいたようにピタリと騒ぎは収まりをみせた。流石隊長格と言えよう。

「あ、たいちよ」

さも今思い出したとばかりの言った一護は、慌てて口を塞ぐ。しかし、それはもちろん冬獅郎にばれているのだから意味はないのだが。

「てめえ、忘れてな…?」

「えっ!? いや、そのー…」

はぐらかそうとするも、なかなか良い言い訳が思い付かないのか言葉は先に進まない。それには冬獅郎も怒気を削がれ、代わりに溜め息が口から漏れた。

「まあ、いい。それより、今日はもう休んでいいぞ」

「え、なんでスか?」

「今日はこの後、あたしも隊長も出払うのよー。だから、あなたの仕事はなし!」

「はあ」

乱菊が理由を述べるも、納得したのか分からない曖昧な返事を一護は返した。その通り、今一納得は出来ていないのだろう。それに冬獅郎は畳み掛けるように言った。

「丁度いいから、阿散井と朽木の見回りに付いて瀟霊挺の把握もして来い。本当だったら書類運びついでに覚えるんだが、てめえはま
だだろ」

「うっ、…わ、分かりました…」

そうすれば一護はうなだれるように頷いた。それを見て、冬獅郎は恋次と朽木に視線を移す。一護はうなだれていて気付かなかったが、その視線はいやに鋭い。

「頼んだぞ」

「はい」

そして、返事をする二人の目も真剣だった。

「とまあ、ここで最後だな。どうだ、覚えたか？」

丘から下を眺めながら、恋次は振り返って訊いた。暗に“何か思い出したか”という意味も込めて。

そう、見回りなんていうのはただの名目に過ぎない。本来の目的は親しかった二人が一護の記憶にあるだろう場所を巡り、それを取り戻すこと。

「まあ、何となくは」

しかし、無情にも彼にそんな気配はなかった。

「そ、そうか？どうだ、何かないのか？」

ルキアはそれに焦ったように、記憶が戻るのを促すように言う。

「何かって？」

「そうだな…、ほら、あれだ！見覚えがあるとか」

「そりゃあ、ここにいれば遠目には何度か見たことはありますけど…」

「そ、そうか…」

ルキアの表情には落胆が浮かぶが、眼下を見下ろす一護がそれに気付くことはない。

「あ、でも」

「何だ!？」

思い出したように続けた一護に、恋次とルキアは揃って勢いよく尋ねる。

「あ、いや、一度だけ近くに来たことはあつたなー、と…」

それに圧され、たどたどしく言う一護に二人は今度こそ明らかな落胆を見せて「そうか」とうなだれた。

そんな二人の様子を、不可解だと一護が思って首を傾げるのも無理

はない。それを察してか、恋次は困ったように言う。

「いや、何でもねえんだ」

「そっつスカ……」

「ああ」

「……………」

一護はそれ以上訊くことなく、ただ黙って下に広がる景色を眺める。

「やっぱ、駄目みてーだな」

大きく息を吐くと共に恋次は言った。それにルキアは頷き、悲しみの残る表情のまま答える。

「ああ。そう簡単にはいかぬとは思っておったが……」

「見覚えもねーだよ。ったく、こっちは忘れたくても忘れられねーってのに」

「仕方あるまい。奴の記憶は」

そこでルキアは口を閉じた。

先日、二人は各々の上司から一護に関する情報を全て聞いた。始めは信じられなかった。一番に思ったのは“あの一護が？”といったところだろう。

それから、自分達に記憶を取り戻す手伝いをしてほしいと言われ、勿論快諾したのだ。自分に出来ることなら、と。

正直、信じたくないことだった。今、目の前に一護がいることだつてあり得ないはずのことで、さらには死ぬかもしれないなどと。でも、そんなことは言っていていられない。今まで彼には散々助けられてきたのだ。

次は 。

「今日はもう、無理そうだな…」

すでに仄暗ホソクハラくなった空を見上げて恋次は言った。見れば夜の帳が落ち掛けた空には星もちらほらと見てとれる。

本来なら業務も終わっている時間帯だ。あまり無理をさせるのもよくないだろう。

「そのようだな。 一護！」

「うおおっ、はい!?!」

呼び掛ければ、呆っとしていたらしい一護は驚いたように答えた。その反応が以前の一護のまま、僅かに目を細めるもすぐに表情を戒めた。

「今日はもう終わりにしようぜ。もう遅いからな」

「はい」

素直に丁寧な返事を返す一護は不気味だが、それを言うのを寸で堪えて恋次は言葉を飲み込む。

「じゃ、行こーぜ」

そう言って歩き出した恋次とルキアを追って歩き出した一護は、ふと後ろを振り返る。

先程まで鮮やかな橙に染まっていた風景は、すでに黒に包まれつつある。

「何やってんだ？」

「モタモタするな」

「なっ、分かってますよ！」

促す声に慌てて先を急ぐ彼等を見下ろすように浮かぶ月は、まるでこれから起こることを予感させるように、不気味な色を湛えていた。

その日の夜。

爛々と輝く月が窓から部屋を照らす。時々雲に隠れたと思いきや、そのすぐ後にはまた顔を出すということを繰り返していた。

不気味な月だ、と漠然と一護は思う。澄んだような銀色でもなく、輝かく金色でもなく、暖かな橙でもない。薄赤い月。どこかおどろおどろしい夜である。

そのせいなのか、今日は歩き回って疲れたはずの一護はなかなか眠れないでいる。隣ではすでに尚晴が健やかな寝息をたてているのに、それに誘われることもない。

理由は分かっていた。

恋次とルキアに連れられて行った見回り。その節々で感じた既視感である。

頭の下で組んでいた腕を解き、片手をすいと天井に伸ばす。

(あれは、何だ　　?)

思い出す、あの胸の高鳴り。何の変哲もない甘味処に行ったとき、変な名前の眼鏡屋に行ったとき、そしてあの双極の丘に行ったとき。

心臓が大きく鼓動し、頭を過ぎる見覚えのない光景。それはささやかに頭を掠め消えていく。

“思い出せ”と奇妙な義務感に襲われ、必死に記憶を手繰ろうとしても、何故か塗りつぶされるようにそれは自らの手から逃れていった。

その度を感じるあの喪失感といたら　　。

ぎゅ、と一護は伸ばした手を強く握り締めた。小さな痛みを感じたから、きつと手の平には爪跡がついてしまっているのだろう。

時々、自分が誰なのか分からなくなる。否、自分は間違いなく黒崎一護であって、それ以外の何者でもないのだ。そこには何の疑問もない。

では、この喪失感は何故、今の自分に違和感を感じているのだ？

分からない。何も知らない。一護の頭の中で自問自答が繰り返される。

本当に何も知らないのか？

知らない。

何故？

だって、見たことがない。

忘れてるんじゃない？

そんな訳ない。自分の記憶は完璧だ。

本当に？

本当に。

何のための問いか、何のための答えか。自分を追い詰め、そこから逃げる。一向に終わらない駆け引き。

“貴様が、死神になれ”

「　　つ！？」

瞬間だった。

もはや見慣れた天井に視界が入る。いつの間にか眠ってしまっていたらしい。部屋の中を照らす光の位置がさほど変わらないことからそんなに時間は経っていないのだろう。

頭に流れた映像、直接響くような声。

現世の街並み、相対するのは虚、佇むは自分、そして血を流すのは、あれは　　。

（朽木四席…？）

何故、彼女が？

いや、それ以前にあの映像は何だ？何故、自分は現世に？

あんな体験はしたことがない。もしかして、あれは自分が生きている頃の記憶か？

否、そんなはずはない。何故なら、こっちに来た時点でその記憶があるはずないからだ。

では、今のは何なのか？

分からない。

分からない、分からない、分からない。

分からないことばかりだ。

自分の知らない、自分。

知っているはずの、自分。

それすら解らなくて、苛々する。

「ちくしょ…っ」

思わず悪態が零れてしまうのも仕方ないではないか。

新たに分かる事実

時は遡り、場所は一護達の去った執務室である。

途端、静まり返った執務室に一つ、冬獅郎の溜め息が零れ落ちる。

「つたく、彼奴等は…」

呆れたような声音に、乱菊は可笑しそうに笑った。

「まあまあ、いいじゃないですか」

書き終わった書類をまとめ、それを冬獅郎に渡しながら乱菊は言う。

「あの子達も思ったより元気そうでしたし。少し安心しました」

「ああ。そうだな」

それを一枚一枚捲って確認していく冬獅郎を見ながら、乱菊は続ける。

「それで、どうするんです？」

「あ？何がだ？」

「何がって…、隊長の仰る通り出払うって言いましたが、そんな予定は…」

そう乱菊が困ったように言うと、冬獅郎は書類を捲る手を止めて不可解だとばかりに彼女を見上げた。

「何言ってるんだ？」

「ですから」

「今から現世に行くぞ、松本」

驚いたように僅か、目を見開くが、すぐに表情を引き締める。その表情はすでに副官然としていた。

「現世に、ですか？」

「そうだ」

「何故？」

「以前、黒崎の監視を命じられた際、もう一つ指示があった」

すでに冬獅郎の目は文を追っていない。

「現世に行くこと。そして、ある人物に会うことだ」

穿界門をくぐった先は、懐かしい町並みをしていた。数十年経っているから所々変わってはいるが、大まかなところは変わらない。

この町で、自分達は生涯で最も大きな事件を迎え、そして終えたのだ。

あれから、ここに来る機会はほとんどなくなった。何と懐かしい。

すでに日の傾きつつある空に降り立った二人が目指したのは、少し外れた所にある小さな店だった。薄汚れた看板には“浦原商店”と掲げられている。駄菓子屋だ。

二人がその店の前まで来ると、そこには竹箒を手に掃除していた気

弱そうな少女と竹箒を放り出し柄悪そうに座り込んでいた赤茶の髪
の少年がいる。

あまり冬獅郎も乱菊も話したことはないが、確か雨ウレルとジン太といっ
たろうか。

「死神が何の用だよ」

下から睨み付けるようにして言ったのはジン太だった。義骸に入っ
ていない冬獅郎と乱菊を見、且つ死神を知っていることから彼等が
只の子供でないことが容易に窺える。

「浦原喜助はいるか」

威嚇してくるような態度を気にした素振りも見せずになぞ問えば、
今度は雨がおずおずと口を開いた。

「店長に御用ですか…？」

「ああ。早急に会いたい」

冬獅郎が頷いた時だった。陽が影って薄暗い店内から人影が現れる。

「どうした、ジン太、雨？」

そんな飄々とした声に、冬獅郎の目が僅かに細められた。どうやらこちらから赴く手間は省けたらしい。

「客だぜ」

やはり柄が悪い口調でジン太が言えば、恐らくは自分達がこちらに来た時点で気付いていただろうに、さも今気付いたとばかりに「おや」と言う。

「これはまた、珍しいお客様ですねえ」

店内から現れた男は、深緑の甚平に黒い羽織を着ていた。頭に同じ深緑の帽子を被り、足には下駄という今の時代にも珍しい恰好をしている。

目元は帽子で隠れ見ることは出来ず、だからと言って口元も扇子で隠れているため表情は全く窺えない。

「まあ、こんなところで話すのもなんですし、どうぞ中へお入りください」

そう促されて、冬獅郎も乱菊も特に反論することもなく中へと導かれた。それ程広いわけでもない和室に卓袱台チャフタイを囲んで、三人は座る。お茶を各々に配っていく鉄裁を余所に、喜助は相変わらず飄々と言った。

「それで、日番谷隊長と松本副隊長が揃って訊きに來られるとは、一体どんなお話なんでしょう？」

それに対し、冬獅郎は腕を組んだまま表情を変えずに切り出す。

「単刀直入に言おう」

帽子の縁から覗く喜助の眼光が鋭く冬獅郎を見遣った。

「何故、黒崎一護が死んだことを尸魂界に報告しなかった？」

次いで、彼の目が細められる。

しばらく、二人はお互いを見つめたまま動きを見せなかったが、不意に喜助が扇子を開いて口元に宛がうことで動きが再開されることとなった。

「はて」

そして、さらに扇子は小気味のいい音をたてて閉じられる。

「いろいろと疑問はあるのですが、まず、その黒崎一護という人物は何者なんでしょう?」

「な…っ」

冬獅郎と乱菊は揃って息を呑んだ。

何ということか。失念していた。まさか、こういうことになっていたとは。否、可能性がないわけではなかった。ただ、考えなかつただけだ。

「何言ってるのよ!一護よ!?!知らないはずないでしょ!?!」

「と、言ってますが…。鉄裁さん、貴方はご存知ですか?」

閉じた扇子を口元に当てながら、後ろで控えていた鉄裁に問う。それに相変わらず重々しい口調で彼は首を振りながら言った。

「いいえ。私は存じ上げませんが」

「だ、そうです」

「そんな…」

その答えに、卓袱台に手をついて身を乗り出していた乱菊は呆然と身を引く。

そんな乱菊に対し、今まで黙っていた冬獅郎はひどく落ち着いている。流石、普段から冷静沉着と言われるだけのことはある。

驚いていないわけではないが、それ以上に隊長としての矜持がそれを許さない。冬獅郎は喜助に向き合つと確認するかのよつに言う。

「本当に知らないんだな？」

「少なくとも、アタシの記憶にはありませんねえ」

「…そうか」

冬獅郎は静かに腕を組んだままだ。乱菊は不安そつに冬獅郎を見ると「隊長…」と名を呼ぶ。

「恐らくこいつ等も記憶を封印されたんだろう」

それにしばらく考えてから冬獅郎は述べた。それにまた目を丸くし、

しかし冷静に受け答える。

「ですが、そう簡単に記憶を消すなんてことが出来るのでしょうか？曲がりなりにも、彼は元十二番隊隊長、初代技術開発局局長ですよ？」

「不可能とは言い切れねえだろ。奴は実際、黒崎の記憶・霊力共に封印しやがったんだ。確かに難しいかもしれないが、今回の場合はそう考えた方が辻褄は合う」

「確かに、そうですね」

冬獅郎から説明をされれば、確かに彼の言うことには筋が通っていて納得出来る。乱菊は頷いた。

「何が起こっているかは分かりませんが…。どうやら我々はその黒崎って人の知り合いだったみたいですねえ」

ふむ、と頷いて喜助は軽い口調で言うが、その声音はどこか真剣身を含んでいるものであった。

「俺はあまりお前らの関係は知らないがな」

そう遠まわしに肯定を示す。すると、やはり喜助はふむと頷いた。

「黒崎一護、ねえ……」

そんな緊張した室内を、覗くように見ている小さな影が二つあった。襖をほんの数センチ空け、そこから目だけを覗かせる。

「ジン太君、やっぱりやめようよ。怒られちゃうよ……」

「いいから見ろよ、雨。お前だって気になるだろ」

「でもやっぱりまずいよお」

ニヤニヤと悪戯するかのように中を覗くジン太とそれを止めたいのだがなかなか強気に出られない雨の背後に、のっそりと影が現れる。しかし、それぞれの役目に夢中な二人は気付かない。二人が後ろの存在に気が付いたときには既に、パシんツと勢いよく襖が開かれた後だった。

「何じゃ。珍しい奴らがいるものじゃな」

「夜一さん」

堂々と現れたのは紫の髪を高い位置で結び上げた、つり目が特徴的

な女性だった。

四楓院夜一、四大貴族の一つ四楓院家元当主であり、かつては護挺十三隊二番隊隊長並びに隠密機動総司令官及び同第一分隊「刑軍」総括軍団長だったという錚々たる肩書きの持ち主である。

夜一は中に冬獅郎や乱菊がいるのを見て、面白そうに目を細めと、それからずかずかと中に入ると空いていた場所に腰を下ろした。

「ご苦労様ツス。随分とお早いお帰りで」

「まあの。儂にかかればこんなものじゃ」

「いやあ、頼もしい限りツスねえ」

まだ手をつけていない喜助の茶を横から奪い取り、一気に飲み干す。その様はまるで男のように勇ましいが、不思議と違和感はなかった。

「お主等がおるということは、また何かあったようじゃのう」

腕で口元を拭いながら、夜一はにやりと笑んで窺うように冬獅郎達に視線を向けた。それに冬獅郎は答えることなく目を細める。夜一の見透かしたような物言いが、彼は気に入らなかった。

代わりに答えたのは、喜助である。

「そのことなんですけどねえ。夜一さんは黒崎一護って方ご存知ですか？」

その質問に、乱菊は緊張に肩を強ばらせ、冬獅郎は些細な動作も見逃すまいというように目を細める。

そんな二人の変化に気付き、夜一も探るように目を眇めた。

(この様子だと、余程の問題のようじゃのう)

ふむ、と頷いて言う。

「主等には悪いが、儂の知り合いにはおらん」

瞬間、気落ちしたように乱菊は目を伏せ、冬獅郎は眉間に皺を寄せた。

「そ奴がどうかしたのか？」

「うせ…」

口ごもるといふよりは、考えることに没頭するようになり冬獅郎はそれ

だけ言った。

説明を求めるように夜一は喜助に目を向ける。

「彼等が言うには、どうやら、その黒崎一護という人物、我々の知り合いらしいんす」

「知り合い？」

意味が分からない、という意味で聞き返せば喜助も肩を竦めた。

「生憎アタシも何が何だかさっぱりで」

喜助は扇子を広げると口元を隠す。帽子と扇子の間から覗く目が、鋭く冬獅郎を捉えた。

「是非、事情をお聞かせ願いたいっすねえ」

その視線に、冬獅郎は考えることを放棄して事情を説明する。重禍罪を犯した少女について始まり、死神代行をしていた少年について、隊長格三人の叛乱、それによって迎えた結末、その後のこと、最近現れた少年、記憶・霊圧の消失、その背後にある敵の気配。

要点のみを的確に纏める。話し終わった途端、一気に静まり返った部屋に喜助の声はよく響いて聞こえた。

「つまり、その黒崎一護という少年が今回の事件の鍵を握っているってことっスね？」

「そうだ」と、冬獅郎は頷いて話し始める。

「黒崎の記憶・霊力を封印したというのもそもそも可笑しな話だ。確かに、奴の霊力は俺らに匹敵するが、奴一人を退けても先にはまだ隊長格は大勢いる」

「そうですね。並大抵では隊長達には勝てないでしょうし」

「それに、此奴等の記憶を封印したということは黒崎についての連絡が此方に来ることを懸念してのはず。だとすると、敵は相当黒崎の力に危機感を感じているということになる」

乱菊ははっとしたように息を呑む。どうやら気付いたようだ。冬獅郎も嫌な予感に眉間の皺を深めた。

「まさか」

「ああ、奴だけが持つ力　　虚化だ」

ますます敵の意図することが分からなくなった。それと同時に、この事件の厄介さが伝わってくる。

「隊長、一体何が」

「それが分かりゃ苦労しねーよ」

事態の深刻さと見えぬ敵に齒噛みする二人に、自然と部屋の空気は重くなる。

それを破ったのは、飄々とした声だった。

「それと関係あるかは分かりませんが」

喜助だ。

「実は最近、どーも妙なんです」

「どついつことだ」

意味深に言う喜助に、冬獅郎は聞く態勢をつくる。それに満足げに扇子の下で小さく笑むと、喜助は続けた。

「本来、虚とは普段虚圏ウエコムンドに存在し、餌として魂魄を狙う時のみ現世に現れるものです」

「それが、どうかしたのか」

虚が何たるかは死神である自分達がよく知っている。今更な内容だ。冬獅郎が急くように先を促せば、やはり喜助は飄々と「まあ、そう急かさないで下さい」と笑う。

「虚なんてものは、この空座町に一日十数体が現れば多い方でしょう。それが近頃は、目に見えて虚の数が増えている。しかも、その虚」

と、喜助は声を低くする。

「改造されているものがありました」

空気が変わった。乱菊と冬獅郎は予想外な発言に目を見開く。

「な、なんだと…!?!」

「もう一度言いましょうか？虚が改造された形跡がある、と言ったんです」

あっけらかんと喜助は言うが、とんでもない話だ。虚の改造。そんなこと簡単に出来るものではない。

「それは確かなんだな？」

気付けば部屋は真つ暗だった。月明かりだけが照らす部屋の中で、煌と輝く翡翠の瞳が鋭く喜助を射抜く。

それを真つ直ぐに受け止め、喜助は「もちろん」と笑んだ。

「それについては儂も保証しよう」

堂々と言ったのは夜一だった。

パチリと部屋が人工的な灯りに包まれた。どうやら鉄裁が灯りをつけたらしい。

「実は、夜一さんにはここしばらく調査してもらってたんです。アタシが調べた虚を捕まえてもらったのも、夜一さんスよ」

付け足すように喜助は言う。それを横目で見ると、夜一は早速とばかりに説明し始めた。

「奴等は今まで本能的に魂魄を狙っていた。じゃが、最近の虚は知能を感じるものが多い」

「知能？」

そこで思い出すのは以前、技術開発局から抜け出した実験用虚だ。乱菊も同じ様に思い出したらしく、「隊長」と視線を向けてきた。

「何じゃ、どうやら心当たりがあるようじゃのう」

「少しな。続けてくれ」

「いいじやろう。始めは一体だけであったのが、次第に数を増やし
いってな。今では十数体の数の虚がこの空座町に出現してある」

十数体、確かに多いと言えよう。冬獅郎はこの町に駐在している自分の部下を思い、眉を寄せた。

「嶺川の報告にはなかったが…」

「それは無理もないじやろう。知能があるということは、知能がないと見せかけることも、数が増えてないように見せかけることも出来るということじゃからの。まあ、言っても完全に誤魔化すのは無理じゃ、そろそろ報告がくるであろう」

訝しげな冬獅郎に、夜一は事も無げにそう言う。

「その黒崎さんという方の事件と関係あるかは分かりませんが、今、空座町に異変が起こっていることに間違いはありません」

喜助は言った。

「無関係というにはあまりにタイミングが良すぎる。調べてみる価値はあると思うっスよ」

まるで、これからの冬獅郎の返事は分かりきっているというような顔が気に入らない。涅のような残忍さや不気味さはないが、やはり不可解で食えない男だ。

「そうだな」

とはいえ、私情を挟み、つまらぬ意地を張る程冬獅郎は子供ではない。

素直に頷く。

「確かに関連性があると断言は出来ないが、だからと言ってないと

も言い切れねえ。調べる必要はありそうだ」

「助かりますー。流石、日番谷隊長だ。話が分かる」

そうすれば、喜助は満足そうに礼を言った。

冬獅郎はちら、とかけられた時計を見て時刻を確認する。気付けばだいぶ話し込んでいたらしい。すでに短針は十を回ろうとしている。

「また、何か分かり次第連絡しよう。長い間邪魔したな」

「いーえー。こちらとしても、協力して貰えるならありがたいっすよー」

「僕も、協力出来ることがあるなら手伝おう」

「助かる」

言われて思い浮かぶのは彼女を溺愛している碎蜂だった。何かと頭の硬い碎蜂だが、もし何かあった時は説得してもらおう。

そう立ち上がる冬獅郎に習い、乱菊も立ち上がりかけたその時だった。

ドンッ、と急激に空気に重みが加わった。空気が震え、嫌な感覚が背を這う。

慣れた感覚、しかし、それはいつもとは確実に違っていた。

「隊長！」

「これは」

腰の刀に手をかけながら、乱菊は切羽詰まった声で冬獅郎の名を呼んだ。

「喜助」

一方で、冷静に座ったまま目つきのみを鋭くして何かを察したように夜一は喜助を呼ぶ。

「どつやら、十数なんて生易しいものではないようですね」

そんな喜助の言葉を背中から聞きながら、冬獅郎と乱菊は店の外へと飛び出した。

「何、これ…っ」

空を見上げた乱菊の目に映ったもの。それは。

「嘘でしょ……っ」

一点に向かって飛ぶ虚の大群であった。

第八章

段菊 | 悩み|

t o b e c o n t i n u e . . .

新たに分かる事実（後書き）

少しずつ話が進み始めました。

喜助と夜一さんも出てきて、何かもつごちやごちやです「汗」

本当は出すか迷ったんですけどね、bleachをやるならやっぱり
出さなきゃなあと思ひまして！

今回は戦闘シーンですね！

上手く書けるかな…。

虚の大群（前書き）

第九章

辛夷

―友愛―

虚の大群

「何、これ…。嘘でしょ…っ」

次々と何処かへ向かって飛んでいく虚に、乱菊は思わずといったように言葉を零す。

「隊長、これは」

「今、考えてる暇はねえ。早いとこ片付けるぞ」

冬獅郎は脚に靈力を込める。

「ついて来い、松本」

「はいっ」

次の瞬間、二人の姿はその場所から消えていた。それを見届けて、喜助と夜一の二人も店から姿を見せる。

「さて、と。我々も行きますかあ」

「仕方ないのう」

冬獅郎達を追うように、二人の姿も消えていた。

空座町空座第一高校上空

「はあ、あー！」

苛立ちを全て晴らすように刀を薙いで、紫水は一息ついた。とはいえ、周りにはまだまだ留まることを知らない虚達がウヨウヨしている。

「一体何なのよ、これ！うじゃうじゃと」

刀を強く握り締め、振り向きざまに。

「鬱陶しい！」

一閃した。

ギユアアアア！

耳障りな雄叫びを上げて虚は昇華されていく。それを見ることなく、紫水は次の虚へと斬りかかった。

始めはこの不可解な現象が気になったが、もう今となってはどうでもいい。というより、それどころではない。

この空座町に駐在する死神は二人、そしてどちらも無席ときた。正直、きつい。

(応援が来てくれるといいけど…)

今はそれを願うしかない。

また一振り、紫水は虚を斬ると屋上のフェンスを蹴って、さらに上空へと跳び上がった。

ザシュツ、と音をたてて虚の身体は真つ二つに斬られる。

「ちっ、キリがねえな……」

それを斬った当の本人はこれで何体目になるか分からない虚に、苛立ちを込めて舌打ちを打つ。

「隊長！」

そこへ、ちょうど虚を倒した松本も合流した。

「隊長、このままでは……」

「ああ。流石に厄介だ」

と、また近付いてきた虚を一刀両断する。二人は背中合わせに立つと虚と向かい合った。

「ここまで大量の虚が偶然に出現するのはあり得ねえ。何か原因があるはずだ。その根本を絶つ」

「何か策が？」

「思い出してみる。あの店からここに来るまでに、虚のいる方へ進んできたが、次第にその数が増えていった」

その言葉に乱菊は記憶を辿る。それから周りを見回し、なるほど、確かに数は増えていつてるようだ。

乱菊が納得したのが雰囲気で分かって、冬獅郎は続ける。

「虚の集まる所へ行く」

その場から二人の姿が消えた。

一方、紫水も斬っても斬っても減らない虚に疲れを隠せないでいた。恐らく、この事は技術開発局も気付いている。早く応援が来なければ流石に対応しきれない。

「っは」

息も上がり、肩が大きく上下する。額から流れる汗を拭い、また虚を一体昇華させる。

「ちくしょ…っ」

虚にか、それとも己にか。紫水は悪態をついて足に力を込め、目の前の虚を笠懸けに斬った。瞬間、横腹に強烈な衝撃が走り、紫水の華奢な体が吹っ飛ぶ。

驚いて、顔をしかめつつ見れば、そこに一体の虚。疲れのせいか、不覚にも気付けなかった。悔しげに舌打ちして、紫水は屋根に叩き付けられる。

正直立ち上がるのもキツイ。しかし、虚が近付いて来ているのを細めた目で捉え、慌てて立ち上がるうとし、走る痛み顔に顔をしかめる。どうやら足首を捻ってしまったらしい。それでも何とか刀を支えに立ち上がる。とはいえ、これでは戦うことすらままならない。度重なる失態に、紫水は怒りすら覚えた。

「はっ」

痛みと焦りに体力が奪われる。紫水は捻った左足に体重をかけないように、刀を構えた。

しかし、そんな状態でまともに戦えるわけがない。爪を振り下ろす虚を防ぐだけで、紫水は身体を吹き飛ばされる。何処かの屋上の鉄柵に背中をぶつけ、崩れるように地面に座り込む。

そこへ、無情にも虚が爪を振りかざした。

「啼け、紅姫」

何か顔の横を通る。そう思った瞬間、目の前の虚は真つ二つに斬られ、昇華していた。

「な……」

啞然とする紫水の前に、誰かが静かに降り立つ。黒い羽織に深緑の甚平、帽子。独特な柄の形をした刀は 斬魄刀だ。

「あなた……」

紫水は警戒心露わに目の前の男を睨み付けた。

羽織の柄は色は違えど隊長格の羽織と似てはいる。とはいえ、あんな羽織は尸魂界に存在しないし、何より死覇装を着ていない。斬魄刀を持っているならば、死神であるはずなのに、だ。

怪しいこと、この上ない。

そんな紫水の疑心を感じてか、その男は紫水を振り返ると言う。

「そう、警戒しないで下さい。ワタシはあなたの敵ではありません」

そう言われて警戒を解くほど、紫水は甘くはない。

「困りましたねえ。じゃあ、これでどうでしょう。貴方の隊の隊長さん、日番谷さんに聞いてみて下さい」

「っ、日番谷隊長!？」

そこで出てきた思わぬ名前に、紫水は反射的に声を上げていた。

「あなた、どうして日番谷隊長の名前を　!？」

「そりゃあ、知ってますよ。もちろん、貴方のことも、嶺川サン」

「あなた、何者なの」

飄々とした得体のしれない男に、紫水の体が緊張に強張る。先程の攻撃といい、自分の今の状態といい、正直勝てる気はしない。

と、男の背後に虚が見えた。

しかし、気付いているだろう男は振り返ることなく自分を見ているだけ。

腕が振り上げられる。見かねた紫水が「ちょ、あんだ後ろ」と声上げた瞬間、ドゴツと鈍い音をたてて虚が吹き飛ばされた。

何が起こったのか紫水には分からなかった。突然、女が現れ、次には虚が消える。あの巨体をいとも簡単に吹き飛ばす女は何なのだ。

紫の髪を一つに結び上げた猫目の女性は、男の横に降り立った。

「何を油を売つとるのじゃ、喜助」

軽い身のこなしに金色に光る目、まさしく猫のようだと紫水は思う。にしても、また得体の知れぬ者が増えた。

警戒心を高める紫水に気付いているのか否か、喜助と呼ばれた男は呑気に返す。

「いやあ、助かりました。夜一さん」

女は夜一というらしい。

「こ奴は」

夜一はそこで紫水に気付く。喜助は紹介するように「嶺川紫水さん
スよ。ほら、車谷さんの後任の」と言えば、彼女は「ほう、こ奴が」
と納得したようだった。

一方、当の紫水は不快感を募らせていた。自分の話を自分そっちの
けで進められているのだ。無理もなかった。痛む身体を半ば無理矢
理動かして、柵に預けていた背を浮かせる。

「あーあ、いけませんよ。その傷で動いちゃあ」

「まだ、質問に答えてもらってないっ。答えなさい。あんた、何者
なの…っ」

殺気も露わに紫水は喜助を睨みつける。

喜助は困ったように帽子ごと頭を掻いた。すると、隣に立つ夜一は
呆れたように彼を見る。

「何じゃ、貴様。警戒されておるのか」

その声音はどこか愉快げだ。

「まあ、無理もないじゃろ。貴様の雰囲気は警戒心を仰ぐ」

「ちょ、それは酷くないっすか？」

夜一は紫水に目を向けた。

「安心せい。こ奴は風貌は怪しいが敵ではない。名は浦原喜助、儂は四楓院夜一という」

「四楓院…っ！？あの…！？」

霊術院でも習った、あの四大貴族の名に、紫水は怪我した体も忘れて大きな声を出す。案の定、背中や脇に痛みが走って顔をしかめた。

「無理をするでない。かなり強くぶつけていたからの」

「でも、こんなことしてる場合じゃ…、って、虚は！？」

この二人が敵ではないということは分かったはいいものの、すっかり周りの状況のことを失念していたことに気付き、紫水は焦ったよ

うに辺りを見回した。

しかし、周りの虚はまるで自分達がないもののように視界に入っていない。

「な、一体……」

「縛道の七十三、倒山晶」

状況についていけない紫水に、喜助はにんまりと笑みを浮かべた。

「その体じゃあ、しばらくは動けないでしょう。敵さんに見えないようにさせてもらいました」

縛道の七十三、倒山晶。外から結界の中を見えなくさせる術だ。

見れば、確かに四角錐を逆さにしたような霊圧の結界が自分達を覆っている。

「そういう訳にはいかない。私が今動かないと、空座町の担当死神は私なのよ」

そう言い、紫水が体を起こそうにも走る痛みが邪魔をする。痛みで額に脂汗が浮かび上がり、傷から流れる血がコンクリートに小さな

血溜まりをつくっていた。

「ふむ、確かにそうじゃ。しかし、今のお主には戦える力があるとも思えぬ」

「でも」

「大丈夫っスよお」

夜一の言葉にさらに言い募ろうとする紫水を、喜助は相変わらず飄々とした声音で遮った。

「我々は少し休憩としましょう」

「な！何を馬鹿なことを言っ…っ」

この状況で有り得ない言葉を口にする喜助に、紫水は怒りを露わにする。

「状況は一刻を争うのよ！？突然こんな大量の虚…っ、早く原因を突き止めないと…っ」

「原因なら大凡^{オオヨソ}検討はつきます」

「なっ」

「それは本当か、喜助」

喜助の台詞に紫水は言葉もなく驚き、夜一は表情を真剣なものにして喜助に問う。

「はい。恐らくは誰かが撒き餌を仕掛けたんでしょっ」

「っじゃあ、早いところそれを…っ」

原因が分かればあとは早い。さっさと始末をつけようと、紫水は何とか身を起こそうと力を込める。そして、やはりまた地面に足をつく。それを見て、夜一は呆れたように溜め息をついた。

「何回懲りれば気が済むのじゃ、主は…」

それに、紫水は眉を吊り上げた。

「あんた達はどうしてそうしてられるのよ！原因が分かってんでしょ！早いところそれを何とかしないと」

「まあまあ、落ち着いて下さい。大丈夫ですよ。後は彼等に任せましょっ」

「彼等？」

「ええ。貴女もよく知ってるお人です」

そう言つて笑つた喜助の後ろで、突如として重い霊圧が伸びた。平隊員である彼女は、その霊圧に耐えられず地に伏せる。

「うっ」

「大丈夫ですか？」

痛みによるものとは違つ汗を流し、歯を食いしばつてようやく意識を保っている状態の紫水に、平然とした態度で問いかけてくるのは少々憎たらしい。

だが、今はそれよりも驚いていた。何故なら、この霊圧は彼女の最も敬愛する人のもの。冷たい氷のようであり、雪のように温かい。高潔で凜とした、この霊圧は。

「日番谷、隊長…っ!？」

「あれが今の十番隊か…」

一方、何とか虚の中心部へ行こうと瞬歩で進みつつ、ホロウ虚を斬り倒していく冬獅郎と乱菊の二人を見て呟いている男がいた。木のなるべく太い枝に座り、葉で身を隠している。夜である今なら、まず見つけ難いであろう。

「確か、史上最年少で隊長になった天才児といったな…。おもしろい…」

にんまりと歪んだ唇が“試してみるか”と形を象った。

空座町上空

「ちっ」

紫水が喜助、夜一と接触していた頃、中心部へ行くとは決めたものの、冬獅郎はなかなか進めないでいた。

「っはあ、あ！」

冬獅郎が氷輪丸を振り下ろせば、氷竜によって連なるように、一気に三匹の虚が昇華される。

「灰猫！」

乱菊も細かい粒子状に散った斬魂魄を振るい、虚を斬っていく。

冬獅郎はザシュツという音をたてて虚を斬りつけると、辺りを見回した。減ることを知らない虚の数。進むうえにも、何故かそれを遮るように虚が現れ進めない。

「隊長、これは……っ」

「どつやら、四楓院夜一の言っていた知性のある虚つてのは、こいつらのことみたいだな」

「話には聞いていましたが、面倒」

二人の目が同時に見開かれる。一瞬で背中に現れた気配、乱菊が防御をするより早く、ソレは腕を振り上げ、乱菊の鳩尾にめり込んだ。

「松本！」

砲丸が放たれたように乱菊の身体は近くのビルへと吹っ飛ぶ。

“まずは一匹”

影の唇はそう形を描いた。

冬獅郎はその虚を氷竜を操り背中から貫く。素早く乱菊の方へ視線を走らせると、硝子によって切り傷は多いものの、大したことはないらしい。

しかし、まるで冬獅郎と乱菊を引き離すように数体虚が二人の間に割り込んできた。

とにかく、今は目の前の敵に集中するべきだ。早く原因を突き止め

るために、一刻も早く虚の大群の中心部へ辿り着かなければならぬ。

そう考え、冬獅郎は瞬歩で移動しようとして、足が動かないことに気がついた。見れば、いつの間にいたのか、一体の虚が自分の足を掴んでいる。

どうやら、乱菊に気を取られた一瞬でやられたらしい。己の失態に、冬獅郎は思わず舌打ちして刀を薙いだ。

と、瞬間感じた気配に振り向きざまにまた刀を一閃させる。それと同時に今度は頭上と足下から虚が迫ってきて、冬獅郎は瞬歩で頭上の虚の上に移動する。

「破道の四、白雷！」

指先から放たれた一閃の白光が、二体を同時に貫いた。

ふわり、と冬獅郎は空に霊子を固めて着地する。が、やはりまたそれを阻止するように虚が爪を振りかざしてきた。体勢が整わなのまま、何とか刀を構えて受け止め、氷竜で相手を凍らした。虚は碎けて昇華される。

だが、また留まることを知らずに虚は隙なく次々と冬獅郎に襲いかかってくる。先ほどからずっとこの調子だ。中心部に行きたくとも行けない。

夜一の言っていた通り、一度に操れるのは十数体というのは本当ら

しい。乱菊の方も合わせて、攻撃を仕掛けてくるのは一度に十数体のみだ。

加えて、霊圧も探査しにくく、スピードも上がっているように思えた。だが、それでも一体一体の戦闘能力は低い。倒すのにそこまで支障はないのだが。

(とはいえ、面倒だ)

冬獅郎は刀を構える。上下、前後左右から虚が襲いかかってくるのも構わず、冬獅郎は防御・攻撃の素振りも見せずに声を張り上げた。

「卍解！」

瞬間、冬獅郎からもの凄い霊圧が吹き上がる。襲いかかってくる虚はその霊圧に為す術もなく吹き飛ばされ、ビルや道路に突っ込んでいる。

その霊圧が収まれば、立っていた冬獅郎の姿は様変わりしていた。背には氷の翼と尾、手を竜の鉤爪が多い、空には氷花が三つ並んでいる。

「大紅蓮氷輪丸」

まさに、その姿は氷竜であった。

「竜霰花！」

氷輪丸を突くように前に出せば、一気に三匹の虚が胸を氷に貫かれる。

「悪いが、通らせてもらう」

だんだんと凍っていく虚は、攻撃も防御もままならず昇華されていく。それを遠くで見っていた男は、その様子を見て“そろそろ、終わりか”と姿を消した。

「……？」

突然、虚の動きに統一性が見られなくなって冬獅郎は動きを止めた。動きも鈍くなり、霊圧の探査も容易になる。

（何だ？）

手の平を返したような変化に、逆に警戒しながら冬獅郎は虚を斬っていく。しかし、好機を逃す訳にはいかない。畏だとしても、そうでなくとも冬獅郎は瞬歩で中心部へ跳んだ。

虚が集まっていたのは、小さな公園だった。その真ん中に、薄紅色の欠片を見つけ、冬獅郎はそこに降り立った。

すでに卍解は解き、始解の状態である。

「破道の三十一、赤火砲」

手の平から放たれた放たれたそれにより、欠片は形を遺さず消される。

「隊長！」

そこへ、乱菊も追いついてきた。

「松本か」

冬獅郎は振り返ることなく、ただ撒き餌のあつた少し焦げた地面を見つめる。

「一体何が…？」

「撒き餌だ」

「撒き餌？」

乱菊の目が鋭くなる。それは、冬獅郎も同じである。「撒き餌」、その意味するところが、二人には分かっていた。

自分達の知らないところで、何かを着々と進んでいるようで、冬獅郎は胸に湧き上がる焦燥感に眉をしかめる。

「一体、誰が……」

そう呟く乱菊に、冬獅郎は何も答えず、「残りを片付けるぞ」とだけ言ったのだった。

更木劍八という男

瀨霊挺十番隊

賑やかな人達が話に花を咲かせる。何処どこに新しい甘味処に出来た。彼奴はまた女にふられたらしい。今日は友人と遊びに行く約束をしている、等々。何でもない他愛もない話である。その一角に、
一護と尚晴はいた。

「また蕎麦かよ……」

目の前で蕎麦を啜る尚晴に、一護はげんなりした様子で言う。ちなみに、今日はとろろ蕎麦である。

「別にいいでしょ。好きなんだし」

そう憮然と言うが、かれこれ三日は連続して蕎麦である。ちなみに、天麩羅蕎麦・ざる蕎麦・とろろ蕎麦である。一護が見る限り、ざる蕎麦に関しては週一の割合で食べている。

「や、そりゃそーなんだけどよ…」

見ている方としては、複雑だ。何だか食欲がなくなり、一護は箸を置いた。

「何？もう、食べないの？」

「見てたら食欲なくなっただよ」

結局、数口しか食べられなかった定食を見て、尚晴は僅かに眉をしかめて一護を見た。

それに、一護はお茶を飲んで事も無げに言う。

確かに、美味しそうではあるが、何故だか食べる気が起きない。

「でも、これからまた仕事じゃん。もう少し食べないと保たないよ

「？」

「ははつ。まあ、そうは言っても、俺がすることなんてお茶汲みや墨摺り位だからよ」

「ふーん」

何処か納得いかなそうに尚晴は頷くも、それ以上追及することはしなかった。

「にしても、一護まだそんなことやらされてんだ」

「なっ、俺だって好きでこんなことやってんじゃねーよ！」

「へー、そうなんだー」

「棒読みかよ！喧嘩売ってんのか、コラ！」

声がかかったのは、そんな時だった。

「おーす、一護」

現れたのは、十番隊の食堂には相応しくない赤毛の男と黒髪の少女
阿散井恋次と朽木ルキアだ。

「阿散井副隊長、朽木四席!?」

それを見て驚いて声をあげたのは、声をかけられた一護ではなく、尚晴であった。慌てて立ち上がり、一礼する。

食堂にいた死神達も、思いがけない人物の登場にざわめいている。

「あー…と、確かお前、前にも一護といた」

「浅井尚晴と申します!」

「浅井な。悪いな、飯の途中によ」

「と、とんでもありません!」

恐縮する尚晴に、ルキアは恋次を見上げて言う。

「だから、私は昼の後の方がいいと言ったのだ」

「なっ、てめーが業務前のがいいつつたんだろーが!」

「馬鹿者! 私はただ、日番谷隊長のお仕事を邪魔する前に訪ねた方が良いと」

「だから、つまりは業務前につてことだろーが!」

「あー…、あのよ、結局アンタ等何しに来たんスか？」

訪ねてきた一護を無視して口論を始めた恋次とルキアに、一護は苦笑して口を挟んだ。その時、尚晴が「アンタ、上司に何て口の聞き方してんの!？」と顔を真っ青にしたが、恋次達が気にしてないのでそれ以上は強く言えずに口を噤む。

「いや、ちょっと付いて来てもらいてーところがあってな。飯食い終わったんなら、と思つて誘いに来たん」

「付いて来てもらいたいところ？」

「うむ。何、そんな怪しい所ではない。そう気構えずとも良い」

「や、別にそういう訳じゃねーんだけど…」

うーん、と悩む一護に、尚晴はまた言葉遣いがなつてないと真っ青になるが、窺った恋次やルキアの表情は彼の予想したものと正反対で目を丸くする。

一護は、あの瀨霊挺の案内以降、こうして時々敬語でなくなるときがある。理由は分からないが、二人にしてみれば昔に戻ったよう嬉しただけだ。もしかしたら、記憶が戻る予兆とも感じられる。

「どこ行くんスか？」

「そりゃ、着いてからのお楽しみだ」

につ、と恋次は笑った。

「じじって…」

わずかに引きつる顔で一護が見上げたのは、十一番隊の隊舎であった。

「何で、十一番隊？」

そういう一護とは裏腹に、恋次とルキアの表情は至って普通だ。

一護の反応も無理はない。十一番隊と言えば“戦闘専門部隊”の異名を持つ荒くれ集団。はっきり言って、新入隊員にとって十二番隊の次に関わりたくない隊である。

特に、隊長である更木剣八は、好戦的な性格だという。新入隊員に

まで突っかかってくるとは思わないが、あんまり接点は持ちたくないもの。

「案ずるな。更木隊長は今、隊主会でいらっしやらないはずだ」

そんな一護の心境を読み取ってか、ルキアは言った。

「あの人がいない時を狙ったからな。抜かりはねえ」と、恋次も得意げに言う。

「よおう、恋次。久しぶりじゃねえか」

そんな三人の会話が聞こえてきたのか、中から人が出てくる。

（ハゲ？）

一護の彼に対する印象はソレだった。十一番隊第三席斑目一角、彼の名前である。

肩に木刀を担ぎ、目元に朱を差すなど、柄は悪そうだ。

「一角さん、弓親さん、お久しぶりっス」

一角の後ろから肩口で揃えた黒髪の、左目に特徴的な飾りを身に付けた十一番隊第五席綾瀬川弓親も現れたのを見て、恋次は頭を下げた。

「そんな所で話してないで、中に入ったらどうだい？」

弓親に促され、三人は中へと足を踏み入れる。途端、荒くれ者というに相応しいような目つきの男集団にジロジロと何処か驚いたような、挑戦的な目見られる。

それは、明らかでないものの、先頭を歩く一角や弓親も同様。時折、何とも言えぬ表情で自分を見てくる。

それが居心地悪くて、一護は案内されている間、終始身を縮こませていた。

「人払いは済んでる。ここでいいだろ」

一角が連れて来たのは修練場であった。

「あの、何で俺を…？」

何故、自分が此処に連れて来られたのか分からず、一護は痺れを切らして尋ねた。

「それは」

ルキアがそれに答えようとした時、遮るように飛んできた物を一護は反射的にパシッと受け取る。

手に握られていたのは一振りの木刀。訳が分からず、一護は投げた本人である一角を見た。

「てめえ、そりゃあ決まってるだろ」

一角は修練場の奥まで移動すると、一護を振り返る。

「戦闘専門部隊十一番隊！その修練場でやることあーっししかねえ！」

何が言いたいのか、それが何となく分かって一護は手の木刀をぎゅっと握った。

「構えるよ、一護お！久々に戦^ヤり合おうや！」

にっこり、一角は挑戦的に笑った。

一護は、しばらく木刀を見つめる。それから一角へと視線を移すと、彼と向かい合いゆっくりと構える。

一角は満足げに笑みを浮かべ、木刀を一護へと向けた。

修練場はしん、と静まり返る。漂う緊張が場を支配し、重々しい空気が皆にのしかかった。

「ッ」

ガツンと音がして二人の木刀が重なり合う。先に動いたの一角であった。

動いたと一護の脳がそう理解した時には、すでに一角が迫っており、咄嗟に木刀でそれを受け止めるも、その重い一撃に一護は顔をしかめる。

「おりゃ、おりゃ、おりゃ、おりゃ、おりゃあああ！」

だが、一角の攻撃はそれで止まることはない。さらに一撃、二撃と重く打ち込んできた。反撃をしなければ、そう思うものの、その隙すら与えられず、一護はただひたすらに耐えるのみだ。

「ぐっ」

一際重い一撃に、一護の顔が歪む。とその時、一角の刀が下から振り上げられ、気付けば刀は空に放り投げられていた。

「しまっ
」

その刀を追う一護の視界に、さらに刀を振り上げる一角が目に入る。反射的に腕で庇った瞬間、体を走る衝撃と共に一護は吹っ飛んできた。

「っつ
」

壁に背中を叩き付けられ、肺の空気が無理矢理吐き出される。

(おいおい、ただの平隊員に容赦ねーんじゃねえか?)

一護はもはや苦笑しか浮かべられず、ズキズキと痛む背中であちががる。

「一護!
」

「い、一角さん!やり過ぎっスよ!」

ルキアはあまりに大きな音をたてて壁にぶつかった一護に、慌てて立ち上がる。

恋次はフラフラと立ち上がった一護を見て、焦って一角に声を上げた。

「ハッ、俺に手加減なんて言葉はねえ！」

一角は木刀を薙いだ格好からゆらりと態勢を元に戻すと、木刀で肩を叩く。

鼻で笑って、恋次の言葉をあしらうと、一角は上げていた口角を下げ、一護を見た。

「にしても、何だあ？一護てめえ、いつからそんな腑抜けになりやがった」

不満げに、見損なつたような口調で一角は言う。

一護はただ、木刀で体を支えながら前髪の間から一角を見据えた。

「いつからって、質問の意味が分かんねー」

そう言つて、一護は痛みを和らげるように大きく息を吐き出した。

一角も、壁に寄りかかり様子を見る弓親も、ルキアも恋次も黙つて一護を見る。

「てか、アンタこそただの平隊員に容赦なさすぎじゃねースカ？」

突然呼び出され、かと思えばいきなり吹っ飛ばされた挙げ句“腑抜け”呼ばわりだ。

流石に一護も苛立ち、三席な対して思つたことをそのまま棘のある言葉を返してしまふ。

しかし、そんな一護の言葉を意に介した様子もなく、一角はハツと鼻で笑つた。

「意味も何もそのままだ！それに、俺はてめーをただの平隊員だなんて思つたことは一度たりともねえ！」

「一角」

一体どういう意味だと一護は訝しげな表情を見せた。

当の一角といえは、弓親に何やら諫めらるよつに名を呼ばれ、「悪い」と謝っている。とはいえ、あまり彼自身反省しているよつには見えないが。

「なあ、斑目三席。アンタと俺、今日初めて会ったんだよな？」

気付けば、一護はそう訊いていた。

まるで、昔会ったかのような口振り。

だからだろうか。よく考えて訊いたわけではなく、彼の本能とも言つべきものが自然と口から出たような感覚だった。

一角はにっと笑う。

「さてなあ、それについては俺から何とも言えねえ」

「一角！」

「まあ、いーじゃねえか。これくらい」

先ほどよりも強めに諫める弓親に、一角は軽く返す。

一方、一護は一角の答えに納得出来ずに、相手が自分よりも上だということも忘れていた。

「何でだよ！それくらい教えてくれたっつていーじゃねえか！」

「うるっせえ！だいたいそれが人にモノを頼む態度か、ああ！？」

「あー、はいはい。じゃあ、昔斑目三席と会ったことがあるか教えてくれませんか、斑目三席い？」

「やたら、腹立つ言い方してんじゃねーぞ、コラ！」

「んだよ、アンタの言うとおり態度改めたじゃねーか、何が不満なんだよ」

いつの間にか、お互いに額を突き合わせ口喧嘩に発展した二人は、もはや戦いのことや、原因である問いのことなど頭にないのだろう。

それを離れた所で見ると恋次・ルキア・弓親の三人は、呆れ果てただ見ていた。

「醜いよ、一角」なんて額に指を当て嘆く弓親を横目に、ルキアは言う。

「恋次、我々は何のためにここに来たのだったか？」

「あー、確か一角さんに試合をしてもらって、一護の記憶が戻るか試しに来たんじゃなかったか？」

そう、ここに一護を連れて来た目的は、交流のあった一角と試合をすれば、一護の記憶が戻るのではないかと二人が考えたためであった。

記憶を封じている術が何か分からない以上、二人が出来るのは記憶喪失への対処法だけだ。

故に、前日も一護の行ったことのある場所や思い出深い場所へ連れて行ったのだが、如何せん効果が見られない。

ならばと思いついたのが、ルキア奪還の際に戦った人物との試合だった。

「だと言うのに、一体これはどういうことなのだ……」

何とも低レベルな口喧嘩に、斑目が自分より上と知りつつ、ルキアはそう言ってしまう。

でも。。。

「でもよ、何てーか…懐かしいよな……」

どこか遠くを見るような目で一護を見る恋次の呟きに、ルキアはもちろん、げんなりと二人を見守っていた弓親でさえ、彼を横目で見

た。

「…そうだな」

ルキアは静かに言う。

「ああいう奴を見てみると、記憶がないなど信じられぬ」

「ああ」

痛ましい目だった。一番一護と仲のよかったルキアが、一番彼に忘れられていることが辛いに違いない。

こうして、昔と変わらぬ姿を見せられると特に。

「だが、反対に言えば」

弓親は、しばしの沈黙の後に言う。

「記憶がなくても、何十という年月が経っていようと、僕達の知る彼と何も変わらないということだ」

そうだろうか？と笑ってみせた弓親に、思いもかけない台詞に目を丸くした二人は、しかし次には「はい」と頷いたのだった。

「上等だ、コラア！てめえ、一護表出るや！」

「いいぜ。乗ってやるよ、その勝負！」

いきなり耳に届いた怒鳴り声に、一人は目を丸くして、一人はげんなりと、一人は呆れたように、それぞれの反応を見せた。

「おい、一護」

ルキアがそろそろ止めようと声を上げた時、十一番隊全体の空気が変わった。

「よオ、てめエら。面白そうなことしてんじゃねエか」

お互いに挑発し合っていた二人の頭上に影が下りる。降ってきた声は低く、好戦的だ。

嫌な予感がした。

恐る恐る二人は顔を上げる。そしてやはり、当たってほしくない予感が的中する顔がそこにはあった。

更木剣八。それが彼の名であった。

尖った独特の髪型に隻眼、屈強な身体に、ピリピリと刺さるような雰囲気は、まさに十一番隊の頂点に立つ者の雰囲気。

見上げたまま、一護はごくりと唾を飲んだ。

「た、隊長……」

一角も思いもかけない人物の登場に顔をひきつらせる。

そんな如何にも荒くれ者然とした彼の肩から、不似合いなピンク色が現れた。

「やつほー！つるりん！」

場に似合わぬ明るい声。肩に乗るまだ幼い少女の名は、草鹿やちる。こつ見えても、十一番隊副隊長である。

立派にその務めを果たしているかといえは言葉に詰まるが、その腕は肩書きに違うことはない。

と、そんなことなど今の一護には関係なかった。

（つるりん……？）

「え、つるりんって、え、お前……」

一護はやちるから一角へときこちなく首を回すと、指を差す。きらいんと彼の頭が光ったような気がした、その瞬間。

「ブフッ」

吹いた。

咄嗟に一護が口を塞ぐも、誤魔化しきれぬわけもない。

「てんめえええ！今笑つたる！？何笑つてんだ、ああん！？」

一角は流石とも言える速さで一護に詰め寄ると、胸倉を掴みあげた。

「イエ、ソナ。メツソウモナイ」

「感情が籠もってねーんだよ！表出る、コラアアア！」

ザシユッ！

「……………」

一同の目が一振りの刀へと向けられる。ちょうど一角と一護の間、

ぐっさりと深く床に刺さっている刀はボロボロと刃こぼれしており、帯刀許可されていないにも関わらず、それが剣八の物だとよく分かる。

「…………え？」

一護は思わず声を漏らした。

反射的に避けられたから良かったものの、もしアレがと考えるとさっさと血の気がひいていく。

そんな一護を気にもせずに、当の剣八は言った。

「よオ、一護。ようやく見つけたぜ。刀を構えろ」

にや、と笑う剣八の台詞が理解できず、相手が恐ろしい十一番隊長長にも関わらず一護の口からは「は？」なんていう声が出ていた。

「お、お待ちください、更木隊長！」

状況に頭がついていかず、呆然と成り行きを見ていたルキアは、ハッと我に返ると二人の会話に割って入った。

「あ、あ？」

慌てて剣八の側まで寄っていったルキアは、ガラの悪い声に僅かに身を縮こませるも、すぐに目に力を込めた。

「戦おうにも、一護はこの通り刀を持っておりませぬ！今回ばかりは、身をお引き下さらないでしょうか！」

「お、俺からもよろしくお願いします！」

ルキアに続き、恋次も剣八へ願ひ出る。

「た、隊長。今回ばかりは無理じゃないですかねえ？」

必死に訴える二人に、一角も剣八の顔色を窺いながらそう述べた。ちなみに、弓親は一人離れた所で傍観している。

「どつするの、剣ちゃん？」

そんな三人の様子を、剣八の肩から見下ろしていたやちるが、どうしたらいいか分からずに尋ねた。

一方で、一護自身も状況が分からずにいた。

何故、隊長である彼が無席の自分なんかと戦いたがっているのか？
だいたい疑問を挙げれば、入隊してからキリがないのだが、とりあ
えず今は自分の身が危険なことは分かる。

自分も願い出ようと口を開いた時、剣八はハツと鼻で笑った。

「なら、要は一護が斬魄刀を持ってりゃいいんだな？」

「え？」

その言葉には、ルキアや恋次、一角はもちろん、一護もポカンと口
を開けた。

そもそも“瀟霊挺内での死神同士による戦闘は許可されていない”
のだが、彼にそんなルールは関係ない。

それが分かっていたから、ルキアはあえて戦闘を避けるための理由
を“一護が刀を持っていないから”にしたのだが、剣八にはその理
由すら痛くも痒くもないようだった。

刀がないなら、あればいいのだ。

「おい、やちる」

「まかせてー！」

剣八の呼びかけに、やちるは肩から飛び降りると音もなく姿を消した。

あっという間に進んでいく現状。ルキアが「お待ちください！」と制止をかける暇もない。

「おいおい、どういうことだよ、ルキア！今はまだ隊主会のはずだろ！」

恋次はルキアの耳に顔を寄せると問い詰めた。

「そのはずなのだ！もしかしたら、更木隊長は途中で抜けて来たのやもしれぬ」

「はあ！？隊主会だぞ？あり得ねーだろ！」

「いや、私もそうは思うのだが」

恋次はちら、と少し離れた場所で愉しげな笑みを浮かべたまま一護を見る更木を窺いながら、まさかとはかりに小さく声を上げた。

それにルキアも困惑したまま同意したところに、一角と弓親も混じる。その言葉はルキアに賛同するものだった。

「いや、隊長ならあり得なくもねえぜ」

「何せ、隊長だからね」

やたらと確信めいた二人に、ルキアでさえそんな馬鹿なと反論してしまう。

「ですが、隊主会といえば全隊長が集まる重要会議です。そんなことが」

「あり得るんだよ、彼ならね」

「あの人はよ、瀟霊挺の秩序や掟なんかどうだっていいんだよ。死神の役割も、下手したらこの十一番隊ですら、だ」

真面目な顔して言う一角に、ルキアも恋次も納得いかないままでありながら、口を挟むようなことは出来ない。

「ただ強い者と闘いたいつつー欲求だ、あの人が刀を手にする理由は。そして、隊長が闘って唯一負けた相手が一護。ソイツと勝負したいってえ本能の前に、隊主会もクソもねえのさ」

どこか誇らしげに語る一角に、ルキアと恋次は息を呑んだ。純粹に闘いを求める。

それは、剣八の闘い方を見ても分かることだった。彼は死を恐れない。どれだけ、己の肉体が傷つこうが、自らの欲求が満たされればいい。

純粋な狂気。そのなんと恐ろしいことだろうか。

そこまで考えて、ルキアはハッと我に返った。

「い、今はそれどころではございません！早いところ一護を避難させなければっ」

「そ、そうだったぜ！早く一護を逃がさねーと」

だが、逃がすまいとギラギラした目を一護に向ける今の更木を、この四人で欺くのは容易ではない。

つ、と冷や汗がルキアと恋次の背中を伝った。

もともと、更木が隊主会でいないことを前提とした計画だ。こんな非常時の攻略法など、考えてあるわけがない。

「おい、弓親っ。てめえ何か考えはねーのかよ」

「知らないよ。僕は一角が彼の鍛錬に付き合っつて話しか聞いてないからね。更木隊長がどうなんて計画とは無関係さ」

「てめ、乗りかかった船だろーが！少しくらい頭捻りやがれ！」

「嫌だね。僕はこういう醜い悪足掻きは嫌いなんだ。だいたい、僕に頼む前に少しくらい自分で考えたらどうなのさ」

「俺はこういう頭使うことは嫌えなんだよおお！」

「ちょっと二人とも！今は喧嘩してる場合じゃねーツスよ！」

何やら口喧嘩に発達している二人を、恋次は慌てて宥めると話題を修正する。

「とりあえず、少しでも更木隊長の気を逸らして、その際に一護を逃がす他ないと思うんすよ」

「そうなるよ、更木隊長の足止めもしなければなるまい」

「それなら俺がやる。隊長とは闘ってみたかったんだ」

「となると、後はどうやって気を引くかだな」

早くしなければ、草鹿副隊長が戻ってきちまう、と恋次は言う。

「それなら、私に任せる」

自信満々にルキアはそう言った。

四人がそんな作戦をしているなど露知らず、一護は非常に居心地の悪い思いをしていた。

（おいおい、この状況、俺にどーしろってんだ！？）

まるで突き刺さるような視線を一身に浴びながら、ただただ黙って突っ立っていることしか出来ない。

（アイツらは…）

何とかこの気まずい雰囲気から逃れたいと、唯一助けを望めそうな面々を探して視線を巡らせる。

そうして見つけたのは、自分達に背を向け、ひそひそと何か話し込む四人の姿。

自分を放って何やってんだと、眉間のシワをさらに深めて見ていれ

ば、おかつぱに何か変な飾りを目尻につけた男と目があつた。

(確か、綾瀬川弓親つつつたよな…。助かつたぜ！)

目が合ったことに小さく安堵し、一護は視線で“助けてくれ”とテレパシーを送る。

しかし、弓親は助けるどころか、何故だか“うわ”と変なものを見たかのように顔をしかめてふい、と顔を逸らした。

(あんのやろおおお！)

この時、弓親は一護の必死な形相に醜さを感じてしまっていたのだが、一護は知る由もない。とは言え、知ったところで「何だよ、それ！」とブーイングすることは必至であろう。

こんな状況を作り出した本人は誰かと聞かれれば、それは剣八以外の何者でもないのだが、きっかけを作ったのは紛れもないルキアと恋次だ。

それなのに、この居たたまれない状況で一人放置されれば文句の一つ二つ言いたくもなる。

さらにいえば、一護はこの更木剣八という名を霊術院で聞いた時から言い知れない苦手意識を感じていたのである。

ふと、剣八と目が合った。

「……………ハッ」

鼻で挑発的に笑われ、一護はもはや引きつった笑みを零すしかない。

その時だった。

「あーっ！」

突如、修練場に響いた大きな声。一体何事か、と思わずビクリと肩を震わした一護が反射的にそっちを向けば、何処かを指差すルキアの姿。

それを視界に入れた瞬間、ぐつと腹に圧力がかかった。

剣八は、「あゝあ？」とルキアの指差す方を見る。だが、しかしそこには何も無い。一体何だ、と視線を元に戻すと彼の視界に入ったのは小さくなる一護、恋次、ルキアの後ろ姿だった。

「何イ!？」

咄嗟に、剣八は脚に力を込める。だが、その場を去る前に剣八は瞬時に刀を右側に構えた。

「っらぁ！」

ガキインツ　、と金属音が響く。

「久しぶりに相手して下さいよ、隊長お！」

「　チツ」

十一番隊付近

「まさか、本当に上手いくとはな」

「だから言ったのである」

「いや、そうだけだよ……」

(あんな古典的なモノに引っかかるなんて思わねーだろ、普通)

ひとしきり離れた所まで来たルキアと恋次は、後ろを振り返り剣八がついて来ていないことを確認すると一息ついた。

「…おい」

「どつやら、一角さんは上手く足止めしてくれてるみてーだな」

「おい」

「ああ。ここまでくればとりあえずは大丈夫だろう。あの方は霊圧探査が苦手でいらっしやる」

「おいって言うてんだろーが!」

下から聞こえた声に、二人は揃って「ん?」と顔を下に向けた。

「てめえら…、自分達で俺を浚つといて何忘れて話し込んでんだ!」

声の主は、皆もお分かりの通り一護である。一護は未だ恋次に抱えられたまま、声を上げて文句を言う。

「ああ、すっかり忘れてたぜ」

恋次がパツと手を離せば、突然のことに受け身を取れぬまま一護は屋根に落ちる。

「っ、てめえ！何しやがる！」

「んだよ。こっちはてめえを逃がしてやったんじゃねーか！」

「それとこれとは関係ねーだろーが」

ジンジンと痛む鼻を押さえて文句を言う一護に、しかし恋次は悪気なく言い返した。

そんな二人のやり取りを、ルキアは呆れたように見ていたのだが、それが徐々にヒートアップしていくのに、とうとう口を開く。

「おい、貴様ら！いい加減にせぬか！まだここは十一番隊に近いのだ」

「あつれえ？いつちー？」

ルキアの台詞を遮って聞こえた声に、三人は勢いよく振り返った。そこには身の丈に合わぬ一護の大刀を抱えたやちるの姿がある。

「ねえねえ、剣ちゃんは？勝負はどーしたの？」

「あ、いや、草鹿副隊長。これは…」

「い、いやあ。じ、実は一護の体調が優れないみたいでして」

咄嗟に何か言い訳しようとして口ごもったルキアの後を引き継ぎ、恋次は反射的にそう言った。

え、と声を漏らし、一護はどうしたらいいか分からず三人の顔を見る。その時。

「ふんっ」

「ぐほっ」

ルキアは引きつった笑いそのままに、背後にいた一護の腹に肘鉄を食らわした。

何ともちょうどいい位置に一護の腹があったものだ。

ぐったりと前のめりに倒れる一護を恋次が背中を受け止め、そのまま背負う。

「あぁっ！大丈夫か、一護！ふむふむ、何！？そんなに、悪いのか！任せる！すぐに四番隊に連れて行ってやる！」

「そ、そういうことツスから…。あの、俺達はこれで」

「ふん」

やちるは焦る二人を、口元に指を当てて無垢な瞳で見ている。しかし、ふとその背後に見慣れた人物を見つけると、パツと表情を明るくして、手を振る。

「剣ちゃん」

その名に、二人はびくりと体を震わせた。やちるの呼ぶ名に、内心で焦りまくる。

向き合いたくない現実、それが背後にある。

しかし、二人はゆっくりと振り返った。現実とはいずれ向き合わなくてはならないのだ。

そして。

「よオ、よくも逃げやがったな」

思った通り、そこには更木剣八がいた。

瞬間、二人は走り出した。もちろん、その際に一護の斬魄刀を拝借していくことも忘れない。

「一角さんはやられちゃったのか!？」

「更木隊長がここにいらっしやるといふことは、そういうことなのだろう!」

あまりの勢いに、一護の身が後ろに傾いているのだが、今の二人にとってそれは些細なことだ。

何せ、二人を追うのは鬼だ。少しでも油断すれば捕まってボコボコにされてしまう。

すれ違う死神たちの好奇心な視線を浴びながら、五人（約一名気絶中）の壮絶な鬼ごっこは始まったのである。

縦横無尽に走り回るのはルキア・恋次・一護・剣八・やちるの五人である。

もはや瞬歩あり、剣八に至っては斬魄刀の使用ありの何でもありな鬼ごっこになってしまっている。

綺麗に整備された白と橙を基調にした瀟霊挺は、剣八によって所々破壊されるは、すでに業務時間が始まって仕事をしていた死神の書類を撒き散らすはと、瀟霊挺への影響も少なくはない。

だがしかし、ルキアと恋次にとってこれは死活問題なのだ。

一番哀れなのは、もしかしたら一護ではなく二人なのかもしれない。二人の心にちらつく影に関しても。

(兄様に何と申し開きをしたら良いのだ…っ)

(怒られる、隊長に絶対え怒られる…っ)

二人の目が潤んでいるのも、もしかしたら気のせいではないのかもしれない。

「待ちやがれエ!」

「いつけー! 剣ちゃーん!」

「もう、本当勘弁して下さいいいい!」

二人はブレーキをかけるのもそこそこに、角を曲がる。待ちやがれと言いながらも、どこか愉しそうに刀を振り回す剣八も遅れずついていく。

ドゴオ、と重い音が背後から響いてきた。見なくても、地面が抉られているだろうことが分かる。

「このままじゃ、キリがねーぜっ」

「ああ、どこか隠れるところを」

そんな会話をした時、不意に二人の頭上が陰った。しまった、と振り返って見上げた先に、刃こぼれした剣先が視界に入る。

逆行に陰った顔がにやりと笑む、咄嗟に背中を庇う、反射的に身構えた、その瞬間。

見開かれた恋次とルキアの視界に映ったのは、小さな背中だった。

第九章 辛夷 ー友愛ー

t o b e c o n t i n u e . . .

更木剣八という男（後書き）

と、いうわけで今回の話は続々キャラ登場でした。

いやあ、十一番隊の皆さんを出せて良かったです！やっぱ、彼等は出さなきゃダメだろ！と、思ってたんで。

喜助と夜一さんは出すつもりなかったんだけどなあ……。いつの間にか出てた！

にしても、弓親！動かしくいよ、君！

今回はほのぼのめでしたが、如何だったでしょうか？楽しんで読んでいただけたら嬉しいです。

番外編『死後の約束』もアップしたので、良ければまたお読み下さい。

事態は収束する(前書き)

第十章

千日紅

―不屈―

事態は収束する

見開かれた恋次とルキアの視界に映ったのは、小さな背中だった。

「ひ、日番谷隊長…」

隊首羽織りを翻し、銀髪を揺らすのは日番谷冬獅郎、彼である。

剣八の斬魄刀は彼の目先で止まっており、それに合わせるようにその場の空気は一時、止まった。

「隊主会に姿を見せねえと思ったら…。こんなところで何をやっている、更木」

そんな空気を動かしたのは日番谷だった。彼独特の静かな口調は、何処か緊張した雰囲気を持っている。

「はっ。見りヤ分かんたる。せっかく、一護がいるんだ。殺り合わねエわけがねエ」

「前に隊主会で話したことを忘れたのか」

「んなの、関係ねエ。戦いたいから戦うだけだ」

その横暴な発言に、冬獅郎は目を細め、眉を寄せた。緊迫感が漂い始める。知らず、ルキアと恋次は息を詰める。

「血が騒ぐんだよオ、俺に流れるこの血が！コイツと戦いたいわよオ！」

溢れ出る殺気と霊圧がその場に威圧感をもたらす。ピリピリと肌に刺さってきて、一瞬でも早く刀を交わしたいと訴えてくる。

「だいたい、帯刀許可は出ていねえはずだ。死神同士の戦闘も認められちゃいねえ。刀を引け、更木。黒崎に手を出すな」

「はッ、聞けねエ相談だな。それとも、一護の代わりにてめエが相手をしてくれんのか？」

「てめえ……」

一気に緊迫感が膨れ上がった。冬獅郎は刀を持っていないというのに、まるでこれから戦闘が始まるのではないかと思わせる。

剣八の持つ刀が、カチャリと音をたてた　と、その時。

「そこまでだ」

気付けば、冬獅郎や剣八達を取り囲むように、塀の上に黒服の集団が立っていた。

隠密機動、そして彼らを率いるのが。

「刀をひけ、更木」

碎蜂である。

動揺したのは更木でなく、ルキアと恋次であった。隠密機動までか出てきて、自分達は気付かぬ間に随分と大事になっていたらしい。

一方で、一番の当事者である更木は平然と屋根の上に立つ隠密機動を見回し、刀を納める。

「ちッ、野暮な連中だぜ。こんなんじゃ戦^ヤる気も起きねエよ」

そう言って、更木は冬獅郎達に背を向け去っていく。それでもきつと、まだ一護と戦いことは諦めていないのだから。最後は彼が好戦的な目を一護に向けたことでも、その場にいる全員が分かっていた。

「じゃあねーヒッシー、イッチー！」

肩に乗ったやちるが手を振る。微笑ましくはあるが、場合が場合なだけに恋次もルキアも複雑そうな顔でそれを見送るしかなかった。

その姿が曲がり角に消えた時、解き放たれた緊張感に二人ははあと大きく息を吐く。

「ったく、何やってんだ、てめえら」

冬獅郎は振り返って、安堵の息をつく二人に呆れの混じった厳しい声をかけた。

「も、申し訳ありません、日番谷隊長！」

「面目ねえっス」

素直に謝ってくる二人に、冬獅郎は少し眉間の皺を弛める。

「ふん、本当に貴様らは面倒を起こすのが得意だな」

嫌みつたらしく言ったのは碎蜂だった。上から降ってきた声に、二人は身を硬くして頭を下げる。

「碎蜂隊長も、申し訳ありません」

冬獅郎はそんな二人を見てから碎蜂を見上げた。

「コイツ等には俺から言っておく」

暗にもう帰るようになれば、碎蜂もこれ以上関わる気はなかったのか「せいぜい、二度と面倒を起こさぬよう大人しくしておけ」とだけ言っただけを消す。

追うように隠密機動の姿も消えた。

「それにしても、黒崎の野郎はどうしたんだ？」

さっきから恋次の背中であたりしている一護を見て、冬獅郎は眉をひそめた。

すると、恋次とルキアは明らかに動揺する。

「い、いやっ。こ、これは、あの。斑目三席との稽古ですね」

「そ、そーなんすよ！コイツ張り切ってたんで、疲れちゃったみた

いで！」

「そ、そうか…」

あまりに必死に言ってくる二人に、冬獅郎は深く訊くことも出来ずに頷いた。

しかし、ふと恋次の肩に頭を預ける一護を見て冬獅郎は眉間の皺を深める。

(霊力の流れがおかしい?)

「日番谷隊長？」

どこか緊張感漂う空気を纏って未だに意識のない一護に近寄った冬獅郎に、恋次は戸惑ったように声をかける。

しかし、それに冬獅郎は答えることなく一護に視線を集中させていた。

(これは…)

「阿散井！朽木！今すぐ四番隊に行くぞ！」

「四番隊？」

「説明は後だ。いいから、ついてこい」

そう言う冬獅郎の声が焦っているのが分かって、二人は説明を求め
るのを後回しにして四番隊へと向かった。

四番隊、とある一室

白いカーテン、壁、天井。清潔感漂うその場所のベッドに一護は横
たわっていた。

身動き一つせず、鼓動も呼吸も隠したかのように静かで、本当に生

きているのか心配になる。

そんな一護を囲むように、彼らはいた。

あれから一護を背負って四番隊に駆け込んだ三人は、頼んで卯ノ花を呼び、診察してもらおうよう頼んだ。卯ノ花としても、一護の身体の衰弱は気になっていたため、それほど待たせることなく診察をしてくれたのである。

今は、その結果を待っている最中だ。

ルキアと恋次は、一護を見たときの卯ノ花の険しい表情を忘れられずに落ち着かない気持ちだった。

はやる気持ちを抑えつつ待っていると、ガチャとドアノブが回る音がして、卯ノ花と勇音が現れた。

何を言われるのか、そんな緊張が一気に高まってルキアと恋次は固唾を飲む。

「どうだ、卯ノ花」

口火を切ったのは冬獅郎だった。

「日番谷隊長のお察しの通りかと」

「やはりか」

固い表情の卯ノ花に、冬獅郎も苦虫を噛み潰したように眉をしかめた。

「あ、あの。一体どういふことなのでしょう？」

二人の間で納得していく話にルキアも恋次もついていけず、ルキアはじれたように問うた。

「黒崎さんの身体が衰弱し始めているという話はお聞きになられていますね」

ルキアの問いに答えたのは、やはり卯ノ花であった。

「その衰弱がだんだんと酷くなっているようです」

簡潔に言ってしまうえばそういうことだ。

「この方の霊力は強大です。それ故に、無理矢理封じられた反動も比例して大きい。日番谷隊長はそれによって乱れた霊力を感じ取ってここに連れてこられたのでしょう」

「そんな…っ」

「な…っ」

卯ノ花から語られる現実。ルキアと恋次は聞いていたとはいえ、それを目の当たりにしてしまったショックを隠しきれなかった。

「今はただ体が無意識に回復を求め、眠っているだけですが、このままいけば…」

卯ノ花は最後まで言うことはなかったが、三人は否応なくその先を察してしまった。

“死”

一体、彼と別れてからの数十年の間に何があったと言っのたろう。

それを知っているのは、恐らく今目の前で眠る彼だけ。だと言うのに、その彼は記憶を失い、そしてあるうことかその自覚すらないのだ。

八方塞がりという状態は、今まさにこのことだろう。

京楽と浮竹が記憶を封じられそんな人物がいなか、過去の記録などを調べている。碎蜂も現世で一護と接触した怪しげな人物がいなかったか隠密機動を率いて探している。卯ノ花と涅も封印を解くべく動いている。

しかし、手掛かりが何も無いこの状況では限界があるのは当然で、何の進展もないのが正直なところなのだ。

敵が分かれば、すぐにでもルキアと恋次はそいつを倒しに行くだろう。

だが、何も分かっていない。手掛かりの糸の端すら見えていない。

ルキアは舌打ちしそうになるのを堪えて奥歯を噛み締めた。

今、欲しいのは一護が封印されたらう現世の情報だ。こういう時、一番頼りになるのは浦原なのだが、聞けば奴の一護に関する記憶も消されていたという。

随分と、用意周到な敵だ。

「…っ」

「っ一護!」

沈黙がおりた病室では、小さな呻き声は四人の耳にしっかりと届いた。

「ん、俺…。っっは?」

状況を理解しようとしているのか、一護は視線を天井からルキアと恋次、それから日番谷と卯ノ花へと向ける。

「目が覚めたか、黒崎」

「隊長…？」

声をかけられ一護は我に返ったようにがばりと身を起こした。その勢いに、ルキアと恋次は少し身を引いたが、混乱する一護は気付いていないようだ。

「え、ええ！？俺、なんで寝てっ。てか、更木隊長は！？」

「落ち着け、一護。今から説明する」

ルキアは、更木隊長に戦いを申し込まれた際に突然一護が気を失ったため、こうして更木を収めてくれた冬獅郎と共に四番隊に連れてきたということを簡単に説明した。

一護は「そんなことが」と頷く。

どうも大変だったようで、疲労感を漂わすルキアと恋次に申し訳なく感じてしまう。

しかし、一護は二人の話に納得するも先ほどから感じる違和感に言葉を詰まらした。

「ただ、何つーか……」

釈然としない様子の一護に、ルキアと恋次は不思議そうな目を何だ、どうしたと向ける。

そつと一護は腹に手を当てた。

「どうも、気を失う前に腹を殴られたようなしたんだよな」

「なっ」

ルキアと恋次はげつと顔をひきつらせる。

「殴られただと？」

「ああ、じゃない、はい。まあ、一瞬のことだったんで、よく分かんないんすけ」

「なあに言っでやがんだ一護お！」

いきなり肩を掴んできた恋次に、一護は「うおおう!?!」と素っ頓狂な声を上げる。

「た、たわけ！我がいたと言つのに貴様に手出しさせるわけがなかるう！」

「そうだぜ、一護！気のせいだ！絶対え気のせいだ！」

「……そ、そうか」

いくら極限な状況だったとは言え、体が弱いということをしつかり忘れて一護の腹に拳を入れたことを冬獅郎、否、卯ノ花に知られるわけにはいかない。

やたら身を乗り出して訴えてくるルキアと恋次に、一護はほぼ反射的に頷いていた。

「てか、てめえ等何でそんな必死なんだ」

冬獅郎が零した言葉は、誰の耳にも届くことはない。

「皆さん」

柔らかな声に、ピタリと声が止む。

「ここは四番隊ですよ。お静かに」

お願いしますね？

そう言う卯ノ花の顔は、確かにお願いしていなかったと皆は言う。

「そつだぞ、恋次！」

「何で、てめえは他人事何だよ！」

事態は収束する（後書き）

ストックがなくなってしまった…！

これから、更新スピードが遅くなってしまおうと思いますが、アップしない間もちよくちよく話は書いていくつもりなので、気長にお待ち下さっていたら幸いです。

瞬く記憶の欠片は

「じゃあ、日番谷隊長。俺たちはこれで失礼します」

「またな、一護」

ルキアと恋次と別れ、一護と日番谷は十番隊へと帰路についた。

山の端が橙から藤色へと染まりつつある空を眺めながら、一護と冬獅郎はゆっくりと十番隊隊舎へと歩いていく。

二人の間に会話は無い。

不思議と辺りに人気はなかった。業務時間も間際に迫り、最後の仕上げへと皆取りかかっているからだろうか。

十番隊の区域であるからこそとも言える。

山へ帰るのだから鴉が頭上でかあと鳴く。つられて空を見上げれば、すでに真上は紺青に染まり、一番星が微かにその身を光らせていた。

「黒崎」

呼びかけられた自身の名に、一護は顔を上から前へと向けた。知ら

ないうちに足を止めてしまっていたらしい。数歩先を行った冬獅郎が、突然立ち止まった一護を怪訝そうに振り返っていた。

「隊長」

いきなり、口を開いてしまったのは、あまりに綺麗な空に感傷的になってしまったからだろうか。

「俺、時々自分が分かんねーんだ」

不器用な笑顔だと、冬獅郎は思った。泣きそうなのか、不安なのか、笑おうとして失敗した不器用な笑顔。

「朽木四席も阿散井副隊長も、俺が何かを忘れているような言い方をする。でも、いくら自分の過去を遡ってみても、忘れてることなんか何もなくて」

一護はそつと手を上に伸ばした。指と指の隙間から一番星が覗く。

冬獅郎には、それがまるで見えもしない記憶の欠片を掴もうとしているように見えた。

「でも、何でだろうな。どうして、こんなに寂しいんだよ。まるで、

何か大切なことを忘れちゃったみてーに、心に穴が空いてんだ」

ぐっと、一護は手の平を握る。星はするりと指を抜け、変わらず空で瞬いていた。

「なのに、思い出せねえっ。すぐそこまで出かかってんのに、気付けば何かに塗りつぶされるように綺麗さっぱり頭ん中から消えてんだ！」

なあ、と一護はゆっくりと視線をゆっくりと下ろしていった。太陽はすっかり山へと顔を隠し、辺りは真っ暗だ。

漆黒に染まる空には、降ってきそうな程星が瞬いている。

「なあ、隊長。俺は一体、何なんだろうな」

沈黙が辺りを包んだ。その問いは、今まで一護が悩み抱えていた切実なもの。

一護と冬獅郎はしばし向き合う。

「黒崎一護」

そして、どのくらい経った頃か、冬獅郎は普段と変わらぬ口調でそれだけ言った。

「え」

名を呼ばれた意味が分からなくて、一護は何も言えずに無意味な音を口から零す。

「自分が何なのか分からないと言ったな。黒崎一護だろう、てめえは」

一護が来てから今までのことを冬獅郎は思い出す。始めは、記憶がないという一護に戸惑った。呼び名や敬語。自分の記憶にある一護とそれらは違っていたから。

寂しさと同時に、自分達のことを忘れたという彼に理不尽な怒りや失望を覚えなかったかと言われたら嘘になる。

しかし、こうして過ごしてきたのは、やはり彼は彼だったということ。自分に対する態度も見せる笑顔も考え方も、何も変わってなどいない。

再会した黒崎一護は、自分の知る黒崎一護なのだ。今なら冬獅郎は確信を持って言うことが出来た。

「お前は確かに記憶を失っている」

一護は息を呑む。「ここまで、きつぱりと断言されたのは初めてだった。」

「だが、そのことを自覚しているんだらう？そして、その記憶が大切なものだということも分かっている」

一護は頷いた。

「それで十分だ」

記憶が第三者によって故意に封印されていると判明した時点で、一護には何の落ち度もない。

むしろ、それでも尚、大切なことを忘れていると自覚出来る一護に感心せざるを得なかった。

「お前は何も変わってなんかねーよ。お前はお前だ、それ以外の何でもねえ」

そう言って、自信に満ちた笑みを冬獅郎が浮かべれば、一護は僅かに目を見開いたあと、やはり不器用な笑みを浮かべる。

しかし、今度はどこか嬉しげで安堵の混じった笑み。

一護はちゃんと今の自分を認めてもらえたような心地だった。

「ありがとうな、隊長」

「礼なんかいらねーよ」

ぶっきらぼうに言う冬獅郎に、一護はおかしげに笑う。前に、流魂街の祖母が“素直じゃない”と言っていたが、本当にその通りだ。

「俺、全部思い出さず。そう決めた」

冬獅郎は相変わらずの表情で、逸らした顔はそのままに視線だけを一護へと向けた。

「大切なことを忘れてるって、今ならちゃんとそう思えるんだ。だつたら俺は、その大事なもんを取り戻す！」

悩むだけってのは、性にあわねーみたいだからな、そう言って挑戦的に笑った一護に、冬獅郎は目を細めた。

「やっぱり、てめえは何も変わっちゃいないよ」

一護はまた笑みを浮かべたのだった。

傳い可能性

十番隊執務室

すでに就業時間を過ぎ、警備や当直の者以外に人氣が少なくなった十番隊の執務室に冬獅郎は一人でいた。

灯りもつけず、背にある窓から差し込む月明かりのみが室内をほのかに明るく照らしている。

机の上に置かれているのは、空座町の駐在任務に着く隊士からの報告。

そこに書かれているのは、最近の任務報告と虚の異常について。

先日、冬獅郎と乱菊が浦原を訪ねた際に起こった虚の大量発生に伴い、虚に見られた違和感について冬獅郎に報告すべきと彼女も思ったようだった。

さすがに気のせいでは済まないという判断だろう。

浦原と話した通り、冬獅郎は山本に虚の大量発生と共に浦原が調べた虚に見られる異常について報告した。

そこで再び、今日も隊主会が開かれたのである。

話し合ったのは、虚の異常と黒崎一護についての二点。

「確かに、虚の異常と一護くんの封印が発覚した時期を偶然と片付けるには、少々タイミングが合いすぎるよねえ」

京楽は冬獅郎の話聞いて、率直に意見を述べた。

「日番谷隊長は、一護くんの虚化の力が関係している？」

浮竹の問いに冬獅郎は頷く。

「ああ。でなければ、黒崎の記憶と霊力を封じる理由が分からない。確かに黒崎は強いが、奴を封じたところで先には俺ら護挺十三隊がいる。つまり敵は俺らにはない、黒崎だけが持つ力を恐れたとみた方が自然だろう」

確かに、と浮竹は納得したようだった。

「となると、敵は虚を利用した何らかの目的があり、それを唯一防げるのは黒崎さんだということになりますね」

卯ノ花の台詞に、誰もが押し黙った。反論出来ない。そう考えた方が筋が通る。

しかし。

「また、彼に頼る形になってしまふのか…」

悔しげに呟かれた浮竹の言葉。それは、この場の誰もが思ったことだった。

「だけどねえ、彼には今力もなければ記憶もない。力を借りようにも無理な話なんじゃないかなあ」

「何を言っている！そもそも、我等護挺十三隊が、たった一人の男に頼らねば敵を倒せないなどと考えること自体が恥だ！」

声を張り上げて言った碎蜂に、再び場に沈黙が降りた。確かに、彼が死神代行となって以来、一護には助けられてばかりだった。

掟に縛られない彼の奔放さと強い意志、次々と常識を覆してくれる彼には、誰もがどこか期待してしまう強さがあるのだ。

「ふむ。碎蜂隊長の言う通り、黒崎一護に記憶・霊力がない今、例

え敵を倒す方法があ奴にあらうとなかろうと、黒崎一護はあくまでただの一隊員とする」

山本は結局、そう結論づけた。

反論はない。確かに、彼の力は今席官にも満たない。そんな彼をわざわざ危険な目に合わせる道理はないし、何より護挺十三隊の矜持もある。

それこそ、今何も知らない彼に頼りきりになるのは皆許すことは出来なかつた。

「しかし、敵を倒す可能性が奴にあり、且つ倒す可能性も黒崎一護にあるというのもまた事実。記憶・霊力を取り戻すのもまた必要と僕は判断する」

これにも反論はない。

敵が迫っている今、誇りにこだわり過ぎて後手後手に回っては仕方がない。倒す方法があるならば、それも手の一つだ。

「卯ノ花隊長、涅隊長。黒崎一護の封印について何か分かったことは？」

山本に問われ、最初に答えたのは涅だつた。一步前に出て、体を軽く総隊長に向ける。

「あの封印について分かったことと言えば、完全なオリジナルということだヨ」

「とうとうと?」

京楽は先を促した。

「君たちからしてみれば、確かにあの封印は一見いくつか鬼道が複雑に絡み合い出来ているように思えるだろうネエ。しかし、その一つ一つを解いて見てみれば我々が知るそれじゃあナイ。術の構成・詠唱全てが独自に作り出されたものダ」

「独自に、だと?」

狛村は引つかかる単語を繰り返して言う。皆もそれは同様だった。

その中でも、卯ノ花は一度とはいえ、あまり詳しく調べられなかったが封印を検査している。

代表して口を開いた。

「涅隊長は“独自”と仰られましたね。ではつまり、敵は鬼道を応用し、我々にも及ばぬ術を使っていると?」

「そんなものじゃあナイ」

涅はさも愉快だと言わんばかりに裂けたように口を吊り上げ笑う。

「私は独自と言ったのだよ、卯ノ花隊長。応用？違うネ。あれは完全なオリジナルダ。我々死神が使う鬼道の上をいつている。もはや、鬼道なんて呼べるものじゃあナイ」

皆が一様して反応を見せた。眉を潜める者、目を見開く者、目を鋭くする者。だが、共通して皆の心根にあるのは驚きだった。

“死神の鬼道の上をいく”

彼等が驚いたのはそこだった。

「鬼道の上をいく、完全なオリジナルの術……。そんなものがあるのかい、涅隊長？」

「あるから、ワタシがこうして君たちにも理解出来るよう説明してやっているんじゃないカ！」

「それで、涅隊長。一護くんの封印は解けるんだろうか？」

京楽に不満げな声をあげる涅に、浮竹は不安そうな面もちで尋ねた。

一護の体を案じると同時に、部下のルキアに朗報を届けてあげたいという気持ちが彼にはあるのだ。

しかし、無情にも涅の答えは否であった。

「無理だネ」

「そんな…っ」

「さっきも言ったが、あの封印は鬼道よるものではない。つまり、あれを解く方法は鬼道では無理なのダヨ」

「俺らには、あの封印を解く術はないということか」

涅の説明に冬獅郎はそう呟くように結論づけた。「簡単に言えばそういうことダネ」と涅は事も無げに頷く。

それきり、しばらく嫌な沈黙が降りた。敵の未知な力と一護の今後。

流石に、明るい気持ちには余程なれない。そんな中、卯ノ花が口を開く。

「一つだけ、あの方の封印が解ける方法があります」

皆の視線ははっと卯ノ花に集中する。

「どういことじゃ、卯ノ花隊長」

「はい」

そうして、卯ノ花は普段と変わらない口調で静かに話し出した。

「確かに、外から黒崎さんの封印を破ることはゼロに近い、いえ、ゼロでしょう。ですが、中から彼自身の霊力で中から封印を破ることなら可能です」

「本当かい！？卯ノ花隊長！」

嬉しげな声をあげる浮竹に、しかし当の卯ノ花の表情は晴れない。どこか苦しげに眉が寄せられている。

冬獅郎と京楽はそれに気付き、窺うだけで口を挟むことはなかった。

「卯ノ花隊長、まさか本気で言ってるんじゃないだろうネ」

「……………」

「馬鹿馬鹿しい！あり得ないヨ、そんなこと！」

涅の問いに、卯ノ花が沈黙という形で肯定を示せば、彼は大仰に両

手を広げて声を大きくする。

そんな涅に、嬉しそうに顔を明るくしていた浮竹も嫌な予感がして身を引いた。

「ですが、涅隊長。可能性がある以上は賭ける価値はあると、私はそう判断します」

「その可能性がないから、ワタシは反対してるんだヨ！」

にべもなく否定され、卯ノ花はわずかに顔をしかめる。しかし、涅の言い分も分かるのだ。

説得しようと卯ノ花が口を開こうとして、それより先に浮竹が先に疑問を口にしていた。

「どづいうことなんだい、卯ノ花隊長？」

「私が先程説明した方法は、涅隊長の言うとおり、ほぼ限りなくあり得ません」

「何故じゃ？」

山本が片目を薄く開いて、尋ねる。それに、卯ノ花は軽く目を伏せ、あくまでいつも通りに答えた。

「封印を破ると同時に、死に至るからです」

息を呑む。先程まで抱いていた希望が崩れ落ちるような感覚だった。表立って狼狽えているのは浮竹だったが、直接耳に届いた“死”という単語にわずかでも動揺したのは皆同じである。

卯ノ花は続けて言った。

「今、黒崎さんが衰弱している原因が封印にあるというのは皆さんご存知ですね。詳しく言えば、その封印に反発する黒崎さんの霊力が精神・肉体の疲労に繋がってしまったためなのです。多少ならば、睡眠と食事を適度にとっていれば、自然と体は回復していきますが、黒崎さん程の霊力になるとその分の反動も大きいことは容易に予測がつくでしょう。疲労が過ぎれば、食事も喉が通らなくなり、睡眠では補えなくなってしまうます。それが積み重なり、最期は。しかし、それとは別に危惧されることがありました。それが、封印を黒崎さんの霊力が破るということです」

ですが、と卯ノ花と言う。

「通常ならば、これはあり得ないものでした」

「どついついことだ」

冬獅郎が問うた。

「黒崎さんにかけられた封印は凡そ十五個。いくら黒崎さんといえど、それ程の封印を破れるはずがありません。出来たとしても、先に身体が耐えられなくなるはずでした。しかし、先日黒崎さんが運ばれた時、以前には見られなかった封印の綻びが見られたのです」

一度、一護が四番隊で検診して以来、定期的に検診は行われていた。一護は不思議がっていたが、そこは冬獅郎が“隊長命令だ”と言ってしまえば、それまでである。

「まさか、それは本当かネ!？」

涅が信じられない、と言うように声を大きくする。卯ノ花が頷けば、「そんな、まさか」とブツブツと呟きながら、それでも身を引く。

そんな涅の様子に、それが驚くべきことだと言うことが分かるが、皆はいまいち実感が湧かずに卯ノ花に話を続けるよう視線で促した。

「黒崎さんの霊力は確かに、封印を解きつつあるのです」

「それじゃあ」

「ですが、これは喜ばれるものではありません」

浮竹が顔を綻ばせれば、遮るように卯ノ花は険しい顔で言った。皆は怪訝そつに顔を険しくする。

「何故？」

「封印が破られるということは、黒崎さんが耐えきれぬ負担を上回るということ。言ってしまうえば、身体にじわじわと負担が募るか、一気に負担がかかるかの違いなのです」

「なるほど」

京楽は卯ノ花が言いたいことを理解出来て頷いた。

「つまりはこういうことかな？風船が萎んでいくのを前者だとすれば、後者は風船が破裂するようなものだ？」

「そついうことです」

二つの結末。しかし、どちらの先にも待つものは“死”だ。

「それで、卯ノ花隊長。黒崎一護の封印を解く方法とは一体なんじや？」

そう、本題はそれだ。皆は気を取り直して耳を傾ける。

「正しくは“方法”ではなく“可能性”ですが、その可能性が黒崎さんが封印を破った上で生き残るということです」

「生き残る、ねえ」

卯ノ花の言う可能性は、もはや彼等には信じがたかった。京楽は釈然としない様子で笠を下げ、浮竹すら素直に喜べず浮かない顔をする。

無理もなかった。先にあれだけ説明されてしまっただけでは、その可能性が如何に低いものなのかは推測出来てしまう。

「その確率は如何程だ？」

珍しく、白哉が問うた。

「高く見積もっても十パーセント程かと」

再び沈黙する。何故、涅があそこまでその可能性を否定したのか、今なら分かった。

始めに封印を破ることがあり得なく、さらにそこから生き残る確率すら低い。

“可能性”はあまりにも儂すぎたのだ。

そして、やはりこれも黒崎一護に賭けるしかないのである。

「結局、我々は何も出来ないのか…」

浮竹が零した台詞に、今度こそ誰も口を出すことはなかった。

「こうなったら、僕達は一護くんを信じて、出来ることをしていくしかないんじゃない？望みがあるだけ、頑張りようはあるさ」

「京楽…。ああ、そうだな」

落ち込む暇があるなら、一刻も早く敵を見つけて倒す。護挺十三隊として、自分達がたが出来ることをしようという京楽の言葉に浮竹は伏せた顔を上げ、決意新たに頷いた。

それを区切りに、卯ノ花は再び口を開く。

「封印が綻びてしまえば、それをきっかけに封印は急速に綻び始め

ます。もはや、封印は破られると考えた方がいいでしょう。そこで一つ、我々は注意しなければなりません」

「注意？」

冬獅郎が疑問を示すと、卯ノ花は「はい」と首肯する。

「封印によつて今まで抑え込まれていた黒崎さんの霊力は、その瞬間一気に溢れ出します。恐らくそれは、一時的とはいえ我々隊長格の霊力を合わせても、その十倍」

「十倍だと！？馬鹿なつ、霊王にも匹敵する霊力だぞ！？」

碎蜂は目を大きく見開くと、信じられるわけがないと声を荒げた。

どれほどの霊圧なのか、およそ想像もし難い数字に皆も流石に驚きを隠せない。

しかし、それにさも当たり前だと言ってみせたのは涅だった。

「フンツ。当然のことダヨ。我々と匹敵する霊力を数十年もの間貯め続けていれば、一時的に今までの数十倍の霊力になることは想像に容易い」

「だが、そうになると我々はともかく副隊長以下の死神、さらには流魂街の魂魄達に大きな影響を与えてしまうんじゃないか？」

浮竹の台詞はもっともだった。現世と違って影響は受けにくいが、さすがに莫大すぎる霊圧は魂魄に多少なりと影響を与えてしまう。

だからこそ、霊王・王族の住む空間と尸魂界は別になっているのだ。もちろん、意味はそれだけにならないにしろ、理由の一つではある。

「その通りです。ですから、黒崎さんの封印が解ける瞬間、霊圧を外に漏らさぬよう結界を張る方が良いでしょう」

最後、意見仰ぐように卯ノ花は山本へと顔を向けた。

「ふむ、なるほどのう。さすれば卯ノ花隊長。その時を知る術は？」

「それでしたら、綻びた封印から漏れ出す黒崎さんの霊力が急激に上がるので分かるかと」

「あい分かった」

カツンと山本は両手で持っていた杖で床を突いた。固い音が空間に反響する。

「これより全隊長は、常に黒崎一護の霊力に気を配り、それに異常を察知し次第、我々隊長格の全力を持って霊力を結界に閉じ込める。

これで良いな？卯ノ花隊長」

「問題ありません」

話がようやく一区切りついた時だった。今まで珍しく話を黙って聞いていた更木が不意に身を翻す。

「どこへ行くのじゃ、更木隊長」

「ここまで聞きゃもう十分だろ。俺は鬼道は使えねエしな」

山本の問いに更木はそれだけ言って、それきり振り返ることなく一番隊舎を去っていった。

「これだから野蛮人は嫌ダヨ。人の話を最後まで聞くことも出来ナイ」

「良いのですか、元柳斉殿」

更木の退室に、狛村は山本に尋ねる。一名隊長が抜けたが、このまま隊主会を続けたものかどうか。

「まあ、良いじゃろう。粗方話すべきことは話した。それより、他の者は何か進展はあったか？」

「恥ずかしながら、それが全く」

「なにぶん、手がかりが少ないので…、申し訳ありません」

京楽は肩を竦め、浮竹はすまなそうに顔を伏せる。

「我々、隠密機動としても敵の情報は何一つないとすると、流石に限界が」

碎蜂もそう悔しげに途中で言葉を切った。

何しろ、手がかりと言えるものが何一つないのだ。山本は「ふむ」と相づちを打つ。

「ならば、今後もそれぞれの使命に励め。護挺十三隊に妥協は許されん」

そう山本が言った時だった。興奮を抑えられないとでも言うように、ビリビリとここまで肌を刺してくる霊圧が膨れ上がる。

誰のものかなど考えるまでもなく、それが先程一番隊舎を出て行った男の霊圧だと分かった。

「全く。手間のかかる童じゃ」

疲れたように山本はそう零すと今日の隊主会をこれにて終わりとする旨を告げた。

それから冬獅郎を呼ぶ。

「何があつたかは想像に容易い。更木隊長を止めて参れ」

「はっ」

「それから碎蜂隊長。主は隠密機動を率いて日番谷隊長を援助するよ。恐らく奴は日番谷隊長にも戦いを強いてくるであろう。流石に隠密機動も動けば奴も身をひこうて」

「承知しました」

こうして、隊主会は更木の隊長によってほぼ強制的に終わりを告げたのだ。た。

十番隊隊舎

ギシ、と椅子が軋んだ音を立てた。

静かな空間に、いやに足音が耳につく。冬獅郎は窓の側まで寄り、高くに輝く月を見上げた。

「隊長……」

「松本か」

いつからか、執務室の扉を開いて乱菊が立っていた。

冬獅郎は振り返るも、乱菊からは髪に隠れて表情を伺うことは出来ない。

乱菊が来ていたことを知っていたのだろう、そこに驚きは見られなかった。

「まだ起きてらしたんですか？」

「…てめえこそ。夜更かしは肌に悪いんじゃないのか？」

「私は…、眠れなくて」

乱菊は少し決まり悪そうに顔を逸らす。

「そうか」

冬獅郎はそれ以上追求することなく、ただ一つそう言った。再び、窓の外から見える月を見上げる。

そんな背中をしばし乱菊は黙って見つめていた。

変わらぬ凜とした背中だ。身体はまだ小さいのに、乱菊はついていくことを迷ったことはない。自分達十番隊には、何より大きな背中なのである。

そうぼんやりと思って、乱菊は急に問うてみたくなった。そして、
気付けば口は動いていたのだ。

「隊長は…、本当はどう思ってるんですか？」

「何をだ」

「一護のことです」

空がすっかり紺青に染まった頃、ようやく戻ってきた冬獅郎から聞
かされた隊主会の内容は、あまりにも厳しいものだった。

たった十パーセント。たった十パーセントしかないのだ、一護が生
き残る可能性は。何て低い確率なのだろう。

ようやく、会えたかつての仲間、しかし会ってみれば何も覚えて
いなくて。その悲しみに暮れる暇もなく今度は死ぬかもしれないと
言う。

それでも、敵がいることが分かって何とか倒そうと、記憶を取り戻
そうと奮闘し始めた時に、この話はあまりに酷いではないか。

しかし、乱菊には分かっていた。自分なんかよりも、よっぽど辛い
者たちがいることを。だから、悲しむのはこの一晩だけと決めてい
たのである。明日からは自分が彼らを励まそう、と。

その踏ん切りをつけたかったのかもしれない。常に冷静で、挫折す
るよりも前に進んでいくような強い彼が、どう思っているのか。

彼の強い言葉を聞いて、乱菊は自分を励ましたかった。不安を人に晒すことの出来ない、乱菊らしい不器用な弱音とも言えるだろう。

「たった十パーセントですよ？隊長は本当に、その、一護が…」

そこから先は口に出せなかった。明確な言葉を言ってしまうって、現実なってしまうのが怖かった。

「お前はどっ思うっ？」

「え…」

「黒崎は死ぬと思うか？」

本当に小さくだったが、冬獅郎はびっくりと乱菊の肩が跳ねたのをしっかりと見た。

恐らく、冬獅郎がはつきりと口にした“死”という言葉だろう。乱菊の不安は分かっていた。彼女は、不安や悲しみを隠すことが上手い。押し隠して笑みを浮かべて、何ともないように振る舞うのだ。

乱菊はもう仲間の死を見たくはないのだろう。もちろん、誰もが思うことだろうが、乱菊はあの叛乱で市丸という幼なじみを亡くしている。

悲しみを乗り越えていても、もう、目の前で仲間が死ぬのを見たくない、そう思うのは当たり前だ。

「正直、俺にも不安がないかと言えば嘘になる。たった十パーセントだ。生きるか、死ぬかなんてもんじゃねえ。ほぼ死ぬことは決まったようなもんだからな」

乱菊が小さく眉を寄せたのを視界に捉えつつ、「だがな」と冬獅郎は続けた。

「ここに来る途中、アイツ、俺になんて言ったと思う？」

心なしが楽しげな声音で問われたそれに、乱菊は首を傾げる。答えなんて求めていない冬獅郎は、あっさりと続きを口にした。

「絶対思い出すって、そう言いやがった」

乱菊は目を丸くした。いつから記憶喪失を自覚していたのか。そんな疑問すら忘れて、ただ昔と変わらない真っ直ぐな決意に。

「なあ、松本」

そこで、冬獅郎はようやく顔を真っ正面から乱菊に向けた。

「こんなこと言う奴がそうそう簡単にくたばると思うか？」

乱菊は自然と自分の口元が吊り上がるのを感じた。見れば、前に立つ自分の上司もつつすらと笑っている。

「思いません！」

不思議なことに、さっきまでの不安は綺麗さっぱり消え去っていたのだった。

第十章 千日紅 一不屈一

t o b e c o n t i n u e . . .

夢い可能性（後書き）

なんだろう、この主人公の出番の少なさ…。

あたしの話に見られる傾向です。なおしたいなあ。

なんと！お気に入り登録が40を超えてびっくりです！感想を書いて下さった方も、励みにさせていただきます！ありがとうございます！

文章力もストーリーも、まだまだですが、これからも頑張りたいと思いますので応援よろしくお願いします。

翌日のジョウ（前書き）

久々の更新なのに、少なくて申し訳ないです。

翌日のこと

太陽も真上に昇り、一心不乱に　もちろん、時折サボる副官を怒鳴りながら　筆を滑らせ、一刻も早く昼休憩をとろうと書類を片付けているだろう頃。

生まれもつての事務処理能力は、サボリ癖のついた副官がいようと周りには劣らず、常ならば今日やる分の半分は処理済みとして冬獅郎の机に積み上げられているはずだった。

もちろん、今日とて彼は机にしがみつき黙々と仕事をしてきたのだが、処理済みの書類は普段よりもわずかに低い。

何故か、それはある時を境に冬獅郎のスピードが落ちたためである。そして、その原因は今まさに目の前で起こっていた。

527

「黒崎ー、その書類とってくれない？」

「あ、はい！」

「あら、墨もつないの？黒崎、その戸棚から代えの墨とってー」

「はいはい、どうぞ」

席官の手伝いを言いつけていた一護が戻ってくるや、発生した事態である。

冬獅郎の手は止まり、目線はちょこまかと動く一護と悠然と机に座る乱菊へと向けられていた。

果たして、一護の役職は何であつただろうか。そんな疑問を抱えながら、それでも黙っていた冬獅郎だったが、次にはそれも破られることとなる。

「んー、なんか肩凝つちやつたわねえ。黒崎ー、揉んでーえ」

「はい！ちよつと待って」

「おい、松本…」

今、はつきりした。少なくとも一護の仕事は乱菊の肩もみではない。冬獅郎の不穏な声音に、二人の視線が冬獅郎へと向く。片手に筆、これはいい。しかし口に煎餅をくわえている乱菊とその肩におかれた一護の手、それが余計に冬獅郎の神経を逆撫でる。

「黒崎はいつからてめえ専用の雑用係になつたんだ…っ？」

一護は冬獅郎の心境を悟つたのだらう、恐々と顔をひきつらせ肩から手を引く。

しかし、乱菊はもはや慣れたもの。他人が相對すれば逃げ腰にもな

ろう雰囲気をもともせず、パリンと煎餅をかじる。

「何言ってるんですか、たいちよー。黒崎は十番隊隊長特別補佐じゃないですかあ。あたし専門じゃありませんよー」

手の平をひらひらさせて可笑しそうに言う乱菊に、冬獅郎の堪忍袋の尾が切れた。

「分かってんなら…っ」

その音を一護はしつかりと聞き取り、部屋の隅まで避難した時に冬獅郎は怒鳴っていた。

「黒崎に肩なんか揉ませんじゃねえ、馬鹿野郎！」

「ひどいですよ、たいちよー。ちょっと黒崎を良いように使っただけ、あんなに怒らなくなっただけ…」

「てめえ、今良いようにつつたる」

冬獅郎によつて煎餅を没収され、約二センチ新たに書類を追加された乱菊は不満を零しながら渋々と筆を滑らしていた。

同じく筆を滑らし、あれから逆に二センチの書類を片付けた冬獅郎は乱菊の言葉にすかさず言い返ししながら、最後の一文を書ききった。

「だつて、一護のやつただ黙つて立たせてると気まずそうですし。それに、あんまり働かせないのも不審がられるって言ったの隊長じゃないですかー」

だから、あんまり体を動かさなくていいように執務室内の仕事させてたんですよ？　そう言う乱菊に、冬獅郎は溜め息混じりに「まあな」と返す。

「だが、だからって肩揉ませんじゃねえ」

「はい」

溜め息まじりに言う冬獅郎に、本当に分かっているのか問いたくなるような返事を乱菊がすれば、彼は仕方ないというようにまた一呼吸を零した。

と、乱菊は不意に乱菊は顔を真面目なものにする。

「隊長こそ、いいんですか？一護を隊舎内とはいえ歩き回らせて」

そんな表情をちらりと冬獅郎を横目で見ると言った。

「ああ。黒崎の衰弱は封印によるものだからな。立っていようが寝ていようが関係ねえ。ただ、いざという時にすぐ対応出来るよう身近にいた方がいいというだけだ。それに、奴に関しては隊長・副隊長と一部死神にしか知らされていない極秘事項。そして、それは黒崎も含まれる」

「そのことですが、一護に言った方がいいのではないのでしょうか？そうすれば、このように誤魔化さずに一護を側に置いておけますし、いざという時もすぐに対応出来ると思うのですが」

「ああ。だが、奴はようやく記憶がないことを自覚したところだ。これ以上、混乱させることないという総隊長の配慮だからな。それに、俺も同感だ」

冬獅郎が思い出すのは、一護が自分に初めて記憶について話した時のこと。

“自分が何なのか分からない”

それを聞いたとき、冬獅郎は一護が今までどれだけ悩んできたのか、そしてだいたい混乱していたのが窺えた。

記憶を取り戻すと決意して、だいぶスッキリしたようだったが、そんな折りにまた“衰弱”やら“封印”やら聞かされては、誰であっても混乱してしまうに違いない。

「じゃあ、結局私達はこうして待ってるしか出来ないってことなんですね」

「簡単に言えば、そうなるな」

しばらく部屋に沈黙が降りて、二人は「はあ」と溜め息をついたのだった。

脳裏を過ぎるのは

「じゃ、よろしくお願いします」

「はい。ご苦労様です」

一護は冬獅郎に頼まれた書類を、ちよつと部屋にいた席官に渡し終えたと一礼して部屋を出た。

「…はあ」

一護は少し廊下を歩いたところで、溜め息を吐いて立ち止まる。

窓の外では、変わらない白と橙の滯霊挺の景色が広がる。もうだいぶ見慣れたものだ。

(記憶を取り戻すつつつてもな)

あの日の夜、冬獅郎にそう決意してから一護は一晩中考えていた。死神になって以来、度々脳裏を過ぎる映像と声。

それなのに、瞬間的にかき消されるように次には頭は黒に塗り潰さ

れている。

後に残るのは胸にくすぶる寂寥感と懐かしさ。

忘れていると今では分かるのに、どうしても思い出せない自身への苛立ちだけが募る。

現世実習の時、ルキアと恋次に初めて会った時、確かに何かを感じたはずだ。

そう、何か。

(しに、れ？違うな。しにみ、れ？じゃなくて、もっと俺が知っている…)

言葉だったような、そこまで思考が至る前、不意に一護は胸がじわじわと熱くなるような感覚がして胸に手をやった。

何だと思うも、死覇装越しに感じる体温は何ら変わらない。

しかし、その間にも胸の熱は内臓を焼かんとするかのよう温度を上げていき、次第に熱さは痛みへと変わっていく。

「うっ、あっ」

突如、自らを襲ってきた痛みには口からは呻きが零れる。内側からの

焼くような痛みにも、一護はとうとう立っていられなくなって跪いた。内側の火を掻き消すかのように着物を破れんばかりに鷲掴み、背中には冷や汗が流れる。

(くそっ、何だっつてんだ！)

目が霞み、床の木目が蜃気楼のように揺れる。

意識が朦朧としていくのを第三者の自分が自覚する。いつそのまゝ気絶してしまった方が楽なんじゃないか。体と脳は無意識に防衛反応で一護を眠りへと誘ってくる。

一護の瞼が半分まで閉じかけた、その時。

死神になれ。

はっと一護は目を見開いた。さっきまで全く思い出せなかったフレーズがすんなりと一護の頭の中に響いてきたのだ。

まるでスライドショーのように映像が脳裏で切り替わる。

血に濡れるルキア、その前に立つ自分。

“死神になれ。”

“おーす。元気が、一護！”

“日番谷隊長、だ！”

“何だ、その腑抜けた顔は！”

(何だ、これ…っ)

まるで映画を見ているようだった。見覚えのない写真を音声と一緒に見せられているように、次々とただ情報だけが流れ込んでくる。

(まさか、これが記憶か!?)

現世のような街並み、覚えのない会話。もしかしたら、これが自分の記憶なのかもしれない。一護は咄嗟にそう思い至った。

ないはずの大切な記憶。どうして現世にいるのか等の疑問を持つ暇もなく、一護はさらに記憶の欠片をかき集めようと頭の中に意識を向ける。

(もっと！もっとだ！)

しかし、その想いに比例するように熱と痛みは増し、思うようには

いけない。ともすれば失いかけない意識を、一護はただ気合いでは
ねのける。

「う、あ……っ」

くそ！と悪態をついて、それでも一護は諦められずに記憶を手繰り
寄せようと、再び真っ黒になってしまった意識に集中した。

そうすれば、ノイズ混じりの音声と砂嵐が酷い映像が蘇る。

あ
い？ ……ん。

(こ、れは……)

の
う ……だね。

(男……？)

おま ……は、記憶……い。

(何だ、聞こえねえ……)

眠れ。

「一護！」

「……っは」

瞬間、場面は切り替わって、尚晴の心配そうな表情が視界一杯に映っていた。

「一護！」

いつの間にか倒れていたらしい。頬に冷たく、固い感触を感じた。

うつすらと開いた瞼を一護がゆっくりと開いていけば、尚晴は安堵したように眉を下げる。

「尚晴…？」

「一護！良かった」

一護は尚晴に支えられながら身を起こす。ガンガンと金槌で殴られたような頭痛の、だるい頭に手を額に当てる。

「頭痛？」

「いや……」

だるさは感じるが痛みはない。一護は尚晴の問いに否定して、倒れた原因である胸に手をやる。気付けば、あの焼けるような熱は今ももう微塵も感じない。

尚晴はぼんやりと自身の胸に手を当てる。一護を不思議に思いながらも、額に手を当てた。

「熱はないみたいだけど……、顔色悪いね。四番隊行ったら？」

「……………」

「一護？」

「あ、悪い。何だ？」

「だから、四番隊行ったらって」

「いや……」

一護は壁に手をついて立ち上がる。

「もう大丈夫だ。悪かったな、心配させて」

そうは言うものの、一護の顔色はお世辞にも良いとは言えない。見れば、髪はしっとりと汗ばんでいるし、表情も優れないようだ。

「あのさ、そんな顔して言われても説得力ないんだけど」

「いや、本当少し休めば問題ねーよ。お前、書類届ける最中だろ？俺のことはいいから、行ってこいよ」

最後、一護は口を弓形にして笑うと、尚晴が反論する前に「じゃあな」と言って歩き出してしまふ。

「一護！」

どこかいつもより曲がった背中に心配になりつつ、しかし尚晴は彼の背中が頑なに追いかけてくるのを拒否しているようで、ただ立ち止まって見送るしかなかった。

一方、尚晴と別れた一護は、先程脳裏に映し出された映像のことが頭から離れず、ぼんやりと廊下を歩いていた。

あれは、自分の忘れていた記憶なのだろうか。

一護はどうも釈然としない気持ちだった。いや、本当はアレが自分の記憶だと分かっている。

それでも認められないのは、記憶を“思い出した”というよりも、“見せられた”という感覚の方が大きいからだろう。

言うなれば、幼少の頃の写真を見せられ、お前は昔こうだったと説明をされるような感じである。

自分の記憶を第三者としてしか見れなかった。

だが、あの映像に感じた懐かしさとこみ上げるような嬉しさが、正に自分が思い出したい記憶なのだと一護に訴えてくる。

（あれは、朽木四席だった…。阿散井副隊長、それに隊長も…）

彼等と昔、接点があったということなのだろうか。だとしたら、一体“いつ”、“どういう経緯”で知り合えたのだろうか。

そつだ、不可解な点はたくさんある。

それに。

(最後に見たあの男…)

壊れたテレビのように映像も音声もよく分からなかったが、唯一、“眠れ”とそう言った声は低く、そして見えた口元は愉快げに吊り上がっていたのだけは、かろうじて覚えている。

一体、あの男は何者なのか。嫌な感じがしたことは確かなのだが、如何せんこれ以上思い出せない。

まるで、何かに押さえつけられているように、思い出そうとする度頭が痛む。

「くそつ。決意したそばからこの様かよ…っ」

上手くいかない状況に苛立ち、一護は感情のままに壁を拳で殴りつけた。

声がかけられたのは、その直後だ。

「何やってんだあ、一護？」

「隊舎の壁を壊す気が、馬鹿者」

一護はハツと意識を引き戻されたかのように顔を上げた。

怪訝そうに自分を見る顔は、ここ最近でよく話すようになった恋次とルキアである。

「恋次、にルキア？どうしてここに…？」

副隊長である恋次と四席であるルキアが他の隊舎に来るとなると、書類を届けに隊主室来るくらいしかない。

そこから少し離れたこの廊下になど滅多に用はないだろうに、何故と一護が尋ねれば、恋次は困ったように「いや…」と頭を掻いた。

実は、恋次もルキアも一護の様子見に来ていたのだ。しかし、それを言ったところで自身の状態を知らされていない一護は、ただ不思議に思うに違いない。

さて、どう誤魔化そうと恋次とルキアが顔を見合わせて、ふと二人は何かにつっかかった。

「一護…、てめえ、今何だった…？」

「へ？」

いきなり声を低くし、焦燥と緊張が混じった真剣な表情をして問うてくる恋次に、一護は訳が分からず言葉に詰まる。

見れば、ルキアも同じような表情で見えてくるのではないか。

「さっき何と言ったのかと聞いておるのだ！」

「え？いや、だから、どうしてここにって……」

「違え！」

一喝されて、一護は思わず身を引いた。しかし、それを許さぬとばかりに恋次は一護の両肩を掴む。

「もう一回、俺達のこと呼んでみる！」

「ええ？」

何故と訊ける雰囲気ではなく、一護は「まあ名前を呼ぶだけだし」と、一息ついた。

「阿散井副隊長、に朽木四席」

これで、いいつスカ？そう言った一護に、二人は沈黙する。恋次は肩から手を離れた。

ルキアは落胆を堪えるように眉間に力を込め、次いで気持ちを抑えるよう視線を下へ流すと一護にきつと目を向けた。

「さつき、貴様は　！」

「ルキア」

ルキアの言葉を遮ったのは、恋次の静かな声だった。

「悪かったな。何でもねえ」

「い、いや。別にいいけどよ」

また、いきなり雰囲気が変わった恋次に一護は戸惑いながらも頷く。

「じゃ、じゃあ俺はこれで…」

何だか、二人に会った時からまた頭痛が酷くなったような気がして、一護は恋次とルキアの横を通り過ぎ、背を向けた。

それを引き止めることもなく、二人はその背を見送る。

「何故言わなかったのだ、恋次？」

一護が角を曲がって姿が見えなくなった時、ルキアは恋次を見上げて問うた。

「見たかよ、一護の顔」

問いに答えず言った恋次に、ルキアは特に何を言うでもなく「ああ」と頷いた。

「酷く顔色が悪かったように思う。恐らくは…」

悲痛な面持ちで、ルキアはわずかに顔を俯ける。

二人は、前回の隊主会での内容を各々の隊長から聞いていた。一護の封印についても、黒幕についても、彼の生存確率についても。

「さつき、我らの名を無意識で呼んでいたことといい、封印の崩壊がだいぶ進んでいるようだな」

「一応、日番谷隊長に報せとくか」

「ああ」

二人は手ぶらのまま十番隊執務室へと足を向けたのであった。

脳裏を過ぎるのは（後書き）

少し進展です。

何だか、恋次が賢い気がする…。私の中では、恋次は常識人ってイメージなんですよね。

でも、怒りっぽい！みたいな。

今回は少し更新が遅くなってしまつと思ひます。

飽きずにいて下さつたら、また読んでくれると嬉しいです。

すでに姿はなく

現世・空座町

遊ぶ子供たちの笑い声やはしぎ声が賑やかな公園。至って平凡なその光景を、離れた電柱の上で紫水は険しい目で見ていた。

（あの男 …）

彼女の視線の先にいるのは、一護の妹・夏梨も気にしていた、何かと不審な動きをする男。

帽子を目深に被り、丸眼鏡をかけた風貌は一見優しげに見えるとい

うのに、怪しげに見えるのは自身の先入観があるからだろうか。

鳩に餌を撒いてやるのが彼の日課のようで、その彼を監視するのもまた、紫水の日課となっていた。

(ここ数日、彼に不審な様子は見られない。妙な行動を見せたのも現世実習の日以来…)

何度か彼を尾行^ッけたこともあったが、その度に虚が出現して一度たりと成功したことはない。しかし、彼女の任務が虚の退治なのだから、それを無視することなど出来るはずもなかった。

(ま、こればかりはね…)

紫水は不満を覚える自分に言い聞かせる。

もしかしたら、疑心暗鬼になっているのかもしれない。気にしすぎだと言われてしまったなら、紫水は何も言い返せないだろう。

事実、あの男の数日の行動は至って普通だった。

。ピピッ、。ピピッ、。ピピッ。

聞き慣れた電子音が懐から鳴る。素早く伝令神機を取り出し、位置を確認した。

そして、それがもう一人の死神より自分の方が近いことを知ると、紫水は瞬歩でその場から消えたのだった。

「ふっ」

大きく跳躍し、白い仮面を一閃すると、紫水は斬魄刀を鞘に納めた。そこへ、また新たに伝令神機から指令が送られる。場所は先程までいた公園の近く。

紫水がその指令に従って行けば、その虚はすでにもう一人の死神が倒していた。

「松田さん！」

「嶺川さん」

松田カオリ薫、それが彼女の名である。紫水は自分の空座町内の担当区域にいる薫に、驚いたように目を瞬かせた。

明らかに「どうして？」といった顔に、薫は事情を話す。

「嶺川さん、さっきまで私の担当区域近くで戦ってたから、虚もいなかったし応援に来たんです。迷惑でした？」

「いえ、そんなことないわ。すごく助かった」

「嶺川さん？」

途中で言葉を途切れさせた紫水に、薫は首を傾げる。声をかけてくる薫に答えることもなく、紫水は首を捻って辺りを見回した。

公園　、いない。脇道、家の陰、木々の隙間。

いない、いない、いない！

（もう帰ったか…っ）

今日こそはと思っていただけに悔しい。紫水はぎりつと奥歯を噛んだ。

「松田さん！ごめん、ちょっと私、用があるから行くわね！」

「え！？ちょっと、嶺川さん！？」

瞬間、周りの景色が流れた。結局、薫が引き止める前にその姿は黒い点となって夕陽に向かって消えたのだった。

（いた！）

紫水は道を歩く男の姿を見つけ、電柱に降り立った。ようやく、ようやく。もしかしたら、男の正体を突き止められるかもしれない。

何もなければ、それでいい。

いや、その方がいいに決まっている。

そんな気持ちで、紫水は男を見下ろす。死神である自分を、普通の人間に見ることが出来るはずもない。それでも、紫水は気配を消していた。

不思議と、そうしなければいけない何かがある男にはあったのだ。

しかし、それすらも無駄だったと紫水は知ることになる。

(どこまで行くのよ。もう住宅街からだいぶ離れたつてのに…)

もう、すでに山の麓まで来てしまった。こんな場所、すでに日の長い夏の太陽の沈みきった時間帯に来るなんて、ますます怪しい。

紫水が本格的に怪しみ始めた時だった。

「っ」

また、男がこちらを見た気がして、紫水は息を呑む。

しかし、次にはまた何事もなかったように猫背気味の背中を紫水に向け、男は山の中へと入っていく。

ギョオオオ …ッ。

それを追おうと足を踏み出した紫水を阻むかのように、空に亀裂が走り中から虚が顔を出した。

遅れて、紫水の懐からピピッピピッと電子音が鳴り出す。

「また虚!？」

紫水は斬魄刀を鞘から抜き、虚と対峙する。くっくっとして空気の読めない虚を睨みつけ、名残惜しむように山の麓を見下ろす。

そこには、すでに男の姿はなかった。

すでに姿はなく(後書き)

お待たせしました？

のに、短い！しかも、キャラが出てないとか。

申し訳ございません。

次もいつになるか分かりませんが、よろしければ気長にお待ち下さい。

現世へ行きたい

十三番隊隊舎

「現世に行きたい？」

縁側でお茶を啜っていた浮竹は、湯呑みから口を離して振り返った。

「はい」

それに頷いたのはルキアだ。

「それにしても急だな。何かあったのか？」

「何、という程のものではないのですが…。少々、気になることがありまして…」

気まずそうに目線を逸らしたルキアに、浮竹はふむと考えるようにまた一口お茶を飲む。

空になった湯呑みにすかさずお茶を注ぐのは虎徹清音だ。甘めのお茶が好きな浮竹が好む玉露“羽衣”。

黄色味がかつた綺麗な色が湯呑みに揺れる。

「まあ、いいだろう。元柳斎先生には俺から言っておく」

「ほ、本当ですか！？浮竹隊長！」

清音は浮竹に目を向ける。その後ろで小椿も浮竹へと目を遣った。

「ああ。男に二言はないぞ」

「あ、ありがとうございます…」

「その代わり、やるべきことはきちんとやるんだぞ」

「はい…」

ルキアは溢れ出る喜びを隠しきれない様子で頷くと、技術開発局に行つてきますとパタパタと駆けて行く。

それを見送つて、清音は浮竹へ問うた。

「いいんですか、隊長。こんな時に」

表沙汰にはならなくとも、一護のことで副隊長以上の人間は、この頃常に緊張した状態だ。

いつ、封印が破られるのか。彼の霊力へと意識は向けられ、気が休まらない。

そんな状況の中で、一番近しかったルキアは尸魂界を離れて本当にいいのか。

「だからこそ、さ」

浮竹は言ひ。

「こんな事態の中、彼女が現世へ行きたいと言つたんだ。それなりの理由があるに違いない。彼女を信じてやろう」

そう穏やかに笑った浮竹に、大袈裟な反応を見せたのは小椿だった。

「そうだぜ、清音！てめえ、隊長の言うことが信じられねえってのか！？」

「何よ！誰もそんなこと言っていないでしょ！？」

それに清音が言い返せば、いつもの賑やかなやり取りが始まる。

浮竹は相変わらず仲が良いと、やはり穏やかな笑みを浮かべ茶を啜った。

「元気がいいねえ」

そこへ、のんびりとした声がかけられる。振り返った三人が見た先にいたのは、女物の着物を羽織った京楽。それに付き従う伊勢七緒の姿もある。

「京楽！」

やあ、と手を挙げる。

「ひょっとしてお邪魔しちゃったかな？」

笠を軽く持ち上げて、楽しげにそう言う京楽に慌てたのは清音と小椿だ。

「い、いえ！」

「とんでもないです！」

その慌てように、京楽はハハハと笑い、七緒も思わず笑みを零す。

「それより、京楽。何か用があつて来たんだらう？」

浮竹が言えば、京楽はうーんと笑みから一転して唸りを上げる。それでも、軽い雰囲気崩さないところが京楽らしい。

「用というか。…そろそろ行く頃だらうと思つてね？」

笠の陰から覗く京楽の目は真剣だ。

その言葉の意味する所が分かつて、浮竹は最後の一口を飲み干すと立ち上がった。

「ああ。そうだな」

行つてらっしゃいませ！と清音と小椿の威勢のいい挨拶を背中に、三人はその場を去る。

向かうのは、尸魂界の情報が全て収容されている　大霊書回廊。

現世へ行きたい（後書き）

話に出てきた大霊書回廊。今、アニメでやっている尸魂界で出てきた気がします。

でも、詳しいことが分からないので捏造ってことにして下さい？

今回は短いのもう一話！

夢と現実の混同

十番隊隊舎

ここ最近、疲労感がとれない。食欲もないため食事も満足にとれず、妙な夢のせいで眠りも浅いのか頭もぼーっとしていた。

だが、もはや今の一護にとってはそんなことどうだって良い。

気になるのはその夢。あの日　そう、突如胸が焼けるように熱くなったあの日以来、同じように記憶の断片が頭の中に映し出されるようになった。

登場してくる人物は様々だ。多く出てくるのはルキアや恋次、それから見覚えのない橙色の髪の少女や大きな体と、神経質そうな眼鏡をかけた少年二人。

家族のような人達も出てきた。

他にも、六番隊隊長、十一番隊隊長やこの間試合した一角や弓親もだ。

「い」

それなのに、どうしてだろうか。あまりにも切れ切れで、音声も雑音混じりだからか。

記憶として認識出来ない。それでも、それを自身の記憶であることが分かるから苦しいのだ。

「お　い！おい！」

だけれど、時折被る。目の前の光景と記憶の中の光景が。

目の前の冬獅郎が、まるで記憶の中の彼のように、「日番谷隊長だ！」と怒鳴っている、そんな感覚に。

「おい！聞いているのか、黒崎！」

「っ！」

急速に周りの光景が自分の目に入ってきた。机に座る冬獅郎が険しい顔つきで自分を見上げ、乱菊は怪訝そうにこちらを窺っている。

「あ…、隊長？」

「黒崎、てめえ。何回呼んだと思ってんだ」

「え…、あ、すみません」

どこかぼんやりとした一護の反応に、冬獅郎は何か気付いて眉を寄せた。

乱菊も厳しい顔をして問う。

「ちょっと黒崎、アンタ大丈夫なの？」

「何がっスか？」

しかし、一護はまるで乱菊の心配にも気付いていないように笑う。これには、乱菊も眉間にシワを寄せ、さらに言い募るうとした。

だが、一護も折れるわけにはいかなかった。誰かに指摘されてしまったら、この身体の違和感から目を逸らせなくなる。

何故か一護は、それに気付いたらいけないような気がしていたのだ。

「あ、隊長！それより、何か用スか？」

乱菊が再び声を発する前に、冬獅郎へと声をかける。

「……ああ。この書類を三席に届けて来てほしいんだが」

別に体調が悪いなら、無理しなくてもいい、そう続けようとするも、一護は「分かりました」と差し出された書類の束を受け取ると、部屋を出て行ってしまふ。

それを見送る乱菊の目は心配げで、閉められた戸を見たままだ。

「わずかですが、一護の霊力少し上がってますね」

「ああ」

それは確かに冬獅郎も感じていたことだった。

恋次とルキアが一護が記憶の片鱗を見せたと報告をしてきたあの日以降、徐々に霊力が上がってきているのを冬獅郎達は感じていた。

「黒崎は記憶を取り戻したいと思っている。しかし、言えばそれは封印を破ろうとしているも同義だからな。霊力の乱れが著しいのも、それに身体が無意識に防衛反応を起こしているからだろう」

今の一護は、記憶を取り戻したいと願う心と相反する封印の破壊から守ろうとする身体が拮抗した微妙なバランスで保たれている。つまり、いつそのバランスが崩れ、封印が破られるか分からないということ。

「常に黒崎には注意している。いいな、松本？」

「はいっ」

冬獅郎は筆を持ったまま、一護の霊圧を追うように目を細めたのだ。
った。

時は動き出す

現世・空座町

リン…と小さく綺麗な音が響くと障子戸が二枚開いた。中からは黒い着物をひらめかせた、一人の少女が現れる。

ひらひらひら、と案内を終えた地獄蝶が空へと帰って行った。

「久しぶりだな…」

眼下に広がる、黄昏色に染まる街並み。数十年前までは目に馴染んだ空座町は、今や所々に見慣れぬ建物がある。

それに少し侘びしさを感じながら、ルキアは懐から伝令神機を取り

出した。

“ 現世に来てほしい。出来るだけ早く ”

要約すれば、そのような内容が書かれた文面。

「ルキア！」

かけられた声に、ルキアははっと後ろを振り返る。

「紫水」

そこにいたのは、空座町の現世駐在任務の応援を任されている十番隊隊員の嶺川紫水だった。

「久しぶりね、ルキア。全く、一気に出世しちゃって。朽木四席って呼んだ方がいいかしら？」

「やめてくれ。お前にそう呼ばれると鳥肌が立つ」

しばし、二人は向き合ったと思うと、ぷつと吹き出し、一緒に笑い声をあげた。

「本当に久しぶりね、ルキア！まさか来てくれるとは思わなかった！悪いわね、突然」

「いや、構わぬ。それより、詳しく話を聞かしてくれ」

ルキアに現世に来てくれるよう頼んだのは、嶺川紫水だった。二人はまだルキアが平の隊員の時に知り合い、友人になったのである。

とは言っても、紫水が死神になったのは藍染の叛乱後。ルキアは叛乱が落ち着き、しばらくして四席へと位が上がり、紫水は現世駐在の任を与えられたため、会うのは久々になるが。

「それで、話したいこととは何だ？」

近くのビルの屋上に二人は移動し、腰を下ろしていた。

「ええ、ちょっと気になることがあって…。見える、あそこ？」

そう言つて、紫水が指さすのは少し離れた先に見える公園。はしゃいで遊ぶ子供や、それを温かく見守る親や、ベンチに座る初老の男も見える。

「公園がどうかしたのか？」

身を低くし、どこか隠れるように鋭い目を向ける紫水に、ルキアも事情が分からないままそれに習う。

「公園じゃないわよ。あそこ、ベンチに座ってる男」

「ああ、あの眼鏡をかけた男か」

ルキアは穏やかな表情で、ただぼんやりとベンチに座る男を見る。にしても。

「何故、身を隠す必要があるのだ」

ちょうど西日を背中にしたこの場所は、公園から見れば眩しくてこちらの姿は見えないだろう。

ただし、それは相手にこちらが見えればの話。

「身など隠さずとも、人間には我ら死神の姿など見えるはずがあるまい」

一護のような特殊な人間でない限り、死神を見ることの出来る人間はいないのだから、確かにルキアの言う通り身を隠す必要はない。

「それが、そうでもないのよ」

「…どういうことだ」

「あの男には私の姿が見えてる、……のかも」

途中まで神妙だった顔つきだったルキアは、最後に付け足された言葉に眉を寄せる。

「何だ、はっきりせぬな」

「だから、ルキアを呼んだんじゃない」

紫水はむっと不満げな色に顔を染めた。

「あたしもまだはっきりとは分かってないのよ。だけど、怪しいわ、あの男。まるで、あたしが見えてるみたい」

言われて、ルキアは男を見た。こうして見てみてもただの穏やかそうな人間にしか見えない。

だが、もし紫水の言う通りなら確かにただの人間ではないだろう。

「それだけじゃないのよ。あの虚が大量がした現世実習時も変な行動していたし、それに年を取ってないって噂も気になる…」

「年を取ってない、だと？」

やはりそこが気になるのか、ルキアは聞き返す。紫水も神妙な顔つきで頷くと、遠くに見える男へと顔を向けた。

「とは言っても、それについてはあたし自身が確認したわけじゃないの。ただ、前に魂葬した整の妹がそう言ってただけなのよ。普通だったら気にしないんだけど、行動が不審なだけに気になってね」

「そうか、しかし確かにそれは気になるな…」

ルキアは顎に指を当てる。

そもそも、ルキアが今戸魂界が大変な時でありながらわざわざ現世まで来たのは、偏に一護のことがあったからであった。

一護が霊力・記憶を封印されたのは現世。紫水から話を聞いたとき、もしかしたら黒幕に繋がる何か手がかりがあるのではと考えたのである。

「ともかく、こんな不確かなことで隊長に連絡も出来ないし、実力もあって頼みやすいルキアをお願いしたってわけなの」

肩を竦めて言った紫水に、ルキアはふむと頷いた。なるほど、確かに不確かではある。ほとんど紫水の推測と勘だ。

だが、ルキアはどうにもその男が気になった。

「分かった。今度は私が奴をつけよう」

「私がつて…。まさかルキア、アンター一人で行く気なの…!？」

「無論だ」

「でも危険よ！相手が何者なのかも分からないのに！私も一緒に

」

「それは、ならぬ。紫水には現世駐在の任がある。それに、聞けば奴をつけようとする度に虚が出現しているというではないか。考え難いが、奴がそれを仕向けているかもしれない。そうならば、誰か一人は残り、その虚を倒す必要がある」

「でも」

「案ずるな。深追いはせぬ」

有無を言わせぬ物言いで、しかも正論を言われてしまえば紫水は何も言えない。

最後、安心させるように向けられた笑みに紫水は渋々頷き、「絶対

よ」とだけ釘を指したのだった。

話がまとまった頃、まるで見計らったかのように目当ての男はベンチから腰を上げた。

同じようにルキアも屈めていた身を起こす。

「いい、ルキア？相手はもしかしたら私達が見えてる可能性があるから、出来る限り霊圧を抑えて」

「分かっている。そう、心配するな」

そうは言われても、時折ふと見せる相手の異様な雰囲気は紫水は知っている。

ルキアの実力を知ってはいても、不安になってしまっただ。

「健闘を祈るわ」

「ああ」

そのやりとりを最後に、ルキアは紫水の目の前から消えた。

一人残された小さなビルの屋上に、一陣の風が吹く。いつそ、胸に

くすぶるこの不安を取り除いて行ってほしいと、紫水は惜しむように風の後を目で追ったのだった。

十番隊隊舎

ぐるぐると頭の中を巡る思考に気を取られながらも、一護は書類を渡し終えて廊下を歩いていた。

（まったく、こんなじゃ仕事出来ねーな）

くしゃりと前髪を掻き揚げ、考えればずっと記憶について考えていた自分に苦笑する。

ふと目を向けた窓の向こう側に、滑るように飛ぶ燕の姿を見て一護は足の向きを変えた。

「ま、ちょっと位いいだろ」

頭に乱菊の姿を思い浮かべた一護は、ほんの一時だけだからと気晴らしに外へと出た。

仕事柄一護は滅多に外に出ることはない。他隊に書類を届けに行くこともないから、自然と隊舎内に籠もりがちになる。

外に出ると、ちょうど柔らかな風が吹いて一護の髪を揺らした。

秋が近付いた澄んだ空気が気持ちいい。

一護は固まった体を解すように伸びをした。

「やっぱり、ずっと畏まってちゃ疲れるな」

ふうと気持ちよく息を吐いて、一護は秋独特の高く澄んだ空を見上げる。

すると、近くを今年初めて見る赤トンボが横切って小さく笑みを浮かべた。知らず、それを目で追う。

と、一護の意識が赤トンボの向こう側へと移された。

何故なのかは彼自身からない。瀟霊挺に来てからというものの毎日見ているというのに、それがどうしても気になって仕方がないのだ。

双極の丘。

「……………はっ」

熱い熱い熱い！

胸が焼けるように熱を持つ。あの時、一回だけ起こった症状が再び一護を襲ってきた。

だが、一護は痛みよりも何よりも期待してしまう。今度こそ、本当に記憶が戻るのではないかと。

「う、ぐう…っ」

脳が、記憶が　揺さぶられる。

自然と一護の足は双極の丘へと進んでいた。

「おい、松本。黒崎、遅くねえか？」

「どっかでサボってんじゃないですか？」

「まったく、黒崎の野郎……」

時は動き出す（後書き）

今回は早めに更新出来たかなあと思います。

次回へ続く！みたいな感じで終わらしてみました。

いよいよ、書く上での第二回の大事な場面に差しかかりましたよ！

ちなみに一回目は一護がみんなと再会するシーンです（^^）

楽しんでいただけたら嬉しいです！

視界は桜色に染まり

気付けば、一護は双極の丘に続く階段を上っていた。ドクンドクンと鼓動が耳に響き、気を抜けば痛みと熱さに膝をつきそうになる足を踏み出す。

頭には壊れたビデオのような映像が頭に流れていて、一護は流れる砂をかき集めようと必死だった。

そうして、長い長い階段を上りきった一護の視界には一気に青空が広がる。

「はあ……っ」

ざあと凧いだ風が砂埃を舞わせた。

静かなその場所に、荒い自分の息がやけに耳につく。

記憶と目の前の光景が重なる。視界にある何ら変わりのない景色と頭の中の記憶にある景色。

交わり、重なり、混同する。

痛みに朦朧とし、交互にその二つの景色が入れ替わる視界の中、変わらぬにあるのは双極だった。

一つは静かな、もう一つは隊長・副隊長が集まり双極の磔架タクカを見上げて
いる光景。

あれは、誰かが吊し上げられているようだ。

(あれは…朽木…)

ふ、とその時ようやく一護は気がついた。遠くに見える、自分と同じように見上げている背中。

靡く白い羽織り、長い黒髪。凜とした佇まい。

(朽木…隊長…?)

「ぐ、うう…っ」

重なる重なる重なる。

映像は急速に場面を変えた。

燃え盛る火の鳥、まるで伝説に伝わるあの朱色の鳥を思わせる、神々しい姿。

自分はそれを背にし、誰かと向き合っている。

う。

自分は場に似つかわしくない、気軽な声をかけた。

もの！な、き　だ！

せっかく助けに来たのに、口を開いて一番に罵倒を浴びせられ　。

貴様　、兄様に　ぬ！

彼女はいつまで経っても、自分の本心を覆い隠して嘯く。^{ウソッ}

は、もう覚悟を決めた　だ！

だけど、そんなもの関係ない。自分が助けたいから助ける。死ぬ覚悟なんて、そんなもの決めさせてなどやるものか。

助ける　か、帰れ　か、ごちやごちやうる　よ。　は。

「言つたる……。てめえの意見は全部却下だつてよ…。」

知らず、一護はそう口から小さく零していた。

見開かれた視界に、双極を捉えた。磔架が壊れている。

ドクン、ドクン。

何故だ、さっきまでは普通だったはずなのに。どうして。違う、あれを壊したのは。

二度目だな。助けに来たぜ…。

「ルキア…」

ドクン、ドクン。

左手にある重み。右手には、持ち慣れた相棒の感触。

現実世界の一護の左手が拳を握る。

礼など言わぬぞ、馬鹿者。

一歩、足を踏み出した。

ざっ、と砂の擦れる音がして、白哉は気付いていた霊圧に初めて振り返った。

やはり、風に揺れる髪も何も、霊圧が小さくなったこと以外変わっていない、彼がいた。

「兄は……」

白哉は言いかけて、一護の様子に気がつく。目が、ここを見ていない。

す、と目を細める。

そうして、分かった。ほんの少しずつ霊圧が大きくなっている。

だが、まだどうなるか分からない。今封印が解けるのか、そうではないのか。

白哉は少しの異変も見逃すまいと、相変わらず表情を変えぬまま遠くを見る一護を見据えた。

のしかかる霊圧、緊張感。一瞬の油断も許されない、刃の交じり合
い。

見える。

初めて会った時には、絶望すら感じた力の差を今は感じない。

勝ちたい、勝たねばならない。心にあるはただそれだけ。

俺がこの手でぶっ潰してやる！

安い挑発だ。何と言われようと私の心は変わりませぬ。

ドクン、ドクン。

(俺は…)

アンタ、どうしてルキアを助けねえんだ。

兄が私を倒せたら、その問にも答えよう。

ドクン、ドクン。

(俺は…っ)

一護の目が、目の前で自分を見る白哉を捉えた。彼は斬魄刀は持っていない。

否、持っている。

重なり、交わり、混同する。

熾烈な戦いで牽星箝は外れ、零れ落ちた前髪の間隙から己を見据え、刀を突き合わせて。

「俺に出来るのは……」

不意に一護の口から零れた言葉に、現実の白哉は眉をひそめた。

俺に出来るのは、もう、一つの斬撃に全てを込めるだけだ！

行くぜ！朽木白哉！

ドクン！

一護の視界には全てを埋め尽くすような桜の花びらが舞っていた。

十三番隊付近

「まったく、ルキアの野郎。勝手に現世へ行きやがって」

今日もルキアと共に一護の様子を見に行こうとしていた恋次は苛立ったように頭を掻いた。

姿が見えないと十三番隊に言ったところ、清音に“ルキアは現世に

行っていない”と告げられたのである。

理由は分かる。一護に封印を施した黒幕を突き止めにいったのだろう。しかし、一言誘ってくれてもいいではないか。

恋次はそれが気に入らなかった。

（まったく。仕方ねえ、俺一人で　！？）

意識しなくても気付けた。一気に上がる慣れ親しんだ霊圧。

振り返った。

場所は双極の丘。

「一護…！」

十番隊隊舎

「　　っ!？」

「隊長！」

冬獅郎は滑らしていた筆を止め、目を開くと勢いよく後ろの窓を振り返った。

乱菊も気付いたようで、いつになく焦った様子で冬獅郎を見る。

「どうして、こんな突然…っ」

それに、なんで双極の丘に、と乱菊が驚く中、冬獅郎は近くに立ってかけてあった斬魄刀を素早く背に背負った。

「隊長」

「俺は行く」

「それなら、私も」

「いや。お前は来なくていい」

「何故ですか！」

「前にも説明しただろう。奴の霊圧は一時的とはいえ、霊王にも匹敵する。あらゆる魂魄に影響が出ないよう俺らが結界を張るが、副隊長以下が耐えられるレベルじゃねえ」

そう冬獅郎が言えば、乱菊は悔しげに言葉を詰まらせる。わずかに顔を伏せ、自分に言い聞かせるように息をつく、副隊長の顔つきになって、顔を上げた。

「ご健闘を祈ります」

「ああ」

放り出された筆は、じわじわと書類に墨を広げていった。

「なん、だ…!?!」

突然のことに、白哉は驚かすにはいられなかった。みるみるうちに、一護から溢れる霊力は上がっていく。

「封印が限界にきたか…」

霊力が巻き起こす風に眉をひそめ、白哉は半ば睨みつけるように俯せに倒れている一護を見た。

遠くを見ていたかと思えば、最後、一護の目は確かに自分を捉え、その突如この事態だ。

一体、何が引き金になったのかは分からないが、今一護は生きるか死ぬかと分け目に立たされている。

そして、自分がすべきこと。

白哉は波立った自分の心を静めた。

「隊長！」

白哉の後ろに瞬歩で降り立ったのは恋次だ。

「つー護！」

「寄るな」

倒れる一護に気付いた恋次が駆け寄ろうとするも、静かな声で白哉に制されて一歩足を踏み出したまま止まる。

「隊長……」

恋次はもどかしくも、有無を言わせぬ雰囲気にも大人しく引き下がった。

と、続々と隊長達が現れる。

碎蜂、卯ノ花、狛村、涅、山本、そして少し遅れて日番谷。

それからさらに遅れて京楽と浮竹が双極の丘に現れる。

「遅いぞ、京楽！浮竹！」

「いやあ、ごめんごめん」

「少し調べ物をしていてな。すまない」

一護を囲むように隊長達は集まった。碎蜂が厳しい声で言うも、京楽と浮竹は気にした風もない。

そのうちにも、みるみると霊圧は上昇していく。

感覚は慣れたもの。しかし、その霊圧は今までに感じたことなく強大で、恋次はとうとう耐えられずに膝をついた。

何気なく、恋次が下を見下ろせば、小さく苦しげに膝をつく死神たちが見えた。

(ちくしょ…っ、何て馬鹿でけえ霊圧だよ…っ)

全身にのしかかる霊圧。副隊長である己を圧倒するこの霊圧で、それでもまだ大きくなる途中だというのだから恐ろしい。

「皆、準備は良いか」

その中でも、山本の声は凜と響いた。各隊長たちは返事せぬものの、その表情は隊長然としている。

「これより、黒崎一護の霊圧による魂魄への影響を最小限に抑えるため結界を張る」

そう重々しく宣言すると、山本は持っていた杖を体の前に横にして構えた。

途端、それは杖から斬魄刀へと真の姿を現す。

それを発端に、皆も腰から背中から斬魄刀を抜き取ると、一護を囲むように地面へと突き刺した。

「ザンハテンセンヒヤクラケツサツ
斬覇天穿百羅結殺！」

“斬覇天穿百羅結殺。”

それは護挺十三隊の隊長格がその通り、斬魄刀を使って行う結界である。

卍解を会得した斬魄刀しか使えぬこの結界術は、鬼道とは違い自らの霊力に加え斬魄刀自身の力も加わるためにより並みの攻撃じゃ破れない。

ただ、欠点は必ず五人以上の隊長格がいなければならぬこと、そしてこの結界術の後にはしばらく斬魄刀の解放が行えなくなることである。

戦闘には不向きなため、ほとんど使われることはない。

山本が高らかに唱えた術名に全隊長が自らの斬魄刀を解放した。光を纏った刀は一時本来の姿を見せたが、すぐにその身を崩すと、天を穿つように伸び上がり頂点で結ぶ。

その光景は神聖な儀式のように美しく、荘厳だった。恋次は思わず息苦しさも忘れ、その光景に見入ってしまう。

頂点で結んだ光が膜のように一護を覆うと、恋次にのしかかっていた霊圧が弛んだ。

我に返ってみれば、身も軽い。

恋次は冷や汗を拭くと立ち上がった。

相も変わらず、結界の中の一護は地に伏したままである。

厳しい顔で結界を張り続ける隊長達を見回した恋次は、最後に一護を見た。

(一護…、絶対え死ぬんじゃないぞ…っ)

視界は桜色に染まり（後書き）

こーれで、良かったのかなー。

大事な部分なのに、自分の文章力がついていかない！いや、ストーリーの展開もダメダメなんだけれども！

「期待してたのと違う！」って方、もう本当申し訳ないです。

そして、あの技名！ぎぶみーネーミングセンス！

それでも、楽しかったぜ！ドンマイ！って思ってくれていたら嬉しいです！

読んでいただきありがとうございます！

記憶の奥底に

「ここは…」

気付けば、一護は精神世界の中にいた。澄み渡った青空、それに水平に並ぶ摩天楼。

一護は目を細めてそれを見渡し、過ぎ去った景色の中にいた男に再び視線を戻した。

「斬月のおっさん…」

膝に手をついて一護は立ち上がる。

彼は何も言わない。

「おっさんは、ずっと知ってたんだな」

何度も夢に出てきては、語りかけてきた“思い出せ”の言葉。今ではその意味がよく分かる。彼は、必死に訴えていたのだ、己に。

「通りでな」

一護は切なげに手のひらを目に当てると上を仰いだ。

「ずっと、何か違うような気は…してたんだ」

いつも何か、自分に違和感を感じていた。

ふとした拍子に感じるそれは、例えば初めて死神の名を聞いた時や、現世実習に行った時、会ったこともないはずの相手に感じる喜びや懐かしさ。敬語を使う自分にだったり。

でも、その原因が分からなかった。

いや、初めからあり得ないと結論づけてしまっていたのだろう。何故なら、自分が求めていた記憶は本来ならば持つこと自体があり得ないのだから。

それでも…、それでも、俺は　。

「思い出したかったんだ…っ」

あるはずがないと頭で理解しながらも、寂しさや懐かしさは消えなかったのだから。

斬月には、まるで一護が泣いているように見えた。頬を伝う雫瞬きして、それが錯覚だと知る。

「なあ、斬月のおっさん…。なんで、俺は忘れちゃってたんだろっかな…」

そつと目から離れた手を、空へ翳す。

「だってよ、今ならはつきりと、まるで昨日のことのように思い出せるんだ」

あの日、己の運命が変わった夜のルキアとの出会いも、無力を痛感した夏の夜のこと、強くなりたいと願ったあの日も、そして、全ての記憶を失った日のことも。

傷つき、笑い、戦った、あの日々はその一つ一つが自分の大切な思い出で、頭じゃない、魂に深く刻まれた仲間たちとの絆なのだと信じて疑わなかった。

確かに、自分の魂は忘れなかったのだろう。でも、まさか再会して尚も忘れていたなどと。

忘れたくても忘れられないはずだと、あの日の自分は思っていた。だからこそ、全てを思い出した今、信じられない。

一護はぐつと翳した手を握り締めた。

俺、阿散井副隊長と会ったのって初めてツスよね？

悪いけど、俺はアンタとも会った記憶がねえんだ…。

過去に言った言葉が悔やまれる。同時にその時の二人の表情も思い出して、一護は眉間にシワを寄せた。

《一護、お前が思い出せなかったのは奴の仕業だ》

「え…」

一護が苛んでいた時、今までただ黙って話を聞いていた斬月の突然の言葉に、一護は戸惑って彼に顔を向けた。

《これを見る》

そう、風もないのにはためくマントを翻し、斬月はビルの際へと足を向ける。

見下げた先には何があるのか。

一護も、習って同じくビルの際へと足を進め、眼下に広がった光景

に目を見開いた。

「な、んだよ…っ、これ…っ」

ビルとビルとの間に吊り下がっている、何重もの布に巻かれた何か大きく“封”と書かれた札がその上に貼られている。ドクン、ドクンと胎動する様は、まるで生き物のようだ。

一護がそれを認識した時だった。澄み渡った青空は黒い雲に覆い尽くされ、不気味な薄暗い空間へと精神世界は変わる。

《あれは、お前の霊力だ、一護》

「俺の…？」

それに視線を向けたままそう言った斬月に、一護は驚いて顔を向ける。

《記憶を思い出した今ならば、一護、分かるはずだ。お前が記憶を封じられた、その時のことを》

言われて、一護は記憶が封じられてからこれまでのことを思い返してみる。

全てを思い出した今、ルキアに封印を施されてからの自分にひどく違和感を覚えて、何とも奇妙な心持ちであった。

(なんか変な感じだな)

確かに、あの頃の自分は何の疑問も持っていなかったのだ。ルキアのことも恋次のことも、ましてや死神や虚の存在すら知らずに、本来あるべき日常を満喫していた。

それが、人間であった自分にとっての普通であるのに、どこか寂しいと感じてしまうあたりに、自分がどれだけ死神代行としてあの世界に馴染み、尚且つ彼らとの交流を楽しく思っていたかが分かる。

気付けば、一護は苦笑していた。

そう寂しかった。彼らと再会してから、ぽっかりと穴が空いたように。いや、死神になる前から、祖母と暮らしていた頃からすでに。

(いや、違い)

一護は思い出そうと、眉間にシワを寄せて目を瞑る。

(もっと前に)

そう、あれはルキアに封印を施されて五年と少し経った頃だったか。大学生活も順調で、なかなか楽しく過ごしていた。

ただ、何か物足りない気は前々からしていて、ふと気付けば空を見上げていた気がする。

部屋にいても、何故か押し入れや窓から今にも誰かが顔を出しそうになる感覚があつて、知らず、一護は楽しいはずの生活の中に寂しさを抱え込んでいた。

そうして、それは突然訪れる。

夏の日の夕暮れ。人っ子一人いない通りで、一護は何かが自分の中から急激に溢れ出すような感覚に足を止めた。

な、んだ？

手のひらを見つめるも、何ら変わりはない。首を傾げ、しかし次いで頭の中に突如どつと情報が流し込まれた。

っ！

大量の記憶を一気に詰め込まれ、一護は頭痛に膝をつく。だが、彼はそれよりも今までの寂しさの原因を思い出し、体の悲鳴すら気にも止めず、痛みを忘れてしまっていた。

ルキア…、恋次…っ。俺は…。

“封印を自力で解いたか”

視界に現れた見慣れぬ靴と降ってきた声。一護は痛みに重い頭を力を振り絞って上げた。生憎、霞む視界と夕陽の逆光ではっきりと相手の顔は見えない。

それでも、冷たい男の瞳はとても印象に残った。

大丈夫かい？黒崎一護くん。

あんた、は…？

五年である爺の封印を解くとは、流石だね。

(なんの話を…)

だが、君に記憶を取り戻させるわけにはいかない。だから…。

男が自分に手を飛ばしてくるのを、一護は霞む視界の中でぼんやりと見ていた。ただ、最後。。。

眠れ。

そう唱えるように呟かれた男の声と額に触れた生暖かな指の感触は、閉じられていく意識の中でもはつきりと分かったのだった。

「おい、斬月のおっさん……。じゃあ、まさか……っ」

《そつだ。一護、お前の記憶、そして霊力を封じたのはあの男》

自分の記憶が封じられた日のことを思い出した一護は、戸惑いを隠すことが出来なかった。

「でも！あのおっさんは人間じゃねーのか？それに！なんで、アイツはそんなことをする必要があるんだよ！？なんで、俺を」

《一護。今はそれを論ずる暇はない》

混乱に思わず声を大きくする一護とは対照的に、斬月は静かな声で落ち着けるように言った。

ドクン！

口を閉じた一護の耳に、やけに響く胎動する音が届く。その音を追って辿り着いた自身の霊力の塊だというソレに、一護は目を見開いた。

まだ差ほど時間は経っていないのに、それは布を破らんばかりに膨張していた。隙間からは赤とも黒ともつかぬ色が見え隠れし、渦巻いている。

《一護。お前は封印に勝たねばならない》

「封印に…勝つ？どういうことだ、斬月のおっさん！」

《無理矢理施されたあの男の封印は、想像以上に体に負担をかけていた》

思い当たりはある。これでも、病気という病気をしたことのない一護だったが、こここのところの体調はお世辞にも良いとは言えなかった。

《その体では、封印が解かれた時にかかる負荷には耐えられぬ》

そこで、斬月はようやく一護へと顔を向ける。

《このままでは、一護、お前は死ぬぞ》

「…っ」

息を呑んだ。

「な、どういふことだよ！」

《一護。今、お前は生きるか死ぬか、その瀬戸際にいるということだ》

はっきりと告げられた自分に迫る選択肢に、一護は動揺を押し隠すように言葉を詰める。

その時、またもやドクン！と大きな鼓動が聞こえてきた。

反射的にそれに顔を向けた一護は、塊から何かが飛び出てくるのを捉える。その影は一護と斬月と向かい合う形でビルに降り立った。

「てめえは…！」

そこにいたのは、自分。

だが、自分と反転した黒と白の色彩に目立つ金色の双眸、そして全てを嘲笑うかのようにつり上がった口角はおぞましい。

《よお、一護お！久しぶりだなあ！》

いやに高い声でそう言ってきた彼は、以前、一護が死神の力を取り戻した時に生まれた内なる虚だ。

「なんで、てめえがここに！」

《てめえがこつちに来てるのを感じてよお！わざわざ出てきてやってたってわけだ！》

「じゃあ、何で斬月のおっさんは…！」

そうだ。斬月と白一護は二人で一つ。今までも二人を同時に見たことはない。

ならば、どうして今ここに二人が存在するのか。

《一護、奴が封印そのものだ》

「な、アイツが!？」

《お前の霊圧を封じるのは容易なことではない。いや、あの男の霊力ではそもそも無理だったろう。それを、あの男は己の技術で補った》

「技術？」

《内なる虚。その霊力で、お前の霊力と記憶を封じたのだ》

簡単な話、一護の霊力で一護の霊力を封じたということだ。

「でも！そんなことが出来んのかよ！アイツを…使った…！？」

自分でさえもコントロールしきれないあの内なる虚を、あの男は利用したと斬月は言う。一護には俄かに信じることは出来なかった。

《あの時、奴は封印の下にあったのだ。術によって眠りについていたところを、あの男によって暗示をかけられている。私は一護が封印を解きかけていたために、眠りから覚め、暗示から逃れることが出来た》

だから、今は私とヤツは別に存在しているようなものだ、そう斬月は言う。

「なるほどな、話は分かった。つまりは、こついうことだろ？」

ふうと息をついて、一護は斬月から白一護へと顔を向けた。

「アイツを倒す！」

にやとした嫌な笑み。それを睨みつけて、一護は堂々とそう宣言し

た。

《どうやら、話はまとまったようだなあ》

「ハッ。えらく親切じゃねえか」

《他のことに気い取られて、戦いに集中出来ないってんじゃないあ
ちとしてもやりがいがねーんでなあ》

「その余裕がいつまで保つか見物だぜ」

斬月のおっさん、一護が白一護から目を離さずに名を呼べば、斬月は足元から徐々に崩れるように刀の姿へと形を変える。

「はああああ！」

そして、二人の息が合わさった時、戦いの火蓋は切って落とされた。

記憶の奥底に（後書き）

とうとうって感じでしょうか？自分でもついに佳境に入ったなあと思います。

なにせ、大まかなストーリーは考えているのですが、細かいところは恥ずかしい話行き当たりばったりなので、皆さんにご満足いただけているか不安です。

でも、白一護は出そうと思ってました！予想されていた方もいらっしやるようで、さすがです！

皆様、ご感想ありがとうございます。

頑張っていきますので、これからも応援よろしく願います。

自分と敵との戦い

双極の丘

「くっ」

冬獅郎は顔を歪めずにはいらなかった。

あれから三十分。留まることを知らない溢れ出す一護の霊圧は、結界を張ってなお、及ぼす影響は強大であった。

結界へと姿を変えた斬魄刀へと霊力を送り続けながら、冬獅郎は地に倒れる恋次へと視線を遣る。

つい先程、とうとう一護の霊圧に耐えられなくなって気を失ってしまったのだ。それでも、よく保った方だと思う。

この分では流魂街の住人はもちろん、隊士たちも他の副隊長たちも

気絶してしまっているだろう。

かく言う冬獅郎も、平然とはしていられないのだから。

睨みつけるような視線を冬獅郎は再び一護へと向けた時だった。

一護の肩に一閃の傷が走った。

「なんだ…!？」

突然のことに冬獅郎は目を丸くする。どうやら気付いたのは冬獅郎だけではないようで、碎蜂も「何が起こった」と眉を寄せ、白哉も目を細めるなどそれぞれの反応を見せる。

「黒崎さんも戦っているのでしょうか」

言ったのは卯ノ花だった。

一体、一護の中で何が起きているのかそれは分からない。しかし、卯ノ花の確信じみた言葉は、その場の隊長たちを納得させるには充分であった。

そう、きっと彼は生きようと戦っているのだろう 己の中で。

「まあ結局、僕らに出来るのは、この霊圧を抑えるくらいってわけ

だ

「俺たちはただ、祈るしか出来ないんだな……」

京楽と浮竹が言った途端、また一護の服が裂け、血が滲む。ズン、とまた霊圧が膨れ上がった。

精神世界

《はぁっ！》

「ぐっ」

ガキン！と刃と刃が混じり合う。お互いに刀を弾き返し、後方へ跳んで相對した。

《はっはあ！どうした、一護お！てめえの力はそんなもんかよお！》

白一護は布を掴むとブンブンと音をたてて刀を回す。

前と変わらず、奴の戦闘能力は高かった。ずっと戦いと離れていたせいか、まだ勘が取り戻せていないこともあり、一護は先程から押されっぱなしである。

っ、と汗が頬を伝う。

《はあ！》

ブン、と勢いよく刀が飛ばされる。それを一護は顔を少しズラして避けた。しかし、相手は二回三回と刀を飛ばしてくる。一護は避けるだけでは間に合わず、刀で相手のそれを弾き飛ばしながら後退した。

だが、白一護もそれだけでは終わらない。弾かれ、ビルに突き刺さった刀を瞬歩で掴むと、一護へ斬りかかる。

《お前えは弱え！一護お！》

ガキン！

《前に言ったはずだぜ！俺は牙より弱い王に付き従う程、甘くねえ！》

ガキン、ガキン！

《俺とお前は対等だあ。どっちも、王にも牙にもなりうる！今まで俺が牙でいてやったんだ。今度は俺が　！》

ガキン！

《王になる！》

白一護は交わらせていた刀を引き、距離を取ると、刃に靈力を纏わせ月牙天衝を放つ。

それに合わせて、一護も咄嗟に月牙天衝を放ち相殺する。

「はあっ、はあっ、はあっ」

肩で息をする一護に対し、白一護は見下すような笑みを浮かべると斬魄刀を肩に担いだ。

《何故、てめえが弱いか分かるか、一護？》

突然、話が変わって一護は訝しげな表情を浮かべる。

《戦いたいという体の奥底に眠る殺戮本能！昔、お前はその本能を受け入れ、俺と張り合う対等の存在となった！だが、所詮は対等！分かるか、一護！お前は俺を支配したんじゃない！俺が！支配されてやってたんだよ！》

「
っ」

《お前の身体だ。この器の魂はお前だからなあ、まあ、支配されるのも仕方がねえ。だが、お前はまた弱くなった！一護！》

ガキン！と刃と刃がまた混じり合う。

《身体の衰弱だとか、勘が鈍ってるだとか、俺はそんなことを言ってるんじゃない。今、お前の中にある罪悪感！》

「 !? 」

《一護。俺と戦っている時、お前は何を考えていた?》

「何を ! 」

《気付いてねえとは言わせねえぜ、一護お！てめえはずっと、てめえの仲間のことを考えていた!》

刃を持つ一護の力が弱まる。それを白一護は見逃さなかった。その隙を狙って白一護はがら空きの腹に蹴りを放つ。防御も何も無い無抵抗の一護の体は、意図もたやすく吹っ飛んだ。

《情けねえ姿だなあ、一護。なあ、何をそんなに罪悪感を感じている?忘れていたことが、そんなに申し訳ねえってか?》

「 黙れ…っ 」

ガキン!

起き上がりざまに振りかぶった刀がまた混じり合う。お互いに近づいた顔は対照的だった。にやりと吊り上がった白一護の口元が、また一護の神経を逆撫でした。

「 はあああ! 」

一護が刀を振り上げるも、しかし白一護は構えようとはしない。それに疑問を持つ前に、一護の刀は止まることとなる。

“何故、我等のことを忘れたのだ、一護”

「！？」

刀を薙ぐ手が止まる。瞬間、一護の肩に傷が走った。見れば、変わらない白一護がにまりとした笑みを浮かべて刀を前に突き出している。

反射的に後退し、肩の傷を見て確認するように敵を見据えた。

（今のは一体…）

一護は頭を振って、さっきの幻覚を消す。

（迷うな！勝つことだけを考える！）

でなければ、自分は死ぬのだから。

一護は瞬歩で白一護の前に移動すると、再び刀を振り上げる。しか

し。

“何故、我等のことを忘れた、一護”

「ルキア…!？」

やはり、手が止まる。と、その隙に白一護の刀が一護の胸を斬り裂く。反射的に避けるも、浅くはない傷から血が滲んだ。

「はあっ、はあっ」

(幻覚じゃ、ねえ…!)

確かに、先ほどまで白一護がいた場所にルキアに立っていた。責めるような悲しむような目を自分に向けて。

“貴様は約束したはずだ。魂は忘れぬと”

“じゃあ、何で俺達と再会した時に知らねえなんて言いやがった!”

“忘れていたんでしょう?一護”

“所詮、俺達の存在はてめえにとっちゃあその程度だったってことなんだな”

(ルキア、恋次、乱菊さん、冬獅郎…っ)

違う！俺は…っ！

白一護に刀を振るう度に現れる仲間達の言葉が、一護の胸に突き刺さる。そっだ、奴の言う通り。一護の中に罪悪感があるが故のこと。

比例して、白一護によって一護に傷が増えていく。

胸、足、手、肩。もはや、一護は満身創痍だった。

“一護、お前に知らないと言われた時の気持ち分かるか？”

“ずっと、俺達は信じて待ってたのによぉ！”

何故、忘れた。

信じていたのに。

「ぐあっ！」

白一護が薙いだ斬魄刀の切っ先が、一護の脇腹を切り裂く。血が、

その軌道をなぞるようにして地に降った。

ポタポタと、白一護の斬魄刀から赤黒い血が滴る。

「はあっ、はあっ」

斬魄刀を地面に突き刺し、支えにして一護は何とか立っていた。

《一護、てめえは強い》

白一護は言った。

弱い弱いと言ってきた白一護の、その突然の台詞の思惑が分からなくて一護は沈黙を守った。

《なら、どうしててめえは俺より弱いのか。それは、抱えるもの
違いだ》

「……」

《てめえの中に何故、罪悪感がある？そうだ、てめえにその仲間っ
て奴がいるからだ。なら、その原因をなくせばいい。そうだろう？
一護、てめえは強い。仲間なんて必要ねえ！》

白一護は高らかにそう言ったのける。

《アイツら如きに何が出来る？昔からそうだ。結局、奴らは死神代行だったためえに頼りつきり。そのくせ、奴らは俺達の足を引つ張る。足手纏いじゃねえか、仲間なんてもんは！その違いだあ、一護！》

“足手纏いがあるか、いないか”

白一護は肩に担いでいた斬魄刀の切っ先を一護へ突き付ける。

一護はもはや、気力を使い果たしたかのように、肩を上下に揺らすばかりで何の反応も見せない。

《俺はただ本能のままに戦う！守るべきものは自分ただ一人！何のしがらみもねえ！純粹に戦いを楽しむ、ただそれだけの意志だ！仲間の言葉一つ一つに惑わされるような軟弱なためえなんかとは、わけが違えんだよ！》

そして、白一護が刀を支えにして跪く一護に刀を振り上げた。勝利を確信した　、と。

ガキン！

《　　！？》

今まで、表情を崩さなかった白一護の顔に初めて動揺が走った。

刃同士が重なり合う。いつの間に構えたのか、一護は刀を頭上に構えて白一護の刀を受け止めていた。

「足手纏い、だと？」

一護は、俯いたまま何かを堪えたようにそう言う。

「馬鹿言ってるじゃねえよ」

反射的に白一護は後方へと跳んだ。一護と距離をとる。

ゆっくりと彼は立ち上がった。

「てめえの言う強さってのが何なのかは知んねえ。だがな、俺は仲間を守りてえから強くなるんだ！強くなりてえから、その本能つてやつを受け入れたんだ！それなのに！その仲間を足手纏いだとか抜かしてんじゃねえぞ！俺は！仲間がいるから強くなれるんだ！」

そう言った一護の表情は、何かを決意したように強かった。先ほどの迷いはない。

いつだってそうだった。お互いに助け合って、励ましあって、そうして強くなって、敵を倒してきたのだから。

「それに、アイツ等は強えよ。礼を言わせてもらっせ、てめえのおかげで思い出した。仲間との絆ってのは、そう簡単になくなるもんじゃねーよな」

何を臆病になっていたのだろう。

“仲間との絆ってのは、そう簡単なことじゃ断ち切れやしねーよ”

そう言ったのは自分だったのに。

一護は斬魄刀を静かに白一護へと向けた。

「悪いが、お前にはまだ牙でいてもらっせ。俺は、生きてアイツ等に謝らなきゃなんねーんだ」

白一護は舌を打つと忌々しげに顔を歪める。

《いいぜ。ただし、それは俺に勝ってからの話だぁ！》

同じように白一護も刀を前に突き出して構えた。二人は相手を見据えたまま左手を右腕に支えるように置く。

空気が止まった。

「卍解　！」

双極の丘

「く、そ…っ」

「おいおい、これ以上はさすがにちょっとヤバいんじゃないの？」

碎蜂が苦々しく顔を歪め、京楽もいつもの飄々とした表情をひきつらせた。

一護を中心にしたクレーターが、さらに範囲を広げ、地面にヒビをつくる。彼の体から流れる血が、その筋に沿って伝っていく。

あれからも止まることのない一護の霊圧は、収まるどころかさらに威力を増していた。

今も何とか意識を保っているが、霊力・精神共に限界が近付いているのは各々十分自覚していた。

しかし、予想はしていたものの、実際に体感して初めてその凄まじさを痛感する。

その中で唯一、元柳斎一人が厳しい表情を浮かべるのみで焦りを見せていない。

敏感になっていたからだろうか？

ピシッ。

小さくも、その音は彼等の耳に届いた。

「な、に…っ」

冬獅郎は一護に遣っていた目を上にやり、その青緑の目を大きく見開いた。

空間に入ったヒビ。

それは、ほんの数センチではあったが、確かに何も無いように見えるそこにヒビが入っている。

「そんな、馬鹿な…っ」

浮竹も、冬獅郎の視線を追った先にあったそのヒビに驚愕の表情を浮かべる。

「結界にヒビが入っただど！？そんなことが、あり得るといつのか…！？」

碎蜂の言葉は、そこにいる者達の心の声を代弁していた。

斬覇天穿百羅結殺。文字通り、例え百の修羅が攻めようとも、まるで攻撃を殺したかのように何にも動じない、死神が用いる最強の結界。

それを、たった一人の死神が壊そうとしている。

その霊圧の凄まじさに驚くと同時に、彼等が何よりも驚いたのは、それを封じていた一護自身。

こんな霊圧を無理矢理封じられれば、体が衰弱するのも当然というものだ。

もし、この結界がなかったら、今頃自分達はどうなっているのか。それが、呼吸をするよりも簡単に想像できてしまう。

「元柳斎殿」

これからどうなされるのか、そういう意味を込めて、狛村は目を睨めてヒビを見る山本へ呼びかけた。

「卯ノ花隊長、黒崎一護をどう見る？」

しばし黙した後、山本は卯ノ花へそう問うた。

その瞬間に、また一護の体に傷が走る。それに、卯ノ花は痛ましげに眉を寄せると答えた。

「もう、それ程時間はないでしょう。封印が解けてすでに三十分、黒崎さんが耐えられるのは、およそもう三十分といったところでしょうが」

「三十分……」

浮竹はその長いと言っていいのか、短いと言っていいのか分からない残り時間を繰り返した。

三十分後、もしかしたら、彼はそのまま永遠に目を覚まさないかもしれない。

そんなことを考えた時、浮竹は悲しみと同時に自分の部下を思い出していた。

彼女はと思うだろうか。

叶うならば、二度と自分は彼女が悲しむような残酷な台詞を口にたくはないと思う。

それが、隊長としての責務だとしても、そう願ってしまうのは許してほしかった。

「ふむ。黒崎一護の霊圧はいまだに増大している。結界が保つのも、約三十分じゃろう」

ピシ。

静かな空間に、小さな音がやけに響いた。

結界が破壊された時、この尸魂界はどうなるのか。あまりに巨大すぎる霊圧は、現世より耐性はあるものの、あらゆる魂魄に影響を与える。

「十年という年月は、我々が感じる以上に長いものじゃない」

冬獅郎は一護へと目を向けた。皮肉にも、尸魂界をも背負うことになっってしまった一人の少年に。

「ま、一護くんなら何とかなるでしょ」

「京楽？」

張り詰めた空気の中に発せられた彼の台詞に、皆の目が向けられる。

「何て言うかさ、一護くんが阿散井くんやルキアちゃんに一言なく死ぬかなあって」

記憶を取り戻さないまま、あの約束も本当の意味で果たされぬままに。

「一護くん、そういうの嫌がりそうじゃないの」

「……………そうだな」

「日番谷隊長！」

「少なくとも、約束を違えるような奴じゃねえだろう」

星の綺麗な夜の下で言った、あの言葉を忘れない。

いつだって、不可能を可能にしてきたお前だからこそ、俺達は信じられる。

白哉が、肯定するようにわずかに顔を伏せた。

「…ああ」

浮竹はまるで、あの頃を思い出すように目を伏せると、いつも穏やかな笑みを浮かべて頷いた。

「ペい！皆、結界に集中せんか！」

見計らったように山本が注意を促す。

「気を抜くでない。ただでさえ、脆くなったこの結界を保たせるには、より靈力を注ぐことが必要じゃ。我々護挺十三隊の威信にかけ、この尸魂界を守らねばならぬ。皆、黒崎一護の靈圧が元に戻るまで、この結界を維持に尽力せよ！」

各々の顔に、新たに力が込められた。のしかかる圧力さえ忘れ、境界にさらに霊力を注ぐ。そうすれば、ピシと小さく音をたてながら少しずつヒビを広げていた音が止まる。

だが、これもいつまで保つか分からない。

失われていく霊力に疲労は確かに積み重なり、さらには巨大な霊圧に全身が悲鳴をあげている。

(早くしろよ、黒崎…っ)

タイムリミットはあと三十分。

男を追った先、やはり彼は空座町の外れにある山へと迷うことなく入って行った。それを見届けて、ルキアは空に足を止める。

（こんな時間帯に、一体何の用だ…）

明るい時間ならまだしも、もう日が暮れるというこの時間にただの人が入るには、山は危険だ。そもそも、山に入る理由がルキアには見つからない。

始めに紫水に言われたせいもあり、男に対するルキアの疑念は増していった。

話に聞いていた現世に出現する虚の異常、一護が現世にいた間に施された封印、何かしら関わりがあるのかもしれない。

そう、ルキアが思うのも無理はなかった。

ルキアは空からふわりと飛び、音もたてずに地面へと降り立った。目の前にはぼつかりと口を開けたように、山への入り口がある。木々が密集しているせいも、夕陽の橙色の日差しは中まで届かず、薄

暗い。

それがまるで、自分を闇へと誘い込むように見えて、ルキアは険しく眉を寄せた。

カサリ。

足を一歩踏み出す。

全身が薄暗い陰で覆われた。後ろを振り返ると、橙色の空と、同じ色に染められた街が見える。再び山の中を見れば、薄暗い色が目に入った。

それが、自分と街が断絶された全く違う空間にいる感覚にいるような気分になる。

どこか不安な気持ちになるのを振り払い、ルキアは足を進めた。

鳥の鳴き声と羽ばたく音、風に揺れる木々のざわめき。夕暮れ時の山は、どこか異次元染みている。

ルキアは、狩りをする人間でもいるのか、整えられた道を歩きながら神経を尖らした。

探すのは、あの男の霊圧。

(……やはり、駄目か。先程探った時も、普通の人間と質も大きさも何ら変わりなかったからな)

思い出すのは、茶渡とインコの事件のこと。

（私にも思ったが…、そう簡単に出来るものではないか…）

ふ、とルキアは小さく笑う。一護はインコの小さな霊圧を、霊絡の視覚化という離れ技で探り当ててみせた。

本来、上級の死神にしか出来ぬ高度な技。

この数十年の年月を、ルキアもただのうのうと生きてきたわけではない。

技を磨き、自分なりのやり方で己を高めてきたつもりだが、それでも死神に換算した年月云々で出来る程、甘いものではなかったらしい。

（ふ、まさか、こんなタイミングで奴の力量を実感させられとは…。まったく、いちいち勘に触る奴だ）

そう思うと、ルキアは途端に一護に対する怒りがむくむくと湧き上がるのを感じた。

（だいたい、一護も一護だ！私と約束を交わしておきながら、会ったことがないなどとほざきおって！だいたい、こちらに来たらまず

は兄様にも挨拶をすべきであろう！忘れていたからといって許されるものではないわ！)

心なしか、歩幅は大きくなり、場所も忘れてガサガサと踏みつける足に草が乱暴な音をたてる。

(くそ、一護め！記憶を思い出した暁には二十個限定幻の餡蜜を一周間分奢らしてやる。いや、それではまだ気が収まらない…、そうだ、以前、松本副隊長に教えていただいた老舗の、数量限定で販売されているという煎餅を買わせるのも良いな…)

そこまで考えて、ルキアは荒々しかった足を緩めた。ガサガサと鳴っていた草を踏む音が小さくなり、静かな空間に戻る。

(そうだ。記憶が戻ったら、全部奢らせてやる。だから)

だから、生きて、また戻ってこい、一護…。

三十分も歩いただろうか。ルキアは足を止めた。

別に、道がなくなっているわけでも、その先が崖になっているわけでも何でもない。

何の変哲もなく、狭い山道は続いている。しかし、ルキアは怪しむように眉をひそめ、そつと手を前に伸ばした。すつとなぞるようにする手の仕草は、まるでそこに壁があるかのようだ。

いや、“まるで”ではない。事実、そこには壁があった。気づかなければ、何ら変わりのない道を歩くことも出来るのだろう。ただし、その際にどこへ辿り着くのかは分かったものではない。

結界、本来あるべき空間と今の空間を遮断している。本来ならば気付けなかったのだろうが、生憎とルキアは鬼道には自信があった。

(どうやら、紫水の懸念は間違いではなかったようだな)

ようやく手掛かりを見つけた…！ルキアは口元に小さく笑みを浮かべると、すぐに表情を引き締めて腰の斬魄刀を抜く。

こういった結界は“気付かれぬ”という点では優れているが、強度に関しては案外柔い。気付くことが出来さえすれば、あとは簡単である。

案の定、ルキアが滑るように斬魄刀を下に動かせば、何もなかった空間に中から光が零れたような筋が出来た。

それをさらに、横、縦、横と入り口を作るように斬っていく。すると、四角く切り取られた部分は霧散するように消え、中には別の景色が見て取れた。

一番始めに見えたのは、寂^{サビ}れてポロポロになった赤い鳥居。それは、洞穴を守るように建っていた。

「ここは…」

ルキアは結界をくぐって中に踏み入る。今度は、今までいた山道の景色が、額縁に縁取られたように見えた。

(あの洞穴か)

迷うことなく、ルキアは洞穴へと足を進める。目の前まで行ったとき、ぞっと背を撫でるような寒気がルキアを襲う。知らず、冷や汗が頬を伝った。

と、その時。洞穴の中からぶわあっと風が吹いた。その勢いにルキアは片足を後退させ踏ん張り、咄嗟に両腕で顔を庇う。

それは直ぐに止み、ルキアはそっと両腕を下ろした。

「な、何だったのだ…」

体験したこともない突風にルキアが驚いていたところに、その感覚は襲ってきた。

ドンツと空気が重たくなる。ざわざわと落ち着かない嫌な感覚。それはルキアが死神となってから何度も味わってきたもので、しかしここまでの圧迫感を感じたことは片手で足りるほどだ。

その感覚で何が起きているのか予測はついた。しかし、俄には信じがたくて、ルキアはゆっくりと振り返る。

そして、息を呑んだ。

「な、んだ…」

点々と空を埋め尽くす、それ。

「何だ、この虚の数は…っ」

そう、ルキアを覆うように空に現れた嫌な感覚の正体。それは、青を埋め尽くくさんばかりの虚の大群だった。

「驚いたかい？」

「　　つ、貴様！」

突如として聞こえた声に、ルキアは弾かれたように振り返った。

「貴様はあの公園にいた男だな？」

洞窟の中から現れた男、しかし首から上は生憎にも陰となって視認することは難しい。

しかし、ルキアにはすぐにその男が誰なのか分かった。服装からというのものもあるが、しかし、何よりも彼の放つオーラ　、得体の知れないものを感じさせる雰囲気によるものなのだろう。

公園にいたときには馴染んでいた彼の雰囲気は、この逢魔が時になって初めてその異彩さをルキアに感じさせる。

ふ、と小さく笑うと同時に、彼は一步前に出た。

「愚問だね。そんなもの訊くまでもない。君はずっと私の後をつけていたじゃないか。君は、私に双子の兄か弟がいるとも言っのかな？それとも、ここにいる私はそのドッペルゲンガーだとも？」

丸眼鏡は光に反射し、瞳を窺うことは出来ないが、口の端を小さく吊り上げた表情は嘲笑うようだ。

ルキアは不快げに眉を顰める。

「では、別の質問をさせてもらおう」

どうぞと言つように男は手のひらをルキアに差し出すような仕草をする。

おちよくるようなその態度にますます、ルキアは不快を募らせた。

「貴様は黒崎一護という男を知っているか？」

「…ふむ」

男の空気が変わった。

「君は彼の知り合いかな？」

「……知っているのだな」

「ふ。だとしたら、君はどうするんだい？」

ふう、とルキアは一つ息をついた。

「それこそ愚問だな」

カチャリ、とルキアは鯉口を切った。少し露わにした刀の身に光に反射して、男の顔を照らす。

「貴様を倒すまでだ」

斬魄刀・袖白雪の切っ先を男に突きつけ、ルキアは鋭く睨み付けた。それでも尚、男は余裕を崩さない。

(この男…)

刀を突き付けているのはこちらだと言うのに、何故自分が焦っているのか。

つうとルキアのこめかみを冷や汗が伝う。

「早計だな。私はただ問うただけなのだが。いきなり、斬魄刀を向けてくるとは、どうやら見た目と違って野蠻のようだ」

「私は自分の勘を信じる質タチでな。そもそも、これだけの虚に囲ませておいて、今さらはぐらかすつもりもないのであろう?」

「……なるほど。どうやら頭は切れるらしい」

男は眼鏡をくいと押し上げた。

「…最後に問おう」

構えた足を滑らせれば、砂がザリと音をたてる。いつの間にか沈んだ陽の代わりに月が昇っていた。

「貴様は一体、何者だ！」

「……………」

ふ。

小さな唾いが耳に届く。

「亡霊…」

「？」

「何者かなど、お前が知る必要はない」

「何？」

「知ったところで、お前の辿るべき道は一つなのだから」

そう言って、男は静かに手を上げる。

ざわり。今まで動かずにいた虚が興奮したようにざわめいた。

(この男、虚を操っているのか…!?)

俄には信じがたいが、今まで静かであったこともこの男の指示だと思えば辻褃が合う。

やはり、一護の件も虚の件もこの男が関わっていると見て間違いはないだろう。

ルキアは目の前の男に焦点を当てる。

「小娘ごとき、私が出る幕ではない。せいぜい、醜く足掻け」

「!? 待て!」

背を向け、再び洞窟内へ戻って行く男を追おうとした時、虚の方向が地鳴りのように黒天へと響き渡った。

「…くっ」

ルキアは洞窟に向けようとした足を止めて、虚の群れへと向かい合う。刀の切っ先を地面へと下ろした。

キン、と空気が冷える。

「舞え、袖白雪」

自分と敵との戦い（後書き）

遅くなりました、申し訳ありません。ですが、いつもよりは長めかな。

初の男との接触はルキアになりました。まだまだ、正体は秘密です。

ここで、お知らせです。

まことに勝手ながら小説タイトルを変えさせていただきました。実は、よく「黒幕は藍染だったりですか？」と感想をいただきます。

小説を楽しみにしていただいているようで、とっても嬉しいのですが、ここで気がつきました。「藍染様の斬魄刀って…、あれ？」と

そうです、まさにこの小説のタイトルですよ。すみません、私、気付いてなかったんです。

別の意味を込めてたんですけど、もう本当に申し訳ありません。勉強不足のせいです！

でも、藍染様も解号あんまり言わない……、はい、すみません。

ある意味、これもネタバレになってしまっのかな、と悩んだのですが、やっぱりすつきりしないので、本当に私自身の勝手ではありませんが、タイトルを変えさせていただきます。

重ねて謝罪いたします。

それでも最後までお付き合いいただければ嬉しいです。

申し訳ありませんでした。

晴香

決着の行方

精神世界

ドオン！とぶつかつた斬撃が、辺りを揺らし風を巻き起こす。

煙が辺りを埋め尽くし、それが晴れた時、現れたのは相対する二人の一護だった。

そんな二人の上に広がるのは、対照的な白と黒が混じり合ったような灰色の曇り空。一護は呼吸を落ち着けると、視線を目の前の白一護から空へと移した。

(どういうことだ…？)

気になってはいた。自分の心を表すというこの世界の空が、曇っている理由^{ワケ}。

きつと、仲間に対する罪悪感が曇らしていたのだろうと思っていた

が、それについてはもう自分の中で決着がついている。

だというのに、空は晴れるばかりか今までにないほど曇り、雲は渦巻いていた。

遠くでは、ゴロゴロと雷まで鳴っている。

《どうやら時間がねーみてえだなあ》

同じように、遠くの空を見ていた白一護が言った。

「時間がない、だと？」

にいと白一護は笑う。

《斬月の野郎が言ってただろう。てめえには二つの選択肢を迫られているってよお》

白い指が二本立てられた。

《いたって分かりやすい選択肢だ、生きるか、それとも死ぬか。生きるにはてめえが俺を倒すしかねえ。だがもし、てめえが俺を倒せず、このまま時間が過ちまえば、てめえの体は封印の負担に耐えら

れず、お陀仏ってわけだ》

その時間がねえってことだよ。

白一護はそう言って締めくくった。

「だったら、その時間ってのはあとのくらい残ってた？」

一護は問う。

白一護はもともと上がっていた口の端をさらに吊り上げた。

《そうだなあ。あと、五分ってところか》

「な…っ」

ドオン！と腹の底に響くような稲光が二人の間に落ちた。一拍遅れて閃光が瞬く。

それに照らされた白一護の笑みが、不気味に一護の瞳に映った。

《てめえが死ぬのは、俺としても困るんでな。早々に決着をつけようじゃねえか》

一護は、焦りの中で考える。時間がない。それを表すかのように荒れる天氣が、まるで自分を急かすようだ。

一護は顔を俯けた。

それに、白一護はふと笑う。

《怖じ気づいたかあ？一護お》

白一護が斬魄刀を構えた。怖じ気づいたのたのなら、それでももう構わない。自分が王となり、奴が騎馬となるだけだ。

ただ、こんな腑抜けが今まで自分の王だったというのが少し癪だが。

《はあっ！》

ガキン！

《 ！？ 》

意外にも、一護は白一護の斬魄刀を受け止めていた。それに、白一護はわずかに目を見張るも、はっと笑いすぐに腕に力を込める。

しかし、力は拮抗。ギリギリと刃が軋み、踏ん張る足がザリと地面を擦る。

ドオン！と雷が地に落ちた。天気はますます荒れ、突風が着物をはためかせ、全てを浚わんと吹き荒ぶ。

《てめえが死ぬのが早えか、決着がつくのが早えか。こりゃ、五分つてとこ、！？》

白一護は一旦刀を退こうとして、しかし出来ないことに目を見張る。

嘲笑うような口元に動揺が走り、一護を見れば食いしばった歯が見える。ギリギリ、とさらに軋み合う刃の音が大きくなった。

「俺が死ぬだと？ふざけんじゃねえぞ？」

ピシャーン！と雷が鳴る。

「てめえを倒しやいいと思いきや、時間がねえだとかごちやごちやややこしいっいたらありやしねえ…っ」

はあ、と息をついて顔を上げた一護の目は腑抜けとは言えなかった。

「言つたる。俺は謝まらなきゃなんねえんだよ！こんなところで時間を喰って死んじまつたら、ルキアや恋次に顔向け出来ねーじゃねえか！」

ギリギリと白一護の刀は押されていった。ぞわりと一護の斬魄刀に月牙が纏わりつく。

「はあ、あああ！」

見開く白一護の瞳に、赤と黒の霊圧が映る。それは、次第に彼の視界を埋め尽くしていった。

「月牙っ、天衝おおお！」

ズドオン！と鳴り響いた爆音は、ちょうど落ちた雷の音さえも巻き込み轟いた。

もうもうと立ち込める煙。はあはあと荒く呼吸する一護は、確かに手応えを感じながらも安心することは出来なかった。

ゆらり、と煙の中から影が見える。咄嗟にわずかに後退し、刀を構えて警戒を高めた。

《はっ、やるじゃねえか》

煙から見えた白一護の口元がにまりと笑う。

黒灰色の空に渦巻く雲に、ひびが入っていた。

尸魂界・双極の丘

「くそっ、黒崎一護はまだか！」

自らの靈力を限界まで高め、結界へと注ぐ狛村は、流れる汗もそのままに齒を食いしばった。

狛村だけではない、碎蜂も、京楽も、冬獅郎も、皆がすでに平静すら装えないでいた。

彼らの張る結界は、何も知らぬ者でさえも、もはや限界だと分かる程にポロポロである。

透明だった空間には細かなヒビが入り、そこに天まで届く程に聳える壁があることが知ることが出来る。

「今、どのくらい時間が経ったんだっ？」

問うたのは浮竹だった。

彼らにはもう時間感覚などというものは残っていない。疲れから言えば、三十分どころか一時間以上経った気分だ。だが、一護のことを思えば、五分も経っていて欲しくない。

そんな複雑な心境が時間の感覚を狂わせる。

「…すでに、あれから二十五分というところでしょうか？」

卯ノ花が言う。沈黙が重かった。

「あと、五分…っ」

浮竹がぼつりと呟いたのを冬獅郎は聞きながら、一護を見た。

(このままでは…っ)

く、と思わず声を漏らす。

「いよいよ、まづくなってきたねえ」

いつも飄々としている京楽が、焦りを浮かべて言った時、ピキリとまた結界のヒビが広がる音が鳴る。

しかし、今回はそれだけで収まることはなかった。

ピキ、ピキピキピキ。

徐々にその小さな音は重なり、辺りに大きく響いていった。天まで届くその結界にひびの広がる音は、天から降ってくるように冬獅郎たちを包む。

「何ということだ…っ」

空まで続くひびを見上げて、流れる汗もそのままに碎蜂は声を上げ

る。

「カウントダウン開始ってところだろうネエ」

「んな、呑気なこと言ってる場合じゃねえだろ」

「むう…っ、皆、気を緩めるでない。最後まで、己の靈力を限界まで注げい！」

山本の言葉に、皆が一斉に靈力を注いでいく。しかし、それでもひびが入る小さな音の波は止むことがない。

そんな中、ハラハラと何か降ってくるのを冬獅郎の視界に掠めた。

「
！？」

それは、結界の破片だった。そのことが分かった瞬間、ドン！と冬獅郎たちにかかる靈圧が重くなる。見れば、上の方から結界を突き破り靈圧が漏れ出しているのが見て取れた。

バキッ。

さらに二カ所、三カ所と穴は増えていく。

「うっ」

小さい声を上げて膝を突いたのは碎蜂だった。他の隊長格もまだ立ってはいるが、足を踏ん張るだけで、霊力を注ぐどころの話ではない。

「むう…っ」

山本も、崩れ始めた結界を元に戻すことなど出来るはずもなく、苦しげに声を漏らした。

バキバキバキ。

雨のように降り注ぐ破片、比例してのしかかる霊圧も増していく。

「くそ！」

「おいおいおい、とんでもないね」

「まさか、ここまでの霊圧だとは…っ」

「このままでは…っ」

一護から溢れ出す霊圧が、結界を壊そうとするかのように膨れ上が

ったのが分かった。

バキバキバキバキ。

「
っ」

ヒビとヒビの隙間から青白い霊圧の光が漏れ出す。

「結果が…！」

「もはや、時間を稼ぐことすら不可能か…！」

バキバキバキ、バキンッ。

息を呑む。

そして、努力もむなしく結界は彼らの目の前で弾け飛んだのだった。

びゅお、と吹き荒んだ風が煙を払った。その隙間から見えた白一護の口元がにまりと笑う。

《はっ、やるじゃねえか》

聞こえたのは不敵な笑い声。

それに、一護はくそっと思わず悪態をついた。

(ダメだったっていいのかよ！もう時間がねえってのに！)

しかし、次いで見えた敵の姿に一護はハツとする。

見えた奴の足元は、すでにふくらはぎまで消えかけていた。

自分の持つ斬月と白一護の黒く染まった足先は、溶けたように空を流れ、間で交わっている。それは、斬月の切っ先を作り上げていた。

それは、本来一つであった斬月と白一護が再び一つになるうとして
いるかのようだ。

《まあ、死なれるよりはマシか。仕方ねえ、今はまだてめえの騎馬
でいてやるよ》

白一護は、もう半分消えかけながら嘲笑を浮かべて言った。

《だが、忘れんじゃねえ。もしまた、貴様が俺に弱さを見せたその
時にゃあ、てめえを殺して、俺が王になってやる！》

最後、そう叫びを残して白一護はとうとう消えた。

「勝った、のか…?」

白一護が消えた場所を見ながら、一護は半ば呆けたようにそう呟い
た。

その手前に突き刺さる斬月に視線を移し、軽くなった右の拳をぎゅ
っと握り締めてから斬月を抜き取る。

未だに、戦いの緊張が抜けない。それは単に、戦いの興奮が胸をく
すぶっているからか、はたまた嵐のような空のせいなのか。

そんな、どこか急かすような空に、一護ははっと思い出す。

そっだ、時間は？

勝った安心で忘れていた、“時間がない”という現実。

再び、空を仰いだ。蜷局トケロを巻くおどろおどろしい雲、轟く雷鳴。ピルの淵に立てば、生き物のように鼓動する球体がそこにはあった。

「間に合わなかった、のか…？」

力が抜けたように一護はその場に膝をつく。ギリと湧き上がる悔しさにコンクリートにしがみついた。

「間に合わなかったって、いつのかよ…！」

生きて帰れなければ、白一護に勝った意味がない。生きて、ルキアに恋次に、みんなに謝る。その決意をどうすればいい。

少し遅くなったけれど、あの約束を自分は守ると、何より己に誓ったのだ。

「ふざけんじゃねーぞ…、ちくしょうー！」

一護が声を張り上げた、その時。

偶然だったのだろうが、空に渦巻いていた雲の中心から空色が見えた。それを発端に光が差し込み、雷は遠くなる。

みるみると空を覆っていた灰色が彼方へと流れ、見慣れた空色が一護の上に広がっていた。

見開いた琥珀に映るのは、澄んだ青。

一護の意識は、そんな変化を捉えてからふつりと途切れた。

「……………」

結界が弾け飛んだ。その光景がまるでスローモーションのように見え、皆が絶望に包まれた。

閉じ込められていた十年分、靈王にも匹敵する靈力が尸魂界にのしかかれば、一体どうなるのか。

前例がない故にどうなってしまうのかは分からないが、多大なる影響を与えてしまうことから逃れられない。

ただ、少なくとも、それが良くないことだということは分かる。

冬獅郎はドクリと脈打つ鼓動を感じながら、覚悟を決める前に訪れるだろう重圧に冷や汗を流した。

しかし。

「……………」

何も起こらない。

大きく見開いた青緑の目に映るのは、ただただ空から降る結界の破

片だけ。

弾け飛んだまま、空は変わらず百群の色に澄み、振り返った先に広がる瀟霊挺にも何の変化もなく、死神たちが倒れ伏している。

「な、んだ…？」

「何も起こらないねえ」

「一体、何が…」

その異変を感じ取ったのか、呆然としていた隊長たちもようやく状況に疑問を口にした。

結界が破れたというのに、さっきまでの巨大な霊圧を微塵も感じない。

今までの重圧が嘘のように、頭上に広がる空は普段と変わりはなく、耳には静かな風の音しか飛び込んでこなかった。

「そつだ、一護くんは！」

ハッと我に返った浮竹が言えば、すでに卯ノ花は一護の側にしゃがみ込み、容態を診ていた。

自然と皆は緊張に息を潜める。

「……生きています」

しばらくして、卯ノ花はそう言った。

安堵した空気が辺りを包む。素直な喜びを表情に出したのは浮竹と京楽だけであったが、空気は確かに生き返り、喜びや安堵が感じられた。

「ですが、まだ油断は許されません。彼の身体が封印によって衰弱していることに変わりはないのです。まずは、その回復を」

卯ノ花の言葉に再び、皆の顔が引き締まる。しかし、正直言って彼らの疲労も半端ではない。誰が運ぶか、そんな時にまた新たな霊圧が加わる。

「俺が運ぶ」

「更木隊長……」

斬魄刀の解放が出来ないため、作戦から外されていたのだが、果たして今まで何をしていたのか。

タイミング良く現れた彼に、冬獅郎は珍しく感謝の念を抱いた。も

ちろん、表情には出していないが。

「ずいぶんとボロボロみてエだからなア。万が一、落とされて一護が死んじまツたら、勝負出来なくなつちまう」

その言い方に碎蜂が不快げ顔をするが、運ぶ程の余力がないのは事実のため反論はしない。

「それでは、更木隊長。四番隊までよろしくお願いします」

「あア」

あとに残されたのは、大きく抉れたクレーターのみだった。

t o b e c o n t i n u e .

第十一章 千鳥草―シンライ―

決着の行方（後書き）

ようやくここまで来ました！長かったような、短かったような…。

量は他の章よりもかならず長くて、HPでは急遽三章にわけさせていただけました。

一護が記憶を取り戻す場面は、この小説での一番大切な部分になるので、その分これで良かったのかなという不安もあります。

本当はもっと一護の心情が上手に書ければいいんですが、自分の文章力ではこれが限界でした…！

“キャラらしさを失わずに”がモットーなんですけど、出来てましたかね？

ですが、最後更木隊長出せて良かったです！

楽しんで読んで下さっていたら、嬉しいです。

二度目の再会（前書き）

第十二章 実葛 ―サイカイ―

二度目の再会

長い長い夢だった気がする。たゆたう水の中で、ずっと自分の記憶を辿っていたような。

初めて死神になった時、母の仇に敗れた時、仲間が出来た時、挫けそうになった時、別れの時。

楽しくて、辛くて、でも温かなそんな日々。

いきなり、命と命の賭け合いをする戦場に引つ張り出されて、それでも真つ直ぐ前に進めたのは、何より仲間という存在が大きかった。

目には見えないけれど、鋼より鎖よりも強く結ばれた絆は、幾十年の年月が流れようが、記憶をなくそうが切れるようなものではない。

それ程に、仲間というものは自分にとってかけがえのないものだった。

だから、信じて疑わずに自分は約束を口にした。寂しくとも、悲しくはなかった。

“ 待っていてくれよな。死神になって会いに行くからよ ”

また、会えると信じていたから。

それなのに、再会して“会ったこともない”“知らない”そう言われた彼らは、初めて会ったような反応をされた彼らはどんな気持ちだったろう。

その気持ちを押し殺して、接してきた彼らはどんな気持ちだったろう。

きっと、自分なら堪えられない。少なくとも、一発殴っているに違いない。

何せ、約束したのは自分なのだから。それを信じてきていたなら尚更だ。

奴に言われた通り、思い出した時は正直、罪悪感で顔も会わせられない。そう思ったけれど、絆はそう簡単に切れるものではないと思いつけたから。

だから、今度こそ。

本当の意味でアイツらと　。

目に入ったのは、清潔感のある白色と光。

まだ長い夢から醒めないようなボンヤリとした視界と頭に、一護は眉間に寄った皺をさらに深くした。

まるで、かつてのあの日のように壁越しに聞いているような会話を耳に拾いながら、一護は軽く辺りを見回してみた。

窓、カーテン、ベッド、そして、カラフルな赤や銀の髪色。

「ここは…」

小さく掠れた声で呟いた一護の声を拾ったのだろうか、今まで会話に夢中だった彼らは、弾かれたように振り返った。

まだ、ボンヤリとしている中で、その目立つ赤色が近付いてくるのが分かる。

「一護！目え覚めたのか!？」

その声が響いた瞬間、一護の脳内はクリアになった。

そうだ、こんな目立つ髪色、自分の知り合いに一人しかいない。

「恋、次…」

「…っ」

ゆっくりと恋次の目が見開かれた。後ろにいた冬獅郎も、浮竹も、京楽も、同様に驚きを見せている。

「一護、てめえ、記憶 ……」

封印が解ければ記憶も戻る。けれど、いざそれを実感すれば、動揺を抑えることは出来なかった。震える声は、一体何の感情によるものなのかは、恋次にさえ分からない。

一護は驚きに満ちる彼らの顔を見て、ゆっくりと体を起こした。気を失う前ほどたるさはなかったが、代わりに白一護につけられた傷がズキズキと痛む。

「おいっ、あんま無茶したら ……」

「大丈夫だって」

寝かせようとする恋次の手を一護は制す。それに、わずかに眉をかめた恋次に、一護はほんの小さく口元に笑みを浮かべた。

「てゆうーかよ、いつから、そんな心配性になったんだ？」

「ああ！？それは、てめえが」

「そうだな。俺のせいだ」

恋次はピキリと額に青筋を浮かべたが、一護のその表情に言葉を飲み込んだ。

「……一護？」

自分を責めるようなその表情に、恋次たちは驚きも喜びも引っ込めて、真剣さを見せる。

「……………あの日、ルキアと約束したこと、絶対お前たちのことは忘れねえって、自信があった」

一護は、一つ一つ言葉を選びながらそう切り出した。

「忘れねえ、はずだったのによ……」

「……………」

俯く一護の表情は、髪に隠れて恋次たちからは見えない。

「……………」

そこで、一護の言葉は途切れた。謝る、そう決めたのはいいもの、こうして対面してしまうと何て謝ったらいいのかわからなくなってしまう。

何か言おうとして口を開き、また閉じるを繰り返す。

わかりかし、物をはっきりと言う一護には珍しい。それは、恋次たちにしても同じことで、どこか違和感を感じていた。

それと同時に、彼が何を言いたいのかわかる。

はあ、と恋次が大きく息をつく和一護の肩が少し跳ねる。

「ふん！」

「いっ！」

ゴン！といい音をたてて、恋次の拳が一護の頭へ振り落とされた。

叫びも出ない痛みにも、一護は生理的な涙を浮かべて頭を抱える。

「てめ…っ、何しやがる！」

今まで出てこなかった声は、すんなりと喉を通り、恋次へと怒鳴った。

当の殴った本人といえ、ひらひらと手の平から小さな痛みを和らげながら、涼しげな顔だ。

「一護、お前、俺たちが怒ってると思ってるんだろ？」

ふ、と一護の表情から怒りが抜けた。

「……………怒って、ねーのか？」

「怒ってるに決まってるんだろ」

「な…っ」

紛らわしい言い方に、一護は驚くと同時に再び苛立ちを覚え、しかしやはり最終的には居心地悪そう、申しわけなさそうな表情を浮かべた。

それを、恋次は正しく読み取ると口を開く。

「久しぶりに会ったと思えば、知らないだ、何だ。ムカつくこと言いやがって、魂は忘れねえとか言っておきながらふざけんじゃねーって話だ」

一護は顔をさらに俯けた。言い返せないし、そんなこと思わない。その通りだ。

一度は振り切ったはずの罪悪感はいくもくと一護の中で湧き上がる。もう二度と、元の関係に戻れないような気がしてしまった。自分の中に罪悪感がある限り、仲間と対等な関係になることを阻んでいくだろう。

「でもよ」恋次の声音が変わる。

「仲間との絆ってのはそう簡単に切れやしねえんだろ？」

一護の目がゆっくりと見開かれる。それは、自分が白一護に対して言ったのと同じ言葉。けれど、こうして聞かされて、それは改めて一護にじわじわと染み渡る。

「始めは、副隊長なんて呼ばれるわ、敬語を使われるわで、何だ？正直、違和感っつーか。でもよ、やっぱりてめえはてめえだった。記憶がなかるーが、俺たちの知ってる黒崎一護だったぜ」

「そつだな」

そこで、黙って様子を見守っていた冬獅郎が初めて口を開いた。

「あの日の夜、てめえは俺に大切な記憶を取り戻すと言った。てめえは、無意識でも約束を守ろうとしていたんだろう」

「っーことだ」

気付けば、一護は顔を上げていた。浮竹は暖かな笑みを浮かべ、冬獅郎は相変わらずの仏頂面で、恋次はにっくと口端を上げる。

「てめえは今、こうして約束を守ってんだ。死神になって、生きて、俺たちと会ってる。確かに、あの時の言葉はムカついたけどよ、仕方ねーから、さっき殴ったのでチャラにしてやる！」

「恋次……」

だから、んなシケた面なんざしんでんじゃねえ！

そう言った恋次は少し照れくさそうだったが、それに一護はふと小さく笑みを浮かべた。

「おう！サンキューな、恋次！」

「なっ。んだよ、急に。気持ちわりーな！」

素直に礼を言えば、恋次は照れてか少し身を引いた。前は、よく言い合っていた仲だっただけに、こうしたやり取りは気恥ずかしかったのだろう。

「ははは！いやあ、こうしたやり取りも懐かしいなあ！」

「浮竹さんも何か久しぶりだな！」

「そうだな。時々会ってはいたが、やはり敬語でない一護くんが一番君らしい」

「そうか？じゃあ、敬語じゃなくてもいいか、冬獅郎？」

「日番谷隊長、だ！ったく、ダメに決まってるんだろ。てめえはもう、代行じゃねーんだぞ」

「そうは言ってもなー。なんか慣れねーんだよ」

「記憶がない時は使ってただろ」

「それはそれ、これはこれだ」

「まあ、俺も今更一護に敬語を使われるのは、ちょっと…」

「俺も構わないぞ！」

「だろ！？」

「てめえら…っ」

ふ、と一護は辺りを見回した。そんな一護を見て、恋次がどうかしたかと尋ねる。

「あ、いや。ルキアがいねーな」と

初めて再会した日のことについて謝るべき人物、そして何より記憶を取り戻した黒崎一護として会いたい少女がいないことに、一護はわずかに落胆の色を見せた。

その気持ちが分かって、彼女の上司は眉を下げて済まなそうに言う。

「ああ、朽木なら二・三時間前に現世に向かってしまっただけ。君が記憶を取り戻すと知っていたら、止めていたんだが…」

「そうか…。いや、いーんだ。またアイツには俺から会いに行くからよ」

「ったく、本当だぜ。アイツはお前のために行っただからよ」

「俺の？」

恋次の台詞に一護はきよとんとした表情を見せた。まさか、ここで

自分が出てくるとは思わなかったのだ。

「お前の記憶を封じた黒幕を探しに行ったんだよ」

「そうか、ルキアのやつ…、って、黒幕？黒幕…、くろ、ま…」

不謹慎だとは思いつつ嬉しさも感じていた一護は、ふと“黒幕”の言葉を何かを忘れている気がして首を捻ると、ああ！と声を上げた。

「そ、そうだ！俺、ソイツのことを思い出したんだよ！」

冬獅郎、恋次、浮竹の三人は顔を見合わせた。

少なからず驚くだろうと思っていた一護は、その反応に拍子抜けすると同時に、疑問を抱く。

「…どうしたんだ？」

「ちよつど、我々もその話をしていたんだ。もしかして、ソイツは秋ノ宮驍山アキノミヤキョウウザンじゃあないかい？」

「あ、いや…、名前までは分かんねえんだけどよ…」

尋ねられ、一護は思い出したという自分より相手のが詳しいことに

気まずそうに返す。

「なら、この顔に見覚えはあるか？」

ずいといと冬獅郎が突き出した写真。近すぎて、一護は身を引き、改めて写真を受け取る。

「ああっ、コイツ！」

その写真に写る人物を見て、一護は声を上げた。

「コイツだよ！俺の記憶を封じたの！」

写真に写るのは、黒髪がまだ艶やかでシワも少ない、五十代前半に見える男性。一護の記憶にある黒幕は、白髪混じりの、少し老けたような男だった。

写真の男が高貴さを感じさせるのに対し、記憶の男はどこか気味の悪いものを感じたが、面立ちはそっくりである。

「やはりか」

「やはりって？」

「俺と京楽で調べていたんだよ。君の記憶と靈力を封じられそうな人物がいないかどうかをね」

冬獅郎に次いで言ったのは浮竹だった。

「そこで出てきたのが、そのー…秋ノ宮ぎよ、ぎよござ？だったってわけか？」

「驍山だ、バカ」

ピキッ。

「ああ！？バカだあ！？んだ、てめえ喧嘩売ってんのか！？」

「バカにバカつつつって何が悪いんだよ！てめえのは食べ物になっ
てんじゃねーか！」

「ややこしい名前が悪い！」

「小学生並の責任転嫁してんじゃねー！」

ぎやあぎやあとつるさい二人に青筋を浮かべながら、冬獅郎は話を進めようと、「とにかく」と話しを遮る。

「確信は得たんだ。このこと、総隊長には？」

「それが、まだなんだ。話すタイミングもなかったし、倒れた隊士たちや魂魄たちの対応に忙しくて隊主会が開けてないからね」

「倒れたって…、まさか、もう！」

もしや、もう驍山による襲撃を受けたのかと、一護は焦りのあまり身を乗り出して脇腹の痛みを顔に顔をしかめた。

恋次は慌てて、「落ち着け」と声をかける。

「ちげーよ。安心しろ、そんな大した被害じゃねえ。ただ気を失ってるだけだ」

「はあ？ なんだよ、それ」

「いいから、気にすんな。話が進まねーだろ」

恋次が言えば、確かにと一護は反論出来ずに「で」と問う。

「そのぎょー…、ざんって奴は誰なんだ？」

「秋ノ宮って名前は聞いたことがあるかい？」

言われて、一護は頭を捻る。秋ノ宮、何だか記憶の隅っこの隅っこの方に覚えがある気がしてうんうんと唸るが、一向に引き出しは開かない。

「秋ノ宮家、かつて四大貴族とその肩を並べようとした程の一族の名だ」

そんな一護に、冬獅郎は助け舟を出す。

「志波家没落に取って代わるように勢力を伸ばした一族。鬼道の天才と言われている」

「んー…、あぁっ。聞いたことあるぜ、秋ノ宮家！霊術院で習った」
ちよつど鬼道の成績の伸びに悩んでいた時に習っていたのを覚えて
いる。それだけに、記憶に残っていたのだろう。

「でも、それがどうして敵の正体だって…」

「その理由のまず一つは、お前にかけられていた封印だ。幾重にも
かけられていたあの術。もはや鬼道とも言えない、あんな術を生み
出せる人間がいるとしたら、秋ノ宮家の者しかいねえ」

「それに調べてみたら、秋ノ宮家滅亡後、一人だけ現世に逃亡した
疑いのある死神がいてね。その人物が」

「秋ノ宮驍山ってわけか」

納得したと一護は頷く。

「ま、そういうことだ」

冬獅郎、浮竹の説明に続き、恋次はそう話を纏めた。

「あとは奴の居場所を突き止めて、倒しやあいだけの話だ。てめえはさっさとその傷を治しやがれ」

「そうだな。どうやら、君が敵を倒す鍵となるようだし」

「なるほどな…って、俺が鍵？それって…、おい、どういうことだ、浮竹さん！」

その時、ドタバタと室の外から騒がしい足音が聞こえてきて、皆の意識はそちらへ向けられた。

パンツと勢いよく扉が開けられる。

「大変です！」

駆けてきたのは一死神。イチシニガミ 全速力で来たのが分かるほどに息を荒げている。

「どつした、騒がしい」

ここは救護詰所だぞ、と眉をしかめれば、しまったというように気まずげな表情を見せたが、しかしすぐに顔を引き締める。

「急ぎ知らせたいことが」

ただならぬ様子に、「何があつた」と促す。

何故だか、異様に嫌な予感を感じて、一護は知らず息を潜めた。

その死神は、息を吐き出すと呼吸を整えて言う。

「十三番隊四席、朽木ルキアが現世にて負傷！四楓院夜一が保護し、現世にて治療中とのことです！」

「何　！？」

これが、全ての決着をつける戦いの幕開けであった。

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
.

第十二章 実葛 | サイカイ |

二度目の再会（後書き）

あとがき

ご迷惑をおかけしました。何故だか文章が繰り返しに…。

申し訳ありません。

なんかグダグダですが、それでも最後までお付き合いいただけると嬉しいです。

ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8084s/>

昇 藤

2011年9月7日21時54分発行